

京都府遺跡調査概報

第 71 冊

1. 国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

- (1) 烏津遠所古墳群
- (2) 中原城跡
- (3) 左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群
- (4) 枯木谷遺跡
- (5) 奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群・奈具谷遺跡
- (6) 南谷古墳群

2. 丹後あじわいの郷関係遺跡

1 9 9 6



ニゴレ遺跡全景（右上は速所遺跡群）



(1) ニゴレ1号製鉄炉全景



(2) ニゴレ2号製鉄炉近景



製鉄関連遺物

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成7年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて行った国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡と、平成4～6年度に、京都府農林水産部園芸経済課の依頼を受けて行った丹後あじわいの郷関係遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、網野町教育委員会・峰山町教育委員会・大宮町教育委員会・久美浜町教育委員会・弥栄町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 樋口隆康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡 2. 丹後あじわいの郷関係遺跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡			農林水産省近畿農政局	
(1) 島津遠所古墳群	竹野郡網野町島津小字遠所	平7.5.19～ 8.11		河野 一隆
(2) 中原城跡	中郡峰山町橋木小字新蔵	平7.5.23～ 7.5		村田 和弘
(3) 左坂墳墓群・左坂古墳群 左坂横穴群	中郡大宮町周積小字左坂	平7.4.17～ 平7.8.8		竹原 一彦 石崎 善久 村田 和弘
(4) 枯木谷遺跡	中郡大宮町奥大野小字枯木谷	平7.9.18～ 11.29		竹原 一彦
(5) 奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群・奈具谷遺跡	竹野郡弥栄町溝谷小字奈具谷・奈具岡	平7.4.11～ 平8.2.28		増田 孝彦 柴 暁彦 河野 一隆
(6) 南谷古墳群	熊野郡久美浜町壱分南谷	平7.7.17～ 10.20		筒井 崇史
2. 丹後あじわいの郷関係遺跡			京都府農林水産部園芸経済課	
ニゴレ遺跡・桐谷古墳群	竹野郡弥栄町字鳥取	平4.9.24～ 平5.2.26		岡崎 研一
ニゴレ遺跡・鳥取峠古墳群・行者山古墳群	竹野郡弥栄町字鳥取・字木橋	平5.4.20～ 6.2.25		岡崎 研一 黒坪 一樹
ニゴレ遺跡・鳥取峠1号墳	竹野郡弥栄町字鳥取・字木橋	平6.4.18～ 平7.2.28		岡崎 研一

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

目 次

1. 国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成7年度発掘調査概要-----	1
(1) 鳥津遠所古墳群-----	3
(2) 中原城跡-----	17
(3) 左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群-----	19
(4) 枯木谷遺跡-----	50
(5) 奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群・奈具谷遺跡-----	56
(6) 南谷古墳群-----	59
2. 丹後あじわいの郷関係遺跡発掘調査概要-----	75

挿 図 目 次

1. 国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

(1) 島津遠所古墳群

第1図	島津遠所古墳群周辺分布図	4
第2図	遠所17号墳出土甕棺	5
第3図	遠所古墳群分布図	5
第4図	遠所古墳群発掘前測量図	6
第5図	遠所古墳群発掘後測量図	7
第6図	遠所16号墳発掘後測量図	8
第7図	遠所16号墳出土土器	9
第8図	遠所16号墳主体部実測図	9
第9図	遠所19～21号墳平面・断面図	10
第10図	遠所21号墳主体部実測図	11
第11図	遠所21号墳出土鉄製品	11
第12図	遠所A城跡盛り土断面図	12
第13図	集石遺構実測図	12
第14図	被熱土坑実測図	13
第15図	遠所A城縄張り図	14
第16図	石川氏の島津進出に伴う中世山城分布図	15

(2) 中原城跡

第17図	周辺遺跡地図	17
第18図	焼土坑平面・断面図	18
第19図	トレンチ配置図	18

(3) 左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群

第20図	左坂古墳群・左坂横穴群・里ヶ谷横穴群分布図	19
第21図	大宮町主要遺跡分布図	21
第22図	左坂墳墓群・左坂横穴A支群遺構配置図	22
第23図	近世墓群平面図	23
第24図	弥生墳墓群平面図	24
第25図	33号墓第1～第4主体部実測図	26
第26図	33号墓第3主体部出土遺物実測図	27

第27図	34号墓第1～第4主体部実測図	29
第28図	34号墓第5・第6主体部実測図	30
第29図	34号墓甕棺実測図	31
第30図	34号墓出土遺物実測図	32
第31図	35号墓主体部実測図	34
第32図	35号墓主体部棺内・棺上出土遺物実測図	35
第33図	35号墓主体部供献土器実測図	35
第34図	左坂墳墓群主要遺構配置図	36
第35図	左坂A-3号横穴実測図	38
第36図	左坂A-3号横穴出土遺物実測図	38
第37図	左坂古墳群C支群6号墳～13号墳地形測量図	41
第38図	C-6～C-8号墳主体部実測図	43
第39図	C-9号墳主体部実測図	44
第40図	C-9号墳主体部出土遺物実測図	45
第41図	左坂C-11号墳平面図	46
第42図	C-11号墳第1主体部実測図及び主体部・溝出土遺物実測図	47
(4) 枯木谷遺跡		
第43図	枯木谷遺跡調査地位置図	50
第44図	B地区平面図	52
第45図	B地区SB1実測図	53
第46図	河川跡1出土遺物実測図	54
(5) 奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群・奈具谷遺跡		
第47図	調査地及び周辺遺跡分布図	56
(6) 南谷古墳群		
第48図	調査地周辺主要遺跡分布図	59
第49図	南谷古墳群分布図	61
第50図	南谷古墳群地形測量図	62
第51図	南谷1号墳墳丘測量図	63
第52図	南谷1号墳墳丘断面図	64
第53図	南谷1号墳主体部実測図	65
第54図	南谷1号墳棺内遺物出土状況	65
第55図	南谷1号墳墓壙内出土遺物出土地点図	65
第56図	南谷1号墳出土遺物実測図(1) 須恵器	67
第57図	南谷1号墳出土遺物実測図(2) 鉄器	67
第58図	南谷4号墳墳丘測量図	68

第59図	南谷4号墳墳丘断面図	69
第60図	南谷4号墳主体部実測図	70
第61図	南谷4号墳出土遺物実測図(須恵器)	70
第62図	須恵器が出土した木棺直葬墳の分布	71
2. 丹後あじわいの郷関係遺跡		
第63図	調査地及び周辺の主要遺跡分布図	76
第64図	遠所遺跡群・ニゴレ遺跡製鉄関連遺構配置図	78
第65図	調査地及び遺跡配置図	80
第66図	ニゴレ1号製鉄炉地形図	83
第67図	ニゴレ1号製鉄炉実測図	84
第68図	ニゴレ2号製鉄炉地形図	85
第69図	ニゴレ2号製鉄炉実測図	86
第70図	祭祀遺構実測図	87
第71図	B地区遺構配置図	89
第72図	出土遺物実測図(1)	91
第73図	出土遺物実測図(2)	92
第74図	出土遺物実測図(3)	93
第75図	出土遺物実測図(4)	94
第76図	出土遺物実測図(5)	95
第77図	出土遺物実測図(6)	96
第78図	出土遺物実測図(7)	98
第79図	出土遺物実測図(8)	99
第80図	炉壁実測図	100

付 表 目 次

1. 国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡	
付表1	平成7年度国営農地関係遺跡に伴う発掘調査一覧表-----2
(3) 左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群	
付表2	左坂墳墓群・古墳群調査次数一覧表-----20
(6) 南谷古墳群	
付表3	南谷古墳群出土須恵器観察表-----72
2. 丹後あじわいの郷関係遺跡	
付表4	「丹後あじわいの郷」整備事業に伴う発掘調査一覧表-----75
付表5	「丹後あじわいの郷」内遺跡一覧表-----81
付表6	調査区別検出遺構・遺物一覧表-----82
付表7	検出住居跡一覧表-----90
付表8	炉関係遺物出土量一覧表-----102

図 版 目 次

1. 国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡	
(1) 島津遠所古墳群	
図版第1	(1) 遠所古墳群全景(東から) (2) 遠所古墳群全景(南から)
図版第2	(1) 遠所古墳群全景 (2) 遠所古墳群完掘状況(西から)
図版第3	(1) 遠所16号墳北側斜面(西から) (2) 遠所A城南側斜面(西から)
図版第4	(1) 遠所16号墳第1主体部全景(東から) (2) 遠所16号墳第1主体部西側集石状況(南から)
図版第5	(1) 遠所19～21号墳完掘状況(西から) (2) 遠所21号墳副葬品検出状況(南から)
図版第6	(1) 遠所A城集石検出状況(南から) (2) 遠所A城被熱土坑1検出状況(南から)

図版第7 (1)遠所A城腰曲輪検出状況(北から) (2)遠所A城盛り土状況

図版第8 遠所古墳群出土遺物

(2) 中原城跡

図版第9 (1)調査地遠景(西から) (2)試掘トレンチ完掘状況(南から)

図版第10 (1)焼土坑1完掘状況(西から) (2)焼土坑2完掘状況(北から)

(3) 左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群

図版第11 (1)左坂墳墓群調査前全景(北東から)

(2)近世墓群調査前(北西から) (3)左坂墳墓群調査後全景(東から)

(4)近世墓群検出状況(南西から)

図版第12 (1)13号近世墓(西から) (2)1号近世墓 人骨(南東から)

(3)13号近世墓 人骨(西から) (4)11号近世墓出土古銭

図版第13 (1)22号墓全景(南西から) (2)22号墓埋葬主体部(南東から)

(3)22号・33号墓区画溝(北西から) (4)33号墓調査風景(南西から)

図版第14 (1)33号墓第1主体部(南西から) (2)33号墓第3主体部(南東から)

(3)33号墓第2主体部(南西から) (4)33号墓第4主体部(北東から)

図版第15 (1)34号墓第1主体部検出状況(南東から)

(2)34号墓第1主体部断面(南西から)

(3)34号墓第1主体部完掘状況(西から)

(4)34号墓第1主体部断面の朱混じり土層(北東から)

図版第16 (1)34号墓第2主体部棺痕跡検出状況(南東から)

(2)34号墓第2主体部調査風景(南西から)

(3)34号墓第2主体部棺内完掘状況(南東から)

(4)34号墓第3主体部検出状況(南東から)

図版第17 (1)34号墓第3主体部断面(南東から)

(2)34号墓甕棺蓋検出状況(南から)

(3)34号墓第3主体部完掘状況(北西から)

(4)34号墓甕棺断面(南東から)

図版第18 (1)35号墓埋葬主体部検出状況(西から)

(2)35号墓埋葬主体部完掘状況(西から)

(3)35号墓埋葬主体部墓上土器群(北から)

(4)35号墓埋葬主体部棺内ガラス小玉・木質(南から)

図版第19 (1)A-3号横穴調査前(南東から)

(2)A-3号横穴玄室(南西から)

(3)A-3号横穴玄門部(南東から)

(4)A-3号横穴完掘状況(南東から)

- (5) A-3号横穴支門部(西から)
 (6) A-3号横穴玄室内遺物(南東から)
- 図版第20 (1)左坂古墳群C支群空中写真(東から)
 (2) C-6号墳埋葬主体部(東から)
 (3)左坂古墳群C支群空中写真(北西から)
 (4) C-7号墳埋葬主体部(南から)
- 図版第21 (1) C-9号墳全景(西から) (2) C-10号墳埋葬主体部(南から)
 (3) C-9号墳埋葬主体部(南から) (4) C-10号墳全景(南から)
- 図版第22 (1) C-11号墳全景(東から)
 (2) C-10・C-11号墳区画溝遺物出土状況(南から)
 (3) C-11号墳第1主体部(北から) (4) C-12号墳全景(北から)
- 図版第23 左坂墳墓群33号墓第3主体部出土遺物
- 図版第24 左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群出土遺物
- 図版第25 左坂古墳群C-9号墳主体部出土遺物

(4) 枯木谷遺跡

- 図版第26 (1) 枯木谷遺跡全景(東から) (2) B地区全景(北東から)
 (3) A地区全景(北西から) (4) 調査地全景(南西から)
 (5) C地区全景(北東から) (6) A地区河川内遺物出土状況

(6) 南谷古墳群

- 図版第27 (1) 南谷1号墳調査前全景(東から)
 (2) 南谷1・2号墳全景(南西から)
 (3) 南谷1号墳主体部完掘状況(東から)
 (4) 南谷1号墳木棺内遺物出土状況(西から)
- 図版第28 (1) 南谷4号墳調査前全景(東から)
 (2) 南谷3・4号墳全景(北東から)
 (3) 南谷4号墳主体部完掘状況(東から)
 (4) 南谷4号墳陥没痕内遺物出土状況(西から)
- 図版第29 南谷古墳群出土遺物(1)
- 図版第30 南谷古墳群出土遺物(2)

2. 丹後あじわいの郷関係遺跡

- 図版第31 (1) ニゴレ1号製鉄炉全景(北東から)
 (2) ニゴレ1号製鉄炉近景(北西から)
- 図版第32 (1) 1号製鉄炉排滓坑近景(北西から)
 (2) ニゴレ1号製鉄炉内粉炭層近景(南西から)
 (3) ニゴレ1号製鉄炉内粉炭層近景(南東から)

- (4)ニゴレ1号製鉄炉内流れ込み遺物出土状況(南西から)
- 図版第33 (1)ニゴレ2号炉近景(南西から)
 (2)ニゴレ2号炉送風管痕跡近景(南西から)
- 図版第34 (1)ニゴレ3・4号炉祭祀遺構全景(南西から)
 (2)ニゴレ3号炉廃滓場全景(東から)
- 図版第35 (1)祭祀遺構検出状況(南から) (2)祭祀遺構内堆積状況(東から)
 (3)砂鉄堆積状況(西から) (4)祭祀遺構完掘状況(南から)
- 図版第36 (1)A地区・桐谷1・2号墳遠景(南から) (2)B地区全景(北東から)
- 図版第37 (1)B地区住居跡19近景(北西から) (2)B地区柱穴群近景(北東から)
- 図版第38 (1)住居跡内遺物出土状況(南から) (2)B地区住居跡2近景(北西から)
- 図版第39 (1)B地区住居跡2近景(南東から)
 (2)B地区住居跡1内焼土半掘状況(北西から)
- 図版第40 (1)小型炭窯検出状況(南から) (2)A地区小型炭窯近景(南から)
 (3)A地区小型炭窯近景(南から) (4)A地区小型炭窯近景(南から)
- 図版第41 出土遺物(1)
- 図版第42 出土遺物(2)
- 図版第43 出土遺物(3)
- 図版第44 出土遺物(4)
- 図版第45 出土遺物(5) 炉壁・鉄滓
- 図版第46 出土遺物(6) 炉底滓

1. 国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡 平成7年度発掘調査概要

はじめに

本概要報告は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)に伴い、発掘調査を実施した各遺跡の概要報告である。ここに掲載した内容は、竹野郡網野町遠所古墳群、中郡峰山町中原城跡、中郡大宮町左坂墳墓群・横穴群、左坂古墳群(C支群)、枯木谷遺跡、熊野郡久美浜町南谷古墳群の発掘調査概要と、平成7年度に調査が終了した竹野郡弥栄町奈具岡・奈具谷遺跡、奈具岡北古墳群、奈具岡南古墳群の概略報告である。

なお、平成6年度に実施した黒部遺跡(仲谷地区)は、平成7年度調査分(黒部遺跡・奈具岡遺跡・奈具谷遺跡、奈具岡北古墳群)と合わせて後日、概要報告を行う予定である。

調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。国営農地開発事業に伴う調査は、昭和59年度から京都府教育委員会が実施し、昭和60年度からは当調査研究センターが、平成6年度以降は関係町と三者で分担して行っている。昭和60年度以降当調査研究センターでは、多くの遺跡の調査を実施し、多大な成果があがっている。

現地調査は、調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員増田孝彦、竹原一彦、同調査員岡崎研一、柴 暁彦、石崎善久、河野一隆、筒井崇史、村田和弘が担当した。

概報執筆にあたっては、各担当者のほかに、南谷古墳群では南山大学学生石田春彦、奈良大学学生福田和浩が執筆した。

調査期間中、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員及び補助員・整理員として作業に従事していただいた。また、調査にあたっては、久美浜町教育委員会、網野町教育委員会、弥栄町教育委員会、峰山町教育委員会、大宮町教育委員会をはじめとする関係諸機関のご協力を得ることができ、現地でも多くの方々のご協力とご指導を賜った。^(注1)改めて感謝の意を表したい。

なお、調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。

(増田孝彦)

付表1 平成7年度国営農地関係遺跡に伴う発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	担当者
1	鳥津遠所古墳群	京都府竹野郡網野町鳥津 小字遠所	平成7年5月19日 ～平成7年8月11日	調査第1係長 伊野近富 調査員 河野一隆
2	中原城跡	京都府中郡峰山町橋木	平成7年5月23日 ～平成7年7月5日	調査第1係長 伊野近富 主任調査員 竹原一彦 調査員 村田和弘
3	左坂墳墓群・ 横穴群 左坂古墳群	京都府中郡大宮町周積小 字左坂	平成7年4月17日 ～平成7年8月8日	調査第1係長 伊野近富 主任調査員 竹原一彦 調査員 石崎善久 調査員 村田和弘
4	枯木谷遺跡	京都府中郡大宮町奥大野 小字枯木谷	平成7年9月18日 ～平成7年11月29日	調査第1係長 伊野近富 主任調査員 竹原一彦
5	奈具谷遺跡 奈具岡遺跡 奈具岡北古墳群	京都府竹野郡弥栄町溝谷 小字奈具谷・奈具岡	平成7年4月11日 ～平成8年2月28日	調査第1係長 伊野近富 主任調査員 増田孝彦 調査員 柴 晩彦 調査員 河野一隆
6	南谷古墳群	京都府熊野郡久美浜町老 分小字	平成7年7月17日 ～平成7年10月20日	調査第1係長 伊野近富 調査員 筒井崇史
	黒部遺跡	京都府竹野郡弥栄町黒部 小字仲谷・金屎・青谷	平成7年4月11日 ～平成7年7月11日	調査第1係長 伊野近富 調査員 岡崎研一 調査員 柴 晩彦
	奈具岡南古墳群	京都府竹野郡弥栄町溝谷 小字奈具岡	平成7年4月11日 ～平成7年5月26日	調査第1係長 伊野近富 調査員 河野一隆

(1) 鳥津遠所古墳群

1. はじめに

遠所古墳群は、京都府竹野郡網野町鳥津小字遠所に所在する。当調査研究センターでは、平成5年度の試掘調査以来、この地区の国営農地造成や、その他の開発事業に先立つ発掘調査を実施してきた。今回の発掘調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の鳥津第3団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて実施した。調査対象となったのは、平成5年度に伐採及び調査前時点での航空写真撮影・地形測量などの調査を行った16号墳、19～21号墳である。調査期間は、平成7年5月18日～同年8月11日であり、面積は600m²である。酷暑の期間中と、その後も関係諸機関及び調査参加者に多大な労苦をかけたことに深謝^(註2)したい。

2. 位置と環境

鳥津遠所古墳群は、離湖の東側、約800mの丘陵上に展開する古墳群である(第1図)。鳥津地区は、網野町掛津ならびに弥栄町鳥取へと通じる交通の要衝であり、網野銚子山古墳がひかえる網野地区の後背地として、多くの遺跡が知られている。例えば、古墳時代ではくらがり1・2号墳、白砂古墳群、谷崎古墳群、大谷古墳群など、歴史時代では横枕遺跡、テヘン田遺跡、大谷古墓、遠所古墓などが知られている。だが、発掘調査された遺跡は少数であり、この遠所古墳群以外では、網野町教育委員会によって調査された横枕遺跡のみである。また、この地区は、中世山城の密集が知られており、遠所城以外にも鳥津城、大谷城、溝川谷城などがある。これらは曲輪や堀切、切岸などが現在でも確認されるが、丘陵端を整形して平坦地を設けた砦状の施設が多く見られるという特徴がある。

今回の調査地は、『京都府遺跡地図』に遠所古墳群及び遠所A城として記された地点である。遠所古墳群は、分布調査によって38基の古墳が知られ(第3図)、平成5年度には当調査研究センターが17・18号墳の発掘調査と、22～25号墳の試掘調査を実施し、後者は古墳ではないことが判明した。17・18号墳は、尾根端部を階段状に削り出し、それぞれ1基ずつの木棺を直葬する。17号墳では、副葬品は見られないが、墓壙上に低脚杯を蓋に転用した甕棺がある(第2図)。この甕は、山陰型甕の形態的特徴を持つが、底部中央に指頭圧痕があり、胎土は高温石英を多量に含む。暗赤褐色を呈する。山陰型甕の拡散に伴い、在地の製作技法と折衷したと考えられ、古墳時代前期初頭に位置づけられる土器^(註3)である。18号墳では、2点の弥生時代以来の系譜にのる大型の柳葉形鉄鏃がある。これらの成果によって、遠所古墳群は、古墳時代前期初頭を下限として築造が開始されたことが確認された。

平成6年度は網野町教育委員会が6・7号墳の発掘調査と、26～33号墳の試掘調査を実施し、後者は古墳ではないことが判明した。6・7号墳は、17・18号墳の北西に隣接した尾根の端部を



第1図 島津遠所古墳群周辺分布図(1/25,000)

- | | | | |
|------------------|--------------|------------|----------|
| 1. 島津遠所古墳群・遠所A城跡 | 2. 網野銚子山古墳 | 3. 難山古墳 | 4. 難湖古墳 |
| 5. 岡1号墳 | 6. くらがり1・2号墳 | 7. 大谷古墳群 | 8. 谷崎古墳群 |
| 9. 白砂古墳群 | 10. 林遺跡 | 11. テヘン田遺跡 | 12. 横枕遺跡 |
| 13. 遠所B城跡 | 14. 遠所C城跡 | 15. 遠所城跡 | 16. 島津城跡 |

整形したものである。6号墳は主体部が見つからなかったが、7号墳は平石を枕にした木棺直葬墓である。いずれも副葬品は持っていない。また、遠所城は、『竹野郡誌』に遠所城よんじょうの名で記されている。それによれば、島津地区で最も古く、城主は石子尾張守とされるが、当否は不明である。島津から掛津へといたる道沿いに遠所城とその砦(A～C城)があり、A城は最も北に位置している。調査範囲に含まれていないが、この丘陵中には堀切が確認され、最高所に位置する16号墳でも何らかの山城関連の遺構の存在が予想され、発掘調査を実施する運びとなった。

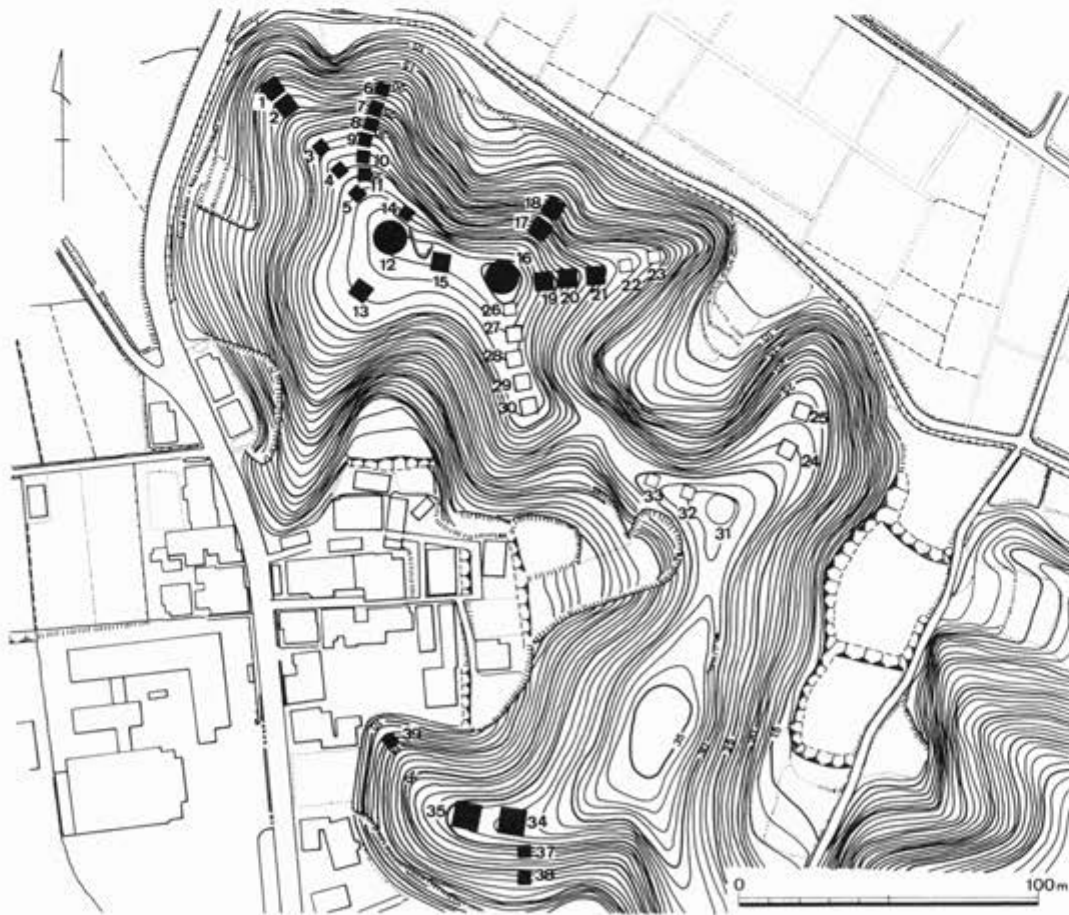


第2図 遠所17号墳出土土甕棺(1/4)

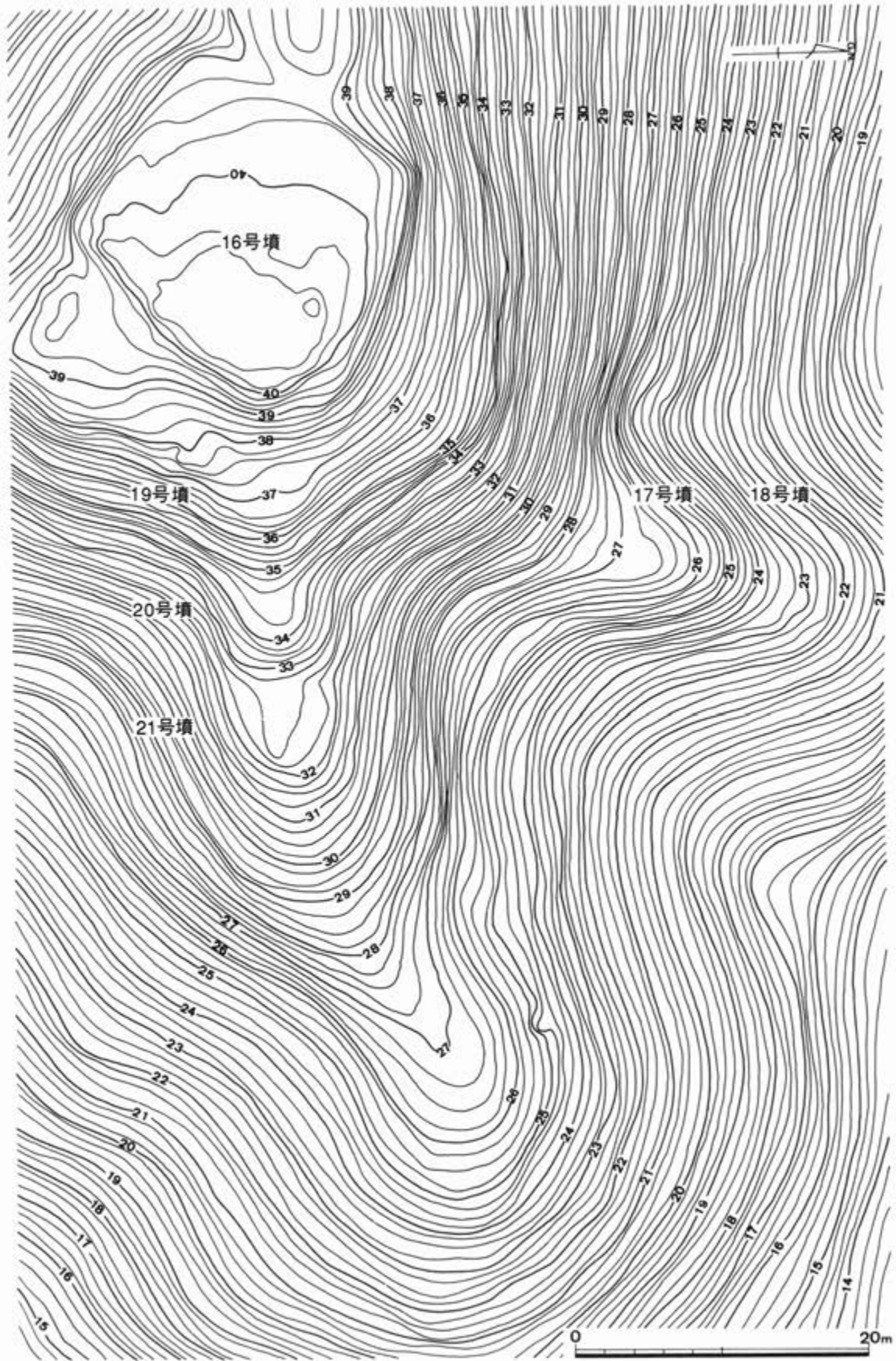
3. 遠所古墳群

(1) 遺構の概要

着手前は、低木や笹が一面に繁茂していたが、地形からみて古墳の可能性が高かったので(第



第3図 遠所古墳群分布図(1/2,500)

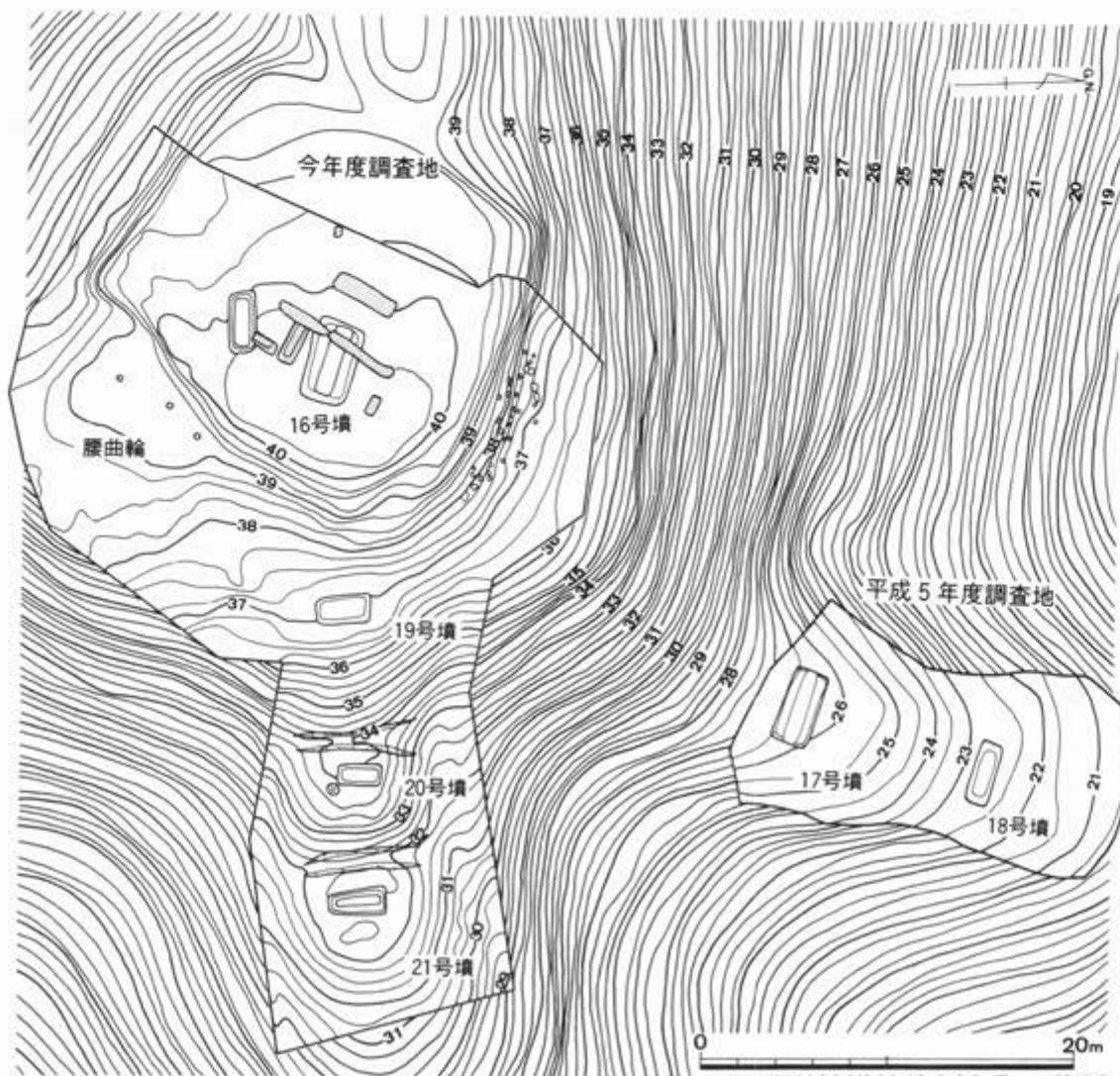


第4図 遠所古墳群発掘前測量図(1/400)

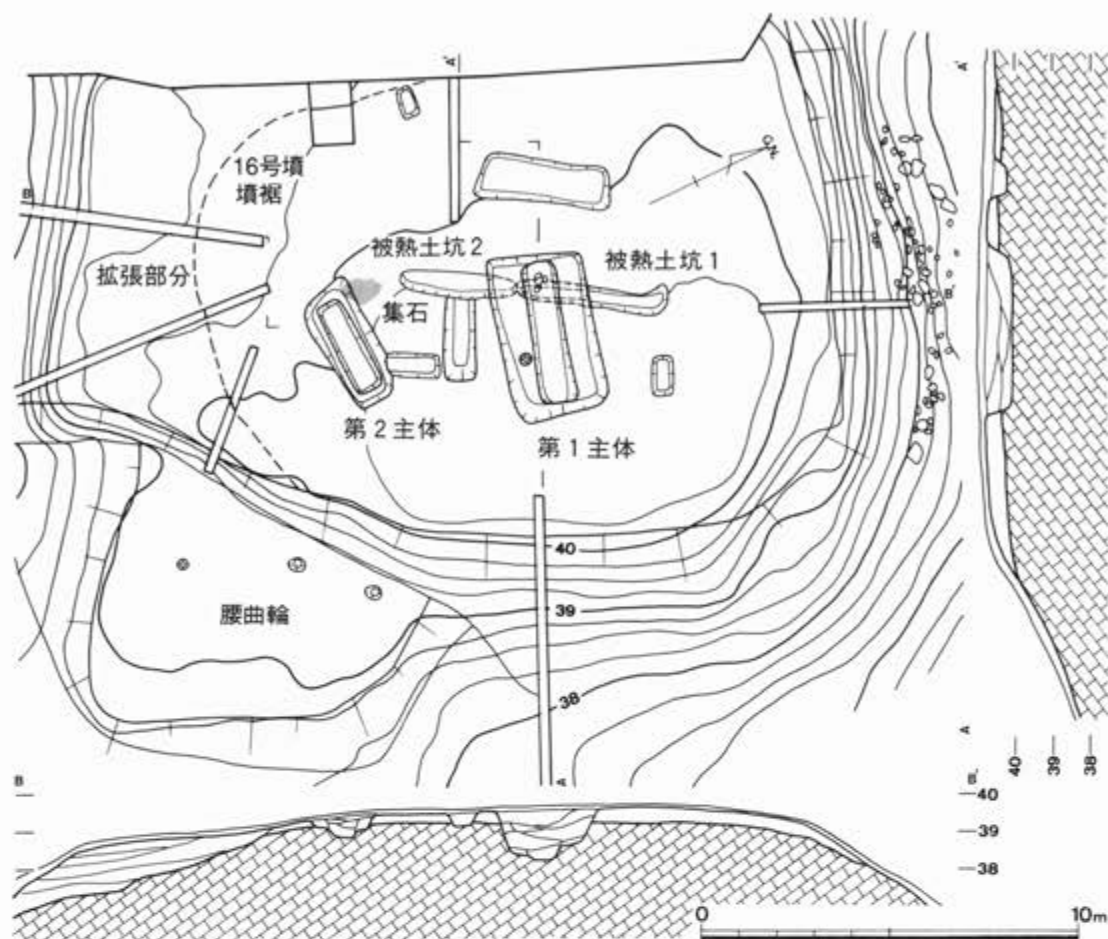
4 図)、土層観察用のあぜを残しながら面的に掘削した(第 5 図)。

①16号墳(第 6 図)

長辺24m・短辺20mを測る楕円形に近い方墳である。東側に傾斜する丘陵を整形し、墳頂平坦面の東半に約30cmの盛り土を行い、その上面から主体部を掘り込んでいる。墳頂で7基の土坑を確認したが、主体部と判断されるのは2基である。第1主体は墳頂中央に位置し、長さ4.4m・幅2.5mの墓壇に、長さ3.8m・幅0.9mの箱形木棺を納める。主軸はN-74°-Wである。木棺は厚さ3cmの板で構成され、小口側を墓壇壁まで掘り抜く型式で、17号墳と共通する。墓壇1段目の南側には炭の詰まったピットがあって、その周囲から小型丸底壺の破片を検出した(第7図)。西側小口部には、人頭大の塊石5個を積んでおり、西頭位で埋葬された可能性がある。副葬品は見られなかった。第2主体は長さ3.2m・幅1.4mの墓壇に、長さ2.5m・幅0.8mの箱形木棺を納める。主軸はN-88°-Wである。副葬品はない。この古墳は、20mを越える規模にも関わらず、副葬品がなく、供献土器にも乏しい。木棺の型式が17号墳と共通しており、4世紀前半頃の築造であろうか。



第 5 図 遠所古墳群発掘後測量図(1/400)



第6図 遠所16号墳発掘後測量図(1/200)

②19号墳(第9図)

16号墳の東側に位置し、長辺8m・短辺7.5mを測る。盛り土はなく、地山を削り出している。主体部は、長さ2.9m・幅1.2mの土壙墓で、長辺に沿って拳大のベンガラを検出している。

③20号墳(第9図)

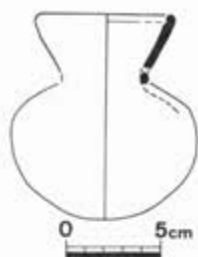
19号墳から3mほど下方に築かれた方墳で、浅い溝によって丘陵と区画されている。長辺10m・短辺7mを測り、約10cmの盛り土を確認した。主体部が長さ2.3m・幅1.2mの土壙墓で、副葬品はなかった。この他に、1基のピットを検出した。

④21号墳(第9・10図)

長辺10m・短辺8mを測る方墳で、20号墳とは溝によって区画されている。20号墳と同様、盛り土上から掘り込まれた主体部1基を検出した(第10図)。長さ3.1m・幅1.2mの墓壙に、長さ2.9m・幅0.9mの木棺を納めている。ただ、底部は岩盤の掘り抜きのままで、その上に副葬品が乗っている点から、底板を持たない型式と想定される。副葬品は、鉄刀1、鉄鎌6、刀子1である。刀は、鞘に入れたままの状態が副葬され、切っ先が南に向いているので、北頭位で埋葬されたと思われる。鎌は、刀の周辺に散乱した状況で出土した。副葬品の特徴から、5世紀初頭に築かれたことがわかる。

(2)遺物

遺物は、16号墳第1主体出土の小型丸底壺(第7図)と21号墳の副葬品(第11図)がすべてで、

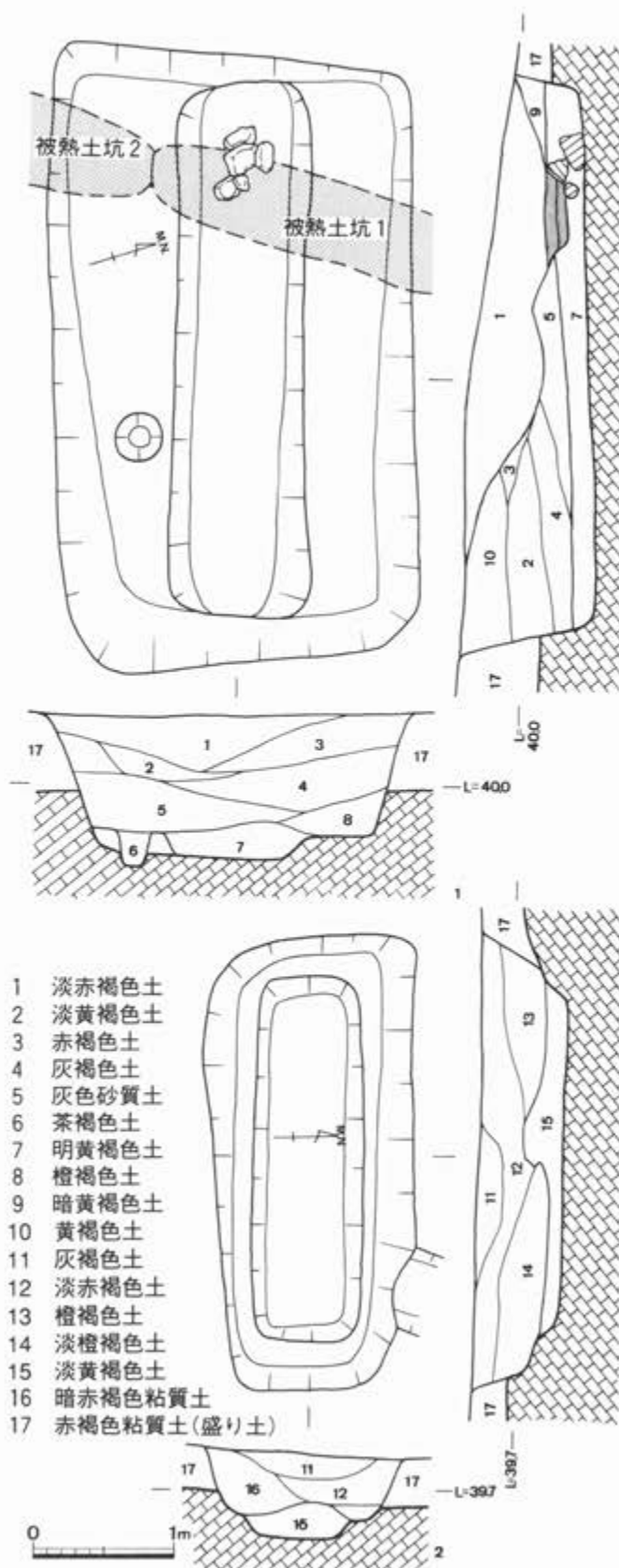


第7図 遠所16号墳出土土器(1/4)

きわめて少ない。小型丸底壺は、口縁端部をややつまむ点以外に全形がうかがえず、風化も著しい。21号墳出土の刀は、錆のために身の中央を欠失しているが、現存長86cm・茎長14.4cm、ふくら部の身幅2.2cm・関部幅3.4cm・茎幅2.2cmを測る直角関のものである。茎尻に近い部分に径3mmの目釘孔があり、刀身部には鞘の木質が遺存する。鉄鏃は、1点ごとに形態が異なる特徴がある。5・6は、腸袂の形態に差のある短頸の鏃で、根扶みが表面に錆が回ったために残存している。5は重腸袂の形態であり、6は透孔がある。3は、鏃身が9.6cmと大型で、実用性を疑わせる。2は刀子だが、刀箭形の鏃の可能性もある。

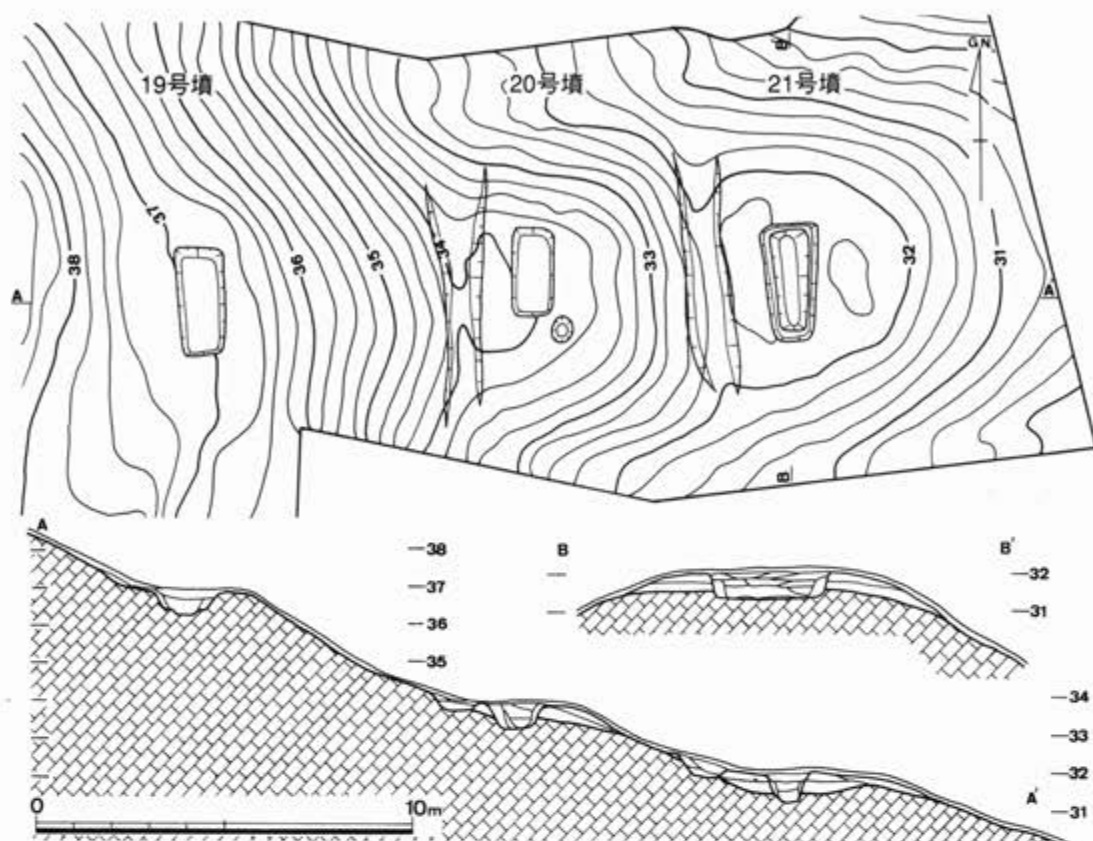
(3)まとめ

遠所古墳群の調査では、大型で丘陵の最高所に位置する16号墳に遺物が少ない反面、21号墳では10m足らずの古墳としては豊富な副葬品を持つというアンバランスが目立っていた。このことは、この古墳群の築造主体であった集団内



- 1 淡赤褐色土
- 2 淡黄褐色土
- 3 赤褐色土
- 4 灰褐色土
- 5 灰色砂質土
- 6 茶褐色土
- 7 明黄褐色土
- 8 橙褐色土
- 9 暗黄褐色土
- 10 黄褐色土
- 11 灰褐色土
- 12 淡赤褐色土
- 13 橙褐色土
- 14 淡橙褐色土
- 15 淡黄褐色土
- 16 暗赤褐色粘質土
- 17 赤褐色粘質土(盛り土)

第8図 遠所16号墳主体部実測図(1/50)



第9図 遠所19～21号墳平面・断面図

に、土器あるいは鉄製品を保有・副葬する点で分化が生じていたことをうかがわせる。

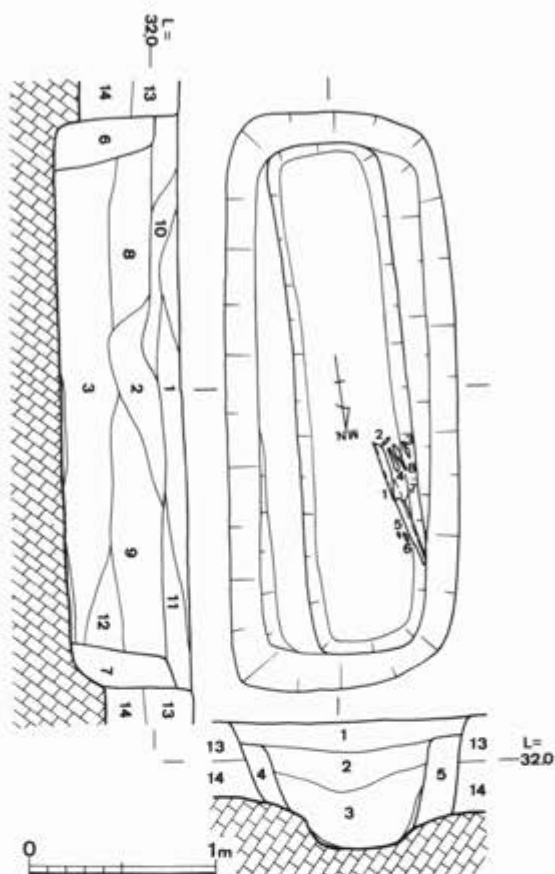
4. 遠所城

遠所古墳群の調査では、16号墳で遠所城関連と見られる遺構が検出されている。それは、造成、集石、被熱土坑などである。これらは、共伴する遺物が明確ではないので、確実に城に伴うのかは不明であるが、16号墳の主体部を切る点などを根拠として、遠所A城に伴う遺構と判断している。

①造成(第12図)

16号墳は、南側に不整形に突出したいびつな形をしている。これは、断ち割り調査によって、この部分に盛り土して、墳頂平坦面を拡張した結果であることを確認した。盛り土の厚さは1mにも及び、遠所城造成時のものと判断される。盛り土の手順は以下の通りである。まず、古墳の墳丘斜面を階段状にカットし、盛り土のための台をつくる。次に、この上に土を乗せていくが、下層ほど粘性が高い土を用いて基礎を固めている。中心から外側に向けて盛られたものであろう。最後に、地山に近似した赤褐色の粘質土で化粧している。このような細工によって、長軸24m・短軸20mの遠所16号墳は、長軸27m・短軸21mの遠所A城へと改変された。

この他に、南側以外の墳丘斜面にも改変された痕跡がある。その一つは、南東側に、一辺8m前後の方形の張り出し部を削り出したことである。ここは、26号墳として記されていたが、表土直下で岩盤を検出し、3基のピットが開けられていた。これは、16号墳の盛り土による拡張部分の造成と一体で整形されており、腰曲輪であった可能性がある。また、北～東側の墳丘斜面も削



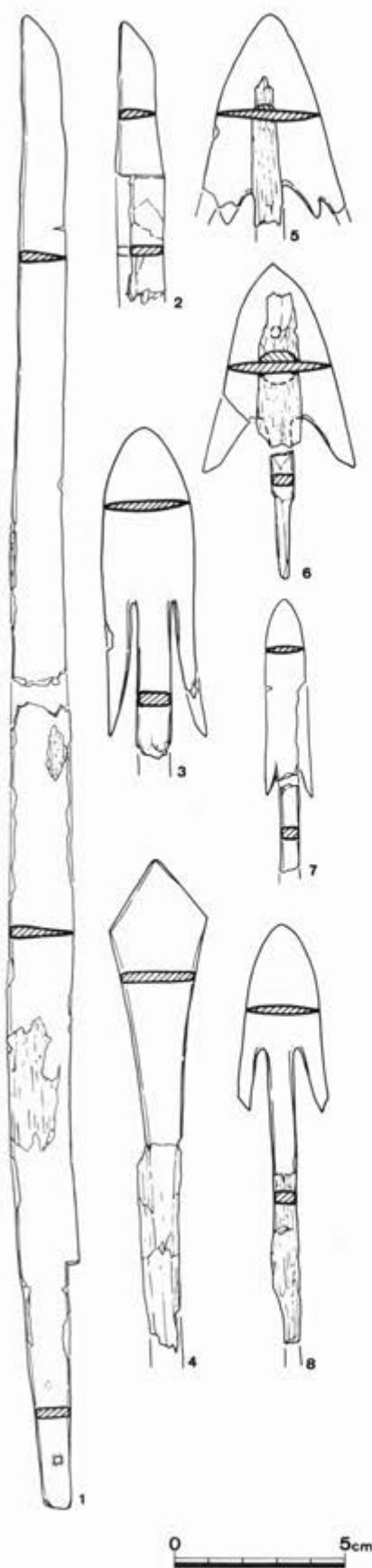
第10図 遠所21号墳主体部実測図(1/40)

- | | | |
|-----------|-----------|----------|
| 1.濁黄褐色土 | 2.暗橙褐色土 | 3.橙褐色土 |
| 4.明橙褐色土 | 5.明黄褐色土 | 6.橙褐色粘質土 |
| 7.橙褐色粘質土 | 8.明橙色土 | 9.明橙色土 |
| 10.黄褐色土 | 11.橙褐色粘質土 | 12.橙褐色土 |
| 13.橙灰色粘質土 | 14.橙褐色土 | |

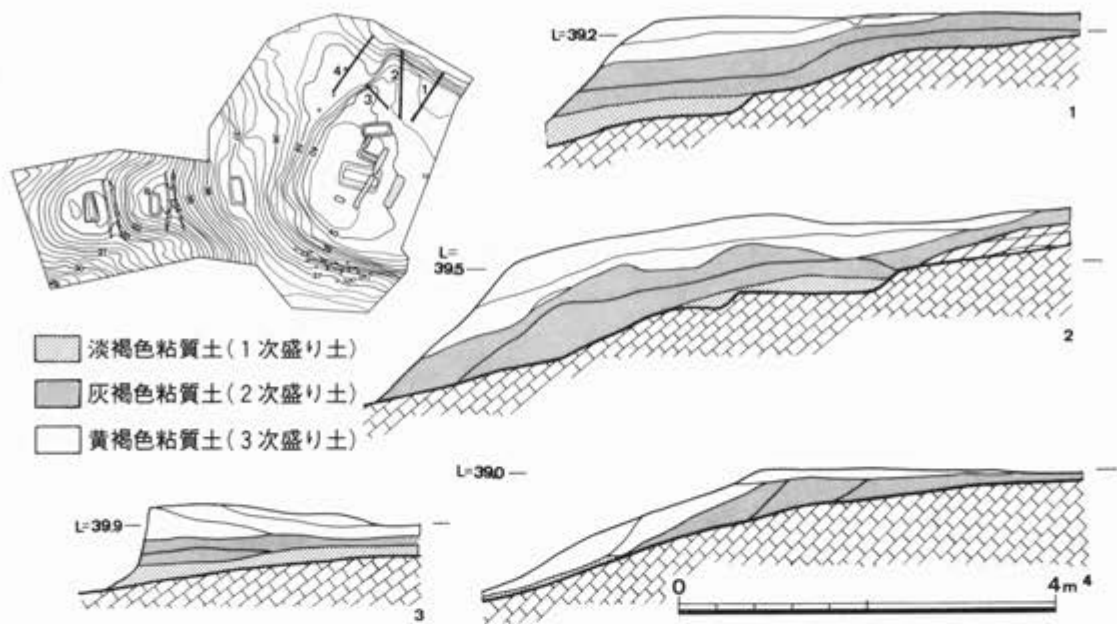
られ、古墳築造当初よりもかなりの急斜面となっている。特に、北側斜面は岩盤層が露出するほど削り込まれていて、切岸のような急な斜面を造り出している。このため、16号墳本来の墳裾は確認できなかった。16号墳の本来の墳形の確認は、この盛り土を断ち割ることによって確認した。

②集石(第13図)

第2主体部の上面、表土直下で拳大の山石の集積を確認した。これは、浅い皿状土坑を中心として主体部埋土上に置かれたような状況であり、重なりも少ない。このような集石は1か所のみで、明らかに人為的に置かれたと判断される。土器を伴っていないので、遠所城の遺構か否かは不明であるが、城に伴うなら石つぶてなどの用



第11図 遠所21号墳出土鉄製品
(1/2、刀のみ1/4)



第12図 遠所A城跡盛り土断面図(断面図のみ1/80)

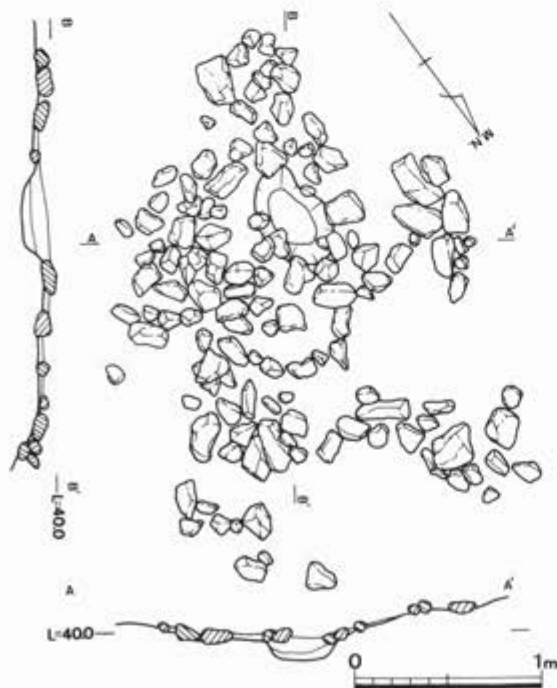
途が想定される。

③被熱土坑(第14図)

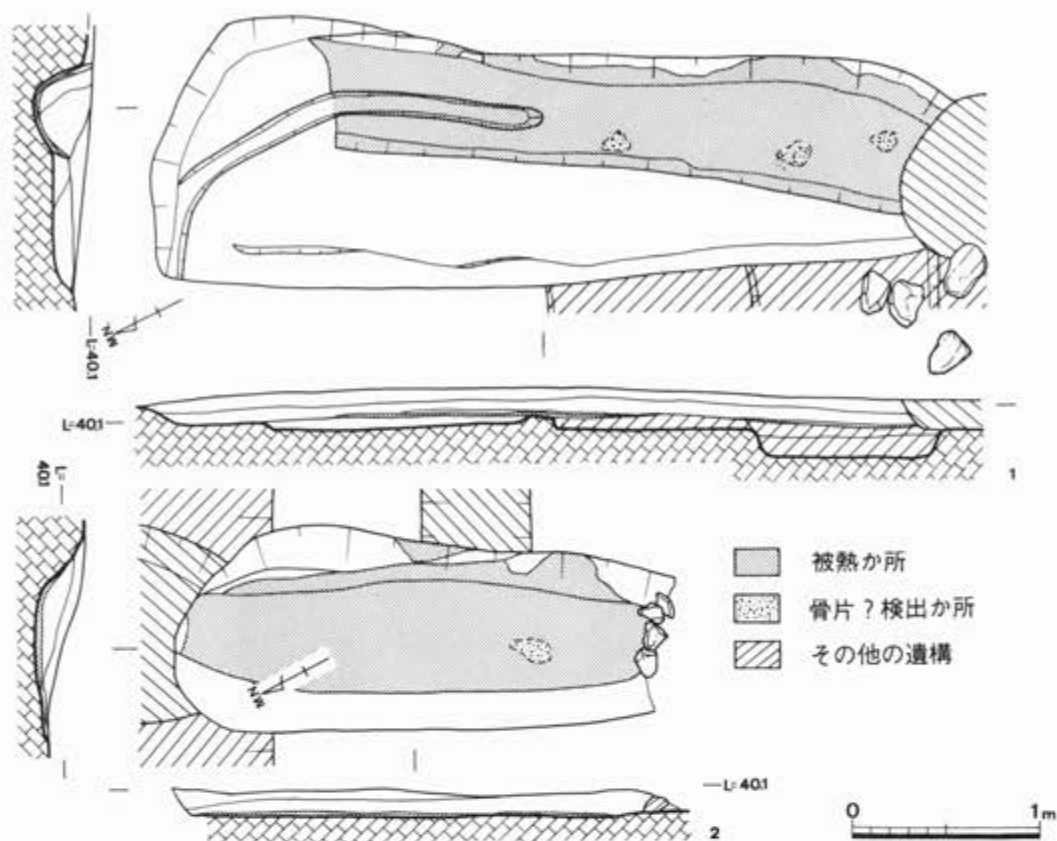
第1主体に直交し、それを切るように2基の土坑を検出した。これは壁面が強く焼けており、部分的には炭窯のような酸化面さえ見られるところもある。しかし、炭窯とは異なり、灰原はなく、検出した炭量も少ない。1基は、長方形の掘形に長さ2.1m・幅0.5mにわたって粘土を「U」字形に貼り付け、そこを火床としている。中央北寄りに幅15cmの排水溝があり、中には炭の小塊

の集積が認められた。もう1基は、長方形の土坑の壁面に粘土を貼り付け、その部分が被熱しており、南側小口に当たる部分には拳大の石が置かれていた。

これらの土坑の床面の粘土中には、0.5～1cm大の骨片と判断される有機質片が混じっている。この土坑の正確な用途はわからない。但し、このような被熱土坑は、山城の調査ではしばしば検出される。例えば、弥栄町教育委員会が今年度を実施した矢田城の調査では、土塁によって区画された建物跡に近接して検出されており、強く焼けた部分が認められることから、狼煙に関連した施設と考えられている。遠所城でも、丘陵最高所に位置し、島津地区の城館を一望できることなどか



第13図 集石遺構実測図(1/40)



第14図 被熱土坑実測図(1/40)

ら、狼煙をあげる施設であった可能性が高い。これら以外にも、16号墳墳頂で2基の土坑、2基の方形ピット、2基の円形ピットを検出しており、遠所城に関連した遺構と考えられるが、出土遺物はなく、用途も不明である。

5. 遠所A城と中世の島津

丹後の中世城館の調査は、加悦町を中心に進められてきたが、特に昭和53年の加悦町教育委員会による金屋比丘尼城の調査、さらに中島利雄氏によって『丹後国御檀家帳』が活字化されたことが大きい。この成果によって、『丹後国御檀家帳』の記載内容と地域ごとの城館、ならびに集落を比定する材料が整ったからである。網野町でも、『京都府遺跡地図』によると44か所の城館が記載されているが、発掘調査で確認されたのは、この遠所A城以外にはない。ここでは、まとめに代えて、島津地区に集中する城館を、中世の丹後地域の歴史の中で位置づけておきたい。

今回の調査と関連して、遠所A城の縄張図を作成した(第15図)。遠所A城では、西側に張り出す尾根端部を加工して、a・bの2か所の曲輪群が造られている。現状では、土塁及び石垣は確認できない。まず、aの構造を略述する。最高所を占めるIとIIが主郭であり、IIの中で最も高く造られているのが今回の調査地に当たる。IとIIの間には堀切があって、その底面レベルは、広いテラス状の曲輪IIIと連続する。この部分是一种の通路として機能したと思われるが、Iの側面は現状では若干くぼんでいて、横堀がある可能性もある。また、Iの北側斜面は切岸というほ



第15図 遠所A城縄張り図(1/1,000)

どではないにせよ、自然地形の急な斜面であり、堅堀と思われる痕跡がある。西側斜面には、IV・V・VI・VII・VIIIの小曲輪が敷設される。また、IXは広いテラスを造成しており、現在でも府道掛津・峰山線がこの部分で大きく湾曲することから、眼下をにらむしっかりとした建物が存在した可能性がある。bは、aと共通した構造で、aよりは小型であるが、主郭であるIとIIを堀切で区画し、通路を兼ねた広いテラス面IIIが回る。尾根端部には、小曲輪IV・Vが造られている。

ところで、この遠所A城の母体となった集落は、北側に対面する台地縁辺部に存在したと考えられる。平成7年度に実施された網野町教育委員会による横枕遺跡の調査では、中世前期の黒色土器及び木柱、さらに龍泉窯製の完形の青磁碗が出土している。また、その背後の山麓には大谷古墓があつて、五輪塔などが出土した。後述のように、鳥津地区の城館と横枕遺跡の出土遺物とは年代の開きがあるが、その周囲に遠所A城を支えた集団の平時の居住域が存在したことは、まず間違いのない。これをふまえて、遠所A城への登城ルートと推測すると、谷の緩斜面である(1)または(2)を詰めて、尾根に上がり、aとbの間は尾根線を移動したと考えられる。ただ、虎口と認められるような施設は見あたらなかった。

遠所A城の構造をまとめると、土塁・石垣はなく、堀切で画された二つの主郭と、尾根端部を加工した小曲輪とで構成されている。また、特に西側を中心とした防御・監視的機能を重視した造りとみることができよう。仮に、『加悦町の中世城館』⁽¹⁸⁾の分類に当てはめれば属性Vに該当し、

加悦町谷垣城と同じく、加悦町安良山城などと比較すれば、より古いタイプの山城とみることができよう。また、福島克彦氏は、夜久野町域の山城を検討した中で、この地域では単郭式山城が主体であり、村落との関係の深さを指摘するが、この遠所A城にも該当するようである。

文献史料によれば、中世の丹後地域の軍事的緊張関係の中で最も大きいのは、いわゆる「永正の兵乱」である。これは、丹後守護代延永春信と丹後守護一色氏の重臣であった与謝郡の石川直経の確執に端を発し、第1次(1503～1507年)と第2次(1516～1517年)の2度に及ぶ。さらに、天正8(1580)年には細川藤孝の丹後入国に伴って軍事的緊張関係があり、以後は平穏へ向かっていく。丹後地域に存在する中世城館が、地域ごとの度合いは異なるにしても、これらの兵乱と関連した可能性はある。特に、島津地区の場合、「永正の兵乱」と関連する可能性が高い。



第16図 石川氏の島津進出に伴う中世山城分布図(1/50,000)

『丹後国御檀家帳』をみると、鳥津の項には「しまのたかおと申城」に「森左京殿」「岡山小七郎殿」と並んで「石河中務丞殿」の名が見える。この「たかお」城は『京都府遺跡地図』に記載はないが、鳥津の南側にある愛宕山の東麓に「高尾」の小字名があり、この愛宕山腹には土塁や堀切をもつ「鳥津城」がある。この鳥津城は、鳥津の集落全域を見渡せる盟主的な位置を占め、高尾城がこれを指していた可能性は高い。

この石川氏の鳥津入城の正確な時期は、文献史料からはわからないが、元から鳥津に居住していたのではなく、他所から軍事的緊張を伴って移ってきた可能性が高い。この石河中務丞は、『丹後国諸庄郷保田数帳』では丹波郡倉富保・光富保に領地を確保しており、ここが本拠であったと考えられる。だが、『下平伝平氏所蔵文書』によれば、応永29(1422)年に丹後守護一色義貫が守護代延永土佐守に竹野郡鳥庄号(鳥津地区)位田領家方一円を沙汰したことがわかる。^(注8) つづいて、永正の兵乱では一色氏と延永氏の対立が激化し、特に第2次のもものでは、幕府が越前守護朝倉孝景と朽木種廣をも動員して、延永氏の城を落とす。鳥津においても、延永氏から石川氏へと支配が移るに伴って軍事的緊張が発生し、それが中世城館の密集となったという想定は無理のないことではない。

また、これを補強するためには、隣接する峰山町域の中世城館にも目を向ける必要がある。この鳥津から南へ向くと、網野町仲禪寺を介して峰山町橋木を通り、竹野川流域である峰山町矢田に抜けていく。この狭い谷には、生産基盤が弱いにもかかわらず、第16図に示したように中世城館が集中している。この中で、発掘調査されたのは中原城と矢田城のみである。矢田城では、まさにこの永正の兵乱の時期と合致する土師器皿・椀などが出土し、土塁・建物跡などが検出されている。また、橋木でも中世以前にさかのぼる縁城寺があり、争乱時には防衛的拠点として機能した可能性がある。

これらの想定をまとめると、永正の兵乱では、石川氏は与謝郡から竹野川流域を峰山町矢田まで進み、そこから現在の府道峰山・掛津線のルートを通して鳥津へと移ってきたのではなかろうか。その際に、延永氏支配下の在地領主と抗争が生じ、結果として石川氏が鳥津を支配するようになったのではなかろうか。鳥津に中世城館が集中することも、この石川氏の領域支配の伸張と密接に関係すると考える。

遠所A城の調査を機に若干の考察を行った。だが、丹後地域の中世城館の実態は不明な点が少なくない。詳細な縄張図の作成と考古学的な成果を対照し、その上で、『丹後国御檀家帳』をはじめとする文献史料と照合する作業が、益々必要となってくるだろう。

(河野一隆)

(2) 中原城跡

1. はじめに

中原城跡は、中郡峰山町橋木小字新蔵に所在する。今回の調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している丹後国営農地開発事業(橋木団地)に伴って実施した。中原城跡は、峰山から網野に向かう道が通る幅約100mの谷の樹枝状になっている東側の小丘陵群の東側小丘陵上平坦部に位置する(第17図)。この調査地の南西の丘陵には、古墳時代後期の新蔵古墳群が存在する。1988年度版『京都府遺跡地図』第1分冊第2版には、中世の山城「橋木城跡」の名称で記載されている。「中原城跡」という遺跡名称は、開発事業計画に伴って付けられた。調査は、平成7年5月23日に開始し、同年7月5日に終了した。調査面積は360㎡である。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富・同主任調査員竹原一彦・同調査員村田和弘が担当した。

2. 調査概要

調査は、南北に連なる2つの丘陵上の平坦部と丘陵斜面のテラス部分に幅1.5mの試掘トレンチを設定して調査を実施し、現地表から約10cmで地山面を検出したが、中原城に関連する遺構・遺物の発見はなく、面的な発掘調査には至らなかった。また、テラス部分でも同様の結果であった(第19図)。その他の時代の遺構としては、東南の丘陵の東方裾部・南方裾部の狭い平坦面で、壁面と底部が堅く焼けた土坑を2基検出した(第18図)。この焼土坑から多量の炭化物が検出されたが、遺物は出土しなかった。焼土坑の類例が峰山町内の西山支城の調査の際にも検出されており、戦前頃の簡易の炭焼き土坑であると報告されている^(註9)。これも、それと同じような炭焼き土坑と考えられる。

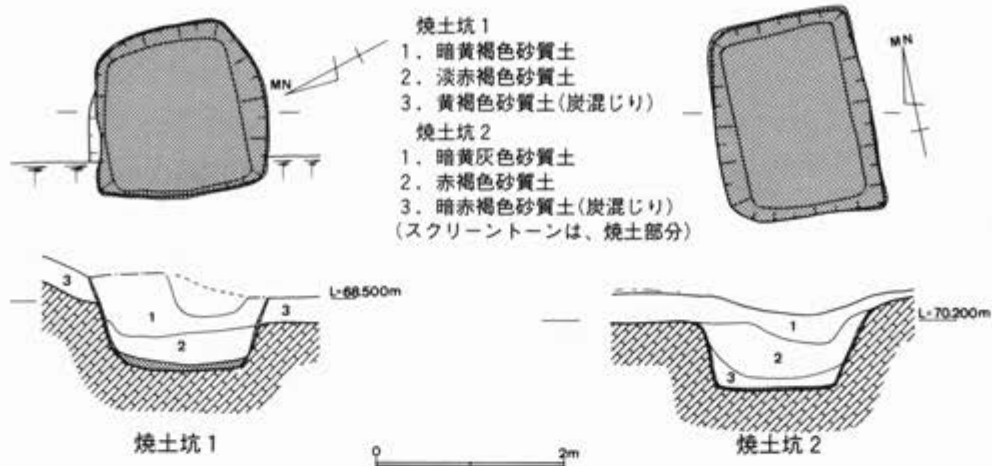
3. まとめ

今回の調査地は、「中原城」として連なる2つの丘陵上平坦部と丘陵斜面のテラス部分で試掘調査を実施したが、山城に関連する遺構・遺物は確認されなかった。検出したのは戦前頃の炭焼き土坑2基のみであった。城跡に関する

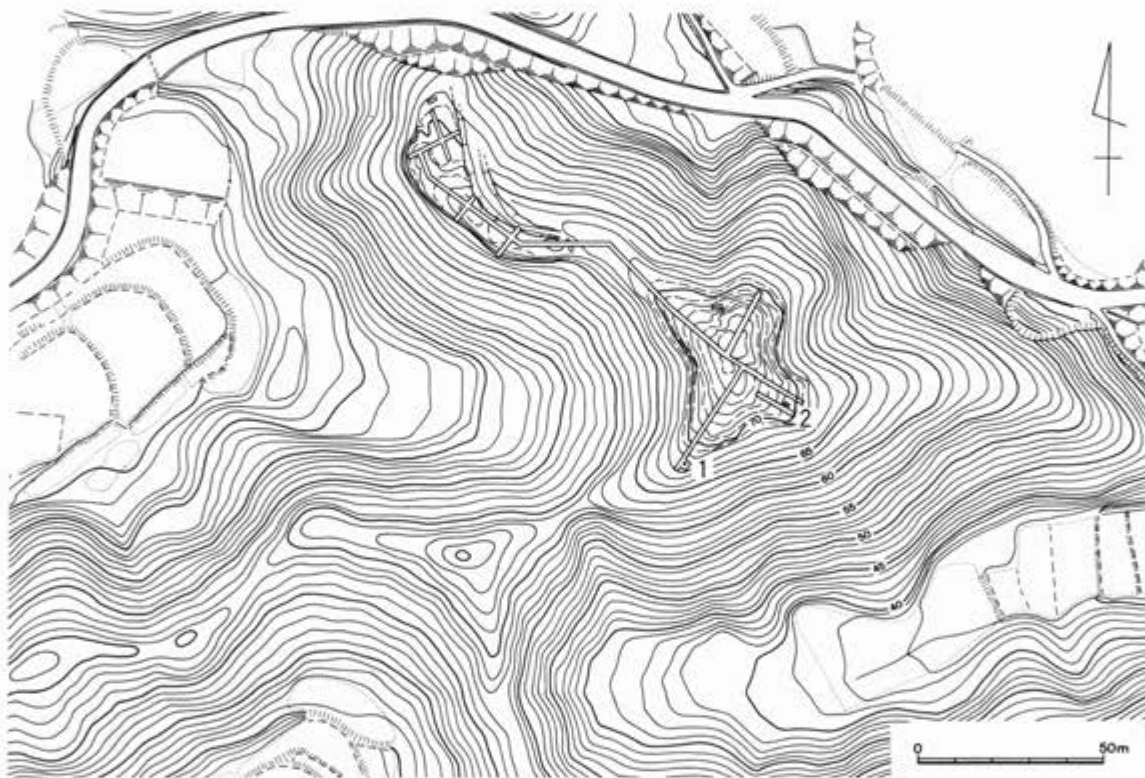


第17図 周辺遺跡地図(1/25,000)

- | | |
|--------------|-----------|
| 1. 中原城跡(調査地) | 2. 新蔵古墳群 |
| 3. 高尾坂古墳 | 4. 松田岡古墳群 |
| 5. 小鳥ヶ巣古墳群 | 6. 十三塚古墳群 |
| 7. 通蔵古墳 | 8. 妙ヶ谷古墳群 |



第18図 焼土坑平面・断面図



第19図 トレンチ配置図

遺構は確認されず、調査地内には中原城跡は存在しないと判断する。今回の調査結果によって、遺跡対象地内に中原城の遺構が存在しないことで、中原城の存在及び位置についても検討する必要がある。

(村田和弘)

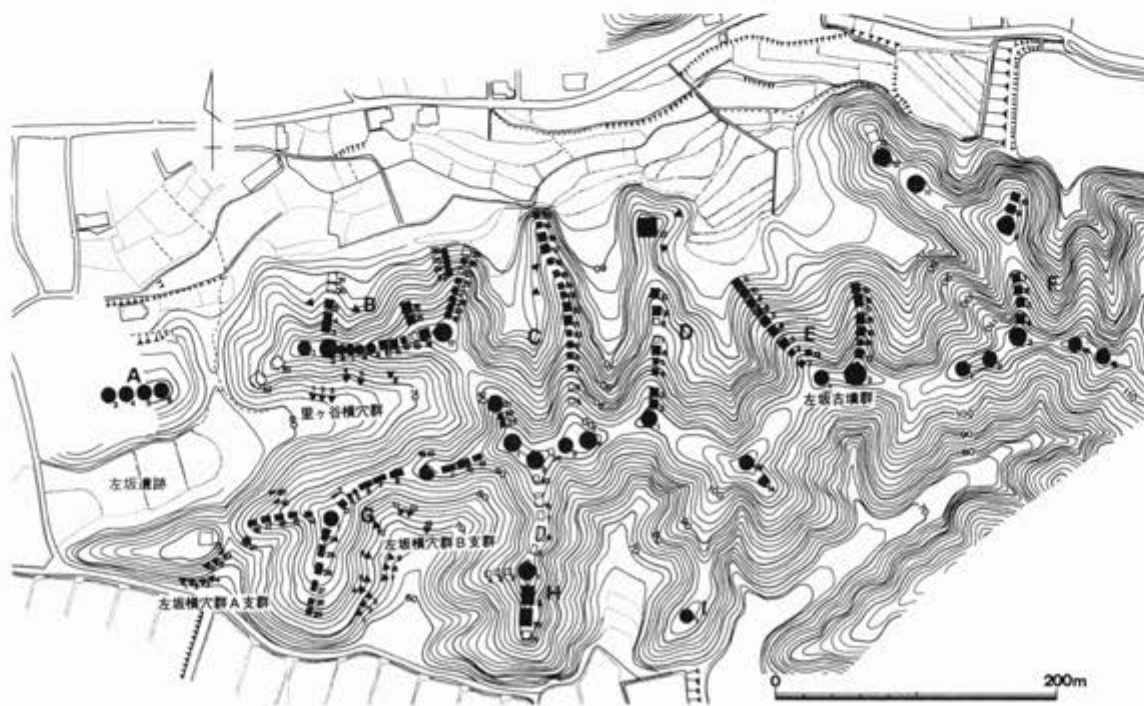
(3) 左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群

1. はじめに

周枳団地造成予定地内の調査は、平成2年度から開始した。これまでに京都府教育委員会・大宮町教育委員会・当調査研究センターの3機関によって、左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群・里ヶ谷横穴群の調査が実施された^(註10)。左坂古墳群は、総数150基を越える古墳群であり、これまでに約半数の古墳(墳墓)の調査を終えている。左坂古墳群の調査の結果、B～E支群の古墳は木棺直葬を主な埋葬施設とした古墳群で、4世紀後半～6世紀中葉に築造されたことが明らかとなった。

また、分布調査によって左坂古墳群G支群とした丘陵西部の支群は、古墳自体は少なく、弥生時代後期を中心とする墳墓群であることが判明した。墳墓は、稜線上だけにとどまらず、斜面でも地山の削り出しと盛り土によって平坦面を造り出して墳墓を築く。

今年度の周枳団地造成予定地内では、左坂古墳群G支群22号墳・同C支群6～13号墳・左坂横穴A支群3号横穴が調査の対象となった。左坂古墳群G支群22号墳は、過去の調査成果から弥生墳墓の可能性が強く、また、地表面に土饅頭・墓石の散乱がみられたことから、近世墓の存在も予測された。当初、左坂横穴A支群3号横穴は造成工事範囲外に位置していたが、切り土面が玄室をかすめることから、崩壊する危険性が高いと判断された。このため、関係機関・地権者の了解を得て、左坂横穴A支群3号横穴を調査対象に含めた。



第20図 左坂古墳群・左坂横穴群・里ヶ谷横穴群分布図

付表2 左坂墳墓群・古墳群調査回数一覧表

調査年度	遺跡名称	支群	番号	調査機関	備考
平成2年	左坂古墳群	B	5・15・16・18～29号墳	京都府教育委員会	12号墳は自然地形
		C	14～20号墳	京都府埋文センター	
		D	11・12号墳	京都府埋文センター	
		E	9～11号墳	京都府埋文センター	
平成4年	左坂古墳群	C	5～13号墳	京都府埋文センター	表土掘削のみ 左坂古墳群G支群 左坂古墳群G支群
	里ヶ谷横穴群		2～6号墳	京都府埋文センター	
	左坂墳墓群	G	15～18号墓	京都府教育委員会	
	左坂横穴群	A	4～6号横穴	京都府教育委員会	
	左坂墳墓群	G	1・14・24～2号墓	京都府教育委員会	
平成5年	左坂古墳群	B	1～4・6・8・9・33	京都府埋文センター	2号墳から石棺
		C	21～23号墳	京都府埋文センター	
		G	10～13号墳	京都府埋文センター	
	左坂横穴群	B		京都府埋文センター	
平成6年	左坂古墳群	B	10～14・17号墳	京都府埋文センター	一部遺構検出
		C	6～13号墳		

現地調査は、造成工事計画に沿い、左坂古墳群G支群22号墳・左坂横穴A支群3号横穴を先行して調査を行い、左坂古墳群C支群は22号墳・3号横穴の調査終了を待ち着手した。左坂古墳群G支群22号墳・左坂横穴A支群3号横穴は平成7年4月17日～同年7月12日の間で、また左坂古墳群C支群は平成7年7月7日～同年8月8日の間で調査を実施した。現地調査は、調査第2課調査第1係長伊野近富・同主任調査員竹原一彦・同調査員石崎善久と村田和弘が担当した。調査面積は、左坂古墳群G支群22号墳・左坂横穴A支群3号横穴が約280㎡、左坂古墳群C支群は約1,300㎡であった。

2. 位置と環境

左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群は、京都府中郡大宮町周積小字左坂に所在する。この地は、丹後半島を南北に貫流する竹野川中流域に広がる沖積平野南部の東側丘陵部に位置し、丘陵尾根線上に古墳群と墳墓群、丘陵斜面部に横穴群が分布する。東から西方向にのびる丘陵は幾つかの支尾根に分岐する。西部に位置する左坂古墳群G支群には、弥生時代中期～後期の墳墓で構成される左坂墳墓群が展開する。また、各支尾根の稜線上には総数約150基を越える古墳群(A～I支群)が存在するほか、丘陵南側斜面に左坂横穴群(A・B支群)・里ヶ谷横穴群が展開する。このような遺跡のあり方から、この丘陵は弥生時代～奈良時代を中心に、墓域として常に利用されてきたことが明らかになりつつある。

竹野川流域で人々の活動の痕跡が顕著になるのは弥生時代からである。峰山町途中ヶ丘遺跡・扇谷遺跡をはじめ、弥栄町奈具遺跡・奈具岡遺跡・奈具谷遺跡など、拠点集落遺跡の調査が実施されている。墳墓では、中期の貼石墓が検出された奈具遺跡、大量のガラス製小玉や素環頭大刀が副葬されていた弥生時代後期の大宮町三坂神社墳墓群・左坂墳墓群などが調査されている。

古墳時代では、竹野川流域に総数約2,200基にのぼる古墳が築造されている。前期末葉の首長

墓として、峰山町カジヤ古墳が築造される。カジヤ古墳は、長径70mの大型円墳に竪穴式石槨1基・木棺直葬3基を埋葬主体にもち、方格渦文鏡のほか石釧・車輪石・楕形石などの石製腕飾類を副葬した畿内色の強い古墳であるが、墳丘には葺石・埴輪はない。丹後半島の大型前方後円墳としては、野田川流域の加悦町蛭子山1号墳(全長約145m)が築かれ、次いで臨海型前方後円墳の網野町銚子山古墳(全長約200m)・丹後町神明山古墳(全長約190m)が築造される。これら3古墳は、葺石・埴輪をもつ畿内色の強い古墳であるが、埴輪自体は丹後型と呼ばれる地域色の強い埴輪である。中期前半には弥栄町黒部銚子山古墳(全長約105m)・峰山町湧田山1号墳(全長約100m)など、100m前後の前方後円墳が築造されるが、それ以降は前方後円墳の築造が衰退していく。



第21図 大宮町主要遺跡分布図(1/25,000)

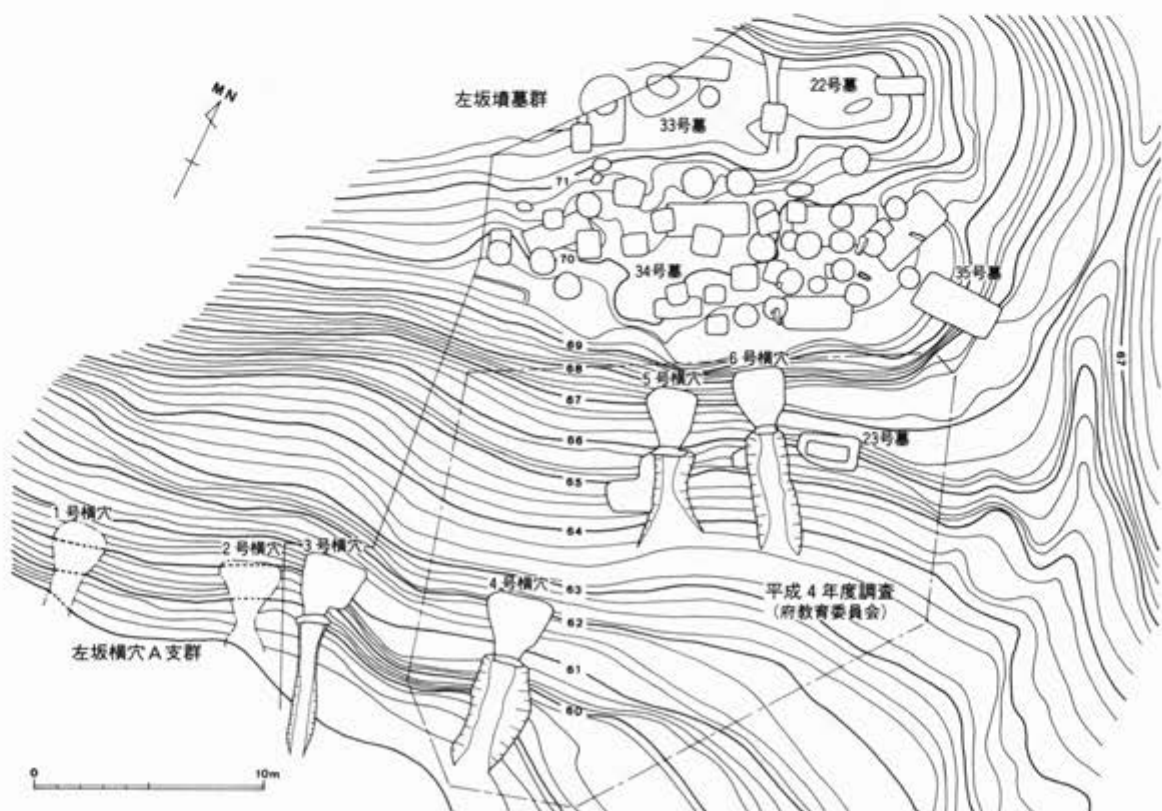
- | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-----------|-----------|
| 1. 小池古墳群 | 2. 清瀆古墳群 | 3. 外尾古墳群 | 4. 幾坂古墳群 | 5. 左坂古墳群 |
| 6. 帯城墳墓・古墳群 | 7. 有明古墳・横穴群 | 8. 三坂墳墓群 | 9. 荒神山古墳群 | 10. 裾谷古墳群 |
| 11. 枯木谷遺跡 | 12. 山本古墳群 | 13. 枯木谷古墳群 | 14. 小中野遺跡 | 15. 奥大野遺跡 |
| 16. 宮ノ森古墳群 | 17. 黒田古墳群 | 18. 新戸古墳群 | 19. 谷内遺跡 | 20. 裏陰遺跡 |
| 21. 正垣遺跡 | | | | |

中期以降の首長墓として、中期初頭の大宮町大谷古墳(円墳・径約30m)・中期中葉の丹後町産土山古墳(円墳・径約50m)・弥栄町ニゴレ古墳(方墳・一辺約30m)など、中型の円墳・方墳が築かれるようになる。これらの首長墓は、その支配領域が広範囲に及んだとは考えられず、小地域を単位とする首長墓と判断される。これら単独で立地する首長墓とは別に、丹後地域では丘陵の稜線上に連続して築かれる明瞭な墳丘を持たない小規模古墳が各地に築かれている。大宮町内では、左坂古墳群・有明古墳群・帯城古墳群・小池古墳群などがある。大宮町内では、左坂古墳群の周辺部でこうしよ古墳群・小林古墳群など、数基単位の横穴式石室をもつ古墳群が築造される。また、奥大野に所在する新戸1号墳は、巨石を使用した横穴式石室をもつ前方後円墳(全長約36m)であり、丹後における最後の前方後円墳として認識されている。

古墳時代後期の埋葬施設としては、先に記したような小規模古墳群のほかに、丘陵斜面部に横穴が多数築かれる。横穴の分布は、竹野川の上流・中流域に分布の中心が認められる。これまでに32群130余基の横穴が確認されている。左坂古墳群の周辺には左坂横穴群・里ヶ谷横穴群・有明横穴群・太田鼻横穴群が存在し、それぞれ10~10数基の横穴で群を構成している。これらの横穴は、6世紀後半~7世紀初頭に築かれ始め、7世紀に最盛期を迎えて8世紀まで継続する。

3. 左坂墳墓群(左坂古墳群G支群22号墳)

今回の調査地は、左坂古墳群G支群22号墳とされた丘陵稜線上と南側斜面が対象となった。また、南側斜面の下位には左坂横穴A支群3号横穴が存在している。調査着手時点では、丘陵の東



第22図 左坂墳墓群・左坂横穴A支群遺構配置図

側と南側は、すでに造成工事によって大きく切り取られていた。調査の結果、丘陵稜線上と直下の平坦部から近世墓45基の存在を確認するとともに、弥生墳墓4基を検出した。調査中に、流土層の中から、須恵器の杯身の小破片が少量出土したが、古墳時代の遺構は存在しなかった。

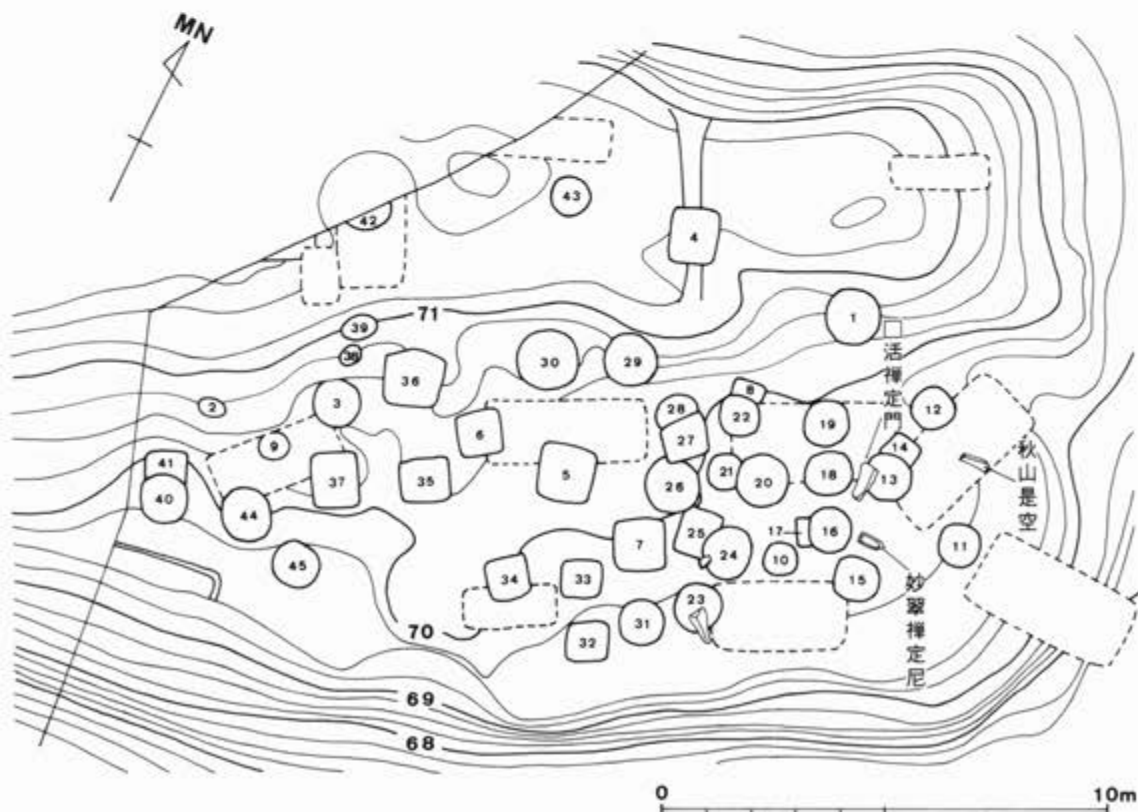
(1)近世墓の調査

①検出遺構(第23図)

丘陵尾根の稜線上から一段下がった南側斜面部の平坦地にかけて、45基にのぼる近世墓を検出した。近世墓は、後に報告する34号墓とした弥生墳墓の平坦地を中心に分布が認められる。近世墓の造成にあたって、上部に位置する弥生墳墓の22・33号墓の南半部を削り、弥生墳墓の34号墓の南及び東南方向に盛り土し、平坦地の拡張を行って墓地を築いていることが明らかになった。近世墓は、当初10基程度とみていたが予想を大きく上回る結果となり、限られた調査期間などの関係から、すべての近世墓の調査は不可能と判断された。そのため、基数の確認を行うとともに、一部の近世墓について完掘調査を行った。

近世墓は、掘形の平面形が円形・方形・楕円形の3形態が認められる。規模に関しては、大型と小型の2種類が認められ、このうち小型の墓壙は楕円形掘形に限定される。

大型の墓壙掘形は、直径もしくは一辺が1.0~1.2m規模であることから、成人墓と判断される。一方、小型の墓壙掘形は長径0.5~1m×短径0.5~0.7mであることから小児墓とみられる。成人墓とした大型墓壙は、極めて深く垂直に掘り下げられる傾向にあり、多くの墓壙は地表下1.5m以上の深さをもつ。完掘した近世墓の中で最も深い墓壙は、3号近世墓であり、墓壙底は地表



第23図 近世墓群平面図

下2.6mに達する。比較的浅い墓壙としては、地表下1m前後で終わる例(6・7・28号近世墓)も確認されている。小児墓とした小型墓壙(2・38・39号近世墓)は掘り鉢のように掘り下げられ、深さは地表下1m以内である。

成人墓では、完掘したすべての墓壙底から人骨が出土している。骨格・歯の状態からみて、青年～老年までの幅広い各年代の男女が、この地に埋葬されていることが明らかになった。一方、小児墓では、人骨の検出はみられない。特異な例として、8号近世墓から火葬骨が少量出土している。

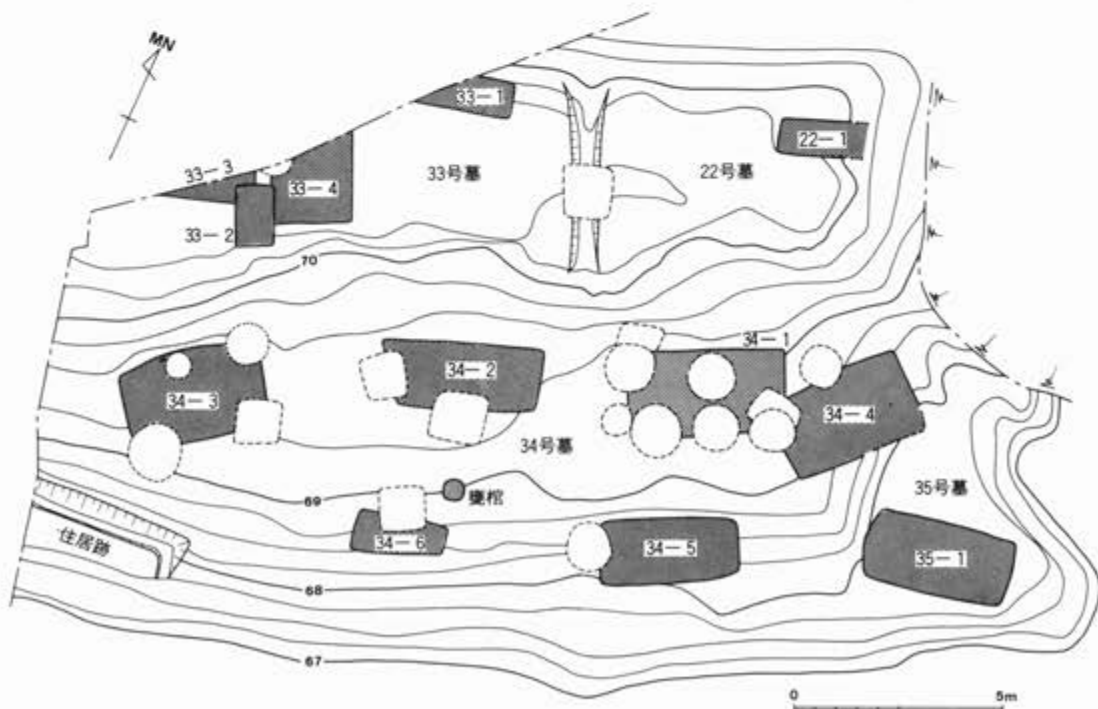
近世墓に伴う外部施設として、近世墓が集中する平坦地の北東部地表面に墓石が散乱していた。銘の刻まれた墓石として、「□活禪定門一元禄十二・十月十六日」・「妙翠禪定尼一元禄十五年・十二月廿七日」・「秋山是空」の3基が存在していた。このうち、「□活禪定門」銘の墓石は13号近世墓直上で、傾きながらも立った状態にあった。この13号近世墓では成人男性の人骨が遺存していた。

②出土遺物

墓地の表土層中から、土師器皿・染付・唐津皿が出土している。また、墓壙内では、3号近世墓から漆器の被膜(漆)、14号近世墓から銅銭6枚、19号墓から貝殻(シジミ貝か)が出土した。

(2)弥生墳墓の調査

当初、左坂古墳群G支群22号墳とされていたが、調査の結果、尾根稜線上から2基の台状墓、南側斜面を階段上に平坦面を削り出した台状墓2基、合計4基の台状墓を検出した。台状墓は、後世の近世墓地造成に伴う地形改変を受けていることから、特に丘陵稜線上の台状墓(22・33号墓)は築造当初の姿をとどめていない。尾根稜線上の2基の台状墓のうち、東側台状墓は古墳番



第24図 弥生墳墓群平面図

号と同じく22号墓とした。今回、新たに検出した3基の台状墓については、新たに過去の調査の墳墓番号に続く33・34・35号の番号を、丘陵上部の墳墓から下位の墳墓に付けた。

A. 22号墓

丘陵頂部の左坂古墳群G支群1号墳から西方に向かって舌状にのびる尾根の、ほぼ中央部稜線上(標高71.5m)に位置する。22号墓の東側は尾根の鞍部であり、東から下降してきた尾根の稜線は22号墓を境に、西側に向かって傾斜の度合いがゆるやかになる。22号墓と西に隣接する33号墓の間には、稜線に直交する区画溝が設けられている。台状墓は、南側の大半が削られており、平坦部はほぼ失われている。規模に関しては、稜線方向が約6.5m・幅約5m、高さは西側区画溝の底部から現地表まで約1mを測る。台状墓は、削りと盛り土によって方形に築かれていたと判断される。

①検出遺構

墳頂部の北部から1基の埋葬主体部を検出した。また、台状墓の南西側に区画溝を検出した。主体部は木棺直葬であり、長軸方向の北東部が失われている。墓壙掘形は長方形であり、長軸の残存長約2.3m・幅約1.1m、検出面からの深さは約0.6mを測る。墓壙の掘削中に、墓壙底の上約0.2mで棺の位置を示す土色変化を確認した。木棺は、2枚の側板と2枚の小口板からなり、小口板は側板の両端部に設けられている。木棺幅は約0.6m、残存長は約1.55mである。

区画溝は、検出面で幅約0.6m・深さ約0.3mを測る。丘陵稜線上はほぼ水平に、斜面部は傾斜に合わせて地山を掘り下げている。また、稜線上の溝幅に対して、斜面下部では幅が約1mに広がられている。

②出土遺物

表土掘削に伴い、主体部の上部から高杯の破片が出土したほか、棺内から甕の破片が出土した。棺内出土の甕破片は、墓壙底から遊離していたことから、当初は棺上にあったと判断される。

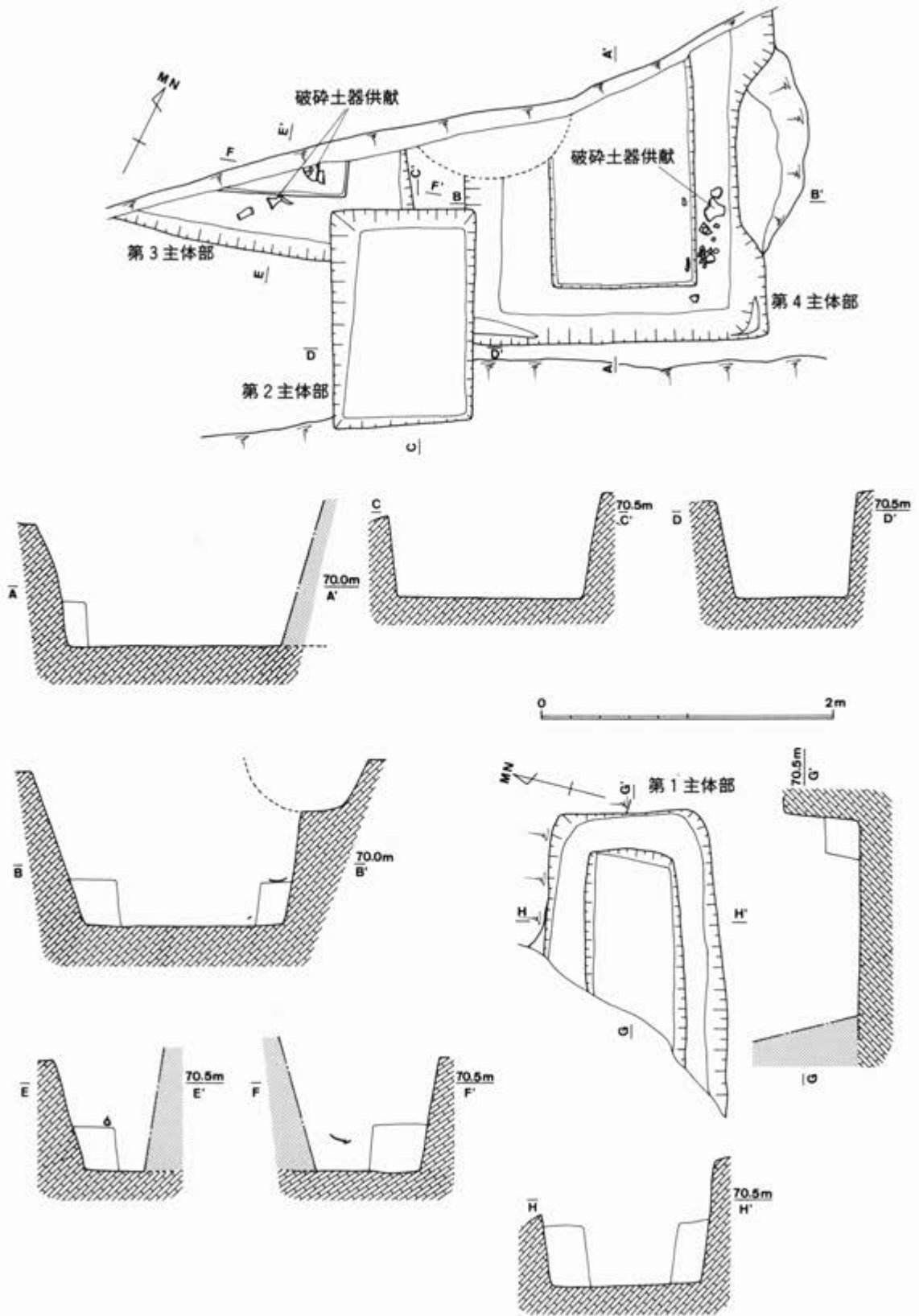
B. 33号墓

丘陵尾根稜線上の標高約71.3m、22号墓の南西に位置する。22号墓と同様に台状墓の南東部が削り取られている。台状墓の西半部が調査範囲外に位置することから、全容は不明であるが、稜線上には平坦面が認められる。調査地内の平坦部から3基、斜面上部から1基の埋葬主体部を検出した。検出した4基の主体部のうち、第2主体部は土壙墓であるが、他の3基は木棺直葬である。

①検出遺構

第1主体部 台状墓の北西部にあり、平坦面の端部斜面に位置する。長軸は、尾根稜線に平行する。主体部の南半は調査範囲外にのびる。長方形を呈する墓壙掘形は、幅約1.2m・長軸約2.1m分を検出した。墓壙底はほぼ水平で、検出面からの深さは約0.7mである。墓壙底から約0.3m上で木棺位置を示す土色変化を認めた。木棺幅約0.7m・長軸約1.5m分を検出した。木棺の小口板は、側板の端に設けられている。主体部に伴う遺物の出土はみられない。

第2主体部 平坦部中央付近の東部で検出した土壙墓で、第3・第4主体部を切っている。墓壙の長軸は尾根稜線に対して直交する。墓壙掘形は全長約1.5m・幅約1.0m、検出面からの深さ

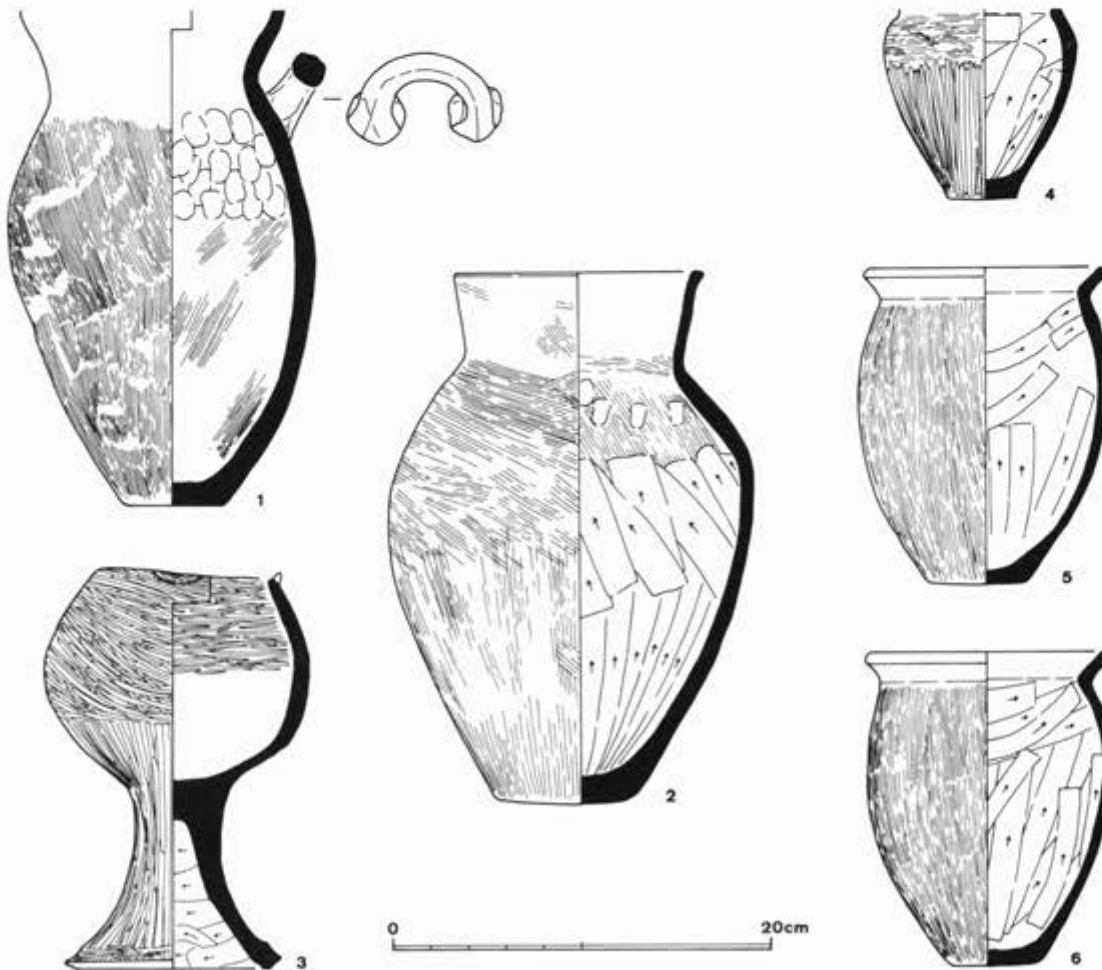


第25图 33号墓第1～第4主体部实测图

は約0.6mを測る。墓壙底はほぼ水平で、中央部付近から破碎された甕(第26図6)が出土した。主体部内から破碎された土器が出土する事例は、丹後・但馬の弥生時代後期の墳墓に多く認められ、「破碎土器供献」^(註1)と認識されている。

第3主体部 平坦部中央付近に位置する主体部で、長軸は尾根稜線にほぼ平行する。主体部の大部分は調査範囲外となり、東側コーナー部分を検出したのにとどまった。また、墓壙の隅部分は第2主体部に切られている。大型の主体部と判断されるが、全体規模は不明である。墓壙底の深さは、墓壙検出面から約0.8mを測る。墓壙底の上約0.3mで棺痕跡を検出した。棺の周囲には、他の墓壙埋土と異なる淡黄灰色のバイラン土を、棺材の裏込め土としている。木棺の小口板は、側板の小口部分に設けられている。棺上及び裏込め土の上面に破碎土器供献が認められた。破碎土器(第26図1～4)としては、水差し・壺・脚付片口鉢・甕が出土している。

第4主体部 平坦面の北東部に片寄って検出した主体部で、長軸は尾根稜線に直交する。主体部の西半部は調査範囲外にのびて、東半部分を検出したのにとどまった。また、墓壙の一部は第2主体部と近世墓に切られている。墓壙掘形は幅約2.1mで、長軸方向に約2.3m分を検出している。墓壙底は、平坦で南から北方向にやや下がる。検出面から墓壙底まで約0.9mを測る。墓壙底の上約0.3mで木棺痕跡を確認した。木棺幅は約1mを測る。長軸は約1.6m分を検出したが、全長



第26図 33号墓第3主体部出土遺物実測図

は不明である。他の主体部と同様に、木棺の小口板は側板の端に設けられている。墓壙東隅の裏込め土の上面に破碎土器供献が認められた。破碎土器として甕(第26図5)が出土した。

②出土遺物(第26図)

検出した4基の埋葬主体部のうち、第2～4主体部から土器が出土した。いずれも、埋葬過程で供献された土器であったが、ほぼ完形復原が可能であった。

水差し(1)は、壺(2)とはほぼ同一形態であるが、肩部に把手を貼り付ける。また、内湾ぎみの口縁部には、把手の反対側に片口をもつ。肩の張らない体部の最大幅は中央のやや上に位置する。体部外面と内面の下半部はハケメ調整する。口径14.0cm・器高26.9cmを測る。壺(2)は、直線的に立ち上がる口縁部がやや外傾し、端部に面をもつ。内外面はハケメ調整し、体部内面は下半部をヘラケズリする。口径13.2cm・器高28.0cmを測る。鉢(3)は、高さのある脚をもつ片口鉢である。体部は、丸みが強く、口縁端部に小さな片口が付く。「ハ」の字に開く脚の端部は面をもつ。外面と体部内面の上半は、ていねいなヘラミガキを施す。口径9.2cm・器高21.2cmを測る。甕(4～6)は、体部内面を頸部までヘラケズリする。体部外面はハケメ調整するが、4の体部下半は、ヘラミガキする。口縁部の形態は、5・6が「く」の字に外反する単純な口縁であるが、4は外反の度合いが強く、端部も上方につまみ上げる。口径は、4が9.6cm、5・6が12.2cm前後を測る。器高は、4が10.8cm、5・6が16.6cm前後を測る。

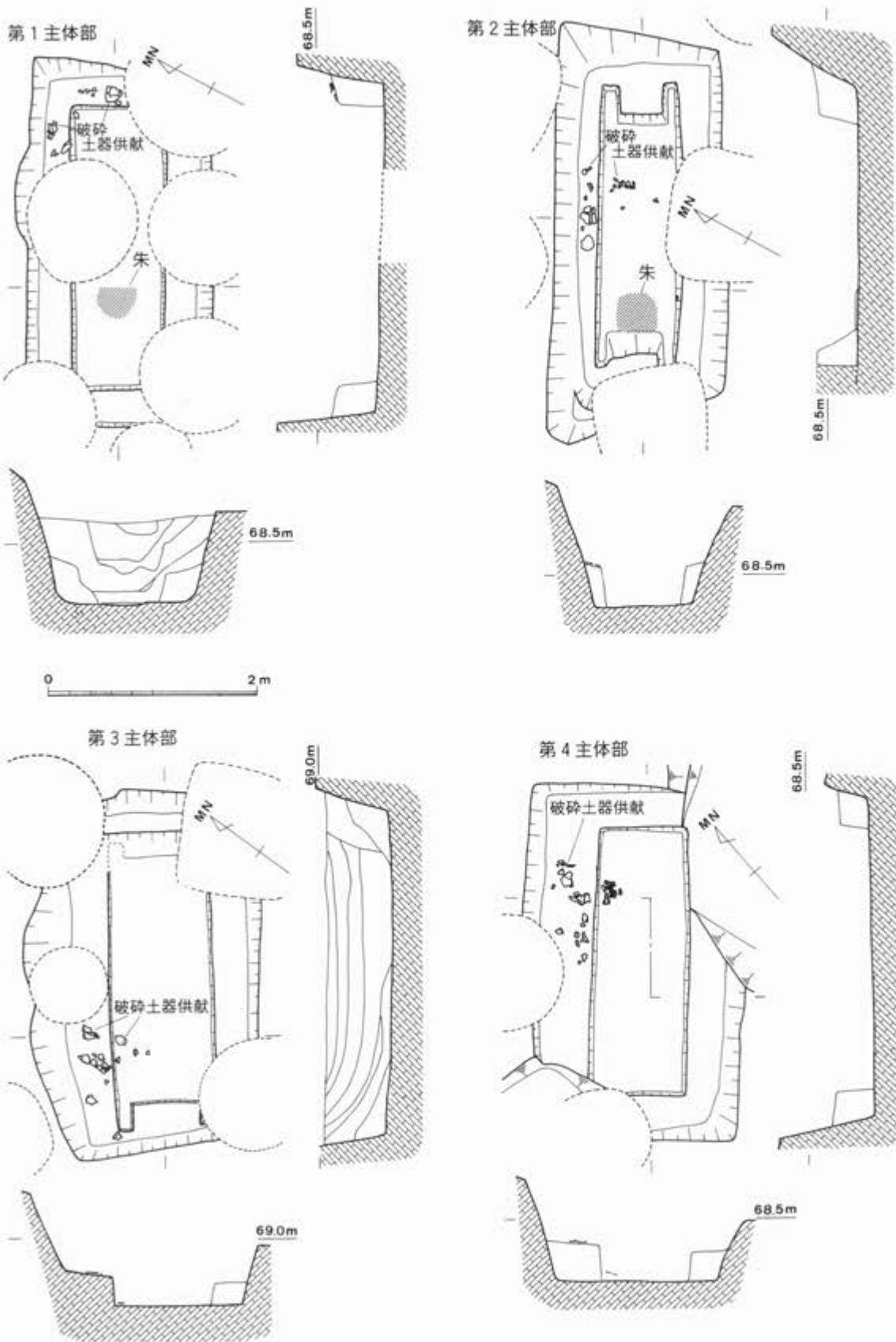
C. 34号墓

丘陵尾根の南側斜面部、22・33号墓から1段下がった標高約70m付近に位置する。北東から南西方向に長軸をもつ平坦面を墓域とし、全長約19m×幅約6.5mの規模を測る。平坦面上から7基の埋葬施設を検出した。このうち6基は木棺直葬であるが、1基は甕棺墓である。木棺直葬墓のうち、4基(第1～第4主体部)は、平坦面北端の登り傾斜変換線に沿って築かれている(第1列)。残る2基(第5・第6主体部)は、平坦面南端の下り傾斜変換線に沿って築かれている(第2列)。この第5・第6主体部は、墓壙底の位置がほぼ第1～第4主体部と同様なレベル高であることから、34号墓に伴う埋葬主体部と判断した。甕棺墓は、平坦面の中央部やや西寄りで見出した。また、第3主体部の南側斜面から、住居跡床面とみられる小規模な平坦面を検出している。

①検出遺構(第27～29図)

第1主体部 第1列とした北端に位置する一群の埋葬施設のうち、東から2基めの埋葬主体部である。長方形を呈する墓壙は、傾斜変換線に主軸を合わせ、全長約3.3m・幅約1.75m、検出面から墓壙底まで約0.8mを測る。墓壙底から約0.4m上位で棺痕跡を検出している。木棺規模は、全長2.7m・幅0.85mを測る。棺の小口板は側板の端に設けられている。棺内の墓壙底の中央部からやや西側に片寄って、直径約0.4mの範囲に朱の広がり確認されている。朱の検出位置・墓壙底の傾斜などから、被葬者の頭位は棺の西側と判断される。木棺の裏込め土の上面(足元)には、甕による破碎土器供献が認められた。

第2主体部 第1主体部の南西に位置し、直列状況にある。墓壙は全長約4m・幅約1.7m、検出面から墓壙底まで約1.2mを測る。墓壙底から約0.4m上位で棺痕跡を検出している。木棺は、

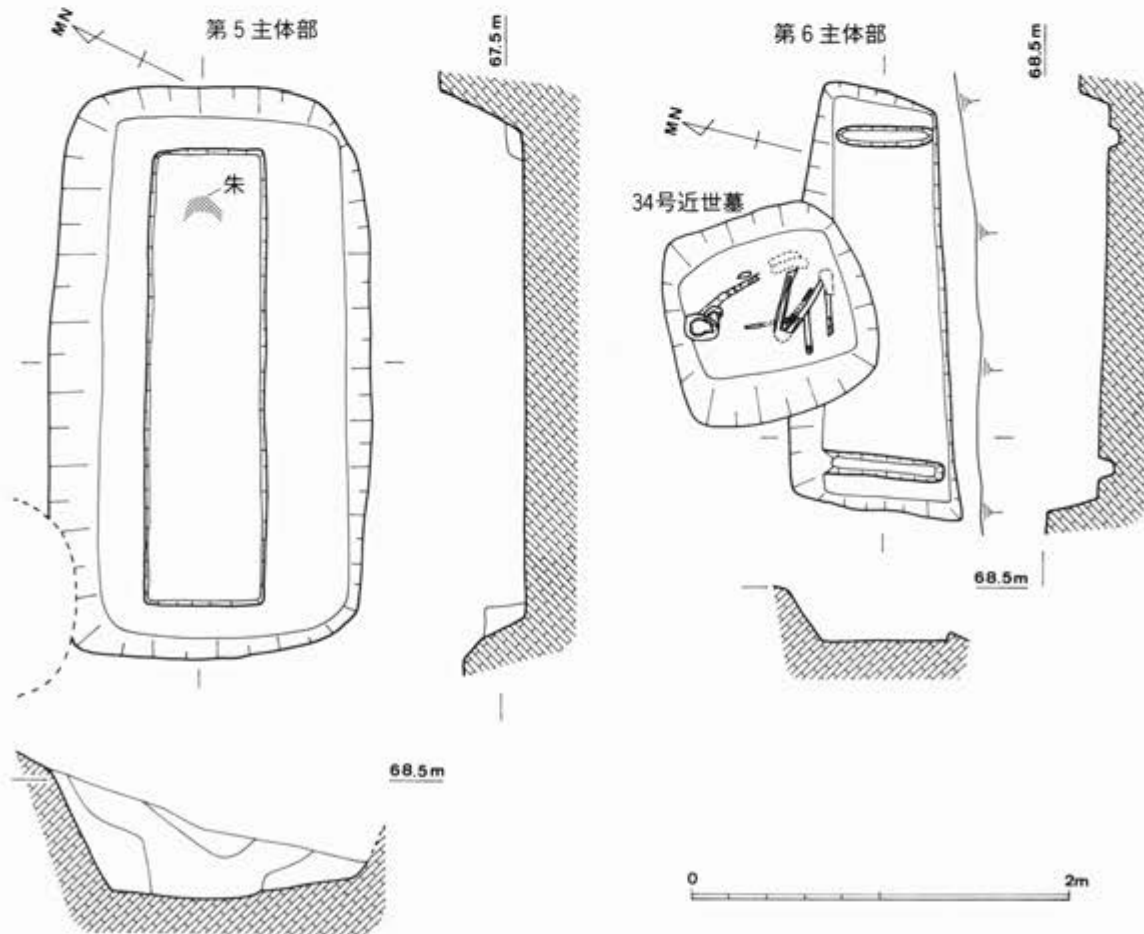


第27図 34号墓第1～第4主体部実測図

小口板が側板の内側に入ることから、平面形が「H」形を呈する。小口の形状から、棺材には10cm前後の厚みをもつ板材が使用されたと判断される。棺の両小口間は約2.2m・棺幅は約0.8mを測る。また、側板の全長は約2.6mを測る。棺内底面の南西側小口付近に、朱の広がりが認められた。被葬者の頭位は、南西と判断される。棺の左側裏込め土上面に、甕(第30図8)による破碎土器供献が認められた。また、墓壙検出段階で高杯の破片が数点出土したことから、墓上でも土器の供献があったと判断される。

第3主体部 第2主体部の南西に位置する。墓壙は全長約3.6m・幅約2.2m、検出面からの深さは約0.6mを測る。墓壙底は、西側のみ二段に地山を掘り下げる。墓壙底から約0.4m上位で棺痕跡を検出している。木棺は、小口板が側板の内側に入ることから、平面形が「H」形を呈する。小口の形状から、棺材には10cm前後の厚みをもつ板材が使用されたと判断される。棺の両小口間は約2.5m・棺幅は約1mを測る。また、側板の全長は約2.7mを測る。棺の西隅付近の棺側部を中心に、甕(第30図7)による破碎土器供献が認められる。

第4主体部 第1主体部の東に位置する。墓壙は全長約3.7m・幅約1.4m、検出面から墓壙底まで約1mを測る。墓壙底から約0.45m上位で棺痕跡を検出している。木棺規模は、全長2.5m・幅0.9mを測る。棺の小口は、側板の端に設けられている。棺の北西隅部の裏込め土上面で甕(第30図9)による破碎土器供献が認められた。



第28図 34号墓第5・第6主体部実測図

第5主体部 第2列とした斜面部上端にあり、第1主体部と並走する。墓壙は全長約3.0m・幅約1.7m、検出面からの深さは約0.6mを測る。墓壙底から約0.2m上位で棺痕跡を検出している。木棺規模は、全長2.4m・幅0.65mを測る。棺の小口は側板の端に設けられている。棺底部の北東部から朱の広がり(三日月状)が認められた。棺内・棺側に遺物はみられないが、墓上付近から大型口縁をもつ壺の破片が出土している。

第6主体部 第5主体部の南西に位置する。墓壙は他の主体部より小型で、全長約2.3m・幅約0.9m、検出面からの深さは約0.3mを測る。墓壙底の両小口部に長さ約0.65m・幅約0.1mの溝が掘られている。両溝間は約1.6mを測るので、棺の全長もほぼ同規模と判断される。墓壙底は平坦であるが、西から東にゆるやかに下がる。出土遺物はみられない。

甕棺墓 34号墓のほぼ中央部、第2・第6主体部の間から検出した。大型の甕(第30図2)を棺に使用し、高杯(同1)を蓋としている。甕より一回り大きな掘形は、直径約0.4mを測る。棺内には土砂が充填しており、人骨・遺物は含まれていない。

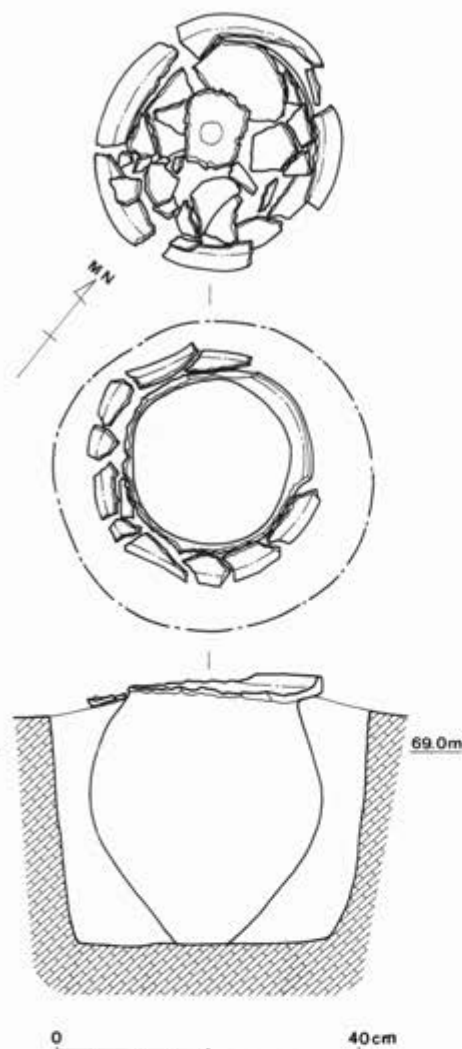
住居跡 34号墓の南西部、丘陵斜面に位置する。

斜面を水平に掘り下げ、長さ約2.6m・幅約0.7mの方形の平坦面を削り出す。平坦面は、西側の調査範囲外にのびることから、全体規模は不明である。平坦面の周囲には幅約0.3m・深さ約0.05mの溝をめぐる。調査地壁面観察の結果、平坦面は検出範囲以上に南にのびることが判明し、幅約2m分を確認した。

②出土遺物(第30図)

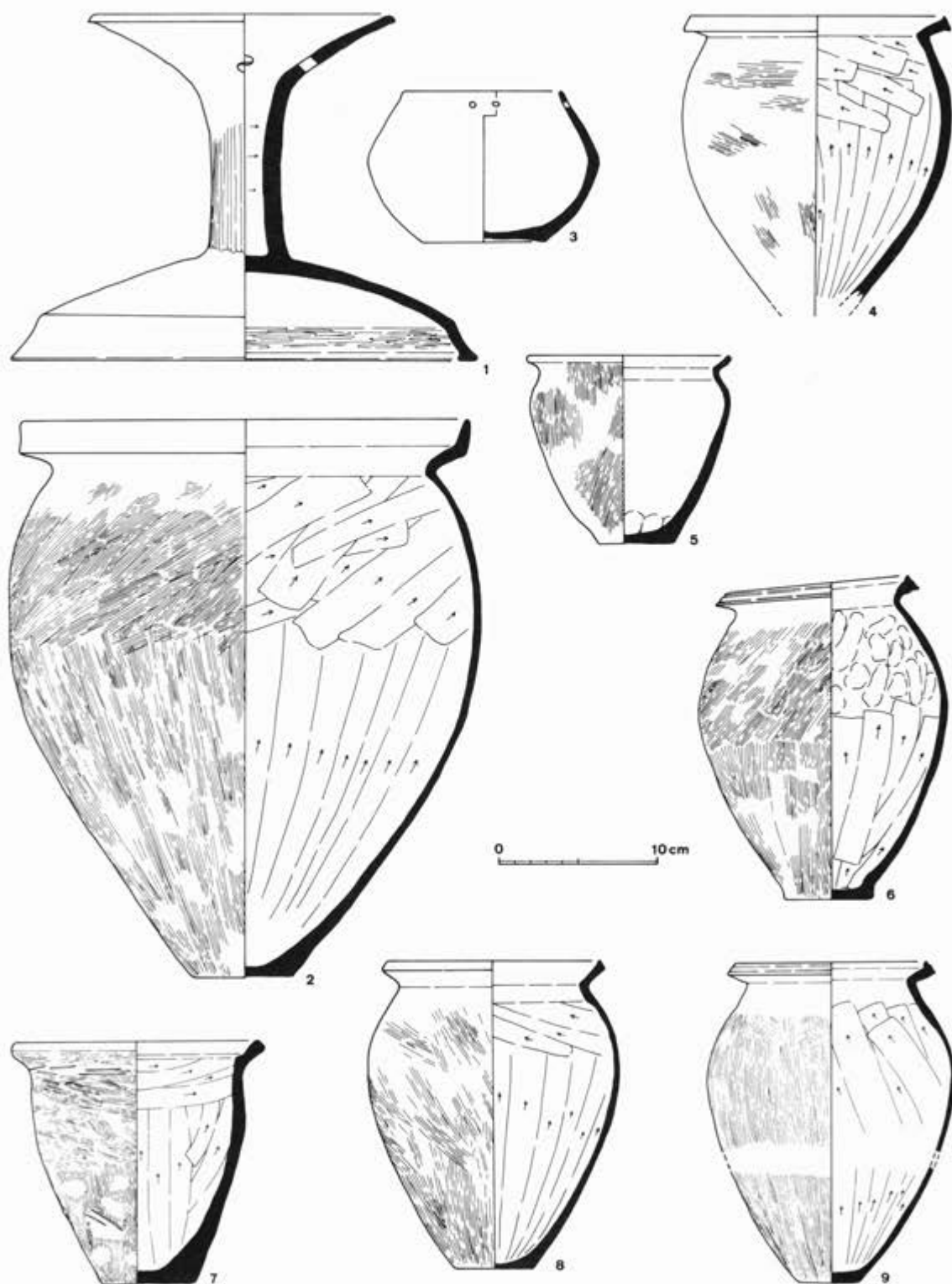
墳丘盛り土内(墓上か?)及び木棺直葬・甕棺の埋葬主体部に伴って、弥生時代後期前半の土器の出土をみている。甕棺墓に伴う甕と高杯以外は、すべて供献土器と判断される遺物である。供献土器には無頸壺・高杯・甕が認められ、このうち棺上・棺側部から出土した土器はすべて破砕行為を受けている。主体部に伴う土器としては、第3主体部棺上・棺側から甕(7)、第2主体部棺上・棺側から甕(8)、第4主体部棺上・棺側から甕(9)を図化した。無頸壺(3)と甕(4~6)は、墳丘盛り土内からの出土である。なお、高杯1は甕棺の蓋であったことから、今回の報告では逆位置で図化した。

高杯(1)の杯部は浅く、柱状の脚柱部から脚部がラッパ状に大きく開く。口縁部はアクセント



第29図 34号墓甕棺実測図

をつけて外上方に立ち上がり、端部は内側に肥厚させる。胎土は精良で、脚内面を除きいねいにヘラミガキを施す。口径は29.5cm、器高は21.7cmを測る。甕棺の蓋として使用されていた。甕(2)は、二重口縁の大型甕である。口縁部は一度「く」の字に外反した後、屈曲して上方に大きく立ち上がる。体部の器壁は薄く仕上げ、ケズリは頸部に達している。体部下半に縦方向のハケ



第30図 34号墓出土遺物実測図

メ、上半部に斜め方向のハケメを施す。口径は28.1cm・器高は34.9cmを測る。甕棺として使用されていた。無頸壺(3)は、盛り土から出土している。体部は肩が張り、口縁端部は丸く納める。口縁端部からやや下がった位置に2個1対の紐穴をもつ。底部は上げ底である。胎土は精良である。口径は9.8cm・器高は9.5cmを測る。甕(4)は、口縁端部を上下に肥厚させる。体部外面はハケメ調整し、内面のヘラケズリは頸部にまで達している。口径15.8cm・残存高18.2cmを測る。甕(5)は、肩部にアクセントをもつ甕である。体部外面はミガキを施し、内面のヘラケズリは頸部に達している。口径12.7cm・器高11.9cmを測る。甕(6・9)は、吉備系の甕である。口縁端部を拡張し、端面に2条の擬凹線を施す。体部外面はハケメ調整し、内面のヘラケズリは頸部に至らない。体部外面には多量のススが付着している。口径11.6~12.1cm・器高20cm前後である。甕(7)は、体部の丸みの少ない甕である。口縁部内側は強いナデにより有段をもつ。胎土は粗く、体部外面はハケメ調整し、内面はヘラケズリが頸部にまで達している。口径は15.4cm、器高は15.3cmを測る。甕(8)は、口縁端部を短く上方につまみあげる。体部外面はハケメ調整し、内面のヘラケズリは頸部に至らない。

D. 35号墓

34号墓の東側で一段下がった、標高約68m付近に位置する。幅約4.5m・長さ約3mの規模で地山を台形に削り出し、平坦面を造り出している。墳墓は、近世墓地造成に伴い、厚く盛り土されていた。

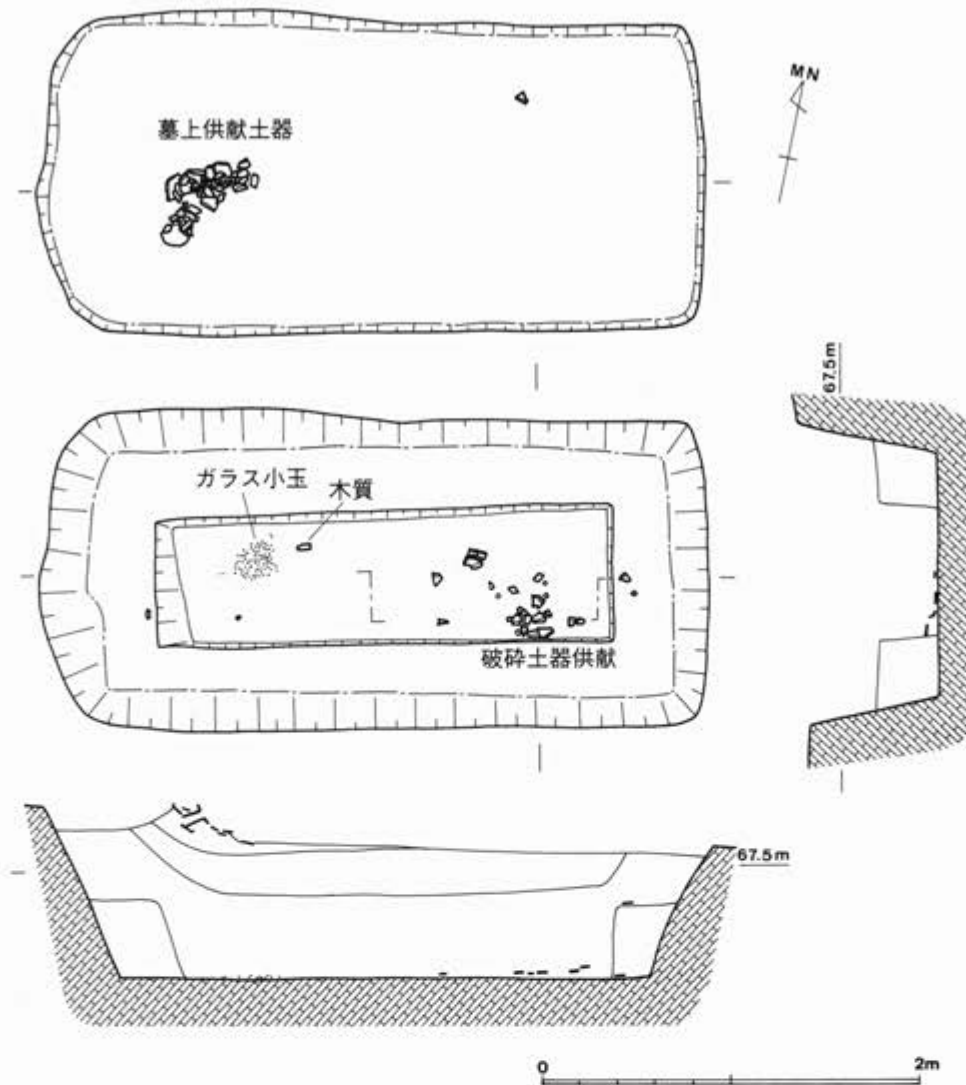
①検出遺構(第31図)

平坦面の中央から埋葬主体部1基を検出した。主体部は、ほぼ東西方向に主軸を向いている。墓壙掘形は長方形を呈し、全長約3.5m・幅約1.7mを測る。墓壙の深さは、検出面から約0.9mを測る。墓壙底は水平で、底面から約0.4m上位で棺痕跡を検出した。棺は長方形であり、小口板は側板の端部に位置している。棺の規模は、全長約2.4m・幅約0.7mを測る。墓壙検出段階で、棺蓋の腐朽に伴う埋土の落ち込みを検出し、旧表土とみられる黒墨土内から壺2点・高杯2点(第33図1~4)が集中して出土した。この土器群については、墓上祭祀に関連するものと判断される。また、棺上・棺側での供献行為として棺の東部から破碎された甕(同5)、西部から打製石鏃(第32図91)1点の出土をみている。

棺内に副葬された遺物として、棺内西部で北側に片寄ってガラス製小玉(第32図1~90)90点が出土した。ガラス製小玉は、直径約0.2mの範囲に集中し、墓壙底もしくは1cmほど遊離して出土している。また、ガラス玉群の東で棺材とみられる木質片が遺存していた。南側棺側部の中央付近から、鉄鏃(同92)1点が出土している。

②出土遺物(第32・33図)

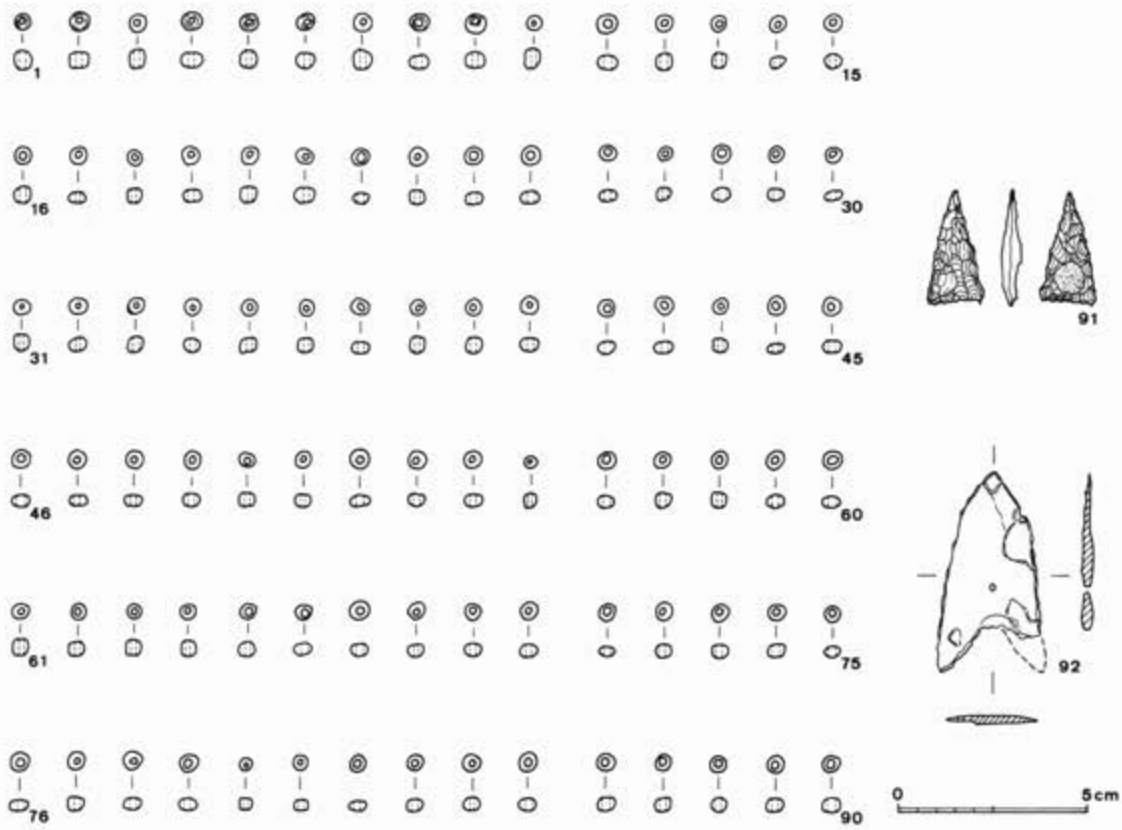
第32図1~90は、コバルトブルー色のガラス製小玉である。個々の大きさにはバラツキが認められるが、直径・長さがともに3~6mmの範囲内にある。小玉の孔径もバラツキがみられ、1mm前後の孔をもつものが多数を占めるが、2~3mmの孔も小数存在する。打製石鏃(第32図91)は、サヌカイト製の大型石鏃であり、全長約3cm・重量約4.2gを測る。鉄鏃(第32図92)は、弥生時



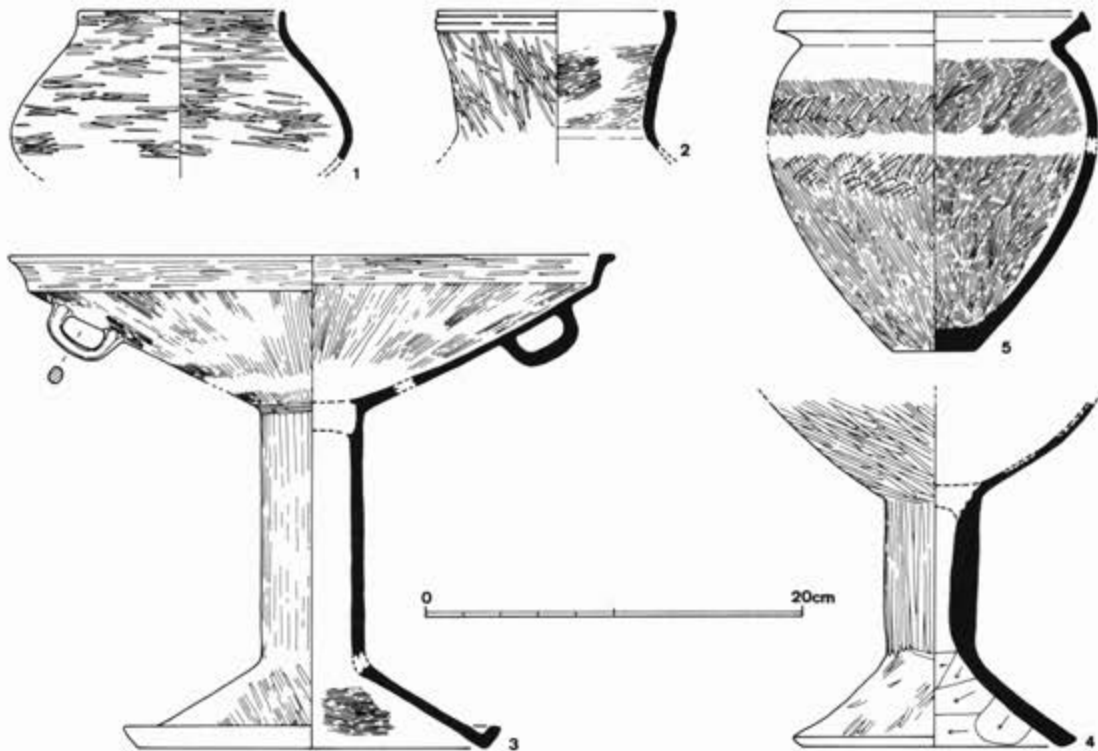
第31図 35号墓主体部実測図

代中期末の大型鉄鏝である。平根鏝であり、鏝身の中央に小さな円孔(1mm強)がみられる。

壺(第33図1)は、台付き壺とみられる。体部は、扁平で胴が張る。口縁部は、短く上方につまみ上げている。胎土は精良で、器壁を薄く仕上げる。内外面は、ていねいにヘラミガキを施す。口径は10.8cmを測る。壺口縁(同2)は、内湾する口縁端部外面に3条の擬凹線をめぐらせる。胎土は精良で、内面はハケメ調整し、外面はヘラミガキを施す。口径は12.6cmを測る。高杯(同3)は、口縁部が屈曲して上方に立ち上がり、端部は外方に肥厚させる。杯部外面に1対の半環状の把手が付く。脚柱部は中空で、ラッパ状に開く脚の端部は上方に拡張する。脚部内面はハケメ調整し、外表面は全面をていねいにヘラミガキする。口径32.1cm・器高26cm前後である。高杯(4)は、脚の短い高杯である。脚柱部は、器壁が厚いが、杯部は薄く仕上げる。脚部内面はヘラケズリ、外表面は全面をていねいにヘラミガキする。甕(5)は、口縁端部が上下に肥厚する。体部の内面はハケメ調整、外面はタタキの後ハケメ調整する。頸部からやや下がった体部外面に斜めのキザミメ(長さ1.7cm)をめぐらせる。口径は14.9cm、器高は18cm前後とみられる。



第32図 35号墓主体部棺内・棺上出土遺物実測図



第33図 35号墓主体部供献土器実測図

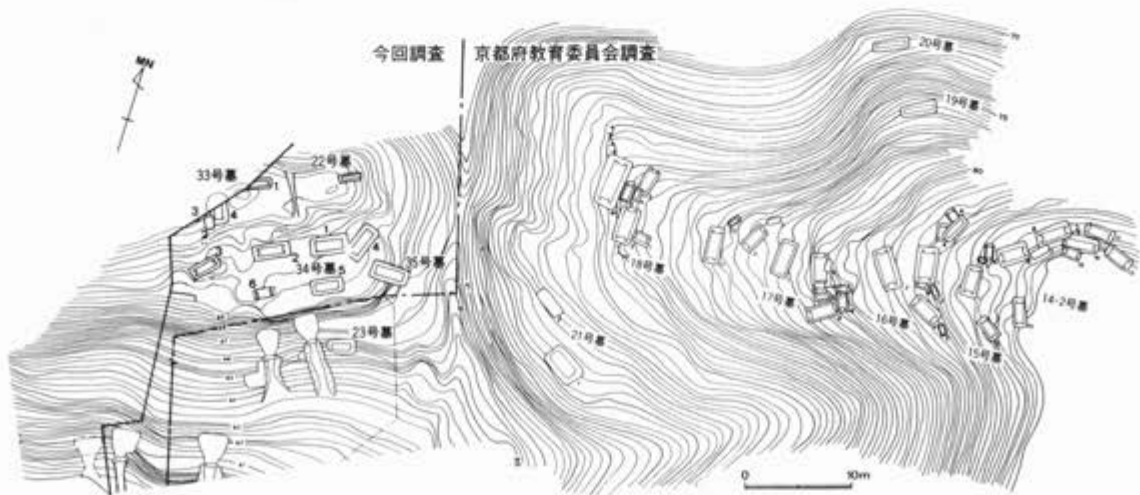
(3)小結

今回の調査では、弥生時代中期末から後期初頭にかけての台状墓と、近世墓の調査を行った。台状墓の調査は、今回の調査地と同一丘陵の東部で、平成4年度に京都府教育委員会と大宮町教育委員会が調査を実施している。現在、大宮町教育委員会では左坂墳墓群と、隣接する三坂神社墳墓群の調査成果の整理を進めている。今回の調査成果については、過去の調査成果の整理を待って再検討したく、2・3の問題にふれてまとめに替えたい。

墳墓 左坂古墳群G支群に含まれる左坂墳墓群は、これまでのところ、東から西に向かっている主尾根と、南にのびる支尾根上に分布が確認されている。西にのびる主尾根の鞍部を境に、東西の墳墓のあり方に変化が認められる。傾斜の強い東側尾根には、区画の明瞭でない台状墓が連続して築かれるとともに、等高線に沿った細長い平坦面に数基～10数基の埋葬主体部が認められる。また、尾根稜線上の主体部は大型墓壇の傾向が強く、稜線に対して直交する主軸を持つ。

今回調査を行った西側丘陵では、稜線の傾斜もゆるやかであり、検出した4基の墳墓は区画溝・階段状平坦面(丘陵腹部)によって、明瞭な区画をもつ台状墓を築いている。調査範囲の制約から、西側丘陵の墳墓の全容はうかがえないが、東側丘陵墳墓と比較して1基の墳墓に墓壇が1～7基と少ない傾向にあるといえよう。また、墓壇は尾根稜線と同一方向の主軸となっている。このような墳墓のあり方は、丘陵鞍部を境に東西の墳墓群で被葬者集団が異なるか、あるいは時期差による変化とみることも可能であろう。

時期 土器及び鉄器によって各墳墓の年代を与えた。丹後地域の弥生時代後期の土器編年については、後期通有の甕(体部内面のヘラケズリが頸部に及ぶ)の口縁部変化を基軸に考えられている。今回の調査では、33号墓第3主体部から中期に属する土器の出土をみている。また、同じ中期の様相の強い甕が34号墓第2・第4主体部に認められる。35号墓主体部では、中期末の鉄鏃が棺内から出土しているが、墓上供献土器は後期中頃の年代観をもっている。他の主体部では後期初頭の土器が伴うことから、今回調査を行った4基の墳墓は、およそ中期末から後期前半にかけて営まれた墳墓であると判断する。



第34図 左坂墳墓群主要遺構配置図(注10-④文献所収図に加筆)

東側丘陵の墳墓は、後期初頭から中頃の墳墓であり、尾根稜線の下位から高所に向かって墳墓が築かれていく様相が明らかになっている。尾根の先端側となる33・34号墓が中期末にさかのぼることからも、尾根先端側から墳墓が築かれていったことが追証された。

土器供献 破碎土器供献と墓上供献行為が認められる。破碎土器供献は、弥生時代中期末から古墳時代初頭にかけて、丹後・但馬地域でしばしば行われる埋葬過程での祭祀行為である。被葬者を墓壙内で組んだ木棺に納めて蓋をした段階で、破碎された土器を棺上及び棺の周囲にばらまく行為である。破碎された土器は、大型破片を含む場合が多く、完形または完形に近い復原が可能であることから、破碎行為自体は墓壙近くで行われたとみられる。今回調査した多くの主体部で破碎土器供献が認められた。土器は、主に煤の付着した甕を中心に壺・鉢・水差しを用いている。

墓上供献は、被葬者埋葬後に墓上において土器を供献する行為であり、後期中頃から開始される。今回の調査では、33号墓第2・第5主体部と35号墓主体部に墓上供献がみられた。土器の墓上供献行為は、棺内の朱・ガラス小玉の位置関係から、34号墓第2・第5主体部では足元側、35号墓主体部では頭側に認められる。これまでに供献土器として高杯・壺・鉢・器台・甕がみられ、特に高杯・鉢の供献が多くを占めている。今回の調査でも、3基の埋葬主体部のうち2基(34号墓-2・35号墓)から高杯が出土しているが、壺も2基の主体部(34号墓-5・35号墓)に認められる。供献土器は、その出土状況から破碎された形跡はうかがえず、完形品が供献されたと判断される。今後の課題として、墓上供献・破碎土器供献における土器の器種構成・供献位置などの検討が重要となろう。

副葬品 今回の調査では、棺内に副葬品を持つものは35号墓1基だけであった。鉄鏃は、被葬者の右側、ガラス小玉は頭部付近から出土した。この地の弥生時代墳墓の特色として、多量のガラス小玉の副葬があげられる。左坂墳墓群と隣接する三坂神社墳墓群では、これまでに多数の鉄製品とともに10,000点以上のガラス小玉が出土した。副葬品の内容などから、これらの墳墓を築いた被葬者は、特定有力者の家族とみられ、集落内に高度な技術者集団が存在していたと推測される。中でも、三坂神社3号墓では、巨大な埋葬施設から水晶玉・ガラス勾玉・ガラス管玉・素環頭鉄刀・ヤリガンナ・鉄鏃・杖状漆木製品など、王墓とみられる豊富な副葬品が出土している。

集落 これまでのところ、丘陵部での墳墓の調査が先行し、集落に関してはまだ不明な点が多い。周辺では、大宮売神社境内遺跡・里山遺跡・谷内遺跡から、弥生時代の土器の出土が認められる程度である。このうち、里山遺跡と谷内遺跡では、後期の住居跡が検出されている。今後、平地部で集落の調査が進展すれば、当時の様相がより明らかになると期待される。

4. 左坂横穴A支群

この地域は、丹後地域でも特に横穴群が集中している地域として注目されている。左坂横穴群が位置する丘陵の周辺には、有明横穴群^(F12)・大田鼻横穴群^(F13)・里ヶ谷横穴群などが分布している。左坂横穴A支群(第20図)は、左坂古墳群G支群丘陵の南側斜面に存在し、6基の横穴で構成されている。また、支尾根を挟んだ東側には左坂横穴B支群(13基)が存在する。A支群では4～6号横

穴がすでに調査されている(平成4年度)。A支群の6基の横穴は、平面的・垂直的分布状況から、2群に分けられる。第I群は、丘陵裾に近い標高59m付近に、西から1号～4号横穴が連続して存在する。第II群は、4号横穴から東にやや離れた上部、標高65m付近に5号・6号横穴が存在

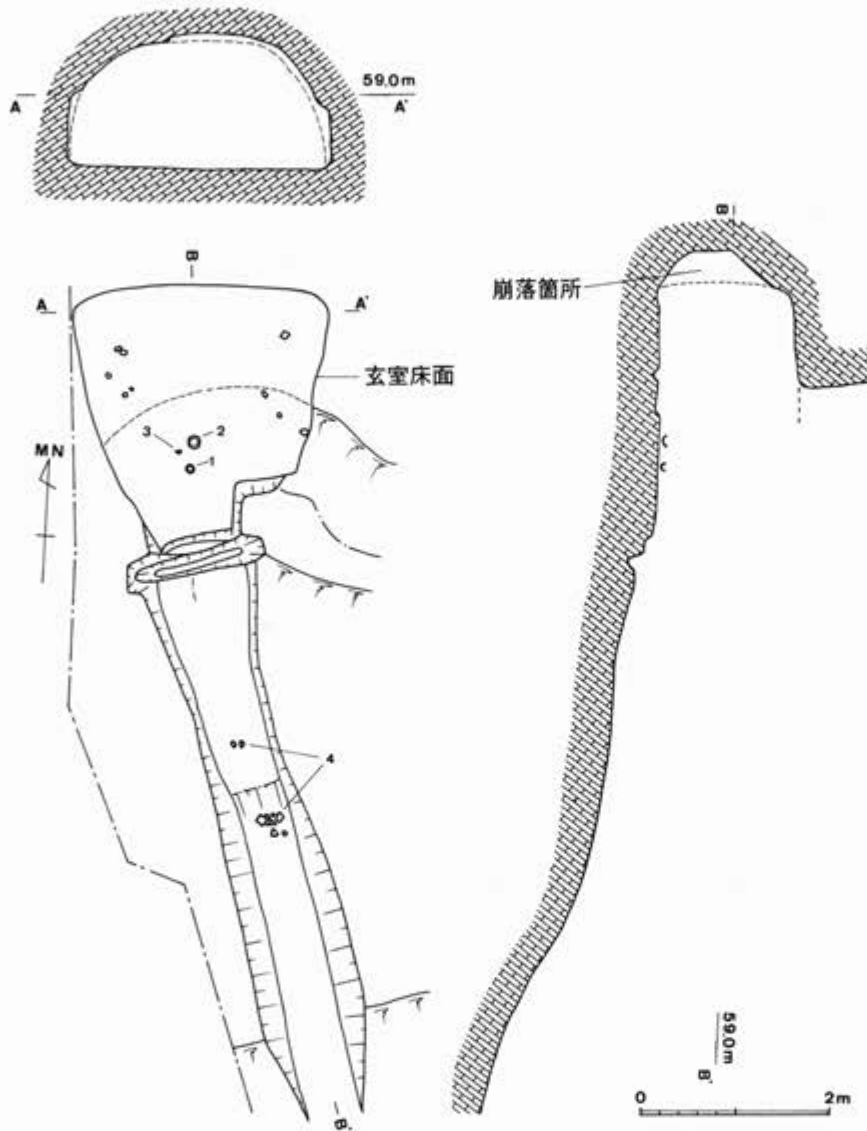
する。各横穴はいずれも南に開口する。

なお、今回の調査は、丹後国営農地開発事業の周積団地造成工事に伴い、崩壊の危険性が増した左坂横穴A支群3号横穴が調査対象となり、緊急調査を実施した。

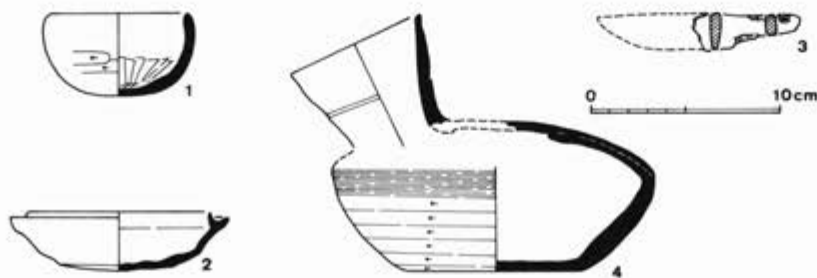
左坂A-3号横穴(第35図)

①検出遺構

第I群とした4基の横穴のうち、西から3基めの横穴である。玄室部は、玄門付近が崩落していたが、玄室天井部が一部開口状況にあった。また、前庭部分は完全に埋没していた。横穴は、玄室・玄門と前庭部から構成される。玄



第35図 左坂A-3号横穴実測図



第36図 左坂A-3号横穴出土遺物実測図

門部床面の標高は58.2mである。

玄室内の崩落土を除去した結果、玄室の平面形は奥壁部が広い台形状であり、玄門部が片袖(左片袖)であることが判明した。玄室の主軸は、磁北とほぼ同一である。奥壁は幅約2.7m、奥壁から片袖間約2.1m、玄門部は長さ約0.5m・幅約0.8~1.1mを測る。玄室内では、天井部の大部分が崩落していたが、奥壁上部と奥壁付近の天井部は遺存状況が良好であった。奥壁付近での横穴断面形は、カマボコ状を呈している。また、遺存状況が良好であった天井部では、玄室内で火を燃やした痕跡として多量の煤が付着していた。玄室奥壁には、後世に穿たれたと判断する小窟(長さ約0.45m・幅約0.3m・高さ約0.3m)が存在していた。小窟の壁面には苔の付着があったが、玄室内に認められた煤の付着がみられず、時期的に新しいものと判断される。

玄室から玄門部にかけてはほぼ水平な床面であるが、玄門と前庭部は前庭部が一段下がり、約0.2mの比高差を測る。前庭部は、断面が逆台形を呈し、幅約0.8~1.2m・全長約6mの狭長な長方形となる。前庭部は、玄門から中程まではゆるやかに下る傾斜をもつが、中程から先端にかけては急激に下っている。また、前庭部の主軸は玄室主軸と異なり、北から西に約19°振っている。玄室の閉塞は、玄室と前庭部の境に溝が設けられていることから、戸板による閉塞が行われたと考えられる。検出した溝は、長さ約1m(下端)・幅約0.2m・深さ約0.08mを測った。

②出土遺物(第36図)

玄室内から、横穴に伴うと判断される須恵器杯身1点・土師器椀1点・刀子1点、近世の染付が出土している。杯身(2)・椀(1)・刀子(3)は玄門に近い玄室中央付近から、5cmほど床面から遊離して出土した。また、染付は、玄室側壁近くの床面付近から数点の破片となって出土した。前庭部では、ほぼ中央付近の表土層下から、平瓶(4)の出土をみている。

土師器椀(1)は、体部の丸みの強い丹塗りの小型椀である。口径6.3cm・器高4.5cmを測る。外面はヘラケズリ、内面底部には、工具の当て具痕を残す。胎土は精良であるが、焼成は軟質焼成である。杯身(2)は、口径9.7cm・器高3.1cmを測る。口径が矮小化しており、立ち上がりは低い。切り離した後、底部外面は軽くナデ調整している。胎土は精良である。刀子(3)は、刀身の大部分を失い、茎部と刃部の一部が残る。茎部には柄の木質が残る。平瓶(4)は、前庭部堆積土中から破片化して出土したものである。体部の肩は丸みを持ち、平面形は正円に近い。体部下半はヘラケズリし、上部はカキメを施す。口縁部の外面中ほどに1条の凹線をめぐらせる。口径7.5cm・器高は13.7cm前後である。

③小結

A支群のうち、第I群とした4基の横穴(1~4号横穴)は、いずれも丘陵裾部の斜面上に幅3~5mの帯郭状の平坦面を造り出し、斜面に直交する前庭部(墓道)を掘った後、玄室部を掘り込んでいる。狭長な前庭部をもつことがこの横穴群の特徴である。左坂A-4~6号横穴では、前庭部全長が4.4~5.5m・底面幅0.6~0.8mを測り、深さも1m近く地山を掘り込む。今回調査を行った3号横穴も同様な状況であるが、平坦面が途切れる前面側は急激に下降する。玄室部分は、4~6号横穴では狭い玄門部から奥壁部にかけてゆるやかに広がるフラスコ形を呈する。3号横

穴では、奥壁側が広がる台形状の平面形を呈し、左片袖の玄室であることが他の横穴と異なる。

左坂横穴群(A・B支群)・里ヶ谷横穴群・隣接の大田鼻横穴群などの調査で、丹後地域では数多くの横穴が6世紀末頃に築造され始め、変容されつつも8世紀前半段階まで造墓されていることが明らかになった。横穴は、初期段階には、無袖長方形玄室と狭長な前庭部(里ヶ谷3・4号横穴)と、両袖形の玄室と狭長な前庭部(里ヶ谷2号横穴)をもつ2形態が存在する。次の段階には、左坂A-4～6号横穴や大田鼻横穴群にみるフラスコ形玄室に変化し、最終的には左坂B-1・2号横穴に代表される玄室長が縮小化し「コ」の字形の前庭部となる変遷を追うことができる。

左坂A-3号横穴は、追葬に伴うと考えられる遺物のうち、TK217(新)並行の杯身の出土をみている。里ヶ谷2号横穴例は、TK217(古)併行期であることから、玄室平面形は両袖形-片袖形-フラスコ形への移行がみてとれる。左坂A-4・5号横穴と6号横穴は、玄室形が片袖・両袖からフラスコ形への移行(崩れ)段階と判断される。また、土器もA-4号横穴は、A-3号横穴より後出の様相を示す。

5. 左坂古墳群(C支群)

左坂古墳群C支群は、左坂古墳群中の中央部主尾根頂部の一部と、北に向かって派生する支尾根上の古墳で構成されている。平成2～6年度にかけて東側支尾根上の6～20号墳(6～13号墳は表土掘削のみ)、西側尾根上の21～23号墳の調査を実施してきている。東側支尾根上には、5号墳以下20号墳までの16基の古墳が連続して築かれ、各支尾根上に分布する古墳群中でも特に密集度が高い。頂部に近い5号墳から9号墳にかけては傾斜がきつく、階段状地形を呈する古墳が築かれている。尾根の先端側となる10～20号墳は、尾根の傾斜がゆるやかであり、尾根に直交する区画溝を設けることで小型の方形墳を築いている。

今回の調査は、平成4・6年度に表土掘削を実施した後、調査を中断していた6～13号墳(第37図)について再度実施したものである。以下、調査の概要について報告する。

(1) 調査の概要

A. C-6号墳

① 墳丘

丘陵尾根の稜線部を階段状に削り、方形に近い平坦面を造り出す。墳丘平坦面は、標高98m付近に位置する。調査対象範囲が6号墳の北半部であるため、墳丘の全容は不明である。調査地内では、尾根稜線に直交する東西方向約6m・南北約1.3mのゆるやかな平坦面が削り出されている。墳丘に盛り土は認められなかった。墳丘斜面部では顕著な整形はみられない。

② 埋葬施設(第38図)

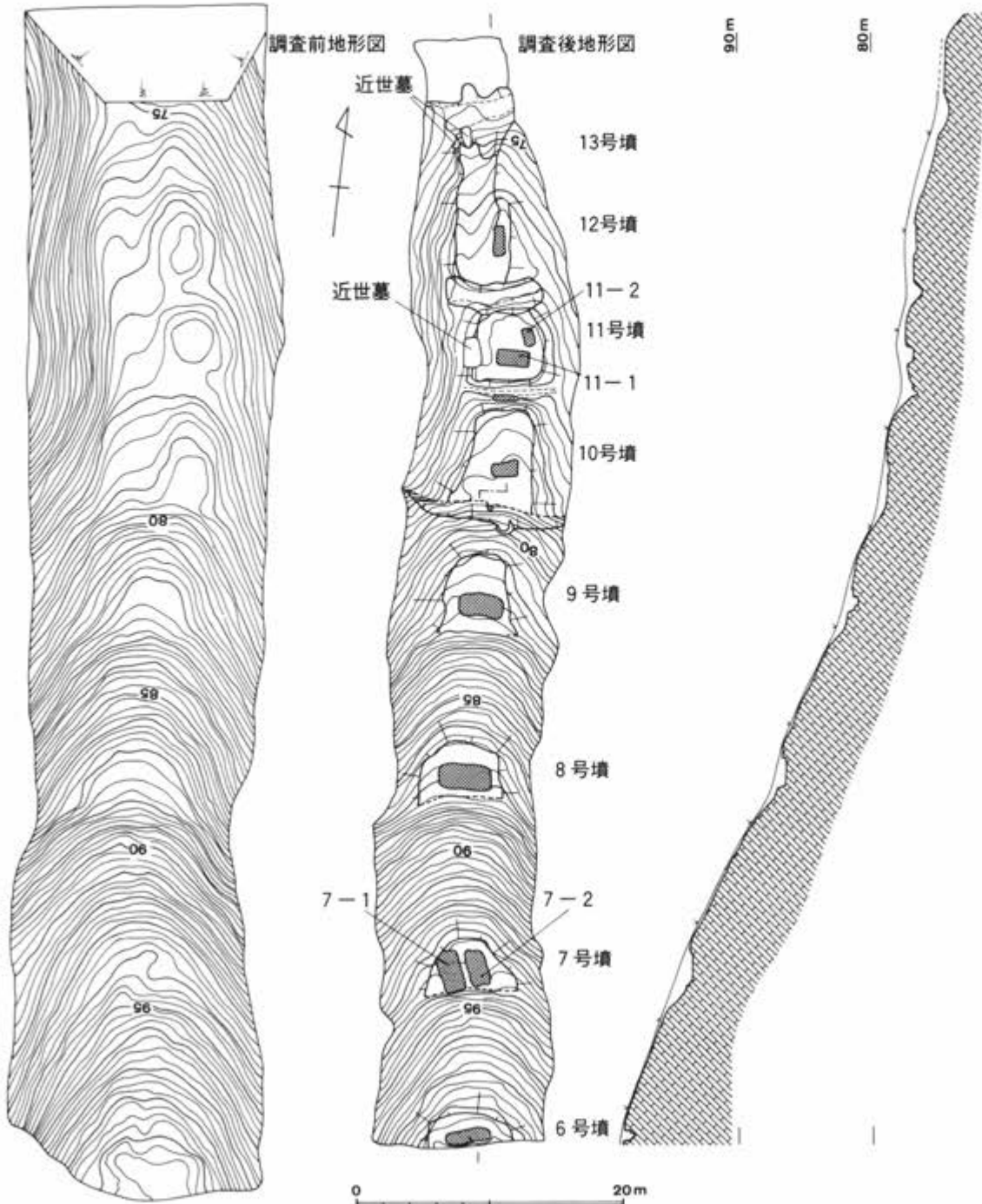
平坦面の北端から南に約0.8mの地点(墳丘中央部か)で、木棺直葬の埋葬主体部1基を検出した。墓壙は、地山面から2段に掘り込まれ、主軸は尾根稜線に直交する。1段目の墓壙規模は全長約3.3m・幅約1.1m、深さは約0.6mを測る。2段目の墓壙はほぼ中央に掘り込まれ、全長約2.75m・幅約0.6m、深さは約0.35mを測る。2段目墓壙の形状から箱形木棺が納められたと考

えられ、墓壙底がやや西に下がる傾斜をもつことから、被葬者の頭位は東側と判断される。主体部に伴う遺物の出土はみられなかった。

B. C-7号墳

①墳丘

丘陵尾根の稜線部を階段状に削り出し、台形に近い平坦面を造る。墳丘平坦面はゆるやかに南に下がる傾斜をもつ。平坦面規模は、高位となる南側が東西約6.5m・南北は約4mを測る。墳丘平坦面は、標高93.5m付近に位置する。平坦面を目一杯利用した形で、南北方向の主軸をもつ



第37図 左坂古墳群C支群6号墳～13号墳地形測量図

2基の埋葬主体部を検出した。

②埋葬施設(第38図)

検出した2基の主体部は、西側を第1主体部、東側を第2主体部とした。第1主体部は、第2主体部と比較して大型の墓壙をもつ。墓壙は、地山面から2段に掘り込まれている。墓壙の1段目は長方形を呈するが、北西隅部のみ丸く仕上げる。この墓壙の丸みは、墳丘平坦面に規制された結果と判断される。検出面での墓壙規模は、全長約3.1m・幅約1.6m、深さは約0.7mを測る。2段目の墓壙は、ほぼ中央に掘り込まれ、全長約1.95m・幅約0.45mを測る。墓壙底から2段目までは約0.25mを測る。墓壙底は、北側小口付近がゆるやかに立ち上がることから、船底状底部をもつ木棺の使用が考えられる。2段目墓壙は、北側小口が南側小口に比べ幅が広いことから、被葬者の頭位は北側と判断される。主体部に伴う遺物の出土はみられない。

第2主体部は、第1主体部の東側に位置し、約0.55mの間隔をおいている。墓壙は、第1主体部より小型であり、2段に地山を掘り下げている。1段目の墓壙は、長方形を呈するが、北側の両隅部を丸く納めている。1段目の墓壙規模は、全長約2.8m・幅約1.4m・深さ約0.15mを測る。2段目墓壙は、ほぼ中央に掘り込まれている。平面形は、長方形を呈するが、北側小口は方形であるのに対し、南側小口は丸く納められる。2段目の墓壙規模は、全長約1.9m・幅約0.4m・深さ約0.3mを測る。墓壙の形状から、船底状の木棺が納められていたと判断される。墓壙底は、南側が高くなるので、被葬者の頭位は南側と判断される。主体部に伴う遺物の出土は認められない。

C. C-8号墳

①墳丘

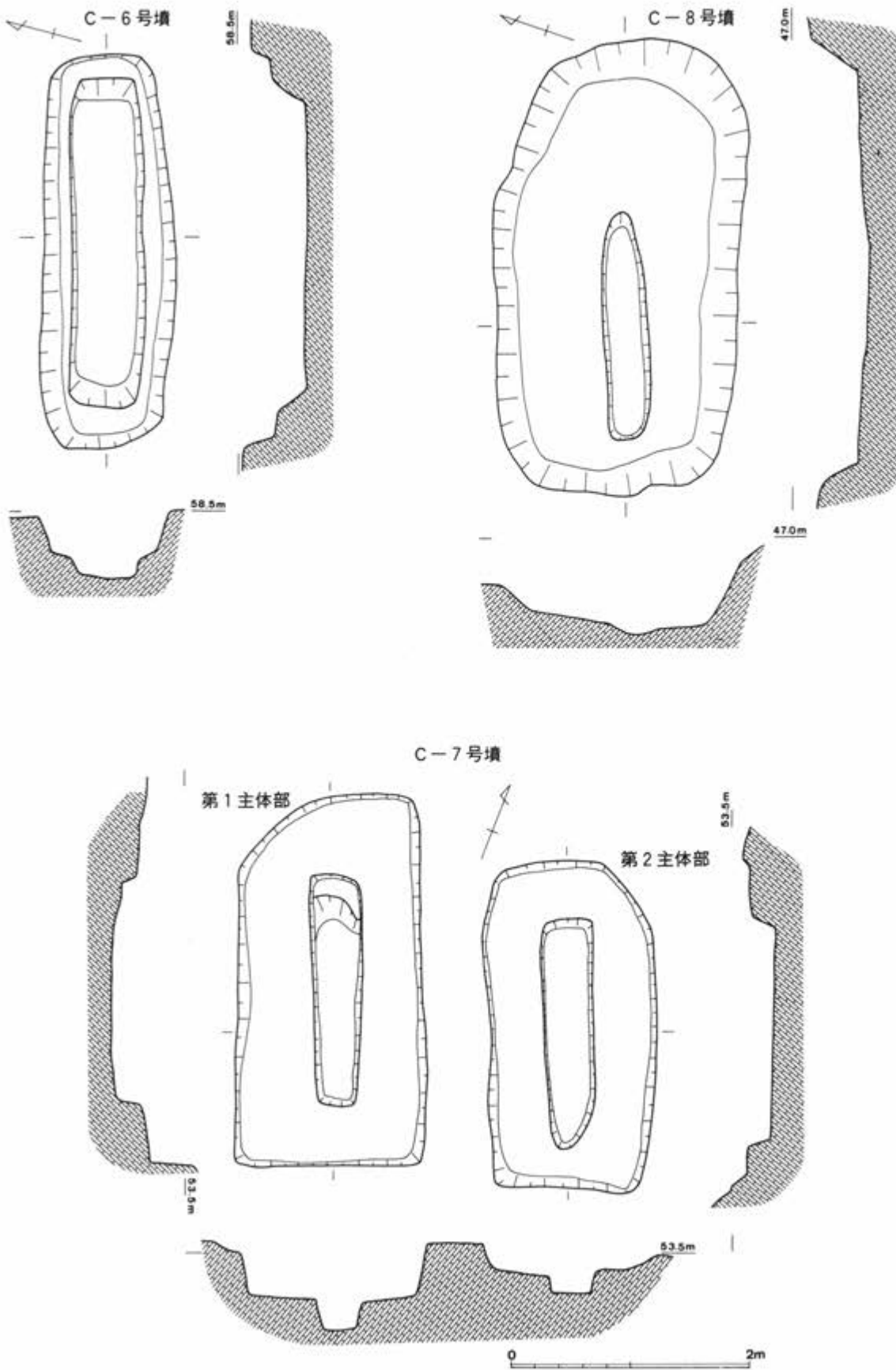
丘陵尾根の稜線部を階段状に削り出し、方形に近い平坦面はゆるやかに南に下がる。墳丘平坦面は、標高87m付近に位置する。平坦面規模は、東西約6.3m・南北は約4mを測る。平坦面のほぼ中央付近から、尾根に直交する東西方向主軸をもつ埋葬主体部を検出した。

②埋葬施設(第38図)

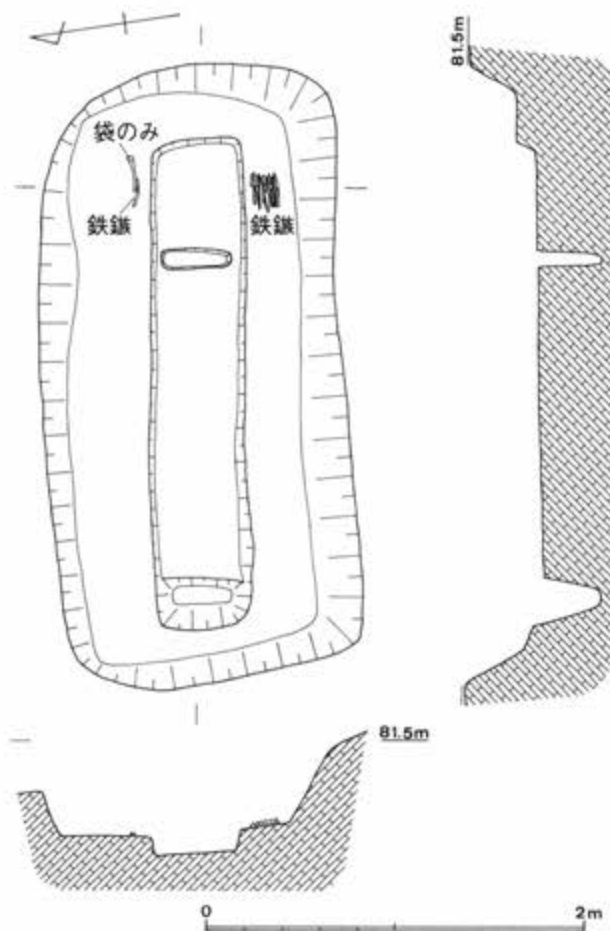
墓壙は、地山を2段に掘り下げ、平面形は小判形を呈する。1段目の墓壙規模は、全長約3.8m・幅約2m・深さ約0.35mを測る。2段目墓壙は、中央から西に片寄って掘り下げられている。2段目墓壙は、両小口部分が丸く納められ、全長約1.9m・幅約0.4m・深さ約0.1mを測る。2段目墓壙の断面形が弧を描く形で掘り下げられ、長軸方向の小口部がなだらかに上がることから、舟形木棺が納められたと判断される。墓壙底が西から東に下がる傾斜をもつことから、被葬者の頭位は西側と判断される。主体部に伴う遺物の出土は認められない。

D. C-9号墳

①墳丘 丘陵尾根の稜線部を階段状に削り出し、方形に近い平坦面を造る。墳丘平坦面は、標高約81.5m付近に位置し、北にゆるやかに下がる傾斜をもっている。平坦面の規模は、東西約5m・南北約5.8mを測る。平坦面の中央やや南側から、尾根に直交する東西主軸の埋葬主体部を検出した。



第38図 C-6～C-8号墳主体部実測図



第39図 C-9号墳主体部実測図

②埋葬施設(第39図)

墓壙は、地山を2段に掘り下げており、その平面形は長方形を呈する。1段目の墓壙規模は、全長約3.3m・幅約1.6m・深さ約0.45mを測る。2段目墓壙は、ほぼ中央部に設けられており、全長約2.6m・幅約0.5m・深さ約0.1mを測る。墓壙底には、西端部と東端から約0.6m内側に入ったところに小口板(仕切板)をはめ込んでおり、0.1m幅の深溝を切っている。溝は、墓壙底から約0.3mを測る。また、両溝間は約1.6mを測る。墓壙の形状から組み合わせ式の木棺が使用されていたと考えられる。東側仕切溝の東側には、ほぼ0.5m四方の副室的空間が認められる。墓壙底が東から西に向かってゆるやかに下がっていることから、被葬者の頭位は東側と判断される。棺内と副室に副葬品は認められないが、副室部の両サイド1段目墓壙底から、鉄製品が出

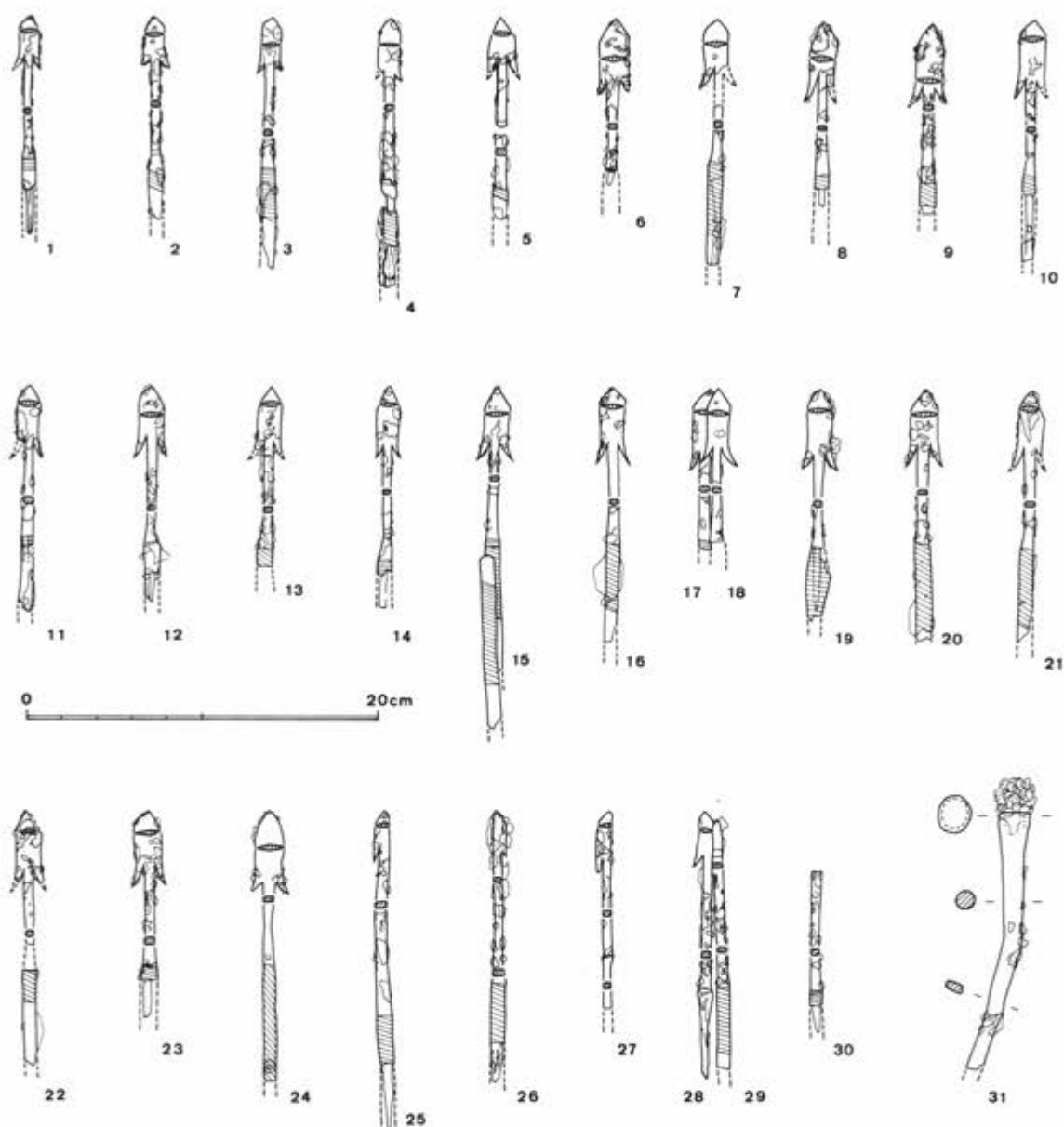
土している。副室部の北側では鉄鎌1点と袋ノミ1点、南側から鉄鎌29点が集束された状況で出土している。

③出土遺物(第40図)

鉄鎌は、いずれも鎌身が小型であって、鎌身に比べて頸部が細長くのびていることから、長頭鎌に分類される。また、鎌身部の形状から逆刺を有するもの(1~24)と、片刃鎌(25~28)に細分される。

鎌身に逆刺を有する1~24は、鎌身長が3~3.5cmを測るもの(1~5)、4~4.5cmを測るもの(6~24)がみられるとともに、逆刺の深さ(大きさ)が浅いもの(1~4・6・14)と、逆刺の深いもの(5・7~13・15~24)が存在する。鎌身は、すべて両丸造りで、頸部の長さは5~6cm程度である。片刃鎌(25~28)は、鎌身長2.8~3.6cmであり、逆刺を有する。頸部の長さは5.7~9.5cmとバラツキがみられる。

袋ノミ(31)は、先端の刃部を欠く。残存長は14.7cmを測る。袋状を呈する基部は、直径約1.8cmを測る。頸部の断面形は、基部付近では円形であるが、中ほどから先端にかけては長方形を呈する。



第40図 C-9号墳主体部出土遺物実測図

E. C-10号墳

①墳丘

丘陵尾根が緩傾斜となる標高約78.5m付近に位置する。墳丘は、地山を方形に削り出し、若干の盛り土で墳丘を整える。尾根の上部側は、大規模な削土面をもつが、墳丘を区画する溝は設けない。一方、北に隣接する11号墳とは幅約2m・深さ約1mの溝で区切られている。墳丘上の平坦面は方形で、南北約7m・東西約5mの規模を測る。平坦面のほぼ中央部に東西方向の軸をもつ埋葬主体部1基(第1主体部)、南側溝内から1基の主体部(第2主体部)を検出した。

②埋葬施設

第1主体部は遺存状況が悪く、検出面からわずか5cmの掘り下げで墓壙底を検出した。墓壙規模は、東西約2.1m・南北約0.9mを測る。墓壙掘形は、単純・2段の区別がつかず、棺痕跡も確

認できなかった。主体部に伴う遺物の出土もみられない。第2主体部は、溝内でも10号墳の墳丘斜面側に位置し、溝底から墳丘斜面方向に斜めに掘り込まれており、墓壙の南側はオーバーハング状況にあった。墓壙の主軸は東西方向であり、平面形は長方形を呈するが、両小口部が丸みもっている。出土遺物は認められない。

F. C-11号墳(第41図)

①墳丘

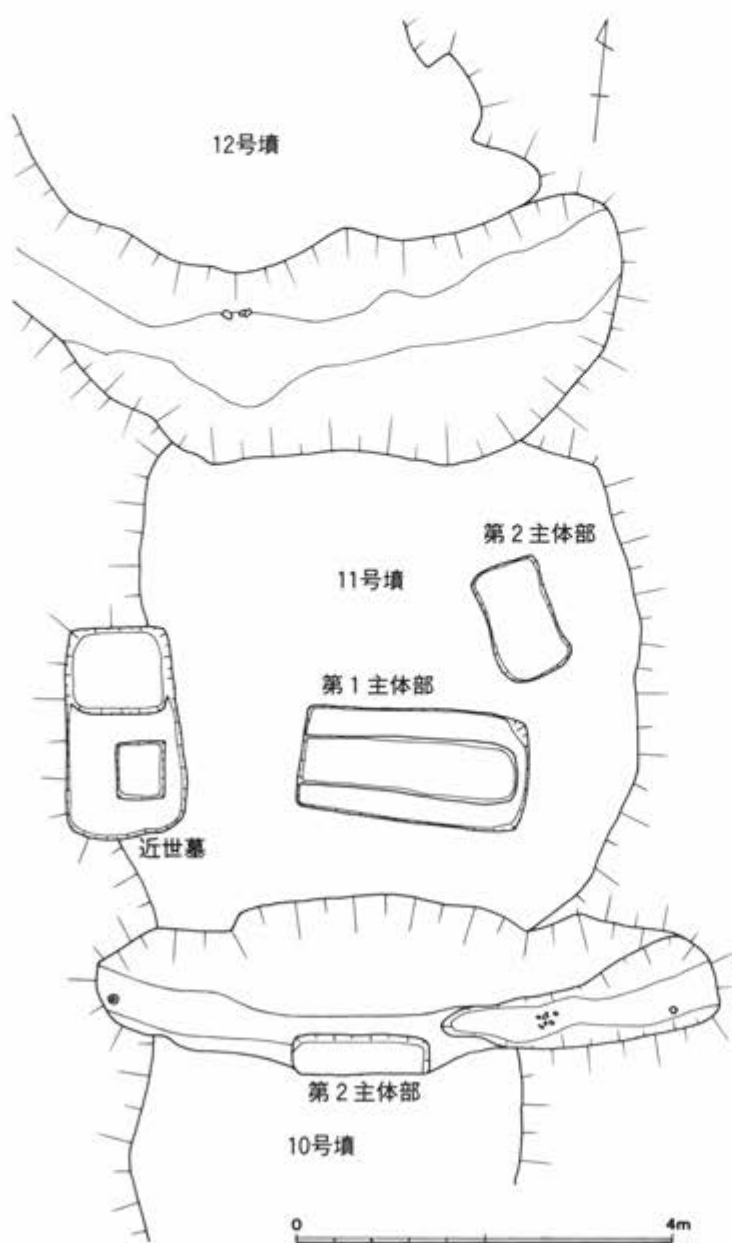
南側の10号墳とは、尾根を切断する溝で区切られ、北に隣接する12号墳との間にも区画溝が存在する。墳丘は、若干の地山削り出しと盛り土で整形されている。東西約8m・南北約7m・高さ約1.6mの方形墳であり、墳頂部の標高は78m付近にある。墳丘平坦面から2基の埋葬主体部

と、近世墓2基を検出した。

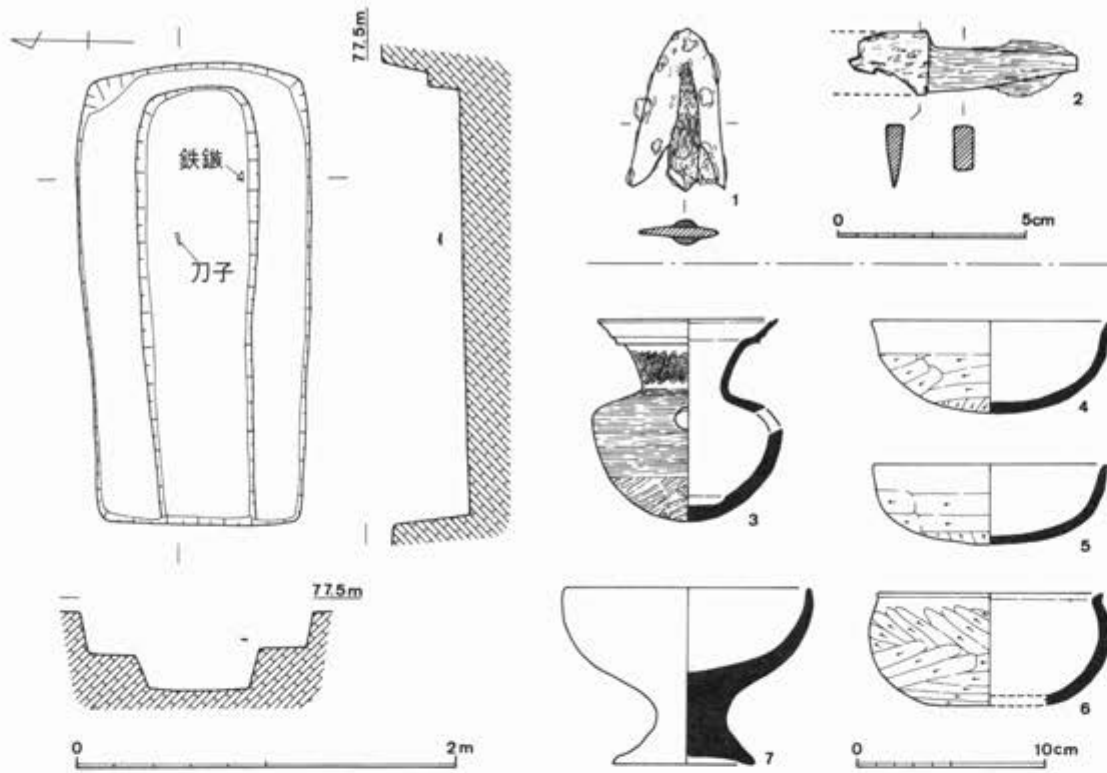
②埋葬施設

第1主体部(第42図)は、中心主体と考えられ、平坦面中央のやや南側で検出した。墓壙の主軸は東西方向にとる。長方形を呈する墓壙は、地山を2段に掘り下げている。1段目の墓壙は、全長約2.45m・幅約1.2m・深さ約0.2mの規模である。2段目墓壙は、ほぼ中央に掘り込まれているが、西側小口には段を有していない。2段目墓壙は、全長約2.3m・幅約0.65m・深さ約0.23mの規模を測る。棺内に副葬品はみられないが、棺上遺物と判断される鉄鏃1点・刀子1点の出土をみている。

第2主体部は、平坦面の中央東端部で検出した。墓壙の主軸は、北から西に約26°振っている。墓壙の遺存状況は悪く、検出面から約0.1mの掘り下げで墓壙底を検出した。墓壙規模は、全長約1.3m・幅約0.7mを測る。出土遺物は認められない。



第41図 左坂C-11号墳平面図



第42図 C-11号墳第1主体部実測図及び主体部・溝出土遺物実測図

③近世墓

墳頂部平坦面の西端で検出している。長方形を呈する掘形は2段に掘り下げられ、2基の近世墓が掘り込まれていた。墓境内は、ほぼ均質な淡黄灰色バイラン土で埋められている。出土遺物はみられないが、周辺地での調査例から近世墓と判断される。

④出土遺物(第42図)

鉄鎌(1)は、第1主体部棺上出土の短茎鎌である。鎌身が逆刺の深い長三角状の鎌である。鎌身長は4.3cmを測る。短茎は、逆刺端部のところまでは達していない。刀子(2)は、刀身の大部分を失っており、茎部と刃部の一部が残る。茎部には木質が残っていた。

甕(3)は、墳丘の南溝東部と墳頂部から出土した。口径9.5cm・器高10.7cmを測る。体部は、上部が押し潰された球形状を呈し、最大幅は上部1/3前後に求められる。体部最大径を測るところに1個の円孔が外上方から穿孔されている。口頸部は短く、ゆるやかに外反した後、大きく上半部でラッパ状に開く。口頸部外面に波状文を施す。体部外面下半にタタキを施す。碗(4～6)は、丹塗りの土師器碗である。焼成は軟質焼成である。4は南溝西部、5・6は北溝及び墳丘斜面から出土した。いずれも、溝底から遊離して出土している。4・5は、口径12.5cm・器高4.5cmを測る。体部外面の下半部をヘラケズリする。6は、北溝から出土した。体部の丸みが強く、口縁端部は外上方につまみ上げる。体部外面のヘラケズリは、口縁端部付近にまで施している。口径12.1cm・器高6.1cm前後を測る。台付き鉢(7)は、北溝から出土した。短い脚部は中実で上げ底である。口径12.9cm・器高9.4cmを測る。

G. C-12号墳

①墳丘

11号墳の北側に隣接し、尾根を横断する溝によって区画されている。溝は、南に張り出す弧を描くことから、12号墳築造時に造られたとみられる。溝は、幅約2mを測る。墳丘の北側はなだらかに下がり、明瞭な墳丘裾を確認することはできない。南溝の底部の標高を参考にすれば、墳丘の南北規模は約7m前後と判断できる。また、東西方向の規模は、墳丘の東側に広範囲に土砂の流失が認められるものの、溝の東端の位置からみて約6mと判断される。墳丘のほぼ中央部から南北方向に主軸をとる埋葬主体部1基を検出した。

②埋葬施設

遺存状況が悪く、検出面から約0.1mの掘り下げで墓壙底を検出した。墓壙の全長は約2.2m、幅は約0.6mを測る。墓壙底は、北側が高位となることから、頭位も北と考えられる。主体部に伴う遺物の出土はみられない。

H. C-13号墳

12号墳と北側に存在する14号墳間を13号墳とみていたが、12号墳から北側はなだらかな傾斜で下がり、顕著な地山整形がみられず、主体部も確認できなかった。調査の結果、13号墳は古墳と認識できず、自然地形と判断した。

6. 小結

今回、調査を行った左坂古墳群C支群6～13号墳とともに、過去に同一尾根で調査された14～20号墳の調査をあわせて、C支群について簡略なまとめを行う。なお、左坂古墳群全体に対するまとめも行うべきであるが、調査・整理も継続中であることから、総括的なまとめはすべての調査が終了した時点で行いたい。

墳丘について C支群(東側尾根)では、6号墳以下20号墳まで15基の古墳を調査した。なお、13号墳については自然地形と判断される。古墳は、基本的には平面が方形を意識した方形墳であるといえよう。尾根稜線の傾斜がゆるやかとなる10～20号墳にかけては、明瞭な盛り土による整形を行わず、墳丘を区画する溝と地山削り出しによって視覚的な墳丘を造り出している。一方、尾根稜線が急な傾斜となる6～9号墳では、ほとんど盛り土がみられず、地山を階段状に削り平坦面を造り出すのみで、視覚的な古墳の姿は認識できない。このような尾根稜線上の古墳の姿は、弥生時代の台状墓と基本的な構造は変わらない。

埋葬施設について C支群で検出された埋葬施設は、いずれも木棺直葬である。木棺には、舟底状の木棺と箱形木棺の使用が認められる。舟底状木棺としては7・8・15・17・19号墳、箱形木棺は6・9～12・16・18号墳の主体部に使用されている。埋葬施設のあり方をみると、基本的には1古墳に1基の埋葬施設とみられるが、複数の埋葬施設が設けられる例(7・11号墳)も一部で確認された。11号墳では多くの古墳と同様に、墳丘平坦面の中央付近に大型墓壙をもつ主体部

(中心主体)が設けられている。中心部からはずれた端に位置する第2主体部は、規模が小さいことから副次的な小児埋葬とみられる。7号墳の2基の埋葬施設は、成人埋葬とみられ、小規模な平坦面を東西に等しくする状況にある。墓壙規模からみると、西側の第1主体部が中心主体部と考えられる。当初から複数の埋葬施設を設ける計画の上で、古墳が築造されたと判断される。他の支群でも複数埋葬例が確認されているが、中心主体部は墳丘平坦面中央の原則にはずれることがなく、小児墓もしくは追葬時の切合い関係が認められている。このような状況の中での7号墳の複数埋葬のあり方は、特異な例として注目される。

出土遺物について C支群では、幾つかの古墳の埋葬主体部内から鉄製品の出土をみている。9号墳では小口の棺側部から鉄鏃30点・袋ノミ1点。11号墳第1主体部では、棺上から鉄鏃1点・刀子1点。15号墳では、小口部棺上から「U」字形鏃先1点・鉄斧1点・鉄滓。16号墳では、棺上・棺側部から鉄鏃3点・刀子1点。18号墳の棺上から、鉄刀1点・鉄鏃1点・刀子1点・渦巻き状鉄器が出土している。各埋葬主体部内の遺物の出土傾向としては、棺内に副葬された遺物は皆無であり、鉄製の武器・農工具が棺上もしくは棺側に置かれている状況にある。これらの鉄製品は、埋葬過程における供献行為の一例として、C支群の古墳を築造した集団特有の祭祀として注目される。

墳丘部分では、土器の出土がみられるが、点数自体はそれほど多くなく、多くの古墳は無遺物であった。わずかに11号墳に伴う溝から須恵器甕・土師器の椀・台付き鉢が出土した。16号墳墳丘から須恵器甕が出土している。また、18号墳では墳頂上から土師器高杯、溝内から須恵器高杯が出土している。

時期について C支群の調査では、各古墳の時期を明確にできる遺物の出土がわずかであり、相対的な時期を押さえられる程度である。墳丘及び区画溝から須恵器・土師器の出土がみられるが、多くは墳丘からの転落遺物であり、直接古墳の時期を示すものではない。11号墳溝内出土の甕は、TK208並行の年代観を示す。また、18号墳墳頂出土の須恵器高杯はTK47並行、16号墳溝内出土の甕はTK23並行の年代観をもつ。9・11・15・16・18号墳主体部出土の鉄鏃は、いずれも5世紀後半から6世紀初頭の年代観を示す。以上のような結果、本C支群に関しては、およそ5世紀後半段階に築造されていった古墳群と判断してよからう。今後、さらに調査数の増加、資料の蓄積・整理の進展が予測されることから、左坂古墳群の様相がより明らかになると期待される。

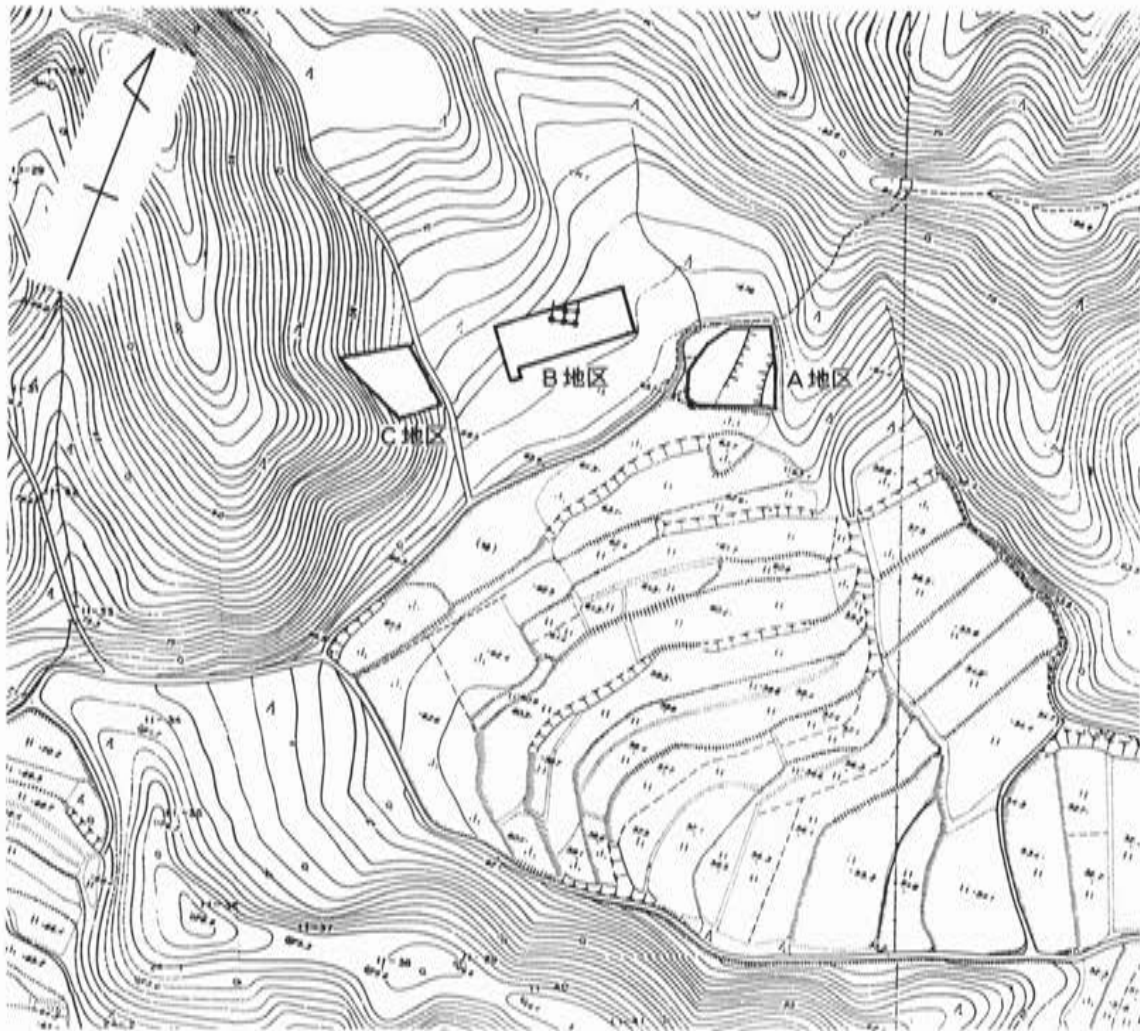
(竹原一彦)

(4) 枯木谷遺跡

1. はじめに

枯木谷遺跡は、京都市中郡大宮町奥大野小字枯木谷に所在する。この遺跡は、竹野川左岸の丘陵部を西から東に向かって、細長く開析した谷奥の盆地状地形に位置する集落跡である。現在は、水田や畑地もしくは荒地となっているが、古代には裾谷遺跡・小中野遺跡・奥大野遺跡などとともに、大きな集落が形成されていたと考えられる地域である。そのことは、遺物の散布範囲はもちろん、周辺の古墳の分布状況からもうかがわれる。現在、この地に国営農地開発事業大野団地造成工事が計画されたため、平成5年に京都府教育委員会によって、枯木谷遺跡の性格・遺存状況の把握を主眼に、グリッドによる試掘調査が実施されている^(B14)。

今回の調査は、京都府教育委員会の試掘調査成果をもとに、特に遺構・遺物が良好に遺存すると判断された地点を中心に、面的調査を実施することになった。発掘調査は、平成7年9月18日



第43図 枯木谷遺跡調査地位図(1/2,000)

～同年11月29日の期間で実施した。調査面積は約1,000㎡である。なお、現地調査は調査第2課調査第1係長伊野近富・同主任調査員竹原一彦が担当した。

2. 調査概要

過去の試掘調査では、丘陵裾部に設けられた多くの試掘地で土器などの遺物が出土し、丘陵裾付近を中心に集落などの遺溝が分布すると判断された。団地造成にあたっては、遺跡保存の観点から盛り土を主体とした工法が採用されたことから、発掘調査は切り土もしくは盛り土の薄い遺跡北部の谷状地を対象とした。調査対象地は、北西から南東方向に開ける小規模な谷の口部(幅約90m)に広がる、ゆるやかな平坦地である。

調査にあたっては、特に多くの遺物の出土がみられていた地点を対象に、3か所の調査区を設定した。また、谷の東側調査区をA地区、中央部をB地区、西側丘陵裾をC地区と呼称する。調査開始時点では、B・C地区には樹木が林立していたことから、両調査区の調査は樹木伐採を待って開始することになった。このため、当初は水田が営まれていたA地区の調査を先行して実施した。調査地の掘削は、試掘成果をもとに遺物包含層直上まで重機による表土部分の除去を行い、その後の調査は人力による掘り下げを実施した。

(1) 検出遺溝

① A地区

A地区は、同じ谷にあっても中央部(B地区)に比べ、低地がさらに谷奥に向かって切れ込む地点に当たる。地表面は、標高約65m付近に位置する。地表下約0.4～0.6mで、黒色粘質土と砂が互層となる遺物包含層を検出した。調査の結果、この遺物包含層は河川堆積土であることが判明した。調査地全域が河川跡であり、調査地東端部で河川の東岸(丘陵裾)となる地山面を検出した。調査地の地形からみて、河川の西岸はA地区のさらに西に位置し、およそ30m前後の幅をもつ河川が存在したと判断される。川底面は、北西から南東方向にゆるやかに下る傾斜をもつ。調査地中央付近の川底地山面は、周辺の川底からゆるやかに盛り上がる。川底の起伏の状況から、常に幅広の河川が流れていたのではなく、小規模な流れがいく筋も存在したと判断される。検出したこれらの小規模河川の中で、特に中心的な流路として、幅約11m・深さ約0.6m前後の河川跡(流路跡1)が東側丘陵裾に沿って流れていた。特に、この河川跡は、多量の土器を包含していた。粘質土層と砂層が互層に堆積して、両土層とも遺物の包含がみられるが、多くの土器は砂層に含まれる傾向にあった。出土した土器は、いずれも奈良時代後半頃の年代観を示し、整理コンテナ6箱分が出土した。

② B地区(第44図)

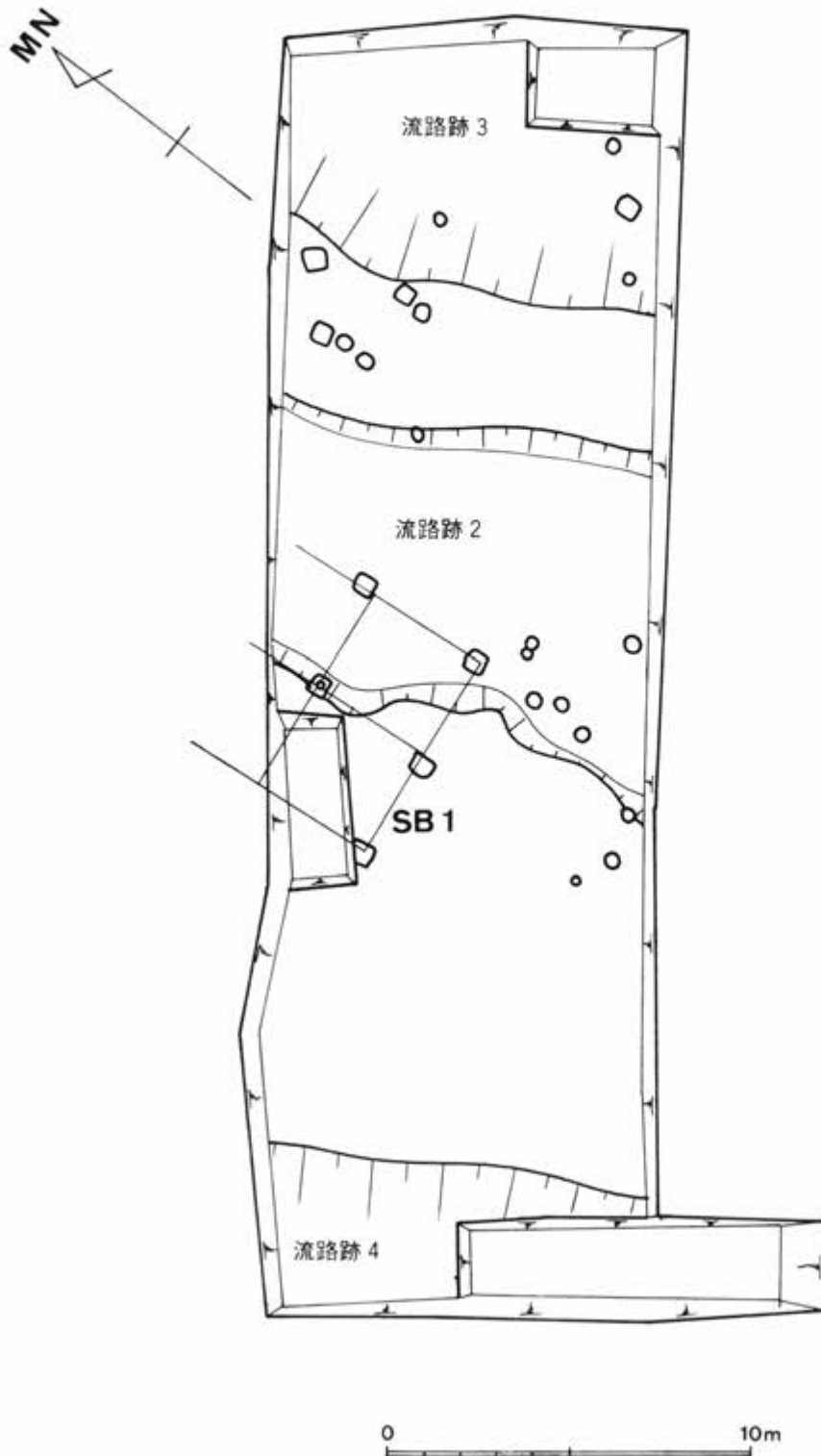
標高約69.5m付近の谷の中央部に設けた、全長約35m・幅約11mの調査区である。谷中央部は、近年まで畑であり、地形改変によって何段かの平坦地が設けられていた。地表下約0.6mで遺構面の広がりを確認した。遺構面は、北西から南東方向にゆるやかに下がる傾斜をもっていた。遺構面の直上にA地区で確認された黒色粘質土の堆積がみられたが、厚みは15～25cmと薄く、出土

遺物として奈良時代後期の須恵器片がわずかにみられる程度であった。検出遺溝として、小規模な自然流路跡(河川跡)と掘立柱建物跡1棟・柱穴がある。

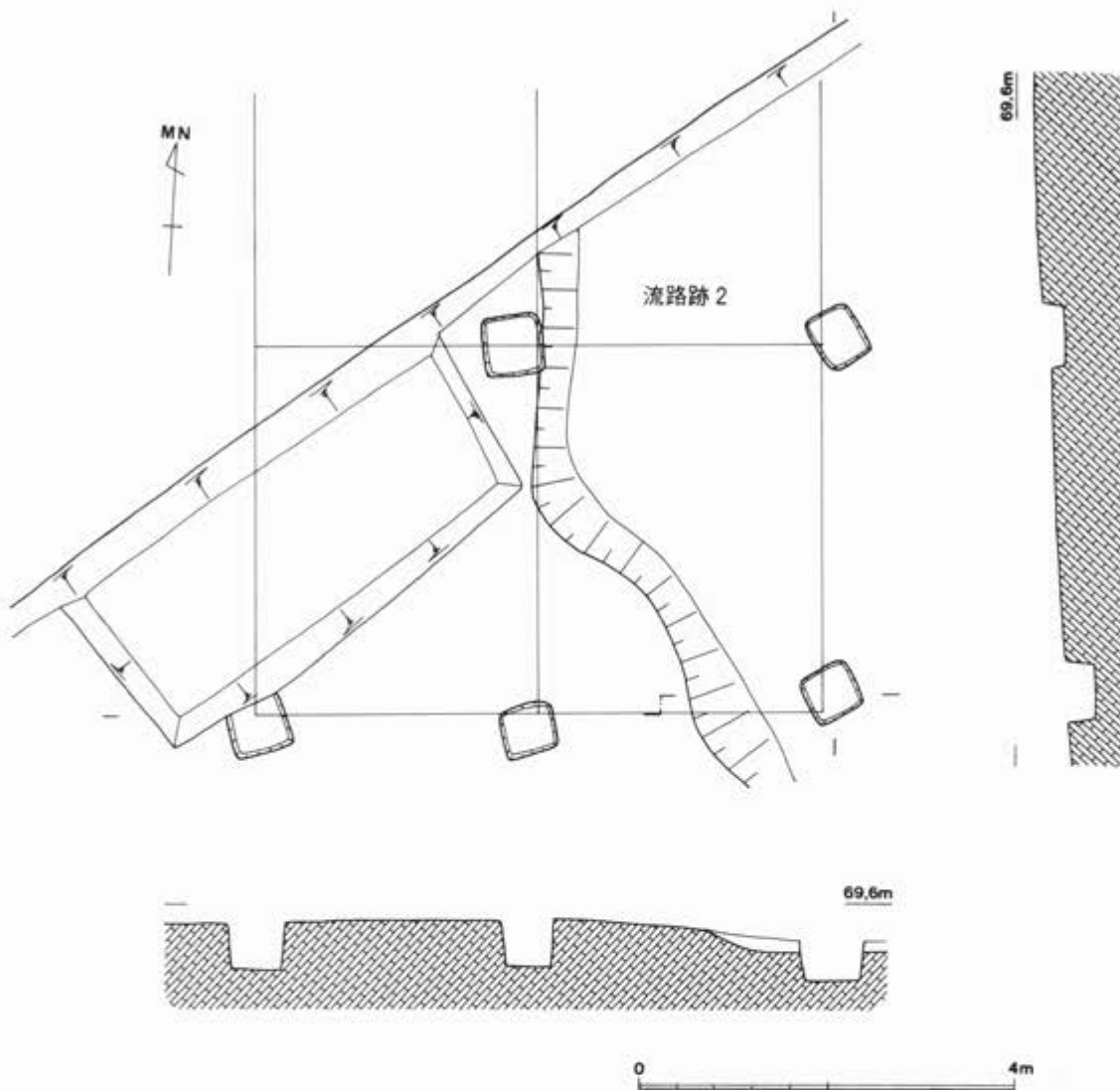
河川跡 調査区中央付近で検出した流路跡(流路2)は幅約7m、深さは約0.2mであり、遺物の出土はみられない。調査区東端では、A地区検出の河川に向かって下降する傾斜面(流路3)が

確認された。また、西端部では逆に西に向かって下降する傾斜面(流路4)が確認された。この東西2方向の傾斜面の存在から、B地区を中心とした谷中央部は河川によって丘陵裾から切り離された、島状の平坦地であることが判明した。柱穴と建物跡は、この島状の平坦地部分で検出している。

掘立柱建物跡S B1 調査区中央で検出した。建物跡は、総柱建物跡とみられるが、北西側が調査地外となることから、建物跡全体の様相は把握できない。建物跡は、南東部を検出したのにとどまり、東西2間・南北1間以上と判断される。建物跡



第44図 B地区平面図



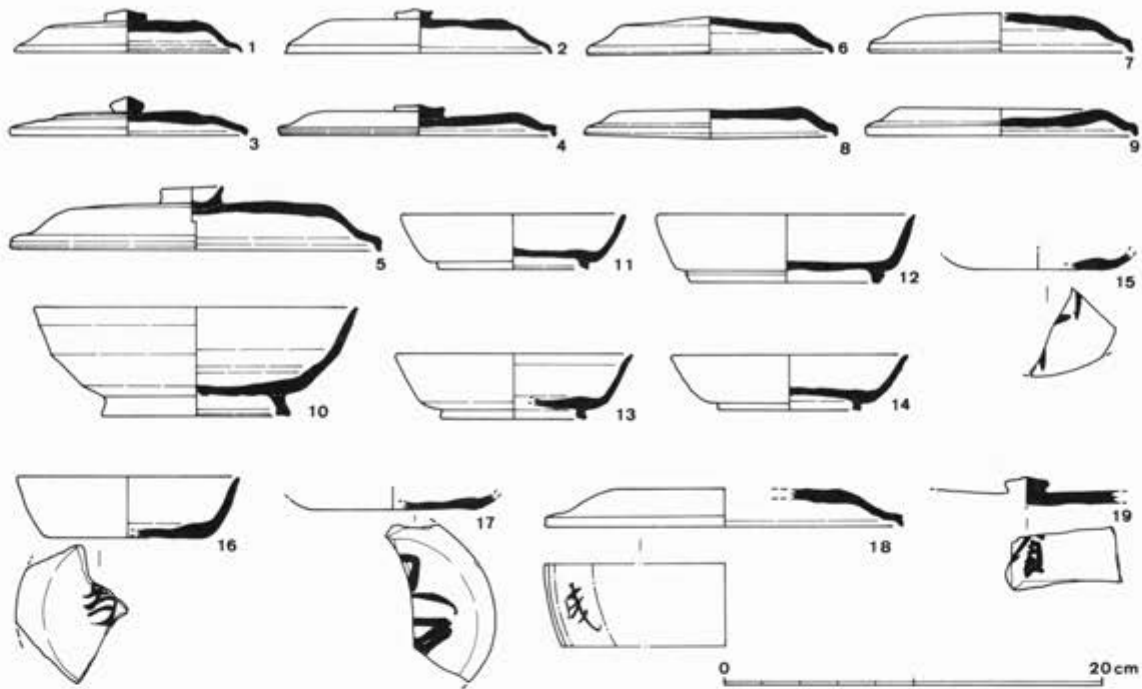
第45図 B地区S B1実測図

の柱穴は、一辺約0.6m前後の方形プランであり、地山面から約0.3～0.5m掘り込まれている。また、柱穴は、中央部で検出した流路の堆積土を切っている。建物跡の東西方向の柱穴心々間は3.0mを測る。また、南北の心々間距離は約3.6mを測った。柱穴に伴う遺物の出土はみられない。建物跡は、谷地形に規制されず、磁北に近い方位をもって建てられている。

③C地区

谷の西側丘陵裾部に設けた調査区である。標高は70～80m付近に位置する。調査地は、丘陵東斜面の緩傾斜地及び平坦地にあり、過去の試掘調査で黒色粘質土層から須恵器の出土をみたことから、周辺に遺溝の存在が予測されていた。

調査の結果、調査地の中でも丘陵裾付近の表土層直下から、遺物包含層である黒色粘質土の堆積を確認した。出土遺物としては、奈良時代とみられる須恵器の破片が数点出土したのみであった。黒色粘質土層は、斜面上部ほど薄い堆積であり、15～80cmほどの堆積状況にあった。黒色粘質土層の直下には地山が広がり、遺溝は存在しなかった。



第46図 河川跡1出土遺物実測図

(2) 出土遺物(第46図)

今回の調査では、A地区の流路1から奈良時代後半の須恵器を中心とする遺物の出土をみた。出土した須恵器の中では杯・蓋が多数を占め、杯・蓋の一部には墨書土器(約10点)・転用硯(墨・朱墨)4点が含まれている。出土遺物に関しては、現在整理作業を進めており、今回の報告では代表的なものについて図化した。

蓋は、擬宝珠つまみをもつもの(1~4)、輪状つまみをもつもの(5)、つまみをもたないもの(6~9)に大別される。蓋は、いずれも平坦な天井部から「S」字状に屈曲して口縁部に至る。蓋(3)のみ天井部から口縁にかけて明瞭な屈曲がなく、口縁端部は下方にややつまみだす。口径によって大・中・小に選別され、小形品(1・2)は口径12.1~12.6cm、中形品(3・4・6~9)は口径13.3~14.1cm、大形品(5・18)は口径19.1~19.6cmを測る。椀(10)は、外面を削り、薄手に仕上げている。底部の輪高台は高さもち、「ハ」の字に開く。口径は17.2cm、器高は5.8cmを測る。杯B(11~14)は、口径に対して体部の立ち上がりが低い。口縁端部は、直線的に丸みをもっておさめるもの(11・12)と、端部が外反ぎみに終わるもの(13・14)がみられる。口径から見ると、12.1~12.6cmの小型品(11・12・14)と、14.0cmの中型品(13)がみられる。特殊な使用例として、杯B(12)は転用硯と漆容器として利用されていた。体部内面には、くすんだ暗茶褐色の漆が附着していた。高台内面は、平滑によく擦られ、広範囲に薄い墨痕がみられる。杯A(15~17)は、底部外面に墨書を有している。破片資料であり、文字の判読はできないが、草書体である。杯B(12)の口径は15.8cm、器高は3.1cmを測る。その他の墨書土器として、蓋(18・19)が認められる。両資料とも蓋の内面に墨書されている。蓋(18)では口縁部に「成」、蓋(19)では天井部中央に「食」が墨書されている。

3. まとめ

今回の枯木谷遺跡の調査では、限られた範囲の調査であったが、掘立柱建物跡を検出するとともに、多量の土器を包含していた河川跡を検出した。河川内出土の土器は、特に須恵器の杯・蓋に代表される供膳食器が高比率で出土する一方、甕などの煮沸容器の出土がほとんどみられない。また、転用硯・墨書土器の一定量の出土は、この遺跡の性格を方向付ける資料といえる。

東西の丘陵裾から河川によって分断された、谷中央の平坦地に集落が営まれたと考えられる。検出した建物跡(倉庫)は1棟であったが、建物の存在する平坦地は東西60m・南北60～70mと推測されることから、他に数棟の建物が存在したとみられる。建物は、谷地形にとらわれることなく、磁北を意識した配置状況がうかがえる。建物跡に伴う遺物の出土がなく、建物跡の時期確定に至らないが、A地区(流路1)内出土の土器の年代観から、ほぼ奈良時代後半とみてよからう。

以上の調査成果から、枯木谷遺跡は奈良時代後半期の集落跡であることが明らかとなった。枯木谷遺跡範囲の北部域での調査であったことから、遺跡全体の性格を把握するに至らないが、一般集落とは異なった何らかの公的 성격の強い施設がこの地に建てられていたと判断される。遺跡範囲内には、谷の南西部の丘陵裾に同様な平坦地が存在し、平坦地及び南側丘陵裾の試掘調査で遺物の出土が報告されていることから、今回の調査地以外にも分散した建物などの遺溝が存在する可能性が高い。

枯木谷遺跡の南東1.3kmの丘陵裾部には、弥生時代後期～鎌倉時代の集落跡である正垣遺跡が存在し、奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡群が検出されている⁽¹¹⁾⁽¹⁵⁾。正垣遺跡は、建物跡群・出土遺物などの内容からみて、地方官衙的な性格の強い遺跡である。枯木谷遺跡と正垣遺跡は、いく筋かの谷地形を通じて結ばれることから、何らかの関連性を持った集落跡と判断されるところである。

(竹原一彦)

(5) 奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群・奈具谷遺跡

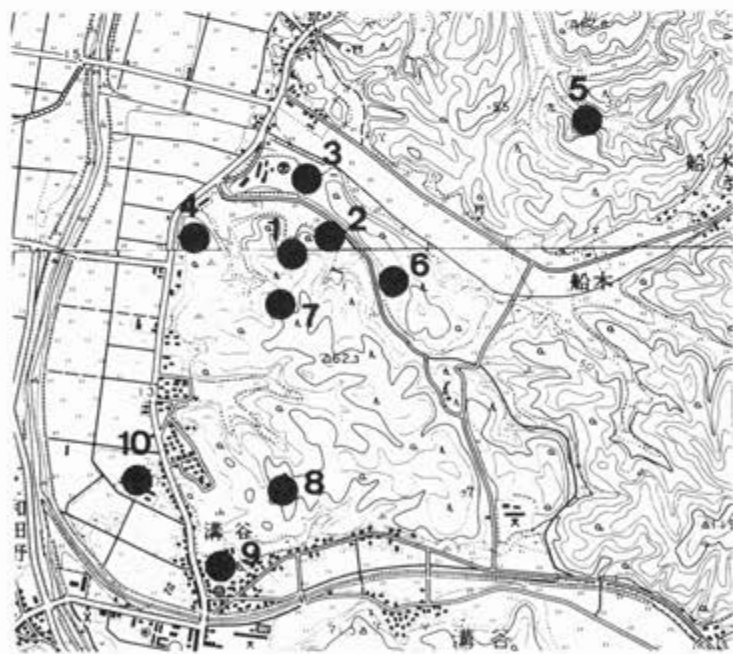
1. はじめに

調査地は、丹後半島のほぼ中央部、竹野郡弥栄町溝谷に所在する。ここは、弥生時代中期～後期の拠点集落として著名な奈具遺跡・奈具岡遺跡が立地する丘陵の谷奥にあたる。付近には、平成4年度に調査された、弥生時代中期の緑色凝灰岩製管玉・水晶製玉作り遺跡である奈具岡遺跡(第7次調査)、護岸板杭列やトチノミの灰汁抜き場が検出された奈具谷遺跡がある。

奈具岡北古墳群は、円墳を中心とした3基の古墳群とされていたが、地形測量の結果、1基の前方後円墳(1号墳)であることがわかった。また、これ以外にも造成予定地内に5基の古墳が存在することが判明し、このうち3基が今年度追加調査となった。この下方の斜面は、水晶製玉作り工房・鉄器・鉄片・ガラス玉・ガラス滓が出土した奈具岡遺跡、谷部では杭列・護岸板杭列を主とする遺構が検出された奈具谷遺跡となる。奈具岡遺跡・奈具谷遺跡は、広範囲になるので過去の調査地との混同を避けるため、調査回数により表している。

2. 調査概要

(1) 奈具岡北古墳群



第47図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

1. 奈具岡北古墳群・奈具岡遺跡・奈具谷遺跡(今年度調査地)
2. 奈具岡遺跡・奈具谷遺跡(平成4年度調査地)
3. 奈具遺跡
4. 奈具谷1～4号墳
5. 黒部遺跡
6. 奈具墳墓群・奈具古墳群
7. 奈具岡南古墳群
8. 溝谷古墳群
9. 龍淵寺古墳群
10. 丸山古墳

1号墳は、丘陵を削り出して墳形を整えた前方後円墳である。自然地形を最大限に利用しているためにややいびつであるが、全長約60m・前方部幅約26m・高さ約3.6m、後円部直径約27m・高さ約2.4mを測る。前方部北西側は、丘陵と陸橋でつながり、葺石・埴輪などの外表施設はない。

埋葬施設は、後円部の中央でほぼ東西に主軸をとる墓壇2基を検出した。中心主体である第1主体部は、長さ5.8m×幅2.1mの規模を測り、組合式木棺を用いる。東側から約1.8mは、径8cm程度の楕円形の礫を敷き

詰めている。遺骸埋葬部分のみ磔床とし、西側半分は仕切り板で区画し、矢束を納めている。

第2主体部は、舟形木棺を用いる。いずれも東頭位である。

第1主体部からは、墓壙上での祭祀に伴うと考えられる陶質土器12点、土師器高杯3点、ミニチュア土器1点が出土した。棺上からは石突1点・鉄矛先1点が発見され、推定される矛の全長は3.3mを測る。棺内の磔床部分からは鉄剣4点・銅釦2点、磔床の西側部分からは鉄鏃61点・刀子1点・不明鉄器3点が出土した。

第2主体部からは、墓壙上の祭祀に伴うと考えられる土師器高杯1点・小型丸底壺1点が出土し、棺上の遺物として鉄鏃4点が発見された。

1号墳の築造時期については検討を要するが、5世紀前半～中頃までと考えている。

2号墳は、1号墳の南東側に位置する。山道により墳丘が大きく削平されており、それに伴い埋葬施設も消失したようである。復原される規模は19m×11mと推定される。遺物が出土していないため、築造時期は不明である。

6・7号墳は、奈具岡遺跡を挟んだ東側の丘陵先端に位置し、丘陵稜線を削平し、舌状の平坦部を設け墓壙を穿つ。墓壙は、6号墳では削平された平坦部中央部よりやや南東寄りに設けられており、墓壙内から弥生時代中期の甕1点・壺1点・水差し1点が出土した。

7号墳は、狭い平坦部に墓壙を穿ち、木棺を用いる。棺内から切先を西に向けた鉄剣1点が出土した。土器類の出土は認められなかったが、周辺での調査成果などから、前期古墳である可能性が高い。

(2) 奈具岡遺跡第12次調査

奈具岡北古墳群墳丘上及び周辺の斜面・谷部にかけての広範囲で、竪穴式住居跡(工房を含む)65基以上、柱穴・土坑を検出した。遺構は、いずれも弥生時代中期後半(畿内第Ⅲ～Ⅳ様式)に比定される。竪穴式住居跡は、丘陵裾部から谷部にかけては後世の開墾を受け一部削平されているが、復原最大規模の住居跡は直径9mを測る。標高35m以上に位置する住居からは、工房に関連する遺物がほとんど出土しないことから、工房に伴う竪穴式住居跡と考えられる。現段階で確認した竪穴式住居跡の内訳は、居住専用住居跡35基、水晶専門工房跡5基、鉄器・水晶が重複して出土する住居跡25基となる。

丘陵裾部から谷部に位置する住居跡では、緑色凝灰岩製及び水晶製の玉作り、鉄器の加工が行われており、多量のこれら関連遺物が出土した。奈具岡遺跡第7次調査では、緑色凝灰岩製管玉の生産工程が明らかになったが、今回の調査では、水晶製玉作りが主体となっている。残存状況のよい工房跡では、生産当時そのままの状態、水晶の原石・剥片・未製品が床一面に散乱していた。これらとともに、加工用に使用したと考えられる鉄製工具(鑿・錐)・石錘・砥石がそろって出土し、原石から製品までの生産工程を明らかにすることができた。

生産された水晶製玉は、算盤玉・棗玉・小玉・勾玉があり、このうちタバコを輪切りにしたような小玉が最も多く、直径3.75～7.1mmまでのものが製作されている。小玉・勾玉については、丹後半島はもとより国内でも出土例がない。

緑色凝灰岩製管玉に関しては、前回調査では認められなかった直径約2mm・長さ4～8mmの極小の管玉を製作している。

鉄器の加工については、弥生時代中期段階では、国内では製鉄が行われていないため、原料となる鉄素材は大陸から輸入したと考えられる。素材としては、鑄鉄・鑄造鉄斧の再利用品があり、一部金属学的分析を行ったところ、鑄鉄脱炭鋼も確認された。製品としては、鉄斧・鉄鎌・楔状・刀子状のものがある。これらとは別に、ガラス玉・ガラス滓も出土しており、ガラス玉の生産も行われていた可能性がある。

(3) 奈具谷遺跡

奈具岡遺跡の下方の谷入り口付近に位置し、地表下約2m付近で弥生時代中期後半(畿内第Ⅲ～Ⅳ様式)と考えられる、板杭列8条及び護岸板杭列の流路3条を検出した。板杭列は、溝に平行して並び、板材は先端が面取りされ、穴を掘って埋め込まれている。分析結果によれば、この杭列は、湿地利用に伴う水田造成の痕跡を示す可能性が高い。奈具岡遺跡第1次調査と同様であり、また同時期でもあり、関連すると考えられる。

遺物としては、水晶・緑色凝灰岩の原石をはじめ、玉作り関連遺物も出土し、特に土器・木製品は遺存状態もよく、奈具岡遺跡を補足する資料といえる。

3. まとめ

奈具岡北1号墳は、副葬品に鏡・玉を持たないものの、多くの武器を副葬する特徴がある。銅釦は、弥生時代中期～後期を中心にして6遺跡で11点が出土しているが、いずれも大型で、本古墳例と同タイプのものはない。類例に中国甘粛省白草坡西周墓出土例がある。陶質土器は、その形態から韓国慶南地方で製作された可能性がある。

水晶製玉生産遺跡としては、鳥根県西高江遺跡(中期末～後期初頭)が最古とされていたが、奈具岡遺跡は中期後半の土器と共伴することから、西高江遺跡より古くなり、規模的にも国内最大である。

多くの鉄片が出土した遺跡としては、福岡県安武深田遺跡(中期末)など弥生時代中期段階では北部九州・瀬戸内が中心であり、量的には後期の熊本県二子塚遺跡が最大であったが、奈具岡遺跡の鉄片の出土量はこれらをはるかに上回る。弥生時代の鉄器の普及及び生産については、その圧倒的な量から北部九州が優位を占め、その他の地域は数時期遅れるとされていた。しかし、丹後半島内では中郡峰山町扇谷遺跡(前期末～中期初頭)・同途中ヶ丘遺跡(中期後半～後期)で鑄造鉄斧が出土している。さらに、今回の出土資料もあわせて、日本列島での鉄器の製作と普及を問題とするとき、丹後半島はきわめて重要な地域といえよう。

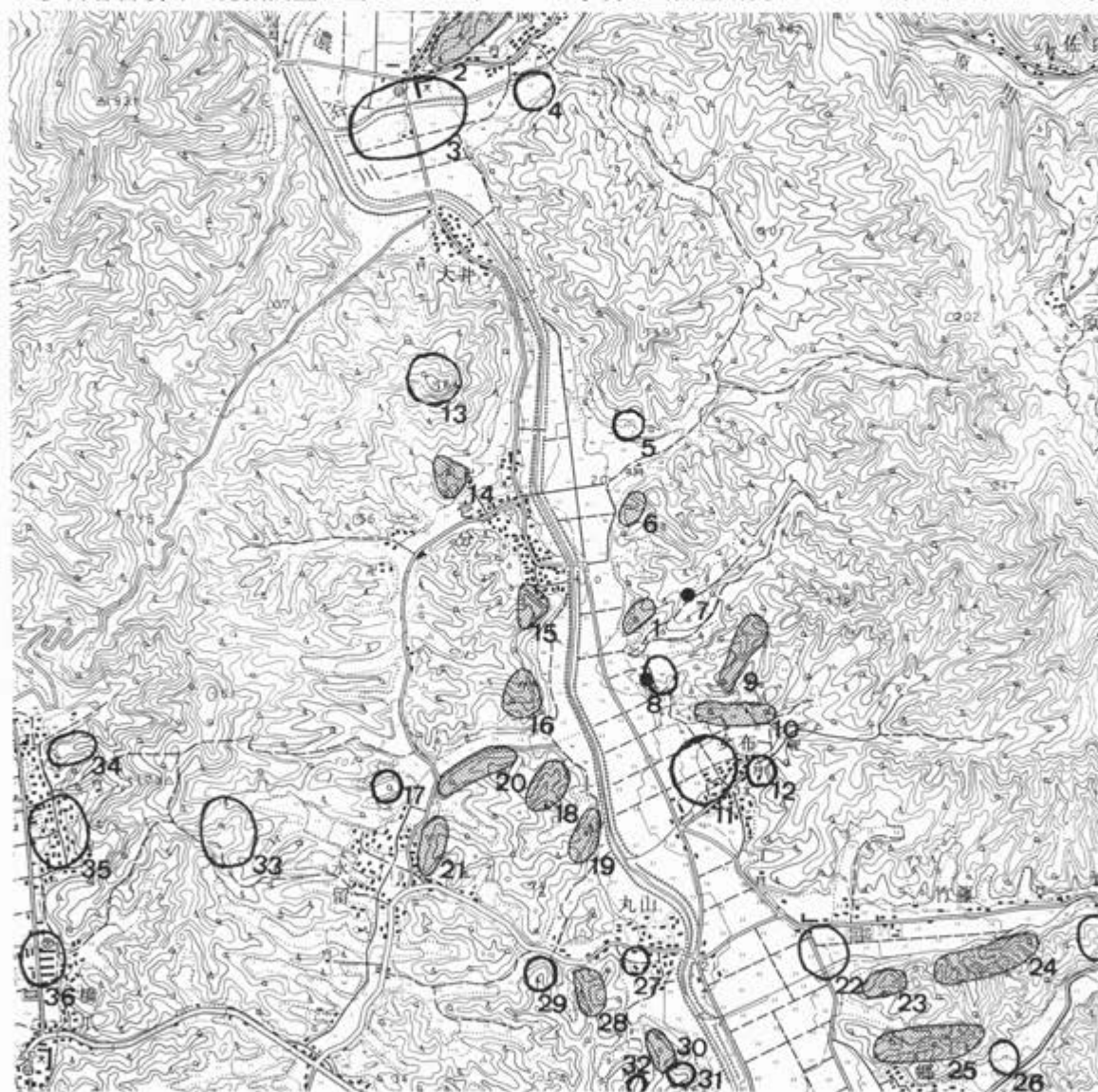
なお、今年度は概略の報告のみで、来年度の整理を待って報告する予定である。

(増田孝彦)

(6) 南谷古墳群

1. はじめに

南谷古墳群は、京都府熊野郡久美浜町字壱分小字南谷に所在する8基からなる古墳群である。今回の調査は、南谷古墳群のうち1～4号墳の4基が、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」に伴う女布団地造成工事にかかるため、同局の依頼を受けて実施した。南谷古墳群の発掘調査に当たっては、1・4号墳を当調査研究センターが担当し、2・3号



第48図 調査地周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|----------------|----------|------------|----------------|-----------|
| 1. 調査地 | 5. 椎ノ坪遺跡 | 7. 塚ヶ谷2号墳 | 8. 女布北遺跡・鶴塚古墳 | 9. 北谷古墳群 |
| 10. 葉師古墳群 | 11. 女布遺跡 | 12. 女布神社遺跡 | 14. 神福寺古墳群 | 15. 大谷古墳群 |
| 22. 竹藤遺跡 | 26. 郷遺跡 | 27. 通谷遺跡 | 28. 堤谷古墳群(B支群) | 29. 万ダラ遺跡 |
| 30. 堤谷古墳群(A支群) | 31. 豊谷遺跡 | 32. 堤谷窯跡 | 35. 海土遺跡 | |
| 36. 橋爪遺跡 | | | | |

墳を久美浜町教育委員会が担当することになった。^(注16)当調査研究センター分の調査は、調査第2課調査第1係長伊野近富・同調査員筒井崇史が担当し、平成7年7月17日から同年10月20日にかけて行った。最終的な調査面積は750m²であった。

(筒井崇史)

2. 位置と環境(第48図)

南谷古墳群が所在する久美浜町は、京都府の西北端に位置し、西・東・南の三方を山に囲まれ、北に日本海を望む地である。町内には西から久美谷川・川上谷川・佐濃谷川の3河川が北流し、それぞれに狭長な沖積平野を形成している。このうち、沖積平野の比較的発達している川上谷川・佐濃谷川流域に多くの遺跡が分布する。今回、調査を行った南谷古墳群は、久美浜町東部を北流する佐濃谷川中流域の右岸丘陵上に位置する。佐濃谷川流域では、縄文時代から人々が生活していたことがわかっている。以下、南谷古墳群周辺の歴史的環境について概観していく。

縄文時代の遺跡としては、函石浜遺跡・浦明遺跡・女布北遺跡などが知られている。このうち、南谷古墳群の南約400mに位置する女布北遺跡では、2次堆積層中から縄文時代早期の押型土器片が出土している。これは、現在、久美浜町内で知られる最古の土器である。

弥生時代の遺跡は、日本海沿岸部や川上谷川・佐濃谷川流域などで多数が知られている。沿岸部には、貨泉出土地として有名な函石浜遺跡がある。川上谷川流域では、弥生時代中期から古墳時代中期に至る大集落であったことを思わせる大量の土器と木製品が出土している橋爪遺跡などがある。調査地のある佐濃谷川流域では、河口付近の浦明遺跡、中流域の椎ノ坪遺跡・女布北遺跡などがある。浦明遺跡では、弥生時代中期初頭の溝状遺構から大量の弥生土器が出土している。椎ノ坪遺跡の出土遺物の中には、弥生時代後期の土器片にタタキ調整を施したものが多量に含まれており、畿内地方との関係が注目される。女布北遺跡では、顕著な遺構は確認されていないものの、弥生時代中～後期の土器が出土している。

古墳時代になると、丹後地域では、前期から中期にかけて加悦町蛭子山古墳・網野町銚子山古墳・丹後町神明山古墳という日本海沿岸域でも最大級を誇る大型前方後円墳が相次いで築造される。久美浜町でも川上谷川流域で、島茶臼山古墳(全長42m)・岩ヶ鼻古墳(全長52m)・芦高神社古墳(全長50m)などの前方後円墳が、前期から中期にかけて築かれる。これらは、川上谷川流域の首長墓と考えられる。

一方、佐濃谷川流域に、前方後円墳を見いだすことはできず、南谷古墳群同様、木棺直葬を主体とする小規模な古墳が、前期中頃から後期中頃にかけて、多数築造される。調査地周辺の古墳群について例をあげると、北谷古墳群・堤谷古墳群・薬師古墳群などがある。北谷古墳群は、前期中頃から中期にかけて営まれた古墳群で、前期中頃に位置づけられる1号墳から多くの土器とともに碧玉製紡錘車形石製品が出土しており、この時期の佐濃谷川流域の首長墓と考えられる。堤谷古墳群は、前期後半から後期初頭にかけて営まれた古墳群である。出土遺物に山陰系の壺や鼓形器台などがある。薬師古墳群では、後期中頃の木棺直葬墳が確認されている。

後期後半になると、丹後地方にも横穴式石室が導入される。川上谷川流域では、金銅装双龍環頭大刀を含む豊富な遺物が出土した湯舟坂2号墳や、平野古墳・塚ノナル古墳などが、佐濃谷川流域では塚ヶ谷2号墳・鶏塚古墳・下村岡古墳などが知られる。これらの多くは後期後半または末に築造され、単独または少数で立地する傾向が強く、首長ないし有力者の墓と考えられる。また、この時期には、長柄横穴群・下西谷横穴群などの横穴群も知られる。

古墳時代の集落遺跡としては、橋爪遺跡・女布北遺跡などで見つかっているが、久美浜町内での調査例は多くない。

飛鳥・奈良時代の遺跡としては、古墳時代末から奈良時代前半にかけて須恵器や瓦類を生産した堤谷窯跡や、遺物散布地であるが伯耆谷の丘陵縁辺部に点在する須田遺跡群などがある。ここからは、須恵器円面硯や転用硯などの官衙的色彩をもつ遺物が出土している。

中世では、嘉応2(1170)年銘の銅板製経筒が出土した山の神1号経塚や、銅鑄製経筒内に朱書きされた経巻が遺存していた栃谷経塚、鎌倉時代以降に位置づけられる和鏡と水晶玉が出土した西明寺経塚など、経塚が多く見つかっている。

(石田春彦)

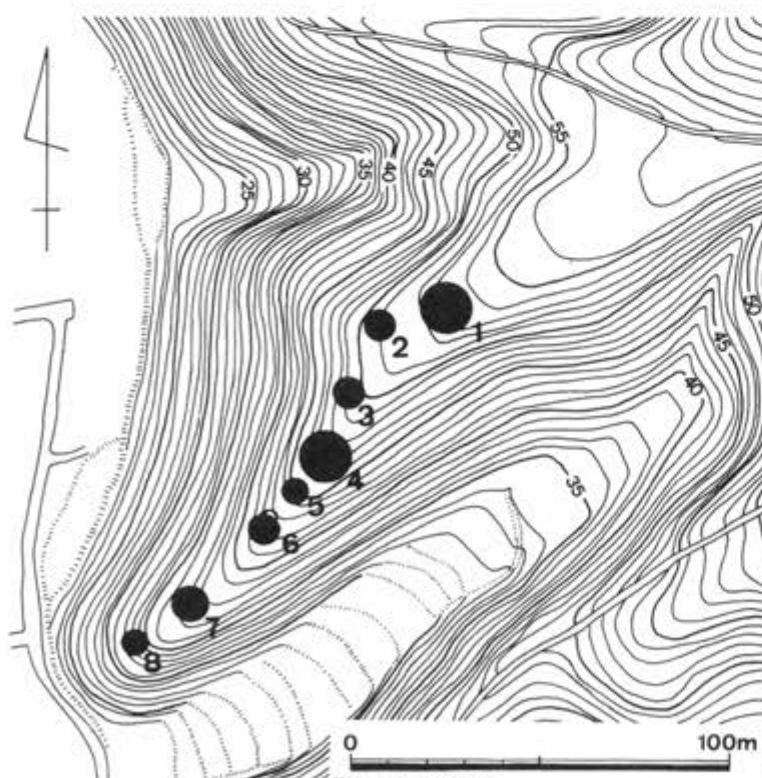
3. 南谷古墳群の立地状況(第49・50図)

南谷古墳群は、佐濃谷川に向かって南西方向にのびる丘陵稜線上に位置する。

1号墳は、標高53.0m付近に位置し、直径15.0mを測る円墳である。1号墳の北東の丘陵頂部は、幅の広い緩斜面となる。1号墳は、丘陵稜線よりもやや北西に位置する。4号墳は、標高47.8m付近に位置し、長径16.5m・短径15.0mを測るやや楕円形を呈する古墳である。4号墳付近から丘陵は細くなるので、4号墳は丘陵稜線上に位置する。

また、久美浜町教育委員会が担当することになった2・3号墳は、1号墳と4号墳のあいだに広がる丘陵頂部と北側の丘陵斜面の地形変換点上に築造されている。両古墳とも直径約7m・高さ約0.6m前後を測る小規模な円墳である。

造成対象地外の5号墳には、多数の石材が散乱してい



第49図 南谷古墳群分布図

ることから、横穴式石室を内部主体とすると考えられる。1・4号墳も、横穴式石室を内部主体とする可能性が考えられたが、調査の結果、両古墳とも木棺を直葬する古墳であることが判明した。

4. 調査の経過と概要

(1) 調査経過

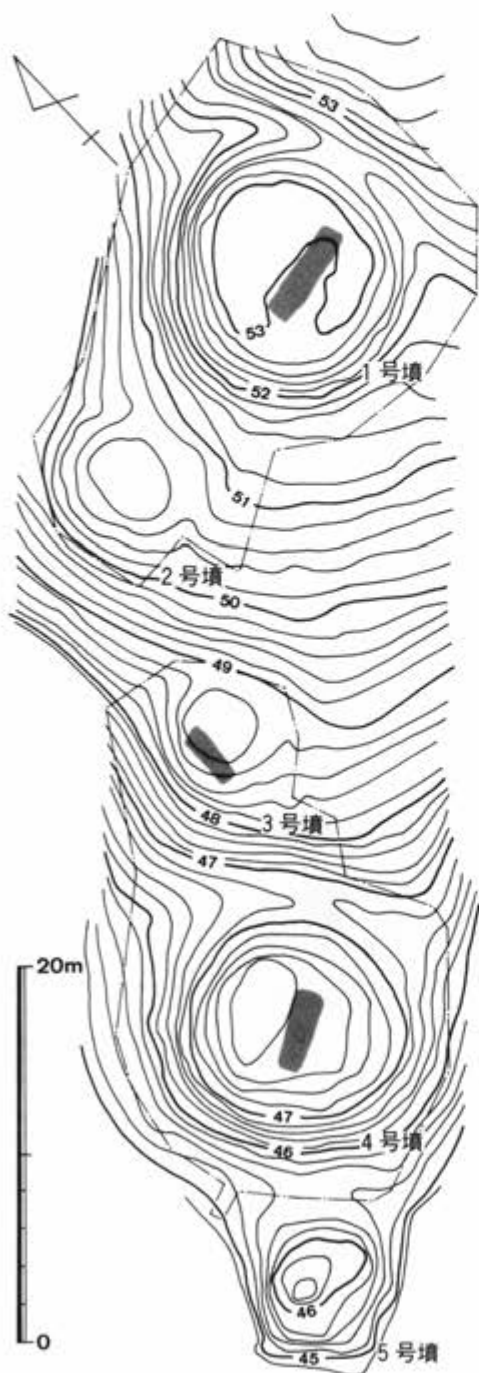
現地調査は、平成7年7月17日から開始した。調査は、まず1号墳と4号墳の墳頂平坦面の中心点に基準杭を設定し、この2点を結ぶ直線を基準線とした。さらに、この基準線上及び直交する方向に任意の基準杭を設定し、これをもとに地形測量(縮尺1/100・20cm等高線)を行った。

墳丘の表土掘削は、地形測量で明らかになった墳頂陥没痕の長軸方向と、それに直交する方向にセクションを設定し、四分法によって行った。

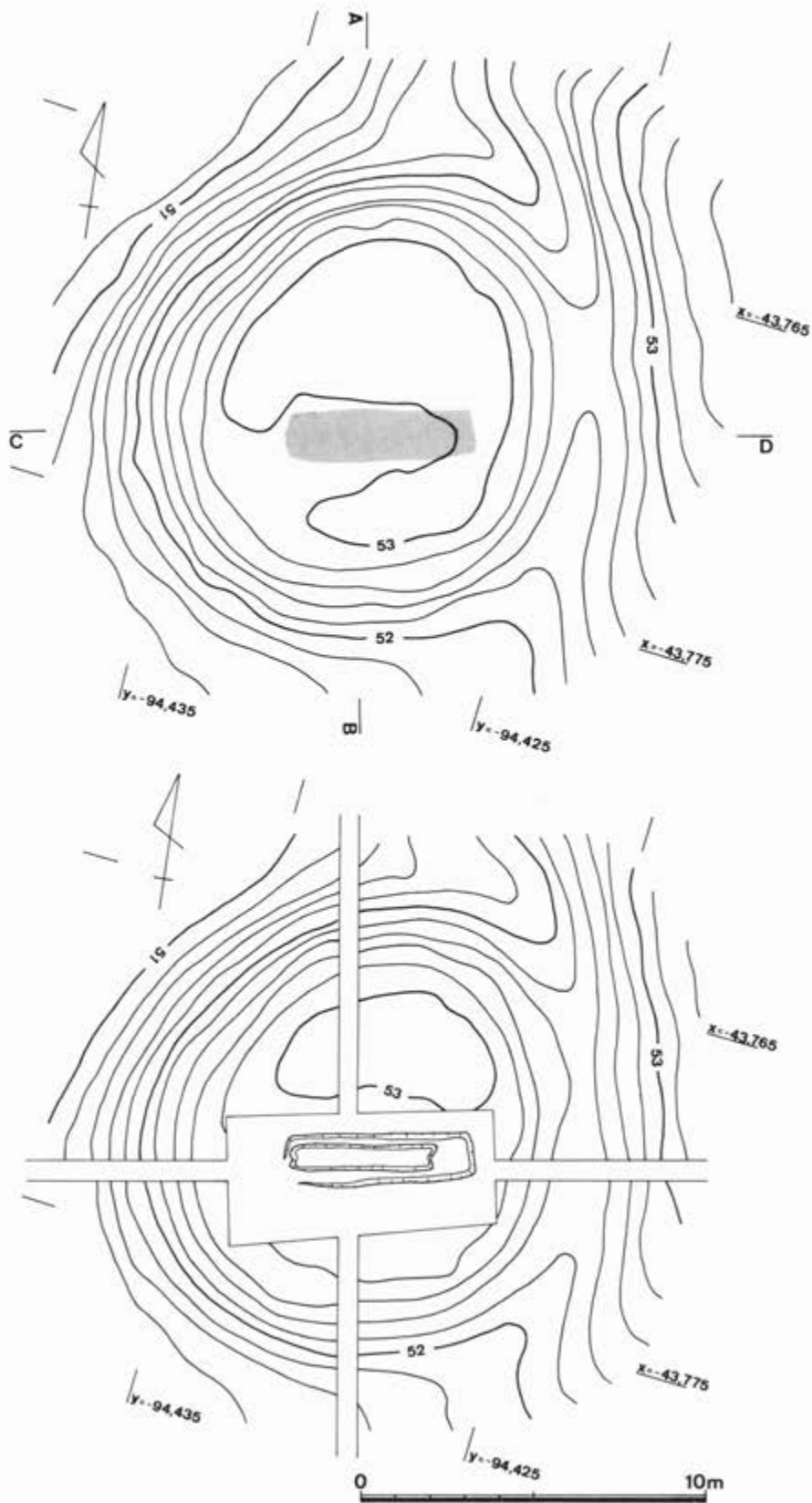
墳丘の表土掘削終了後、墳頂部で主体部の検出に務めたが、両古墳とも盛り土墳ということもあり、主体部の確認にかなりの時間を要した。1号墳では、墳丘上に8m×4mのトレンチを設定し、掘り下げを行った。最終的に、墳頂トレンチ内を旧表土まで掘り下げることによって、木棺を直葬する主体部を確認することができた。木棺はいわゆる組合式木棺である。遺物は、表土直下や陥没痕内から須恵器8点余りが出土している。また、木棺内から鉄鏃10点・刀子1点・不明銅製品1点が出土している。

4号墳では、表土掘削後、墳頂を墓壙が確認できるまで墳丘を全面的に掘り下げることにした。墳丘の掘り下げに当たっては、幅30cmの断ち割りを先行して墳丘盛り土の状況と墓壙の確認に務めた。主体部は、現地表下約0.7mまで掘り下げて確認することができた。主体部は組合式木棺を直葬していた。遺物は、表土直下及び陥没痕内から、須恵器6点、土師器片が出土している。木棺内からの出土遺物はなかった。

墳丘の断ち割り作業や実測・写真撮影などを行い、平成7年10月19日にすべての現地調査を終了した。翌10月20日に現地説明会を実施し、約60人の参加を得た。



第50図 南谷古墳群地形測量図



第51図 南谷1号墳墳丘測量図(上が調査前、下が調査後)

(2)南谷1号墳

①墳丘(第51・52図)

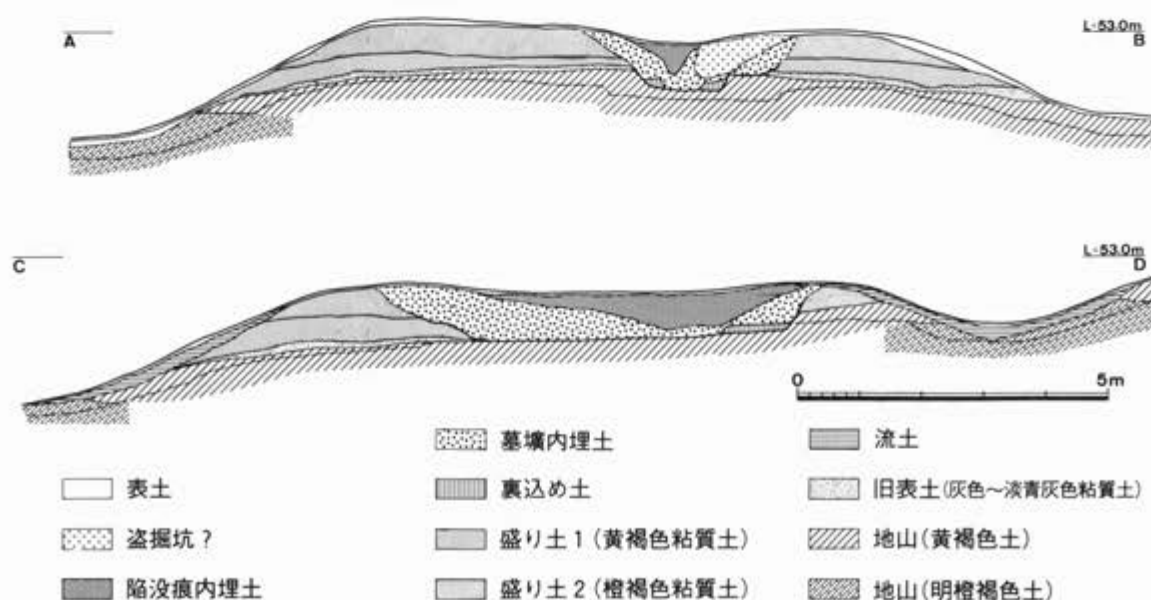
標高53.0m付近に位置し、直径15.0mを測る円墳である。墳高は、最大で2.0mを測る。墳丘の遺存状態は良好で、墳頂部や墳丘裾部を明確に認識できた。また、墳丘の北東側から東側にかけて大きな区画溝が認められた。墳頂部には、長径10.0m・短径8.5mを測る平坦面がみられ、そのやや南寄りにはほぼ東西方向に主軸を持つ深さ0.3mほどの陥没痕が認められた。調査の結果、この陥没痕は、木棺の腐植に伴うことが明らかになった。

墳丘は、地山成形と盛り土によって築造されている。墳頂部に設けたトレンチにおける土層観察の結果、墳丘の築造・墓壙の構築について次のような知見を得た。すなわち、旧表土(灰色～淡青灰色土、部分的に大量の炭化物を含む)上に、盛り土1(黄褐色粘質土)を土盛りして、その上面が水平になるようにしている。盛り土1の上面の標高はほぼ52.5mを測る。これは、旧表土が西に向かって傾斜しているため、墳丘をいったん水平に整えるための土盛りと考えられる。この盛り土1の上に、盛り土2(橙褐色粘質土)が土盛りされて墳丘が完成する。盛り土2は、木棺の腐植に伴って木棺内に落ち込んでいることから、木棺の安置後に土盛りされたと考えられる。

区画溝は、地山(黄褐色土・明橙褐色土)を掘り込んでおり、その際に得られた土を盛り土として利用していると思われる。

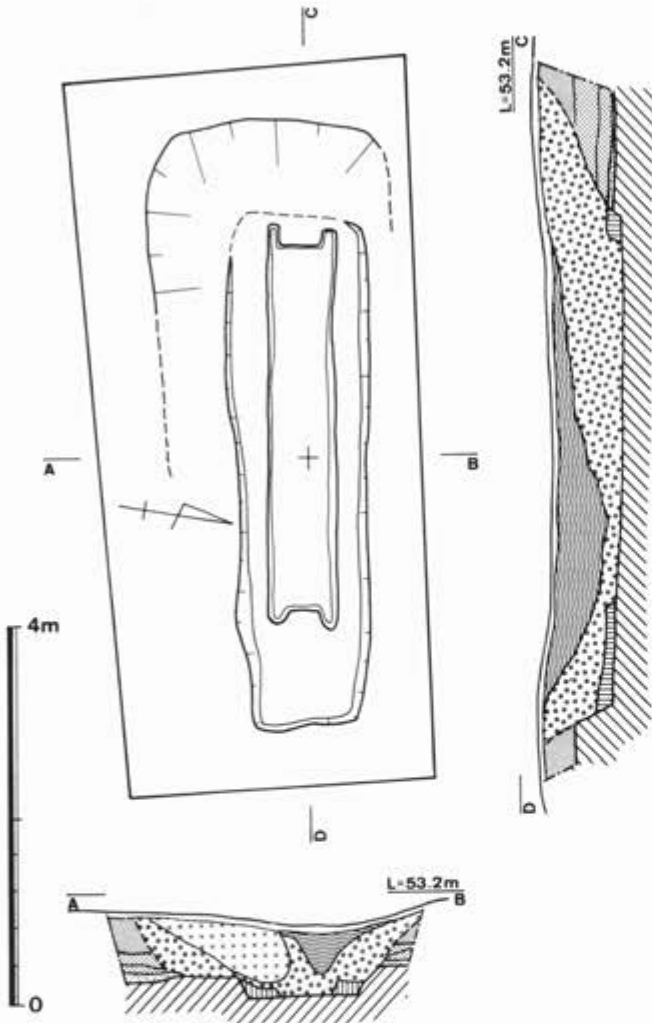
②埋葬施設(第53図)

木棺を直葬する主体部1基を検出した。墓壙は、墳丘の中心部よりもやや南寄りで検出された。木棺の安置は、墳丘の項で述べたように、盛り土2以前に行われたと考えられる。したがって、墓壙は、盛り土1と旧表土を掘削することによって造られている。盛り土1の墓壙傾斜角度と、旧表土から掘削した墓壙傾斜角度は若干異なり、特に西側の傾斜角度はかなりゆるやかである。また、南側では横断面で幅0.8mほどのテラスが確認できた。

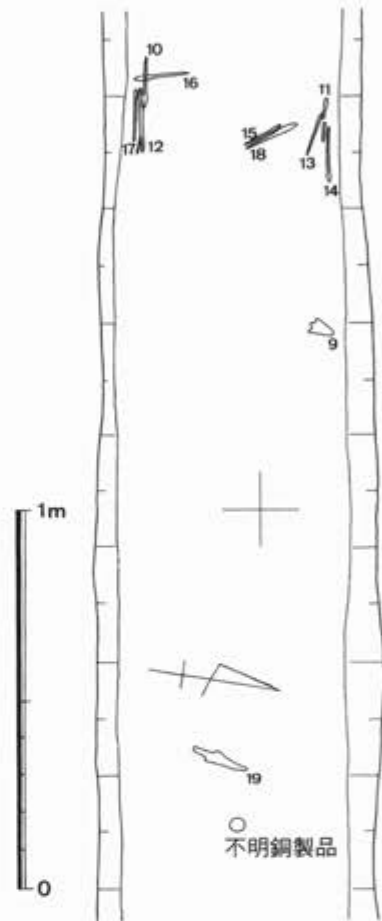


第52図 南谷1号墳墳丘断面図(A-B、C-Dは第51図に一致)

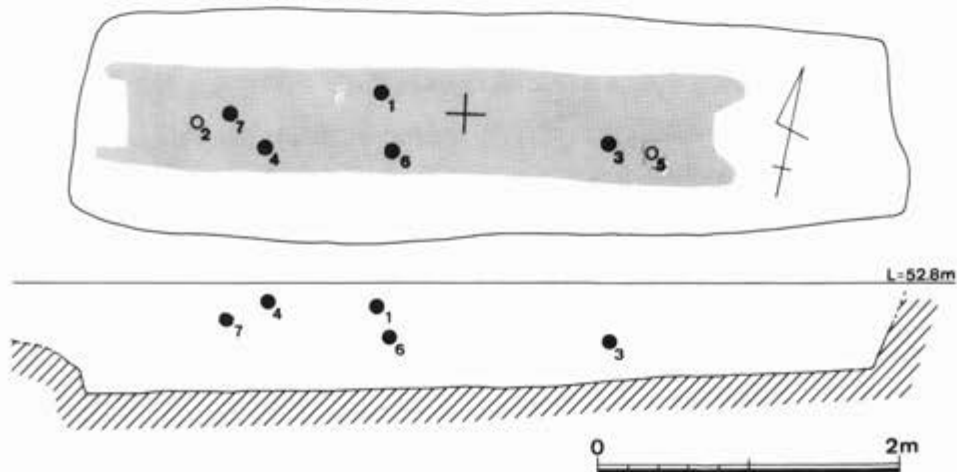
墓壙は、当初、盛り土1の水平面上で確認できなかったため、最終的に旧表土まで掘り下げることによって確認した。その後の土層観察や再精査の結果、墳丘西側の盛り土1上で墓壙掘形を確認することができた。しかし、東側では未確認のまま旧表土まで掘り下げたため、正確な形状



第53図 南谷1号墳主体部実測図
(トーンは第52図に同じ)



第54図 南谷1号墳棺内遺物出土状況



第55図 南谷1号墳墓壙内出土遺物出土地点図(トーンは木棺の位置を示す)

を把握することができなかった。部分的に検出できた平面形から類推すると、隅丸に近い長方形プランを呈していたと思われる。規模は全長6.4m以上・幅2.6mと推定される。また、横断面で確認したテラス面についても、正確な形状・規模を把握することはできなかった。

埋土について、一部誤認したまま掘削したため、墓壙斜面の傾斜角度のわかるところは少ないが、盛り土の厚い西側墓壙斜面の傾斜角度は、およそ30°であることが確認できた。比較的ゆるやかな傾斜角度から、1号墳の埋葬施設は、構築墓壙である可能性を指摘したい。

木棺痕跡は、旧表土を掘り込んだ墓壙まで掘り下げて確認することができた。木棺痕跡はこの墓壙の西壁に接するように置かれていた。検出された木棺は、長側板と木口板を組み合わせたいわゆる組合式木棺である。木棺は、長さ4.3m・幅0.7mを測る。主軸はE-10°-Nを測る。旧表土から掘り込まれた墓壙は、全長5.5m・幅1.5mを測る。棺底は、西側が低く東側が高いため、東頭位であったと考えられる。

③遺物の出土状況(第54・55図)

南谷1号墳では、墓壙上から須恵器が、木棺内から鉄鏃・刀子などが出土した。

須恵器には、有蓋高杯・高杯蓋・広口壺などがあり、土師器は出土していない。須恵器の多くは陥没痕内から出土したものである。その出土地点については第55図に示した(○は、出土レベルの不明なもの)。これらは、木棺の腐植に伴う陥没によって2次的に移動しているため、本来の配置状況は復原できなかった。各個体は、比較的完形に近い状態で出土しているため、破砕などの行為は行われず、墓壙埋土上面に供献されたと考えられる。

鉄鏃は、いずれも木棺内西寄りで10点出土した(第54図)。鉄鏃の切先は、さまざまな方向に向いており、本来どちらに向けて副葬されていたか判断しきれない。鉄鏃の直下で棺底を確認したため、これらの鉄鏃は、棺上に置かれたものではなく、木棺内に副葬されたと判断した。鉄鏃は、数本ずつ南側と北側の長側板に沿って、置かれていたと思われる。

刀子1点・不明銅製品1点は、棺の東側から出土した。棺底からやや遊離した状態で出土した。

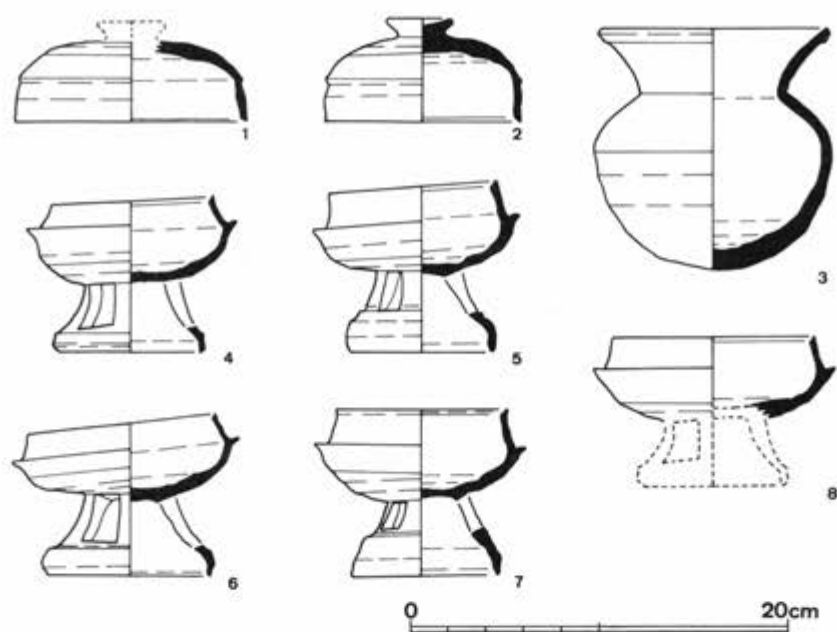
(筒井崇史)

④出土遺物

須恵器(第56図) 1・2は、高杯蓋である。器高は高く、天井部はやや丸みをおびる。天井部と口縁部を分ける稜線はややシャープさを欠く。口縁端部は、内傾する。天井部には、つまみを有する。1は、自然釉が付着する。3は、広口壺である。口縁部は強く外反し、端部を丸く納める。体部はやや肩部が張る球形を呈する。4～8は、短脚一段スカシの有蓋高杯である。口縁部は、内傾し端部に段を有する。4・6は、5・7・8に比べ、内傾の度合いが強い。受け部は短く丸く外上方へのびる。脚部は、端部が内湾する「ハ」字形を呈し、杯部に接して方形のスカシが、3方に穿孔されている。スカシ穿孔時の工具痕が杯部底面に残っている。

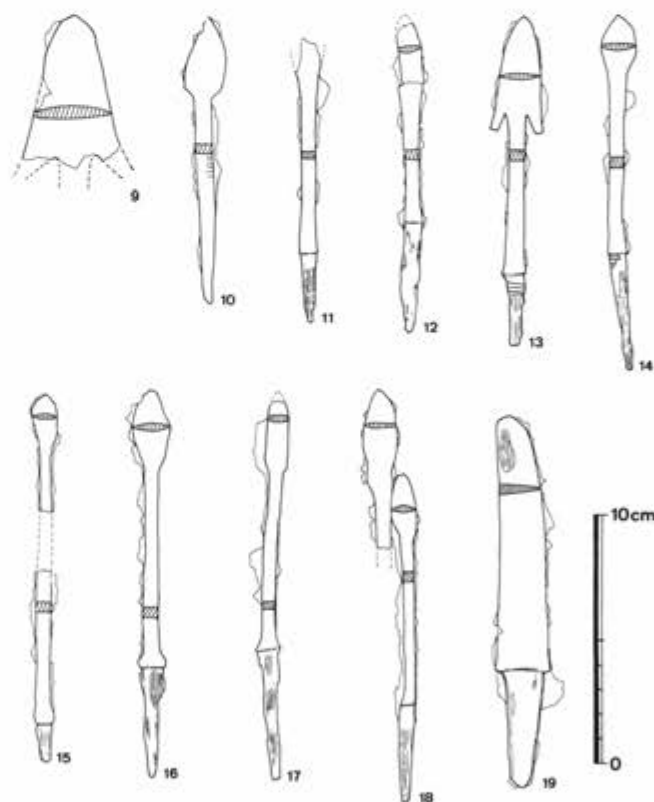
これらの須恵器は、形態からみて陶邑編年のTK47～MT15型式に位置づけられよう。

(福田和浩)



第56図 南谷1号墳出土遺物実測図(1) 須恵器

鉄鎌(第57図9~18) 鉄鎌は、逆刺を有する柳葉式のもの(9・13)と、逆刺を有さない柳葉式のもの(10~12・14~18)に分けられる。9は、鎌身の残存長が5.9cmを測る大型品であるが、頸部以下を欠損する。10~18は頸部の長い、いわゆる長頸鎌である。13以外の逆刺を有さないものは、鎌身長が3cmを測るもの(10・14~16)と、2cmほどのもの(12・17・18)に分けられる。前者は細身であるが、後者はやや鎌身幅が広い。鎌の全長は、13で13.2cm、17で15.2cm(残存長)であり、おおむね13~15cm前後を測る。各鉄鎌は、矢柄の木質や矢柄に巻き付けられた桜の樹皮と思われる有機質の遺存状態

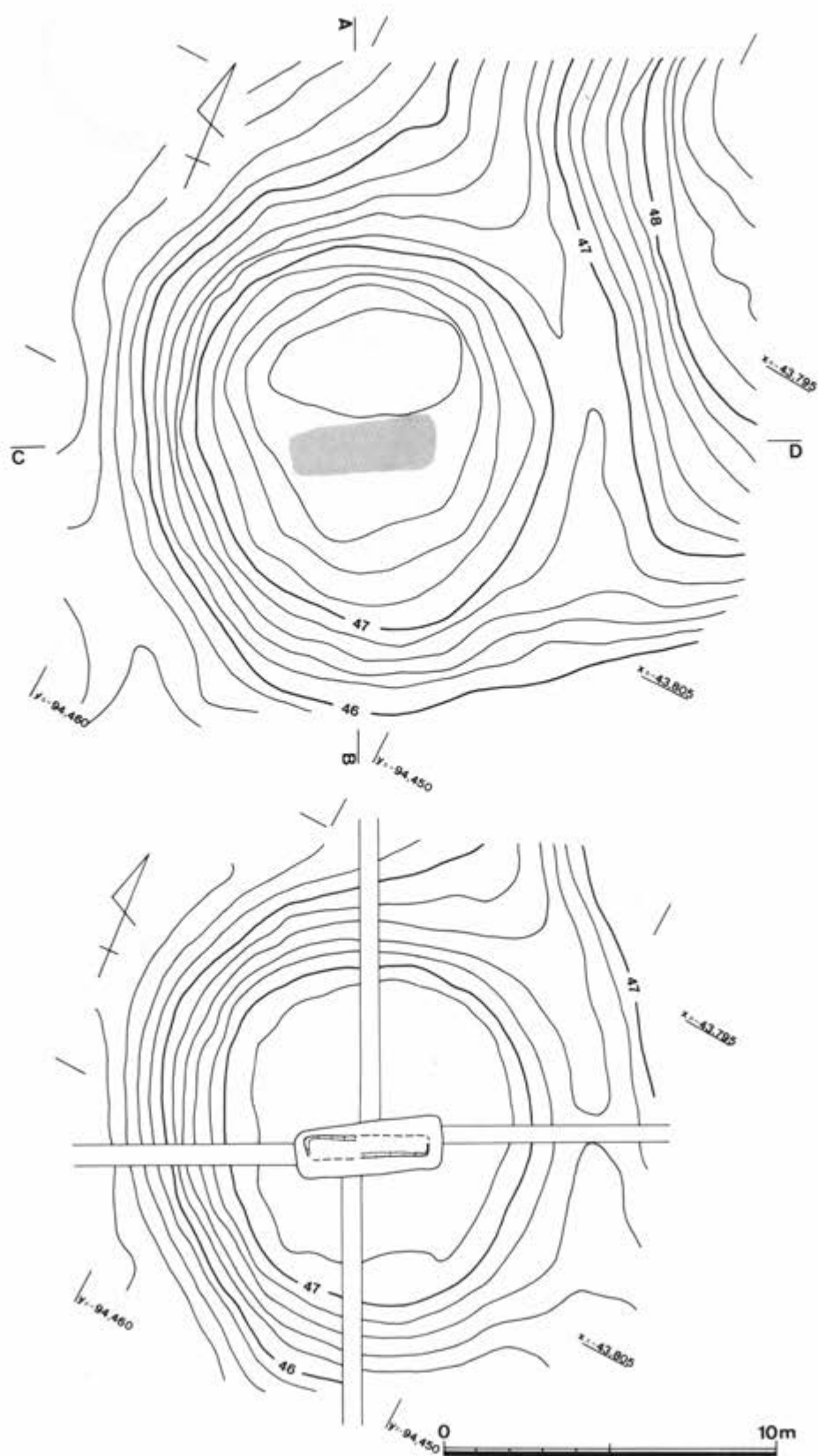


第57図 南谷1号墳出土遺物実測図(2) 鉄器

が比較的良好である。各部の断面形は、錆や矢柄の木質、桜の樹皮などのため正確に観察し得ないが、鎌身は鑄をもたない平造りで、頸部は長方形、茎は円形を呈するようである。

刀子(第57図19) 全長15.0cm・刃部幅1.9cmを測る。両関で、茎に木質が遺存する。刃部にも木質が付着しており、鞘に収められていたと思われる。

不明銅製品 直径2.5cm・厚さ0.2cmを測る円形の銅製品である。中央に小さな穴があいた突起があることから、鏡のミニチュアと思われる。遺存状態が悪く、図化していない。



第58図 南谷4号墳墳丘測量図(上が調査前、下が調査後)

(3)南谷4号墳

①墳丘(第58・59図)

標高47.8m付近に位置し、長径16.5m・短径15.0mを測る、やや楕円形を呈する古墳である。墳高は、最大で2.8mを測る。墳丘の遺存状態は比較的良好で、南側がやや崩れていると思われるほかは、墳頂部や墳丘裾部を明確に認識できた。また、北東側に大きな区画溝が認められた。墳頂部には、長径8.0m・短径7.0mを測る平坦面がみられ、その中央部に東西方向よりもやや南に振る、深さ0.2mほどの陥没痕が認められた。この陥没痕は、1号墳同様、木棺の腐植に伴うものであった。

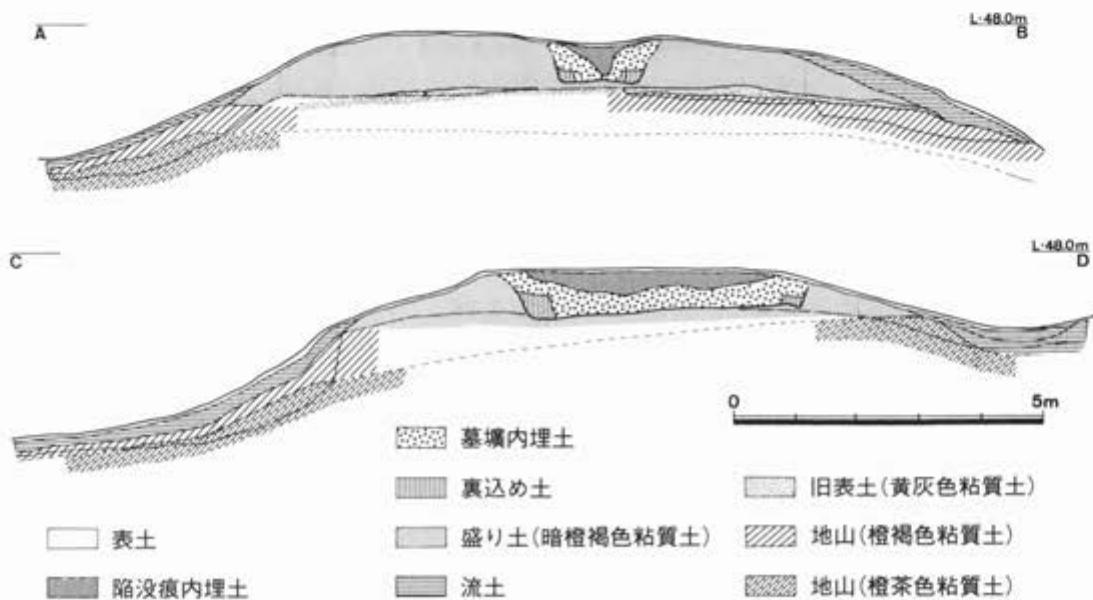
墳丘は、地山成形と盛り土によって築造されている。調査経過で述べたように、4号墳では、一部断ち割りを先行しながら、墳丘を掘り下げ、墓壙の検出に務めた。断ち割りの観察によれば、墳丘は旧表土(黄灰色粘質土)上に、盛り土(暗橙褐色粘質土)を土盛りすることによって形成されている。盛り土である暗橙褐色粘質土は、砂粒の混入の度合いなどによって、さらに細分することができた。

墓壙は、墳丘を現地表下から約0.7mほど掘り下げて確認することができた。なお、墓壙底面は旧表土に達していないため、墓壙は盛り土を掘削して設けられていると判断した。

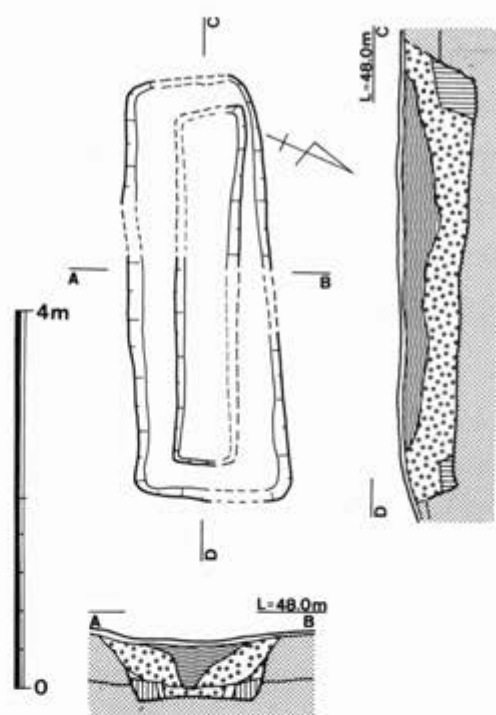
4号墳の盛り土は、区画溝が地山(橙褐色粘質土・橙茶色粘質土)を掘り込んでいるので、その際に得られた土を利用していると思われる。

②埋葬施設(第60図)

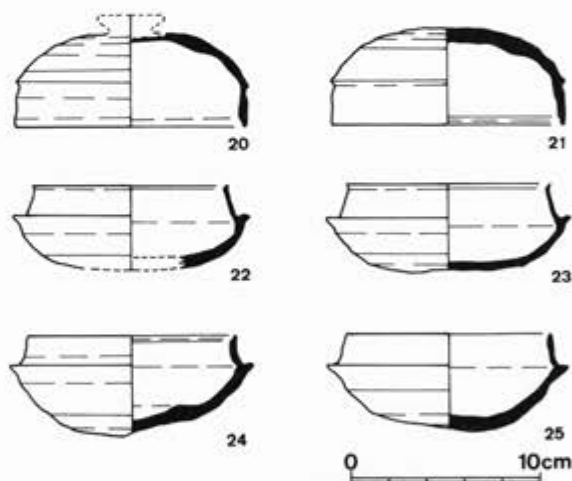
木棺を直葬する主体部1基を検出した。墓壙は、墳丘のほぼ中央部に掘削されていた。墓壙は、墳丘掘り下げ作業中の断ち割りによって、一部を損なったが、全長4.5m・幅1.6mを測り、平面形は長方形プランを呈する。墓壙の主軸は、E-33°-Nを測る。墳丘の項で述べたように、墓壙底面は、旧表土・地山を掘り込んでいない。



第59図 南谷4号墳墳丘断面図(A-B、C-Dは第58図に一致)



第60図 南谷4号墳主体部実測図



第61図 南谷4号墳出土遺物実測図(須恵器)

④出土遺物(第61図)

図示したのは須恵器のみである。20は、つまみを欠損しているが高杯蓋である。器高は高く、天井部は丸みがある。口縁端部に段を有する。天井部と口縁部を分ける稜線は、ややシャープさに欠ける。天井部内面に同心円文が認められる。21は、杯蓋である。20同様、器高は高く、天井部は丸みをおびる。口縁部は内傾し、受け部は短く水平に外方へのびる。22～25は、杯身である。形態的には、1号墳出土の有蓋高杯に類似している。25は、口縁端部を丸く納める。

4号墳出土の須恵器も、陶邑編年のTK47～MT15型式に位置づけられると思われる。

(福田和浩)

墓壙斜面の傾斜は60～70°を測り、1号墳の値とは大きく異なる。4号墳の墓壙は、墓壙斜面の傾斜角度が急であることから、いわゆる掘り込み墓壙ではないかと考える。

木棺痕跡は、墓壙内をさらに10cmほど掘り下げて確認することができた。検出できた木棺痕跡の一部で幅4cmほどの黄色粘質土が認められ、棺材が粘土質に置き換わったものと考えられた。木棺は、側板と木口板が直角に組み合わさる木棺であったと考えられる。木棺は、墓壙同様、断ち割りて一部損なったが、長さ3.8m・幅0.6mを測る。木棺の主軸は、E-25°-Nを測るが、墓壙の主軸とは大きく異なる。木棺の棺底は、西側が低く、東側が高いため東頭位であったと考えられる。

③遺物出土状況

4号墳から出土した遺物は、須恵器・土師器の土器に限られる。これらは、いずれも表土直下もしくは陥没痕内から出土した。出土したのは須恵器杯・高杯蓋、土師器片などである。須恵器杯24は、墓壙の北側の表土直下から出土した。須恵器蓋20・杯23・25は、墳丘横断面と縦断面がほぼ交差する陥没痕内からまとめて出土した。これらは、墓壙埋土上面にまとめて供献されたものであろう。

なお、木棺内から遺物は出土しなかった。

(筒井崇史)

4. まとめ

今回の調査では、当調査研究センター及び久美浜町教育委員会により、南谷1～4号墳の4基の古墳の調査を行った。その結果、各古墳とも木棺直葬を主たる埋葬施設とする古墳であることが明らかとなった。1・4号墳から出土した須恵器の年代観から、南谷古墳群は、古墳時代後期前半に相当することが明らかになった。久美浜町教育委員会が調査された2・3号墳のうち、2号墳では木棺を直葬する主体部2基が検出されたが、遺物は出土しなかった。また、3号墳では、乳文鏡1面、玉類40個余り、刀子1点が出土した木棺直葬墓1基が検出された。

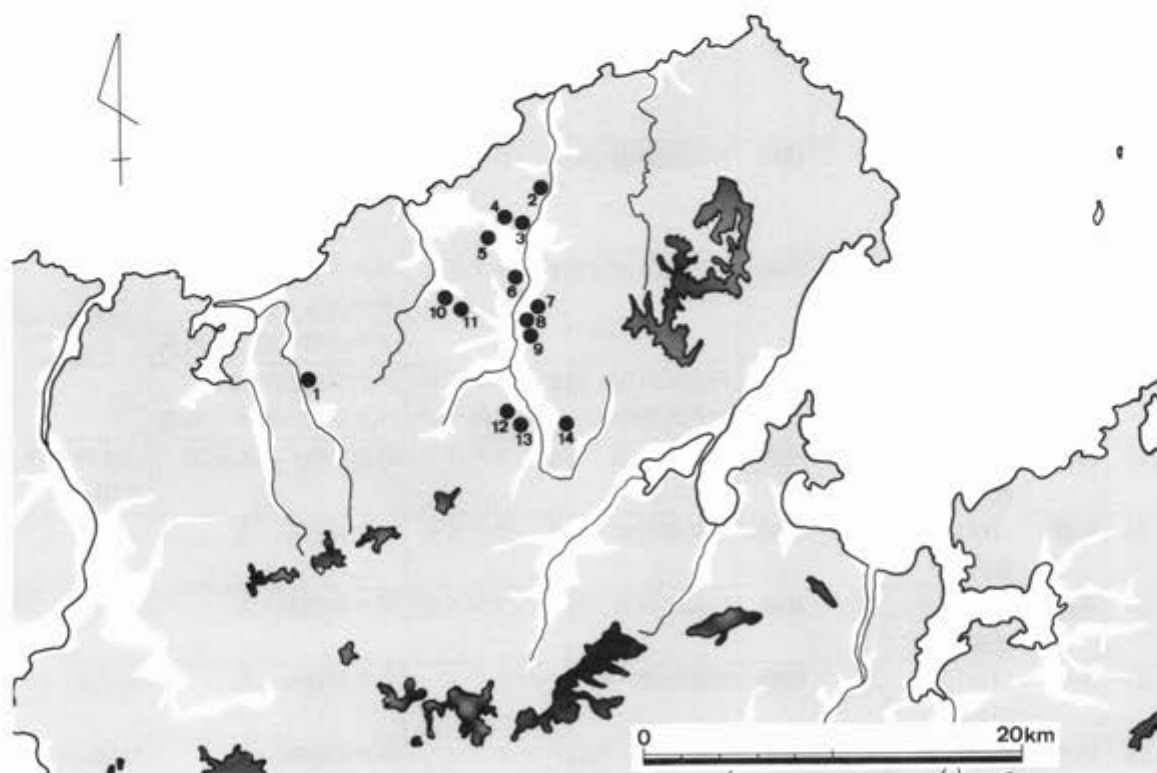
なお、今回の調査では、古墳時代以外の時期の遺物は出土しなかった。

以下、今回の調査成果について、二、三の問題点の整理を行い、まとめとしたい。

須恵器の供献について

南谷古墳群では、1・4号墳から須恵器が出土した。これらの須恵器は、陶邑編年のTK47～MT15型式に相当するものである。須恵器はいずれも、墓壙埋土上面に供献されたものと考えられ、棺上・棺内への副葬は認められなかった。この出土状況について、丹後地方の須恵器が出土した木棺直葬墳と比較したい。丹後地方の木棺直葬墳から出土した須恵器については、石崎善久氏^(E17)によって集成・研究が行われている。同氏の研究成果によりながら、南谷古墳群出土須恵器について、検討していきたい。

南谷古墳群出土須恵器に近い、TK47併行期の須恵器が出土した古墳群はあまり多くない。わ



第62図 須恵器が出土した木棺直葬墳の分布

- | | | | | |
|--------------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1. 南谷古墳群 | 2. 西小田古墳群 | 3. 坂野古墳群 | 4. 宮の森古墳群 | 5. 遠所古墳群 |
| 6. 大田古墳群 | 7. 新ヶ尾東古墳群 | 8. スクモ塚古墳群 | 9. 桃山古墳群 | |
| 10. 生野内大内古墳群 | 11. 大耳尾古墳群 | 12. 池田古墳群 | 13. 小池古墳群 | 14. 左坂古墳群 |

ずかに、大宮町池田1号墳、弥栄町遠所19・21号墳などで出土しているにすぎない。池田古墳群で出土している須恵器は、墓壙上または墳丘上に供献されたものと考えられる。また、この段階では1墳丘1埋葬が一般的なようである。

MT15併行期の須恵器が出土した古墳数は、格段に増加し、墓壙上・墳丘上よりも棺上あるいは棺内への副葬例が多くなる。また、これに伴って1つの墳丘に複数の主体部が設けられるようになるのもこの時期である。1墳丘複数埋葬の例としては、大宮町池田3号墳、峰山町桃山1号墳、弥栄町太田2号墳・同4号墳、同町新ヶ尾9号墳などがある。TK47併行期の古墳とMT15併行期の古墳の間には、土器の供献方法や埋葬施設のあり方などから大きな画期が認められる。

次に、南谷古墳群の状況についてみると、南谷1・4号墳は1墳丘1埋葬であり、須恵器は墓

付表3 南谷古墳群出土須恵器観察表

番号	器種	法量(cm)	胎土	焼成	調整技法※	備考	残存率
1	高杯蓋	口径12.2 残存高4.35	精良	精緻	天井部外面一回転ヘラケズリ	ロクロ回転・左 自然軸	1/3
2	高杯蓋	口径10.4 器高5.5			天井部外面一回転ヘラケズリ	ロクロ回転・左	口縁端部一部欠損
3	広口壺	口径12.0 器高13.0	密	精緻	底部外面一回転ヘラケズリ後ナデ		完形
4	高杯	口径8.6 器高8.2 底径7.4	密	精緻	杯底部外面一回転ヘラケズリ	ロクロ回転方向不明 3方スカシ スカシ切り取り工具痕	杯部1/2欠損
5	高杯	口径8.9 器高9.1 底径7.4	密	精緻	杯底部外面一回転ヘラケズリ	ロクロ回転・左 3方スカシ スカシ切り取り工具痕	
6	高杯	口径10.2 器高8.8 底径8.6	密	精緻	杯底部外面一回転ヘラケズリ	ロクロ回転・左 3方スカシ スカシ切り取り工具痕	口縁部1/3欠損
7	高杯	口径9.1 器高9.2 底径8.0	密	精緻	杯底部外面一回転ヘラケズリ	ロクロ回転・左 3方スカシ スカシ切り取り工具痕	
8	高杯	口径10.8 残存高4.45	緻密	精緻	杯底部外面一回転ヘラケズリ 杯部内面中央一定方向ナデ	ロクロ回転・右 スカシ切り取り工具痕	
20	高杯蓋	口径12.3 残存高4.9	密	精緻	天井部外面一回転ヘラケズリ	内面中央に同心円文	つまみのみ欠損
21	杯蓋	口径12.4 器高5.1	密	精緻	天井部外面一回転ヘラケズリ	ロクロ回転・左	1/2
22	高杯	口径10.4 残存高4.5	密	精緻	杯底部外面一回転ヘラケズリ	ロクロ回転・左	2/5
23	杯身	口径10.8 器高4.8		精緻	底部外面一回転ヘラケズリ	ロクロ回転・左	2/3
24	杯身	口径11.0 器高5.5	精良	精緻	底部外面一回転ヘラケズリ	ロクロ回転・左 外底部に「+」のヘラ記号	ほぼ完形
25	杯身	口径10.7 器高5.2	精良	精緻	底部外面一回転ヘラケズリ	ロクロ回転・左	ほぼ完形

墳上面への供献に限られ、棺内への副葬は認められない。しかし、同時期の1墳丘1埋葬の古墳中には、棺内に須恵器を副葬する例もある(弥栄町遠所21号墳など)。以上のことから、TK47併行期は、MT15併行期に普遍化する須恵器の棺内への副葬や、1墳丘複数埋葬などの新しい埋葬様式への過渡期として位置づけられる。

佐濃谷川流域における南谷古墳群の位置づけ

佐濃谷川流域では、南谷古墳群のほかにも、北谷古墳群・堤谷古墳群・薬師古墳群・塚ヶ谷2号墳・鶏塚古墳などの調査が行われており、前3者は木棺直葬墳であり、後2者は横穴式石室墳である。北谷古墳群は前期中頃から中期後半にかけて、堤谷古墳群は前期後半から後期初頭にかけて、薬師古墳群は後期中頃に、塚ヶ谷2号墳・鶏塚古墳は後期末頃に築造された。したがって、これまで後期前半に位置づけうる古墳群は知られていなかった。今回調査を行った南谷古墳群は、佐濃川流域で空白であった古墳時代後期前半の古墳群であることが明らかになった。同時に、この段階では少なくとも佐濃谷川中流域では、横穴式石室はまだ導入されていなかったことも明らかになった。

(筒井崇史・福田和浩)

注1 調査参加者(順不同、敬称略)

(国営東部) 高原与作・平林秀夫・菱川 實・石井 清・稲岡徳治・松村 仁・森 秀雄・平尾馨・小國喜市郎・城下 勇・大垣鉄雄・城下則行・安達定雄・横島 迪・嵯峨根清一・岩佐正一・安達哲也・堀江登喜雄・森野美智代・藤原多津子・熊谷千代子・由良里枝・村上五月・坪倉愛子・安達睦枝・大下成子・山副まつ江・藤原敏子・尾崎三三代・藤原ヒサエ・石田寿子・石嶋文恵・谷口勝江・野村孝子・古木恵美子・由良美津子・大江田洋子・黒川花枝・金久富美子・新井俊一・吉岡つや子・大下昭一郎・森戸源一郎・安田正夫・東宇虎次・城下サヨ・吉岡道子・吉岡正子・吉岡千恵美・森野咲枝・吉岡真喜子・山副綾乃・片山敦子・金保真由美・松村和美・谷辻絹代・上田奈智子・河崎祐子・金久真弓・有田恵美子・伊熊佐知子・吉岡美秋・馬場行幸・藤原 諭・藤沼孝弘・奥田栄吉・山田恵子・巴 宏信・中尾清之・松原一哉・大橋一弘・豊田重子・中西富代・中村操・野村清一・野村節子・藤村益美・堀口静子・山田フクヨ・山本 薫・山本一枝・山本ちよ子・長谷川ハナ・野川 操・鈴木 豊・永島俊夫・田村文代・糸井文雄・山添喜代子・木成靖夫・野村功・野口美乃・堀口百合子・長埜ヤス子・永澤拓志・永濱寛子・前田 穰・山端紀明・平良友秀・山崎由紀子・上田真一郎・小川正志・才本佳孝・井田泰文・小西偉之・山本 絹・津久井端絵

(国営西部) 岡田正吉・岡所文之・小森トミ枝・岡田桂子・梅田美代子・小国サダ美・野村純子・山内基弘・妹尾活明・石田春彦・福田和浩・甫喜山淳・市田英介・安田幸次・都築靖敏・佐藤幸輝・山崎頼人・中西貞子・草野敦子・小川夕祐子・平松美智恵

調査協力者(順不同、敬称略)

大澤正巳・潮見 浩・川越哲志・古瀬清秀・河瀬正利・岡崎晋明・村上恭通・穴沢義功・清水真一・朴 天秀・李 柱憲・山田隆一・山内紀嗣・新海正博・深澤芳樹

注2 なお、網野町教育委員会及び当調査研究センターによって、この古墳群では今までに3次の発掘調査が実施されている。だが、平成5年度の当調査研究センターの概報では「網野遠所古墳群」と呼称され、平成6年度の網野町教育委員会の報告では「遠所古墳群」となっている。これらはすべて同一古墳群であり、混乱を防ぐためにも、今後は「遠所古墳群」または小字名を冠した「(島津)遠所古墳群」の呼称を採り、「網野遠所古墳群」は破棄したい。

黒坪一樹「(1)網野遠所古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

『遠所古墳群』 網野町教育委員会 1995

注3 第2図の土器は前回の概報にも掲載したが、図面に不備があり、再実測・トレースしたものである。

- 注4 浪江庸二・百田昌夫・吉岡 晋他『金屋比丘尼城遺跡発掘調査報告書』(加悦町文化財調査報告 第3集 加悦町教育委員会) 1980
- 注5 中島利雄「資料編 丹後国御檀家帳」(注4書所収)
- 注6 佐藤晃一・松村英之『加悦町の中世城館跡』 加悦町教育委員会 1994
- 注7 福島克彦「縄張りから見た大俣城一地面観察から発掘調査へ」(『都と城』第75回埋蔵文化財セミナー資料 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
 なお、丹後の中世城館については、佐藤晃一氏、福島克彦氏からご教示頂いたところが大きい。記して感謝したい。
- 注8 今谷 明「室町・戦国期の丹後守護と土豪」(注4書所収)
- 注9 岡田晃治「西山支城跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』 京都府教育委員会) 1988
- 注10 ①肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成2年度調査概要 [2] 左坂古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1991)』 京都府教育委員会) 1991
 ②石崎善久「丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度、平成3・4年度発掘調査概要-(2)里ヶ谷横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
 ③石崎善久ほか「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成5年度発掘調査概要 (1)左坂古墳群・(2)左坂横穴群(B支群)」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
 ④肥後弘幸ほか「国営農地開発事業関係遺跡平成4年度発掘調査概要 [2] 左坂横穴・[3] 左坂墳墓群(左坂古墳群G支群)」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1993)』 京都府教育委員会) 1993
 ⑤『左坂墳墓群発掘調査現地説明会資料』 大宮町教育委員会 1993
 ⑥肥後弘幸ほか「国営農地開発事業関係遺跡平成5年度発掘調査概要 [7] 左坂墳墓群(左坂古墳群G支群)」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1994)』 京都府教育委員会) 1994
 ⑦石崎善久「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成6年度発掘調査概要 8. 左坂古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
 ⑧今田昇一「大宮町・左坂墳墓群発掘調査について」(『丹後・但馬の弥生から古墳へ』第73回埋蔵文化財セミナー資料 京都府教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター・大宮町教育委員会) 1995
- 注11 破碎土器供献の用語については、但馬考古学研究会による命名である。その概念は以下の論考に詳しい。
 ①『但馬を掘る』但馬考古学研究会編 1990
 ②松井敬代「破碎土器の埋納について」(『但馬考古学』第6集 但馬考古学研究会) 1991
 ③瀬戸谷皓・松井敬代ほか「上鉢山・東山墳墓群」 豊岡市教育委員会 1992.3
- 注12 有明横穴群は、有明古墳群(第21図7)が存在する丘陵の東側斜面に展開する。
 増田孝彦「丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要 (1)有明古墳群・横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注13 大田鼻横穴群は、帯城墳墓群(第21図6)が存在する丘陵の南側斜面に展開する。
 岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要 [2] 大田鼻横穴群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』 京都府教育委員会) 1987
- 注14 肥後弘幸ほか「国営農地開発事業関係遺跡平成5年度発掘調査概要 [7] 左坂墳墓群(左坂古墳群G支群)」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1994)』 京都府教育委員会) 1994
- 注15 竹原一彦「府営ほ場整備関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要 (1)正垣遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注16 久美浜町教育委員会の調査は、当調査研究センターの調査に並行して行われ、同教育委員会岩崎浩一氏が担当された。調査中は、岩崎氏をはじめ、久美浜町教育委員会の調査参加の方々にお世話になった。
- 注17 石崎善久「須恵器出土の木棺直葬墳」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

2. 丹後あじわいの郷関係遺跡発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、京都府農林水産部園芸経済課が計画・推進している「丹後あじわいの郷」整備事業に先立ち、同部の依頼を受けて実施した。

「丹後あじわいの郷」整備事業は、「国営農地開発事業」に伴い、国営農地で生産された農産物の集荷・出荷場として、約100haの範囲に関連施設を設備する計画がたてられた。この範囲の遺跡には、桐谷古墳群や鳥取峠古墳群と製鉄遺跡のニゴレ遺跡などがある。これらの遺跡は、京都府竹野郡弥栄町字鳥取・木橋に所在し、遠所遺跡群の東側に隣接する(巻頭図版第1)。

桐谷古墳群や鳥取峠古墳群とニゴレ遺跡は、平成4年度から平成6年度にかけて試掘調査ならびに発掘調査を継続して行った。検出遺構については、平成4年度から6年度に一部を報告した^(注1)。今年度は、製鉄関連の遺物の実測や図面整理を実施したので、この成果を中心に報告する。

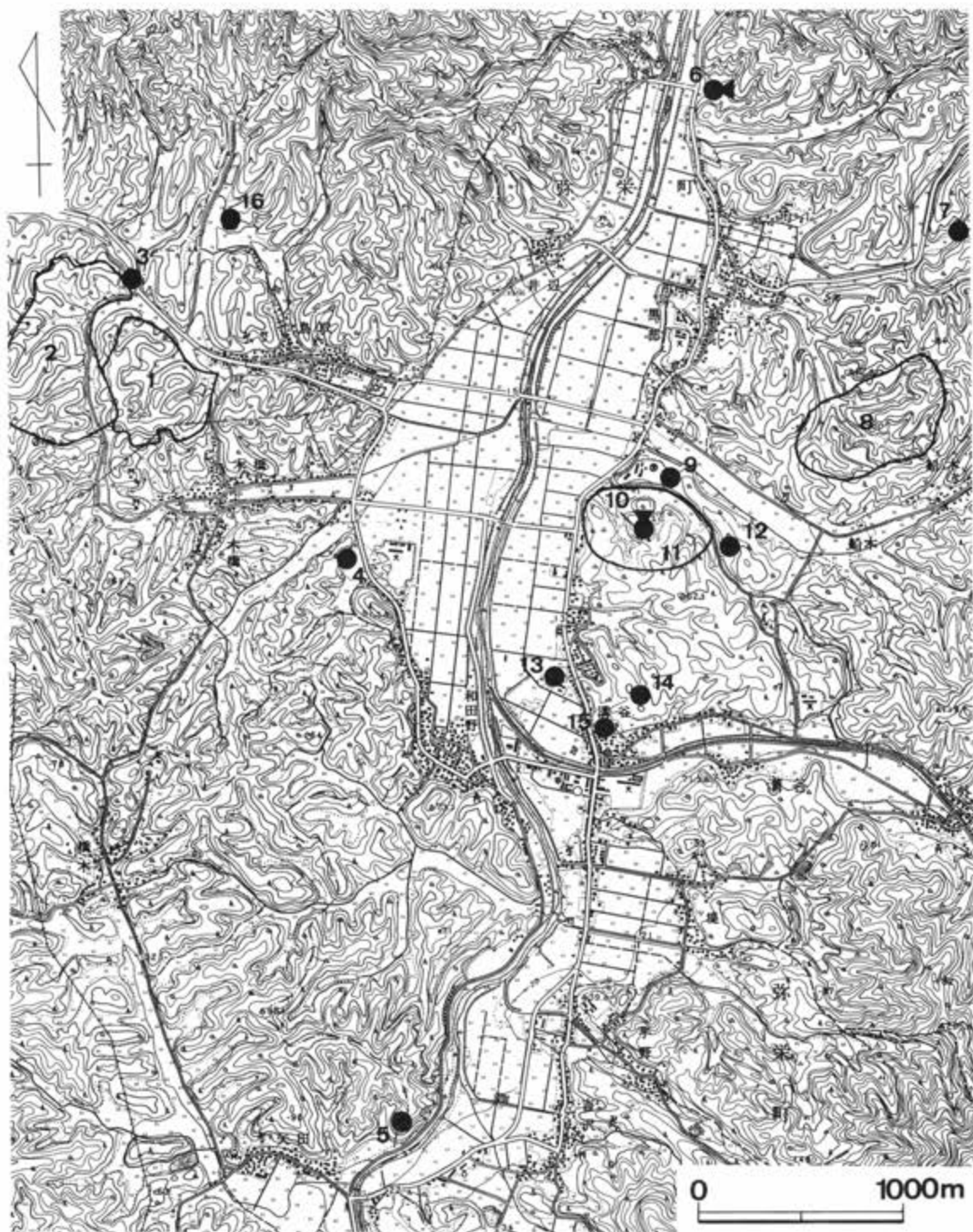
整理作業は、平成7年4月11日から平成8年3月29日まで行い、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富、主任調査員増田孝彦、調査員岡崎研一が担当した。概報執筆は岡崎研一が行い、整理業務及び委託関係の調整は増田孝彦が行った。また、遺物写真は、田中 彰が撮影し、炉壁・炉底滓など製鉄関連遺物については岡崎が撮影した。調査期間中は、地元有志の方々に作業員及び整理員として作業に従事していただいた^(注2)。調査を行うにあたり、弥栄町教育委員会をはじめ、関係諸機関や地元の方々の御協力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。

また、出土遺物の科学的分析のうち、鉄滓・砂鉄などの分析を新日本製鐵株式会社八幡製鉄所内TACセンター・九州テクノロジー株式会社株式会社に委託した。木炭の樹種同定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。その結果については、文末に付した。

なお、整理業務にかかる経費については、全額京都府農林水産部園芸経済課が負担した。

付表4 「丹後あじわいの郷」整備事業に伴う発掘調査一覧表

遺跡名	所在地	調査期間	担当者
ニゴレ遺跡 桐谷古墳群	竹野郡弥栄町字鳥取	平成4年9月24日 ～平成5年2月26日	主任調査員 増田孝彦 調査員 岡崎研一
ニゴレ遺跡 鳥取峠古墳群 行者山古墳群	竹野郡弥栄町 字鳥取・字木橋	平成5年4月20日 ～平成6年2月25日	主任調査員 増田孝彦 調査員 岡崎研一 黒坪一樹
ニゴレ遺跡 鳥取峠1号墳	竹野郡弥栄町 字鳥取・字木橋	平成6年4月18日 ～平成7年2月28日	主任調査員 増田孝彦 調査員 岡崎研一
遺物・図面整理 概報作成		平成7年4月11日 ～平成8年3月29日	主任調査員 増田孝彦 調査員 岡崎研一



第63図 調査地及び周辺の主要遺跡分布図

- | | | | | |
|-----------------|----------------|----------|-----------|-------------|
| 1. ニゴレ遺跡 | 2. 遠所遺跡群 | 3. ニゴレ古墳 | 4. オテジ谷古墳 | 5. 大田南古墳群 |
| 6. 黒部銚子山古墳 | 7. かせ谷遺跡 | 8. 黒部遺跡 | 9. 奈具遺跡 | 10. 奈具岡北1号墳 |
| 11. 奈具岡遺跡・奈具谷遺跡 | 12. 奈具墳墓群 | 13. 丸山古墳 | 14. 溝谷古墳群 | |
| 15. 龍瀬寺古墳 | 16. ゲンギョウの山古墳群 | | | |

2. 位置と環境(第63図)

弥栄町は、京都府北部の丹後半島のほぼ中央に位置する。京都府北部では、大きな河川の一つである竹野川が同町を北流する。この河川の周辺部には、狭小ながらも平地部が開けており、その範囲は南北6km・東西1.5kmに及ぶ。その他は、標高600mほどの金剛童子山や太鼓山などから派生する低丘陵が平地部に向かってのびており、町の大半は山間部で占められている。

この10年間、低丘陵を中心に、「国営農地開発事業」という大規模な整備事業が進行中である。これに伴って多くの遺跡が発見されている。

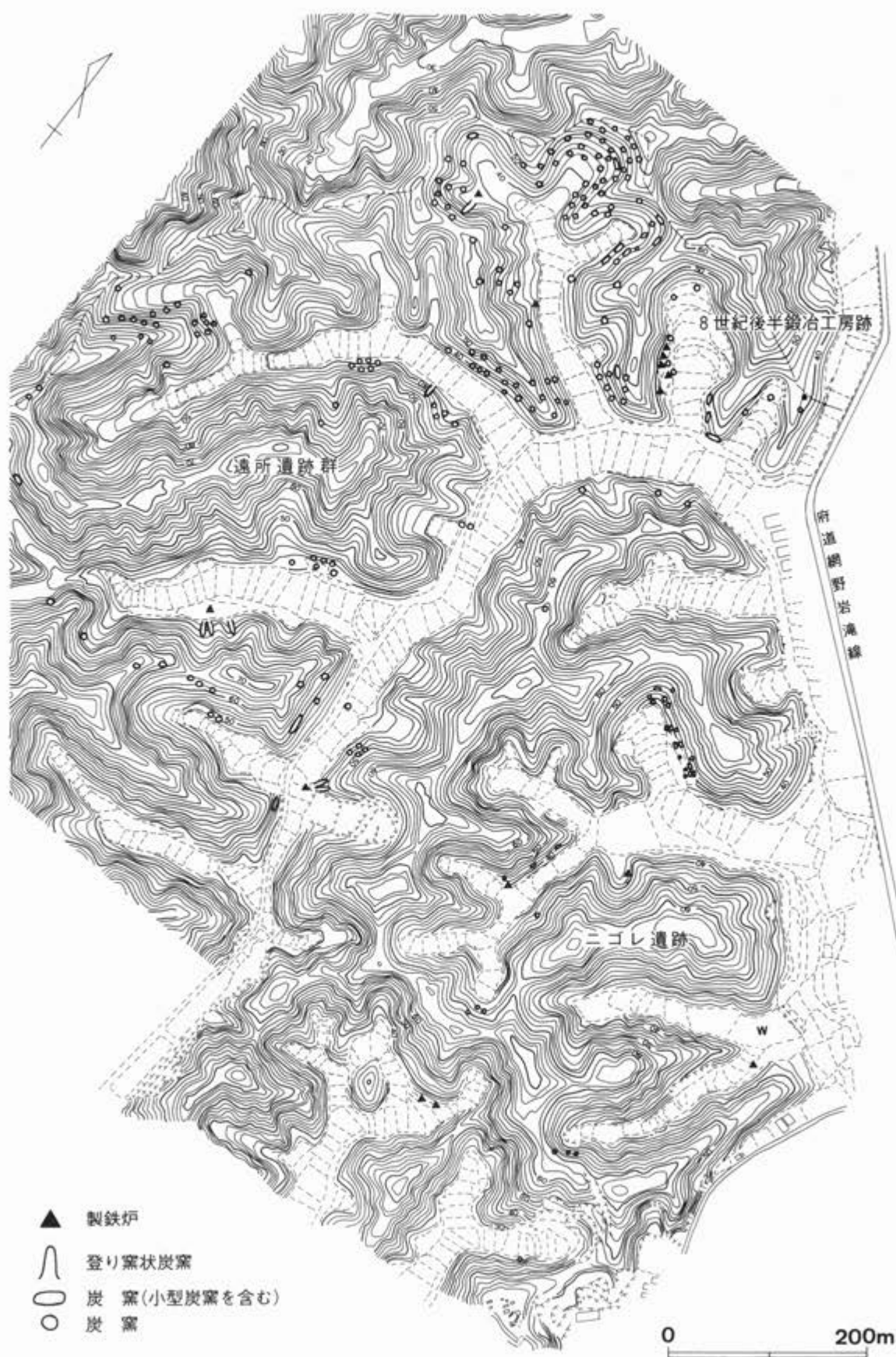
奈具岡遺跡では、平成4年度と7年度の調査で弥生時代中期後半段階の緑色凝灰岩と水晶製の玉作り工房跡が確認された。中でも、平成7年度調査の水晶製玉作り工房跡からは、水晶の剥片以外に、多量の鉄片をはじめ鉄製工具(鑿・錐)・砥石などが出土した。これらは、玉を穿孔したり、磨いたりした工具類と考えている。また、鍛造品・鍛造剥片・鑿の羽口も出土している。鉄製工具については、「弥生時代中期後半段階では、国内では製鉄が行われていないため、原料となる鉄素材は大陸から輸入したと考えられる」とし、鉄素材については、「鑄鉄・鑄造鉄斧の再用品があり、一部金属学的分析を行ったところ鑄鉄脱炭鋼も確認された」という成果をあげている。また、鑿の羽口などの出土については、「鍛冶炉が存在する可能性がある」としている。玉類としては、算盤玉・棗玉・小玉・管玉・勾玉などが出土している^(註3)。

奈具岡遺跡に隣接する5世紀前半に構築された奈具岡北1号墳(前方後円墳)からは、墓壙上から12点の陶質土器が出土した。土器の形態や手法上の特徴などから、朝鮮半島の伽耶地域で生産された可能性が高く、この地域との文化交流があったことがうかがえる。調査の結果、「大陸と密接な関係をもった被葬者」と考えられるに至った^(註4)。

6世紀後半と8世紀後半に鉄生産をしていた遠所遺跡群^(註5)は(第63・64図)、町の西端に所在し、今回報告するニゴレ遺跡と隣接している。この遠所遺跡群の調査では、科学的な分析成果から、6世紀後半にさかのぼる炭窯が見つまっていることから、その時期の製鉄炉もある可能性が高いと評価している。また、遺跡名である「遠所」は煙所から由来している可能性があり、町内に「井辺」や「芋野」などの字名の存在や、小字にも製鉄関連地名が見られることから、古くは弥栄町の至るところで製鉄を行っていたのではないかと考えられている。

竹野川の東、字黒部に所在する黒部遺跡では、8世紀中頃から後半の製鉄炉と炭窯を発見した。50基を越える炭窯の大半は、地下式の登り窯形態に類似しており、製鉄炉近辺に集中して築かれていたことなどから、大規模な鉄生産が集中的に行われていたと考えられた。しかし、鍛冶炉の発見には至らなかった^(註6)。

このように、この10年間で発見した主な遺跡を列記したが、その調査成果を見ても、丹後半島という地域が、弥生時代中期後半以降、大陸と大きく関わりをもっていたことを示しており、その後の技術伝播によって鉄生産を行うなど、古代では先進地帯であったことがうかがえる。



第64図 遠所遺跡群・ニゴレ遺跡製鉄関連遺構配置図

3. 調査の経過

「丹後あじわいの郷」関係遺跡の調査は、平成4年度から行った。当調査研究センターが調査を開始する前に、京都府教育委員会と弥栄町教育委員会が予定地内の分布調査を行った。その結果、91地点の古墳状隆起と、1か所の鉄滓出土地を確認した。^(注7)

平成4・5年度には39か所を試掘調査し、6か所が古墳であると確定した。また、谷部や古墳状隆起以外の丘陵部に80か所のトレンチを設定した。これらの成果を受けて、造成範囲が決定された。

これを受けて、当調査研究センターでは3基の古墳(桐谷1・2号墳、鳥取峠1号墳)を調査した。そして、A～I地区の9か所を面的に調査した。これらについては、付表6を参照していただきたい。

なお、B地区については、調査途中に設計変更がなされ、削平か所は北西隅のみ(住居跡1～3・19～21)となり、他のか所は完掘していない。また、D地区の2号製鉄炉は、現地保存されることとなり、これも完掘していない。1～4号製鉄炉から出土した鉄滓や炉壁については、原因者によって1号製鉄炉付近に収納円筒管が設置され、保管された。^(注8)

4. 調査概要

(1)古墳の調査

「丹後あじわいの郷」造成にかかる古墳は、試掘調査の結果、桐谷1・2号墳と鳥取峠1号墳の3基であった。以下、概略を説明する。

①桐谷1・2号墳

桐谷古墳群は、鳥取古墳群の南側の丘陵尾根筋上に位置する。

分布調査時には、円墳3基、方墳14基からなる17基の古墳群と考えられていたが、造成にかかる14基の試掘調査の結果、丘陵先端の2基のみ古墳であることがわかった。したがって、現在のところ、桐谷古墳群は、5基からなるようである。丘陵の先端から1・2号墳として調査を実施した。1号墳は、径約15m・高さ約2mを測る円墳で、墳頂部から南北方向の主体部2基を確認した。主体部は、いずれも二段墓壙で、上段での規模は、長辺約4.2m・短辺約1.8mを測るものと、長辺約3.5m・短辺約1.7mを測るものの2基がある。後者は、小口部を拳大の石を用いて棺板を支えていた。

2号墳は、径約10m・高さ約2mを測る円墳で、墳丘中央部で南北方向の主体部1基を確認した。主体部の規模は、長辺約3.7m・短辺約1.9mを測る。どの主体部からも出土遺物はなく、両古墳の時期については不明である。

②鳥取峠1号墳

鳥取峠古墳群は、鳥取と木橋の字界付近の丘陵尾根筋上に位置する。標高が約62mと高所に築かれた古墳で、周辺の集落を見渡すことができる。この古墳も試掘調査によって確認され、調査を実施した。径約10m・高さ約1.3mを測る円墳であるが、後世に墓地として付近一帯を整地し



第65図 調査地及び遺跡配置図

付表5 「丹後あじわいの郷」内遺跡一覧表

地点	名称	種類	所在地		遺跡の概要	備考
			大字	小字		
1	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、一辺6m	『京都府遺跡地図』では1号墳
2		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~10m	
3		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~10m	
4		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4.5m、高さ1.5m	『京都府遺跡地図』では2号墳
5		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺8.5m、高さ1.5m	『京都府遺跡地図』では3号墳
6		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~10m	
7		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径9m、高さ1.5m	『京都府遺跡地図』では4号墳
8		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4m、高さ0.3m	『京都府遺跡地図』では5号墳
9		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径2m、高さ0.3m	『京都府遺跡地図』では6号墳
10		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺6~8m	
11		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径12m	古墳状隆起か
12		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径13m、高さ2m	『京都府遺跡地図』では7号墳
13		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~8m	
14		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~8m	
15		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~8m	
16		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~8m	
17		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~8m	
18		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~8m	
19		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、径8.6m、高さ1.8m	『京都府遺跡地図』では10号墳
20		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、一辺9.5m、高さ1.5m	『京都府遺跡地図』では9号墳
21		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、一辺5.5m、高さ1.8m	『京都府遺跡地図』では8号墳
22		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、一辺8.5m、高さ2m	『京都府遺跡地図』では11号墳
23		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径20m	古墳状隆起か
24		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、径10.8m、高さ2.3m	『京都府遺跡地図』では13号墳
25		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、一辺9.8m、高さ1.5m	『京都府遺跡地図』では12号墳
26		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、一辺5~7m	
28	入道奥古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺7m	古墳状隆起か
29		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺7m	古墳状隆起か
31	桐谷古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径8m	
32		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺7m	残丘?
33		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径18m	
41		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径10m、高さ2m	桐谷2号墳、主体部1基
42	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径15m、高さ2m	桐谷1号墳、主体部2基	
47	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺3~6m	
48		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺3~6m	
49		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径10m	
50		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径8m	古墳状隆起か
51		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺6m	
52		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径10m	古墳状隆起か
53		円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径8m	
55		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺2~5m	残丘?
56		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺2~5m	
57		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺2~5m	
58		方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺2~5m	
59		円墳	木橋	権谷	丘陵稜、径10m	鳥取峠1号墳、主体部1基
63	行者山古墳群	円墳	木橋	西谷	丘陵稜、径12m	

66		円墳	木橋	西谷	丘陵稜、径10m	送電線下、古墳状隆起か
67		方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
82		方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
85	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
86		方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
87		方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
88		方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
89		方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
90		方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
92	ニゴレI地区	製鉄炉	鳥取	ニゴレ	丘陵裾、鉄滓露出	

付表6 調査区別検出遺構・遺物一覧表

地区名	検出遺構	出土遺物	備考
A地区	住居跡10基・炭窯17基	須恵器・土師器・炭	平成5年度調査（『京都府遺跡調査概報』第59冊）
B地区	住居跡21基・鍛冶炉	須恵器・土師器・炭・石器	平成5・6年度調査（『京都府遺跡調査概報』第66冊）
C地区	製鉄炉1基・炭窯1基	鉄滓・炉壁・炉底滓・須恵器・土師器	平成5年度調査（『京都府遺跡調査概報』第59冊に略報記載）
D地区	製鉄炉1基・炭窯2基	鉄滓・炭	平成5年度調査（『京都府遺跡調査概報』第59冊に略報記載）
E地区	なし	鉄滓数点	平成6年度調査（『京都府遺跡調査概報』第66冊）
F地区	廃滓場2か所・祭祀遺構	鉄滓・炉壁・炉底滓・須恵器・土師器	平成6年度調査（『京都府遺跡調査概報』第66冊）
G地区	炭窯2基	炭	平成6年度調査（『京都府遺跡調査概報』第66冊）
H地区	自然流路	弥生土器（後期）・木製品	平成6年度調査（『京都府遺跡調査概報』第66冊）
I地区	柱穴群	土師器片	平成6年度調査（『京都府遺跡調査概報』第66冊）

しており、かなり削平されていた。このため、非常に残りの悪い主体部を1基確認した。規模は、確認長約3m・確認幅約0.6mである。出土遺物はなく、古墳の時期は不明である。

(2) 製鉄炉の調査

分布調査、試掘調査や発掘調査の結果、ニゴレ遺跡には5基の製鉄炉が存在することがわかった。字鳥取に3基、字木橋には2基存在する。ニゴレ遺跡は、字鳥取側の遺跡名称であり、通常字名の異なる木橋側の製鉄遺跡には別の遺跡名称を付すところであるが、同じ製鉄遺跡であり、低丘陵を挟んで存在することなどから、あえて木橋側の2基の製鉄炉を含めてニゴレ遺跡として調査を行った。造成にかかる製鉄炉は、鳥取側の2基と木橋側の2基の合計4基で、これらの製鉄炉のみ調査を行った。鳥取側のC地区に位置する製鉄炉を1号製鉄炉、D地区を2号製鉄炉と呼称した。また、木橋側では、後世の削平によって製鉄炉は存在しなかったが、排滓状況から2基の製鉄炉が想定できたので、3・4号製鉄炉とした。以下、概略を説明する。

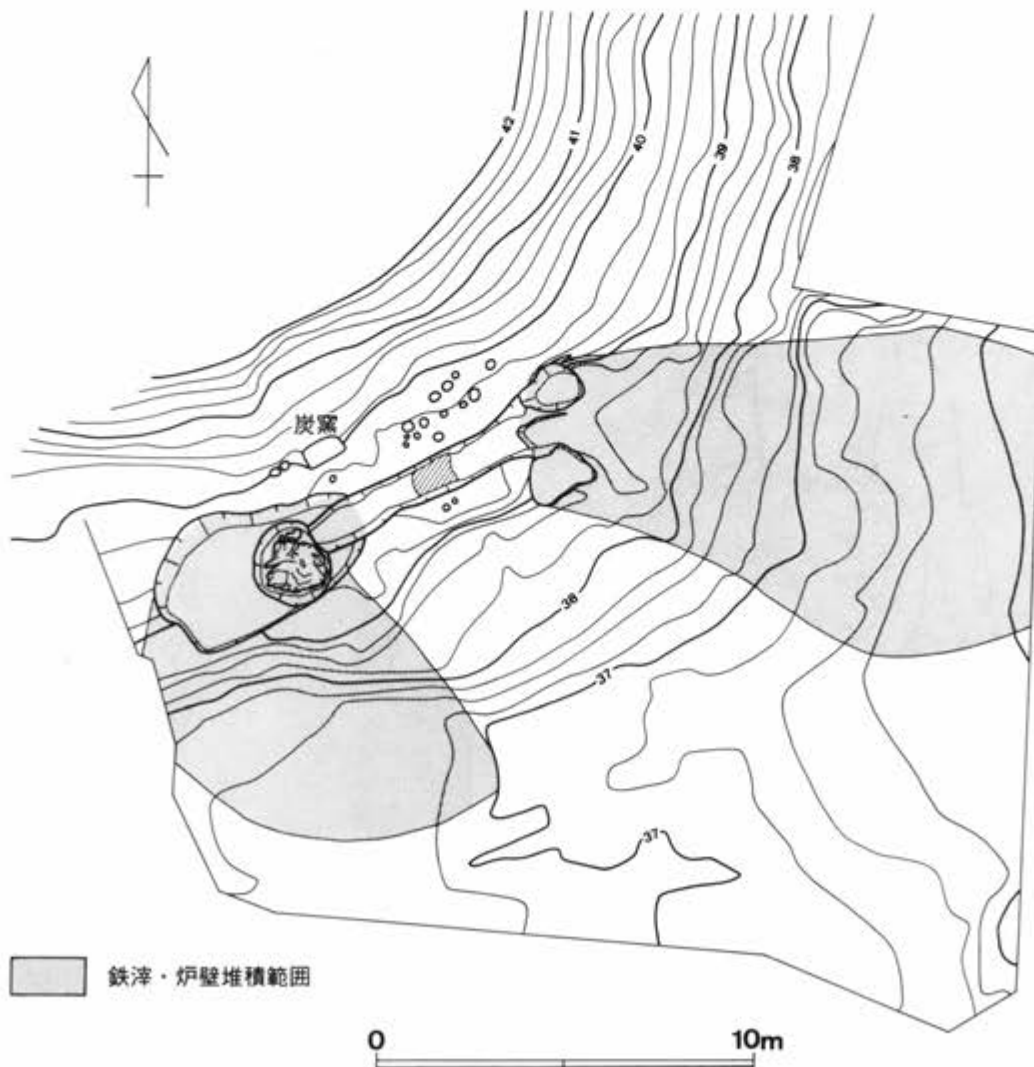
①ニゴレ1号製鉄炉(第66・67図、巻頭図版第2、図版第31・32)

丘陵裾部のほぼ直角に屈曲するわずかな平坦部を利用して、ニゴレ1号製鉄炉は構築されてい

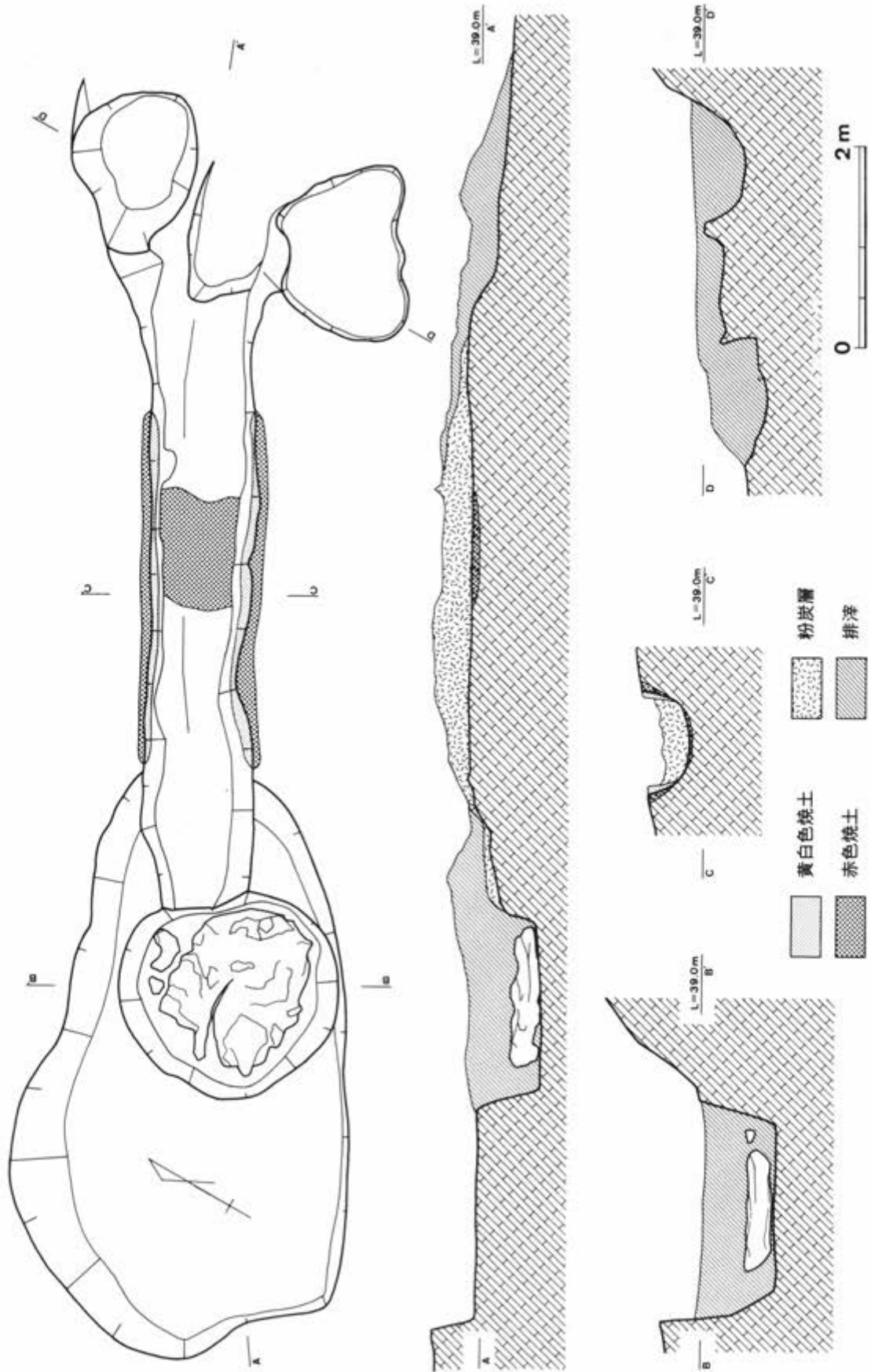
た。製鉄炉は、ほぼ東西方向に築かれていたが、調査時には製鉄炉本体はすでになく、その下部構造を確認した。下部構造は、断面「U」字の溝状の遺構である。その規模は、幅約1m・深さ約0.5mを測る。この遺構内には粉炭が敷き詰められており、その範囲は床面から約0.4mのところまでで、長さは4.9mを測る。

下部構造の肩部から壁面、床面にかけて火を受けた痕跡が見られた。壁面や床面の焼土については、下部構造を築いた際の空焼きによると考えられるが、肩部の焼土は製鉄炉作業時の熱によって、赤色に変化したと考えた。下部構造である粉炭層の範囲とは異なり、長さ約3.4mの範囲が赤色に焼けていた事実から、製鉄炉の内法が約3.4mで、粉炭層の範囲である4.9mは製鉄炉の外法に該当し、差し引いた1.5mが両側の炉壁の厚さを示すのではないかと考えた。出土した炉壁の中にブロック状に面を持つものがあることから、一定の企画性をもって構築していたと考えられ、製鉄炉基部は少なくとも厚さ約0.75mの壁が四方を取り囲んでいたと推測する。

また、輪は、地形から見ても製鉄炉両側に設置するには面積的に余裕がなく、おそらく製鉄炉の山手側のわずかな面積に設けられていたと考える。



第66図 ニゴレ1号製鉄炉地形図



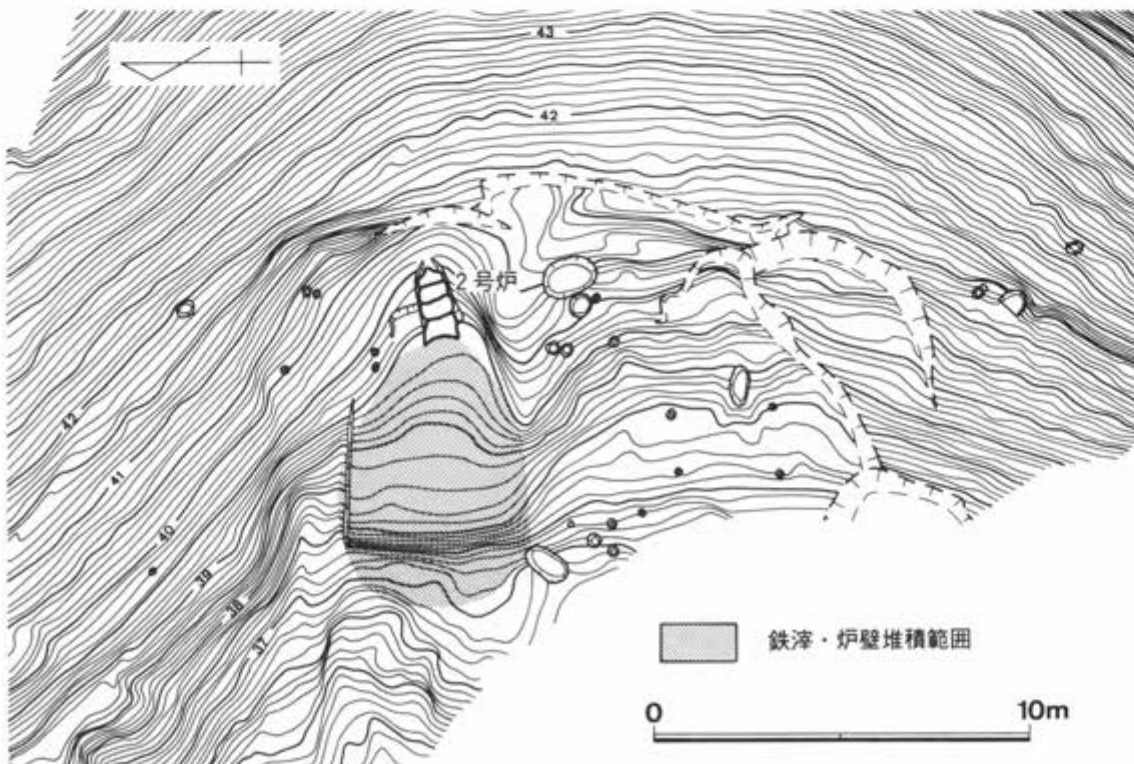
第67図 ニゴレ1号製鉄炉実測図

排滓については、製鉄炉西側に排滓坑を、東側に排滓溝を設けて、前面に広がる谷部を廃滓場として鉄滓を掻き出していた。排滓坑の規模は、5m×3.3mを測る長楕円形の土坑と、1.9m×2.1mの土坑である。操業当初は円形の排滓坑を設けていたが、操業するにつれて機能が悪くなり、長楕円形の土坑を設け直したようである。排滓溝は、製鉄炉から扇形に広がりながら谷部に鉄滓を掻き出すことができるようになっていたが、排滓坑のように明確に造っておらず、地形を利用して若干の手を加えたものであった。排滓坑と排滓溝、また谷部の廃滓場からは、多量の炉壁、炉底滓、鉄滓が出土した。

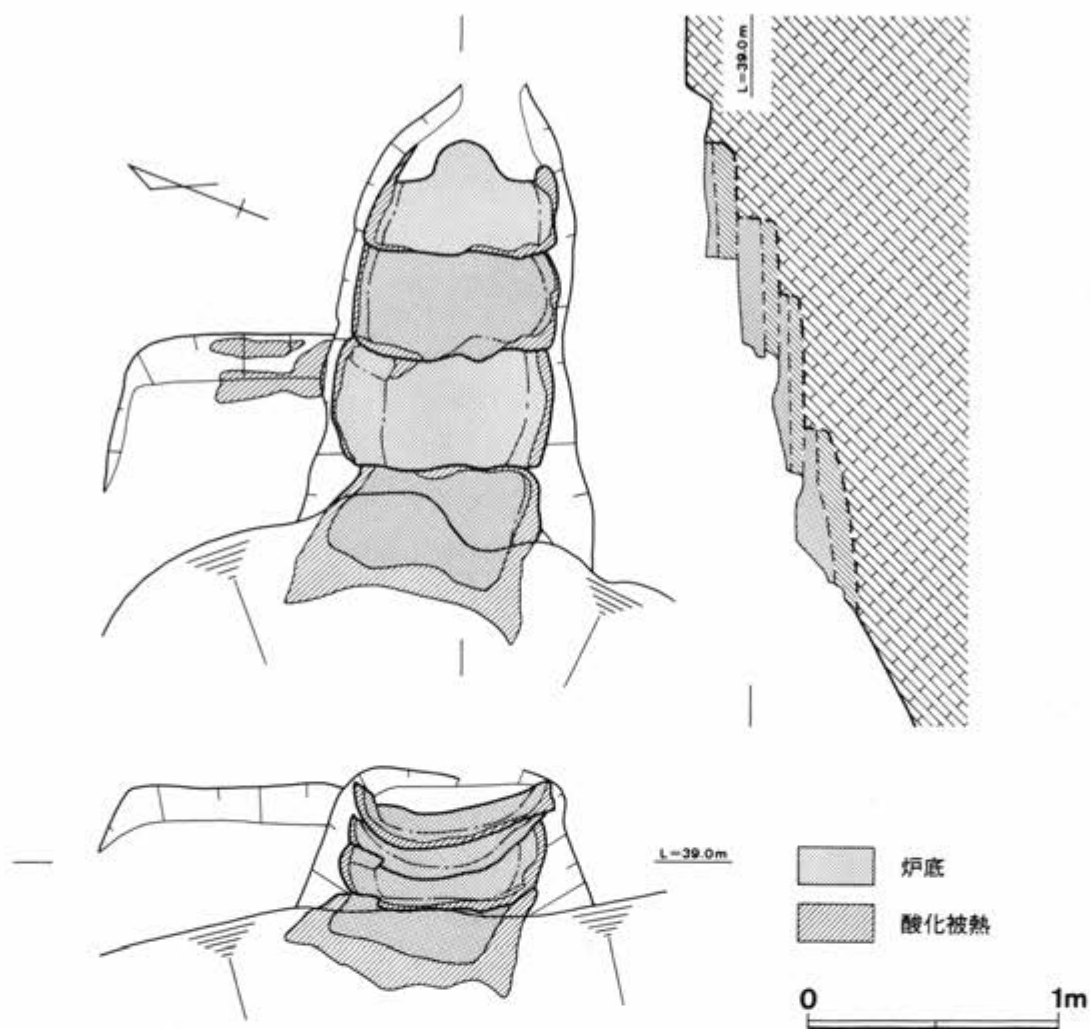
②ニゴレ2号製鉄炉(第68・69図、巻頭図版第2、図版第33)

小さな谷部の周囲に広がる丘陵斜面中位に築かれた製鉄炉である。この製鉄炉は、一辺または径が70～80cmの固く焼けた面が4面あり、それが階段状に築かれていた。固く焼けた面1面が1回の操業を示しているとし、さらに、山手側にも赤色の焼土も見られたので、少なくとも4回から5回の操業があったと考える。また、製鉄炉西側から二筋の焼土を確認した。これは、竈と製鉄炉をつなぐ送風管が操業時に熱を受けた際の痕跡と考えられる。このことから、竈は炉の西側にあったと考えられるが、痕跡は確認できず、丘陵斜面にどのように設置していたか不明である。

このような非常に小型の製鉄炉を発見するに至ったが、1号製鉄炉と異なる点が三つある。一つは、製鉄作業面積の縮小である。そのためか、丘陵斜面でも炉を構築しており、排滓溝を設けずに主に谷方向の一方へ排滓されていた。造成範囲端で検出したため、製鉄炉より山手側については不明であるが、大きな落ち込みと土色の変化が認められたことから、この製鉄炉に伴う何らかの遺構が山手に続くと思われた。もう一つは、一辺または径が70～80cmと、製鉄炉本体が非



第68図 ニゴレ2号製鉄炉地形図



第69図 ニゴレ2号製鉄炉実測図

常に小型化したことである。異なる点の最後は、1号製鉄炉のような粉炭が敷き詰められた下部構造を持たないことである。製鉄炉炉底部に粘土を貼り付け、周囲に粘土を積み上げていくことによって炉壁を築いたようである。構築後に一度高温で焼き締め、炉として使用したらしい。この炉が使用不可能となった時点で、固く焼けた床面を防水施設として再利用し、次の炉底を山手側にわずかにずらして重複する形で築き直していた。操業時期は、廃滓場から出土した土器片や10世紀初頭に操業したと考えられる炭窯が付近から検出されたことによって、この頃と考えた。

③ニゴレ3号製鉄炉(図版第34)

調査対象地の南部で、木橋の集落から入る谷奥に位置する。かなり急斜面の丘陵裾部にわずかな平坦地があり、この平坦地から谷部にかけて多量の鉄滓や炉壁、炉底滓などの堆積を確認した。これらの堆積状況から、この平坦地付近に製鉄炉が存在すると考えて精査したが、後世の削平によって炉本体は確認することはできなかった。排滓場の規模は、幅約7m・長さ約8m・深さ約2.8mを測る、大規模なものであった。その堆積状況は、炭層と鉄滓の層、炉壁・炉底滓層、流土層との互層が認められ、製鉄炉から出た鉄滓の廃棄状況を良好な状態で確認することができた。砂鉄を溶かすために入れる炭、操業中に出る排滓、鉄を取り出す際の炉壁の取り壊し、次の操業

時までに堆積する流土層として各層をとらえると、堆積状況から少なくとも2回以上の操業が行われたと考えられる。排滓場に堆積していた炉壁や炉底滓の出土量から、3号製鉄炉は、2号製鉄炉のような小型の製鉄炉ではなく、1号炉と同じ形態の製鉄炉であったと考えられる。

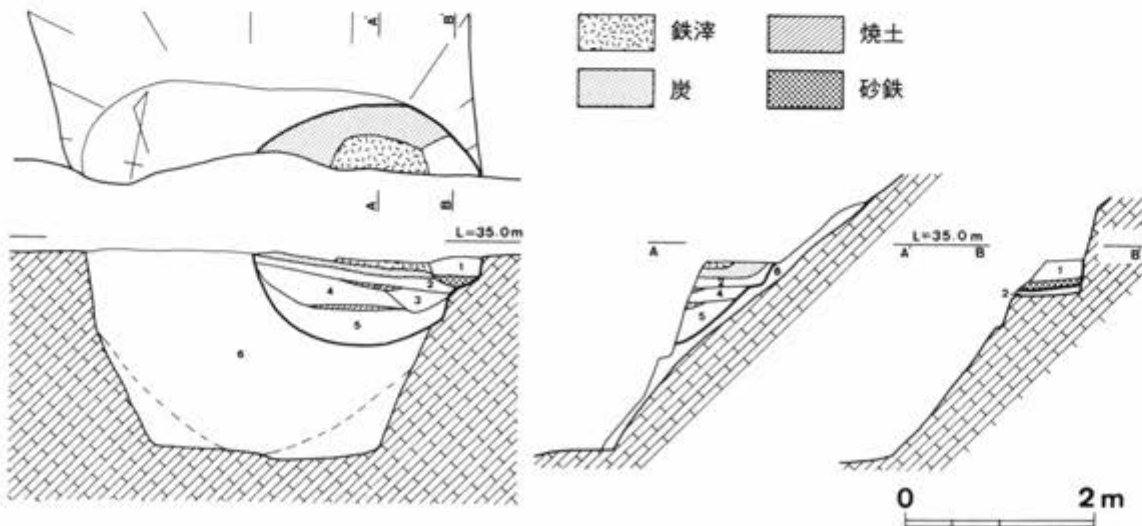
また、炉底滓の破片の大きさから推測すると、製鉄炉の短辺の内法は約56cmを測り、130cmを測る炉壁片の出土から、それ以上の長さを持つ製鉄炉であったと考えられる。このように炉壁や炉底滓から、すでに削平された炉本体の規模の一部をうかがうことができた。また、炉壁の中に、送風口を15cm間隔に設けたものも出土した。これは、当時の製鉄に多量の空気を送り込む必要性があったことを物語ると同時に、竈からの送風管の多さがその気密性を表わしており、高度な技術で鉄生産されていたことがうかがえる。また、15cm間隔に規則正しく送風口を設けていたことは、古くから長年にわたって行ってきた製鉄技術が、高度な域に達した成果と考える。調査時の地形から考えると、製鉄炉が存在したと推定される平坦地には、炉本体と竈座で占められていたと想定する。

④ニゴレ4号製鉄炉

3号製鉄炉廃滓場の東方約9mに位置し、平坦地から谷部にかけて鉄滓の堆積を確認したことから、4号製鉄炉とした。廃滓場の範囲は、幅約6m・深さ約1.5mを測る。後世の削平によって製鉄炉はすでになく、どのような形状の炉が存在していたかは不明である。しかし、製鉄炉からの排滓量や、炉壁、炉底滓の出土量から見ると、1・3号製鉄炉と同じ形態の製鉄炉であったと考える。これについては、廃滓場から良好な状況での炉壁や炉底滓が出土せず、遺物から裏付けることはできなかった。

⑤祭祀遺構(第70図、図版第35)

3号製鉄炉後方の丘陵斜面裾部で確認した、土坑状の遺構である。3号製鉄炉側は削平を受けており、全体の形状は不明である。土坑の規模は、幅約2.4m・深さ約1mを測り、残存長は0.7mであった。床面は赤色に焼けていた。土坑の堆積状況は、下層に砂鉄や炭混じりの黄褐色土を



第70図 祭祀遺構実測図

1.小礫混じり淡褐色土 2.赤黄褐色土 3.黄白色土 4.黄褐色土 5.淡黄褐色土 6.明黄褐色土

入れ、その上に炭を敷き詰めていた。炭の上には、鉄滓や鉄塊状遺物が撒かれた状態で堆積していた。また、土坑東端の一角には、砂鉄21.8kgが埋納されていた。このような検出状況から、小型の製鉄炉、製鉄を行う際の材料置場、祭祀的な遺構ではないかと考えられた。しかし、製鉄炉と考えるには土坑壁面が焼けておらず、鉄滓や鉄塊状遺物の出土状況を見ても製鉄炉とは考えられなかった。

さらに、原料・材料置場とするには、炭層上面からの鉄滓や鉄塊状遺物の出土の理由付けに無理があると考えた。土坑内に砂鉄混じりの土や炭を敷き詰めることは、製鉄炉の下部構造を意識してのことと思われ、土坑の一角には砂鉄が、炭層の上面からは鉄滓や鉄塊状遺物が撒かれたような状況で出土した。これらは、製鉄炉の操業を意図してのことであり、特に砂鉄は、製鉄の原料を炉内に入れる代わりに、その一角に盛ったのではないかと考えた。炉を築造するにあたってのものか、あるいは操業を祈願するためのものかについては不明であるが、鉄生産一連の工程に伴う祭祀的要素の濃い遺構であると考えた。

(3) 炭窯の調査(図版第40)

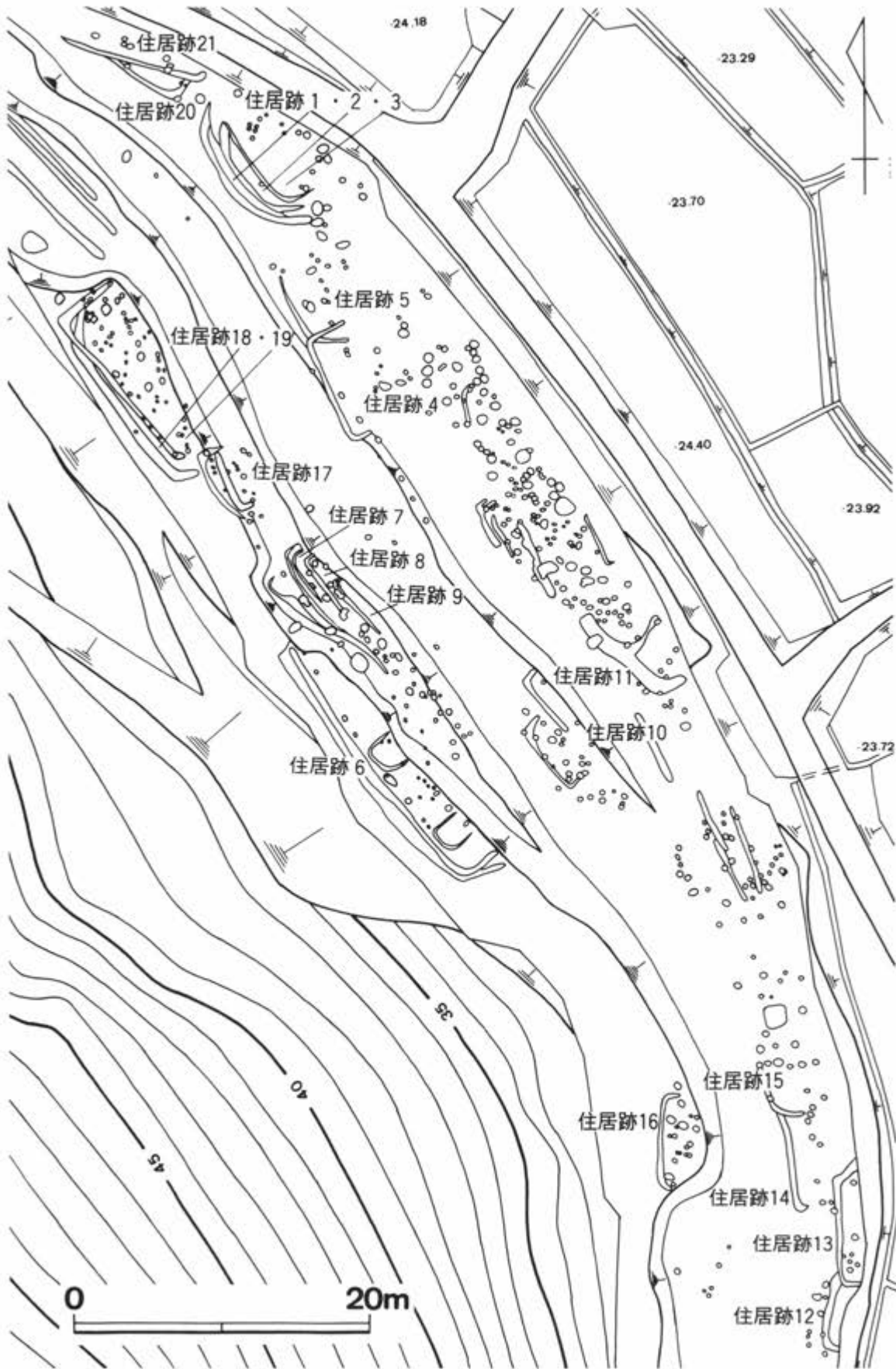
ニゴレ遺跡の炭窯は、部分発掘のためその発見数は29基と、遠所遺跡群と比べるとその数はかなり少ない。しかし、この限られた遺構からいえることは、平面形態が登り窯に類似した炭窯は構築されておらず、およそ2m×4mの平坦地を利用した平窯が13基と、小型の方形または円形炭窯が16基というように、平窯と小型窯を併用している。

小型の炭窯は、一辺または径70～80cmを測り、検出状況から見て、丘陵の尾根筋から裾部にかけて一帯に点在する傾向を示す。周知の製鉄遺跡である遠所遺跡群や黒部遺跡の炭窯の分布密度と比較すると、ニゴレ遺跡の炭窯は分布が希薄である。炭生産量が少なく、労働量も少なくすむ炭窯を使用していたことは、当時の鉄の需要量を物語るのか、それとも技術向上によるのではないかと考える。

小型の炭窯が多数を占める中で、さまざまな形態の炭窯を構築して炭作りした遠所遺跡群、また、地下式の登り窯状の炭窯を主流とする黒部遺跡とは、その内容が大きく異なる。これら各遺跡内での遺構分布状況などから見る限り、技術向上と考えるよりも、社会的要因が大きく影響しての結果と考える方が妥当と思われる。いずれにせよ、現段階では、各生産遺跡の操業時期の表われとか、構築工程の簡略化によるかなど、さまざまなことが考えられることから、今後の調査や報告に期待することにしたい。

(4) 住居跡の調査(第71図、図版第37～39)

遺跡内には、住居を構えるには平坦地が少なく、わずかに広がる平坦地や緩傾斜(A・B地区)を利用したところで住居跡31基(A地区10基、B地区21基)を確認した。出土遺物を見ると、この地が鉄生産遺跡として稼働する以前の古墳時代から人の生活痕跡が見られた。このような状況は、A地区で顕著に認められ、B地区でも遺物は出土しているが、その大半が包含層出土で遺構に伴



第71図 B地区遺構配置図

付表7 検出住居跡一覧表

	平面形態	長辺	短辺 (残存長)	出土遺物	備考
住居跡1	円形	8.5m	—	なし	※住居跡1
2	円形	8.5m	—	なし	※住居跡1
3	円形	8.8m	—	なし	※住居跡1
4	方形	8.0m	3.0m	なし	※住居跡2
5	方形	5.0m(残存長)	2.0m	なし	住居跡3
6	方形	20.0m	2.5m	なし	住居跡4
7	方形	4.0m(残存長)	1.0m	なし	
8	方形	4.0m(残存長)	0.5m	なし	
9	方形	5.0m(残存長)	0.5m	なし	
10	方形	5.0m	1.5m	なし	
11	方形	4.5m(残存長)	1.5m	なし	
12	方形	5.0m	1.0m	土師器小片(1点は古墳時代前期)	住居跡10
13	方形	7.5m	1.0m	土師器小片(1点は古墳時代前期)	住居跡11
14	方形	6.0m	0.4m	なし	住居跡12
15	方形	3.0m(残存長)	1.8m	なし	住居跡13
16	方形	6.0m	1.0m	なし	住居跡16
17	方形	4.0m	0.8m	なし	住居跡18
18	方形	13.5m	1.5m	弥生土器(後期)、土師器・須恵器(古墳時代)	※住居跡19
19	方形	12.0m	4.0m	弥生土器(後期)、土師器・須恵器(古墳時代)	※住居跡19
20	方形	4.0m	1.5m	なし	住居跡20
21	方形	10.0m	0.5m	なし	住居跡21

※は、平成6年度に概要報告した。住居番号は、当時の遺構番号。出土遺物は、すべて埋土上層

っていないため(第72～74図)、時期のわかる住居跡は認められなかった。住居跡の規模などについては、付表7に記した。

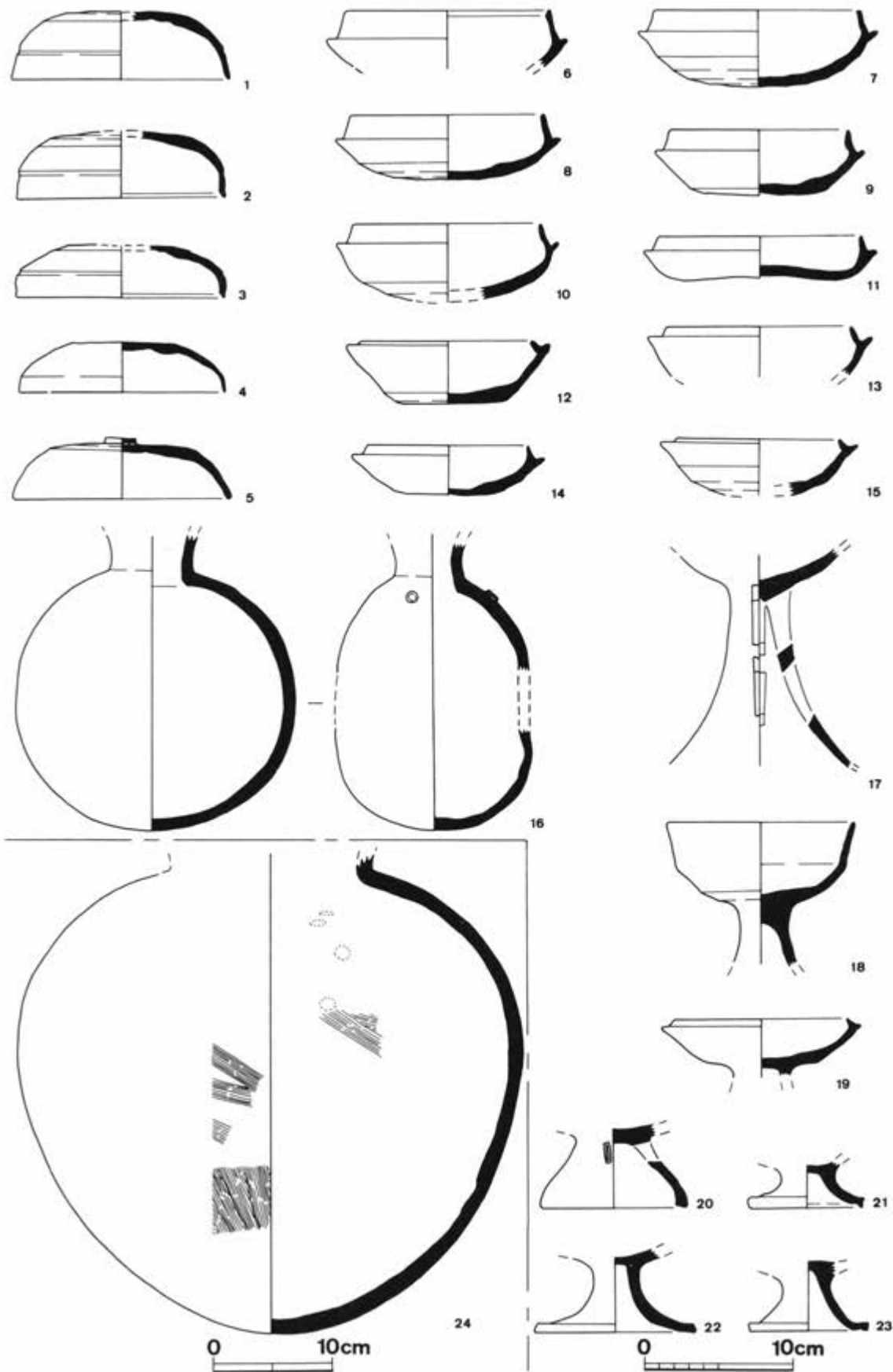
(5) 流路の調査

造成するにあたっての進入路(H地区)ならびに沈砂池(I地区)工事に先立ち、その部分の発掘調査を実施した。府道網野岩滝線から直交する形で進入路が計画され試掘調査(H地区)を行ったが、その大半は礫の堆積層であったことから、鳥取川の氾濫域であったと思われる。遺物は出土しなかった。唯一、B地区付近の地表下約1mで自然流路を検出し、ここで、弥生時代後期から古墳時代後期の土器が出土したが、それ以外に顕著な遺構は認められなかった。自然流路の規模は、調査区で確認することはできなかった。I地区はB地区東側の高台部にあたる。後世にかなり削平されており、柱穴をわずかに検出したにすぎない。

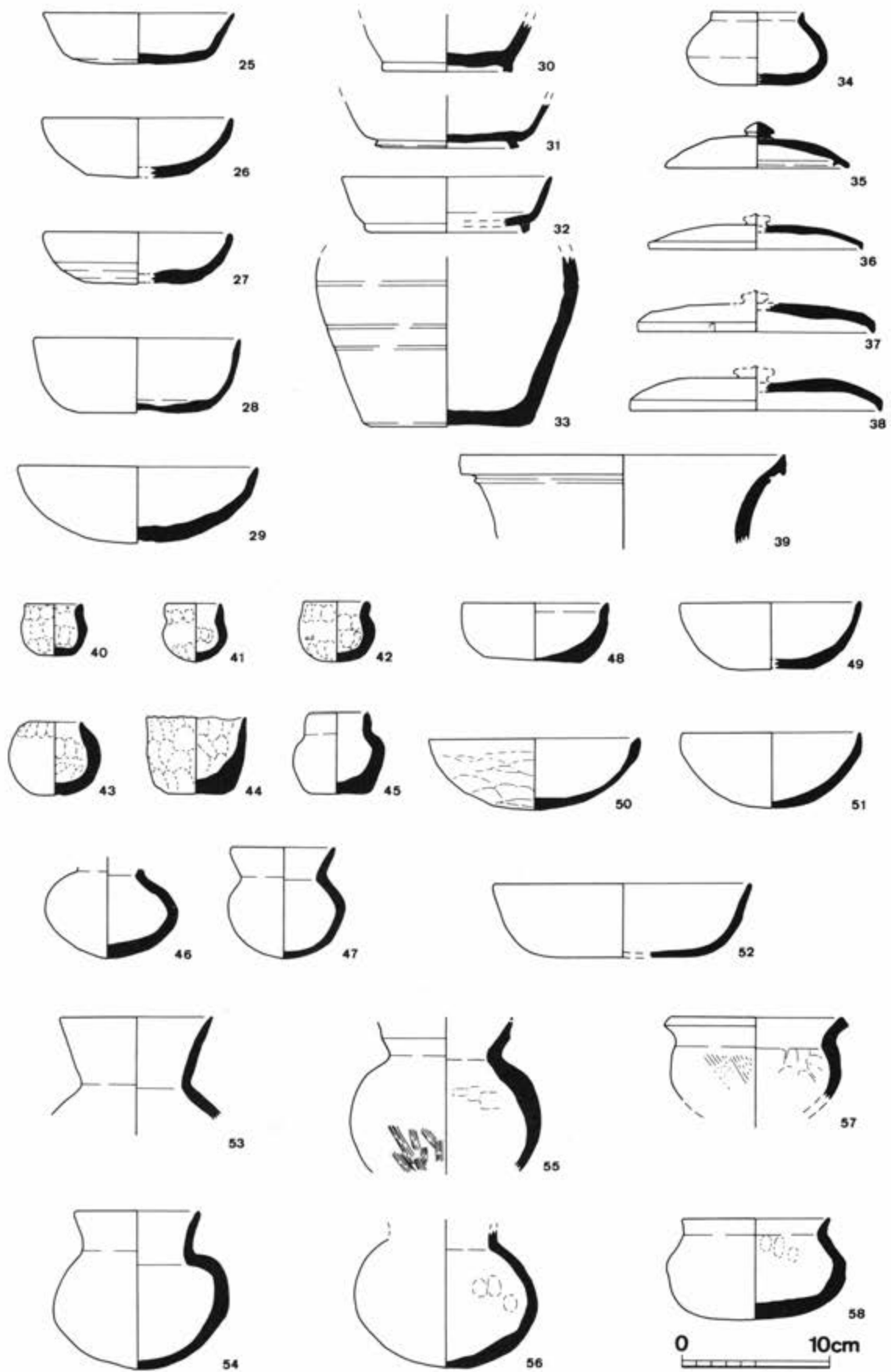
5. 出土遺物

(1) 土器(第72～76図、図版第41～44)

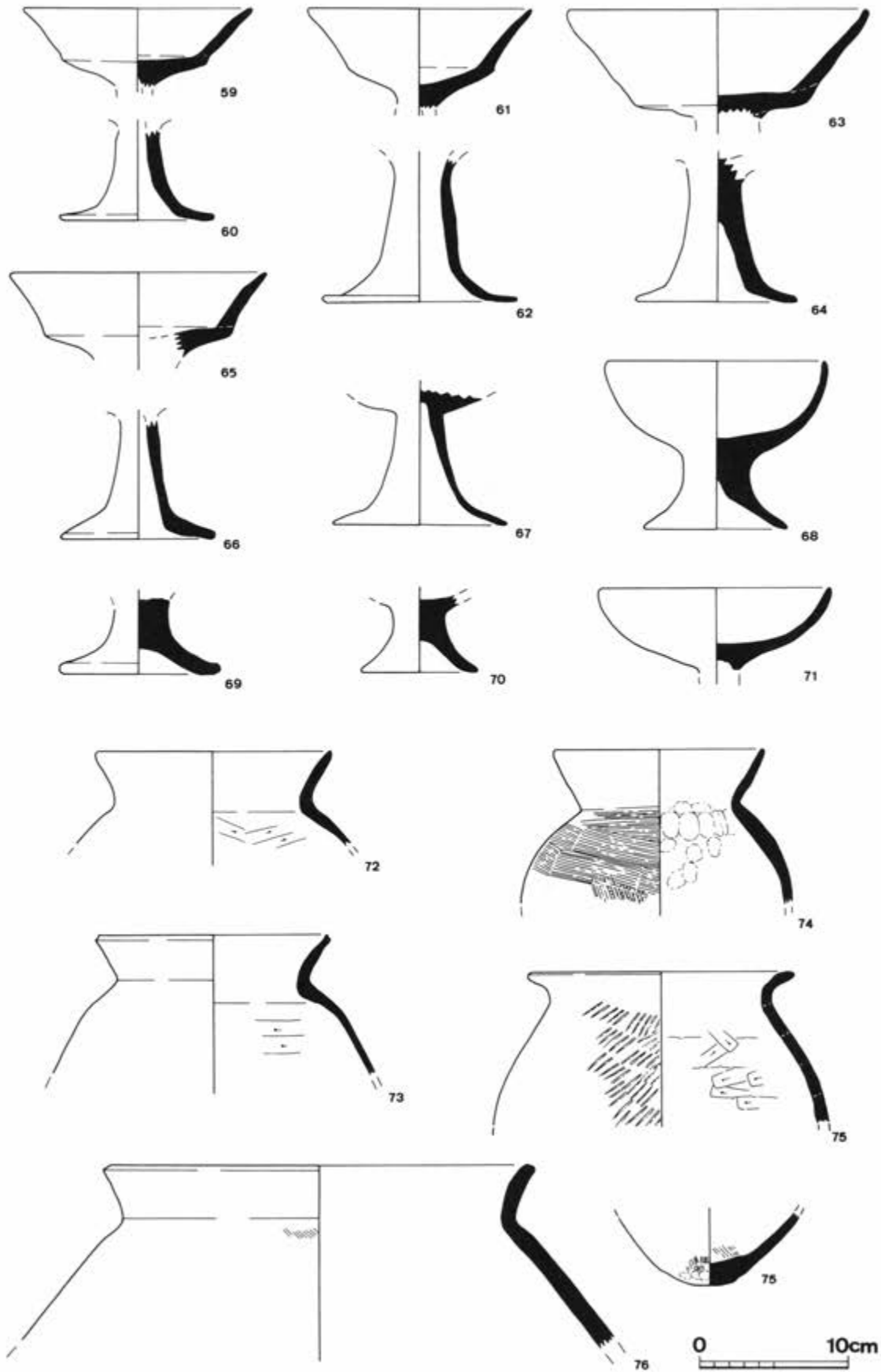
ニゴレ遺跡からは、弥生時代から平安時代にかけての土器が出土した。調査区ごとにまとめると、次のようになる(第65図参照)。A・B地区では、古墳時代前期から平安時代の須恵器・土師



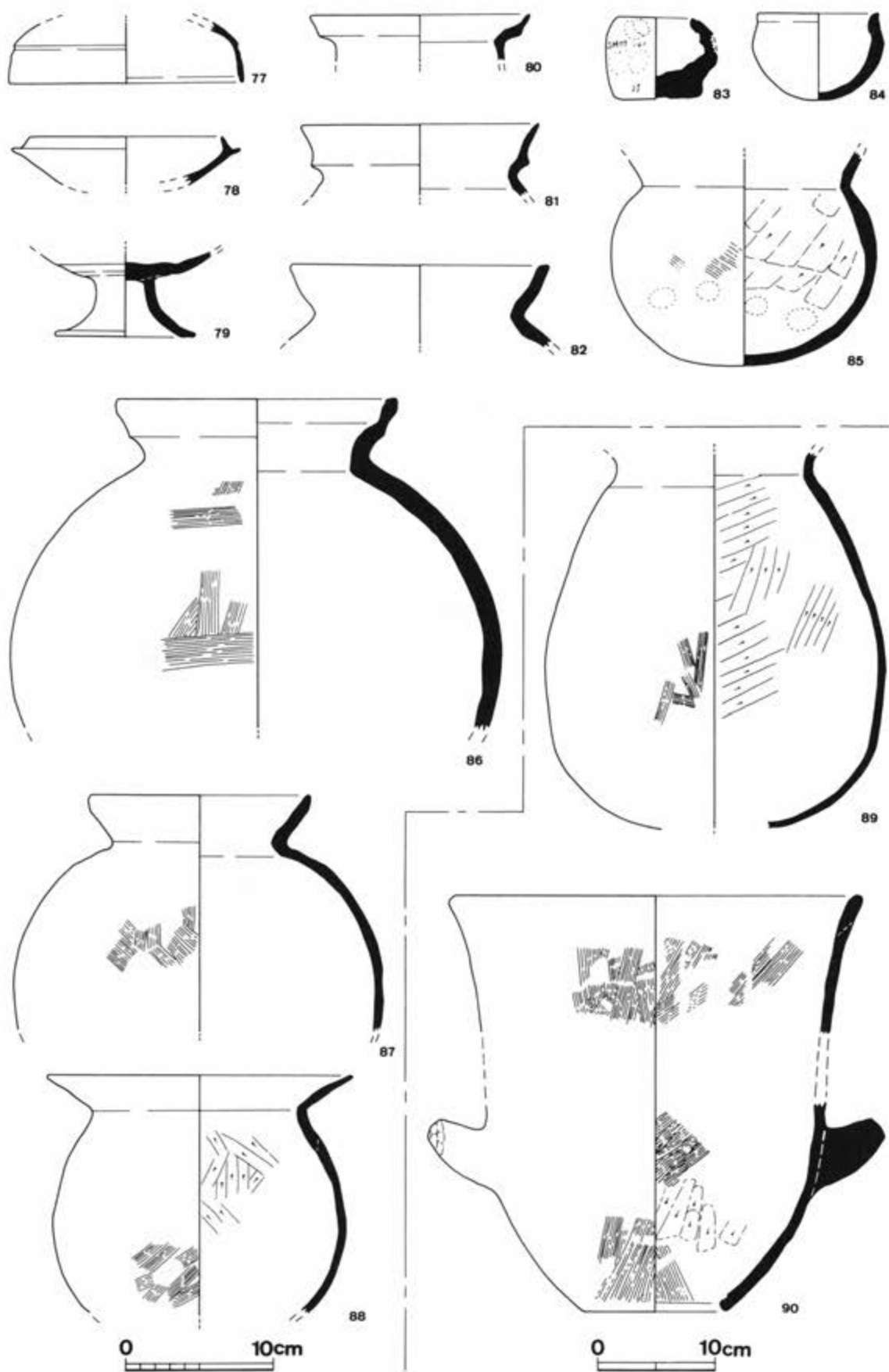
第72図 出土遺物実測図(1) 1~24. B地区包含層出土



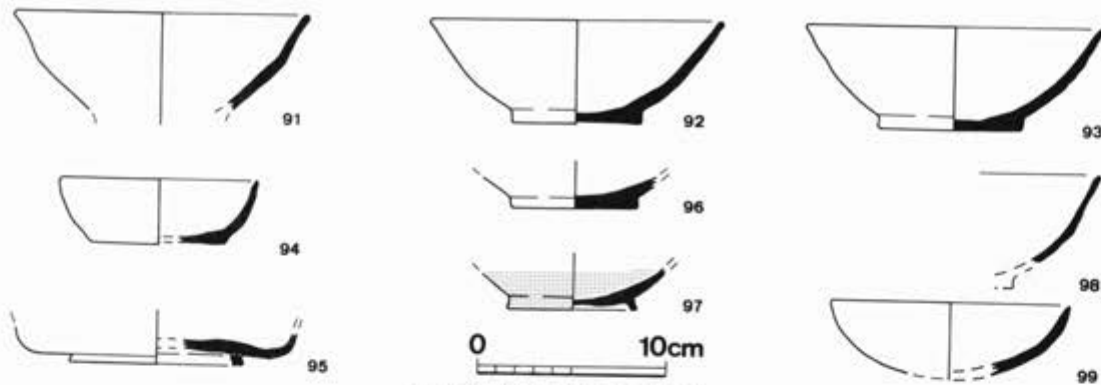
第73図 出土遺物実測図(2) 25~58. B地区包含層出土



第74図 出土遺物実測図(3) 59~76. B地区包含層出土



第75図 出土遺物実測図(4) 77~90. A地区住居跡内出土



第76図 出土遺物実測図(5)

91～93. 1号製鉄炉流土内出土 94～99. 3号製鉄炉廃滓場出土

器が出土した。1号製鉄炉の位置するC地区では、平安時代の須恵器が少量、3・4号製鉄炉の位置するF地区からは、奈良から平安時代の須恵器が出土した。自然流路跡を検出したH地区からは、弥生時代後期から奈良時代にかけての土器が出土し、D・E・G・I地区からは、遺物は出土しなかった。

次に、図示した遺物について説明する。第72～76図の内、1～27・30～33・35～39・77～79・91～98は須恵器で、28・29・34・40～76・80～90・99は土師器である。そのうち、須恵器では、杯蓋の肩部に沈線をめぐらし(77)、杯身の口縁端部にわずかに段をめぐらせる(6)ものがある。この形態からTK10型式に併行する時期と思われる。また、口縁端部が短く立ち上がる杯身(11・13・14・78)や、器高の低い杯蓋(4)などは、TK209型式に併行する時期と思われる。かえりが蓋に付くもの(35)や、これに対応する杯身(25～27)などは、TK217型式に併行する時期と思われた。これらの遺物は、A地区の住居跡内やB地区の包含層から出土したため、ニゴレ遺跡内で鉄生産される以前から人が居住していたことがわかった。製鉄遺跡、特に製鉄炉に伴うと考えられる土器は、第76図に載せた。

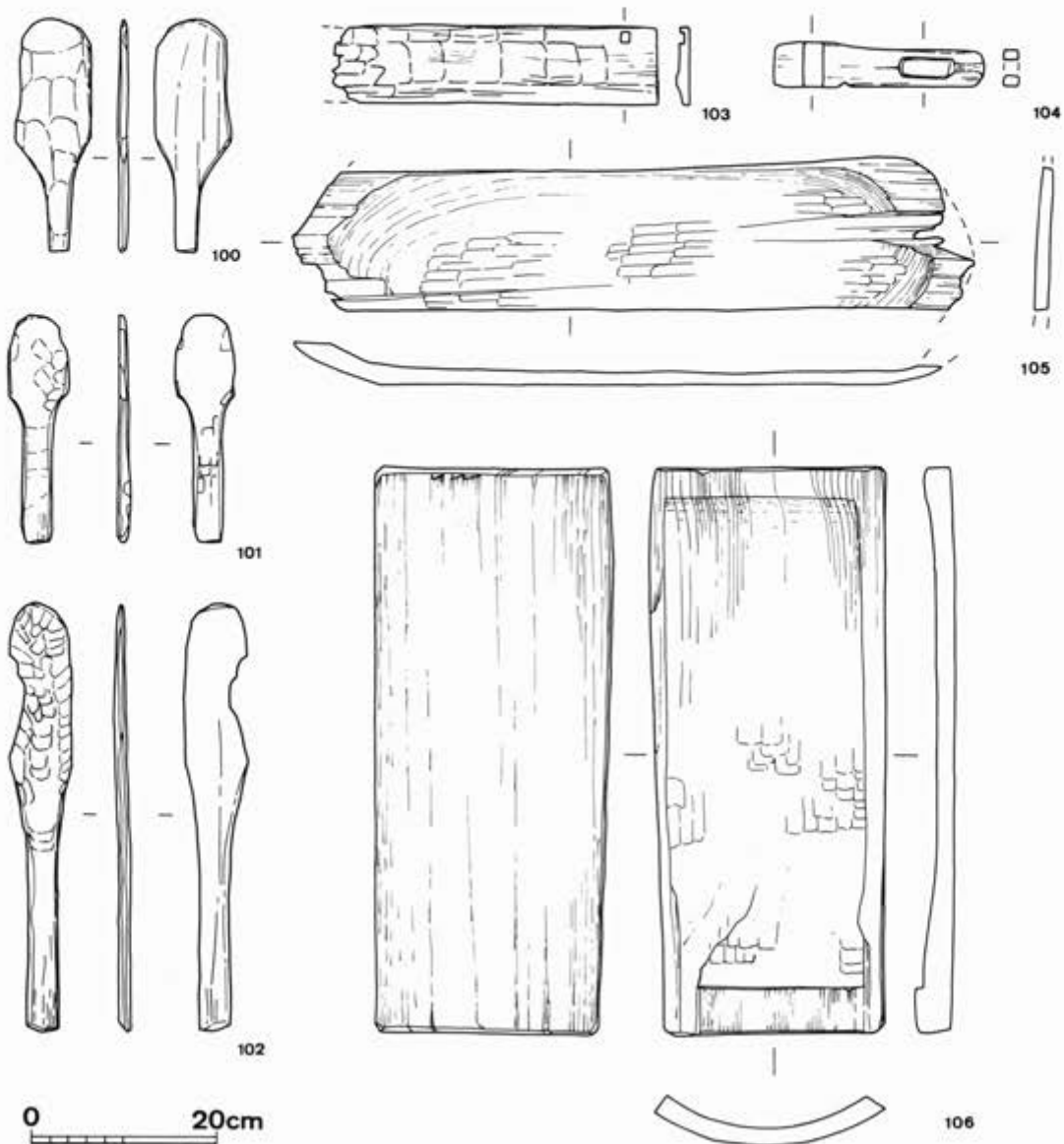
1号製鉄炉廃滓場からは、8世紀後半と10世紀初頭頃の土器片が出土し、1号製鉄炉の埋土に混入した状態で10世紀初頭頃の須恵器・碗が出土した(91・92・93)。この埋土は、炉の山手側に小型の炭窯を構築した際のもので、出土した碗は炉に伴わず、この炭窯に伴っていた。碗の形態は、平坦な底部から外上方に内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。中には、体部半ばでわずかに屈曲するものもある。底部切り離しは糸切りで、体部から口縁部にかけてはミズビキ成形である。

3・4号製鉄炉廃滓場からは、8世紀中頃から後半にかけてと10世紀初頭の土器が出土した(須恵器94～98、土師器99)。2基の製鉄炉がどの時期に相当するかは、土器の出土状況から確認できなかったが、排滓量ならびに炉壁・炉底滓の形状から、3号製鉄炉は8世紀後半に操業されていたと考えられる。4号製鉄炉も、ほぼ同時期の操業と考えられるが、廃棄された鉄滓の量で時期を決定できない。また、製鉄炉の形態を示すような炉壁や炉底滓が出土しなかったことから、遺物から見た操業時期については不明である。8世紀中頃から後半にかけての須恵器・杯(94・

95)は、平坦な底部から内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。高台をめぐる須恵器・杯(95)は、底部端からかなり内側に高台がある。10世紀初頭に該当する須恵器・椀(96~98)は、丸みを帯びた底部から内湾しながら外上方に立ち上がる椀で、平底高台や輪高台のものが出土している。輪高台の椀(97)は、淡緑色の緑釉陶器である。手法は、ミズビキ成形後に糸切りで切り離し、輪高台のものは削り出しで成形している。これら10世紀初頭の土器(96~98)は、3・4号製鉄炉に伴わず、この付近にこの時期の遺構が存在していた可能性を示している。

(2)木製品(第77図、図版第44)

木製品(100~102)は、杓文字形をしているが、これらは、その磨滅状況から見て、炉を構築する際の篋状工具と考えられる。炉を構築するにあたっては、ブロック状の粘土を積み上げている



第77図 出土遺物実測図(6)
100~102. 3号製鉄炉廃滓場出土 103~106. H地区出土

ところであるが、この木製品はそのつなぎ目を粘土で埋めたり、粘土をこねる際に使用されたと
 思われる。また、3号製鉄炉廃滓場最下層から出土したことから、3号製鉄炉作業前の築炉時に
 伴うと考える。その他の木製品は、製鉄炉から離れたところで出土しており、製鉄に関連するか
 どうかは不明である。

(3) 炉関係遺物(第78・79図、巻頭図版第3、図版第45・46)

① 炉壁(107~113・117~123)

炉壁の大半は、3・4号炉排滓場から出土し、良好な状況で採集できた。中には、4つの送風
 口を確認できる大きなものもあった。送風口の大半は楕円形で、8cm×4cmほどである。これら
 の炉壁片から、送風口はほぼ同じ高さに設けられ、ほぼ15cm間隔で開いていた。立面的に見ると、
 送風口の向きは炉外から炉内の炉底方向で、斜め下方を向いていた。平面的に見ると、2つ以上
 の送風口のある炉壁は、壁に直に開いていたことから、送風管は平行に設けられたと思われる。
 しかし、第80図のような炉壁も出土しているので、製鉄炉両端部のみ斜め方向に送風口を設け、
 輪から製鉄炉にかけての送風管が扇形に配されていた可能性も指摘する資料である。また、送風
 口に木片が炭化した状態で付着したものもあった。送風管の材質を知る上で貴重な資料と考え、
 樹種同定を行った。その結果、竹と思われたが、アカガシ亜属といわゆるカシ類を使用していた。

今回、ニゴレ遺跡で出土した炉壁で新たなことがもう一つある。それは、送風口下約20cmのと
 ころで送風口とは逆の方向の穴を確認したことである。穴の形状は不明であるが、確認した限り
 では径約8cmの半円形であった。これは、排滓を円滑にするための製鉄炉中央部に設けられた排
 滓口と思われる。

② 炉底滓(114~116・132~135)

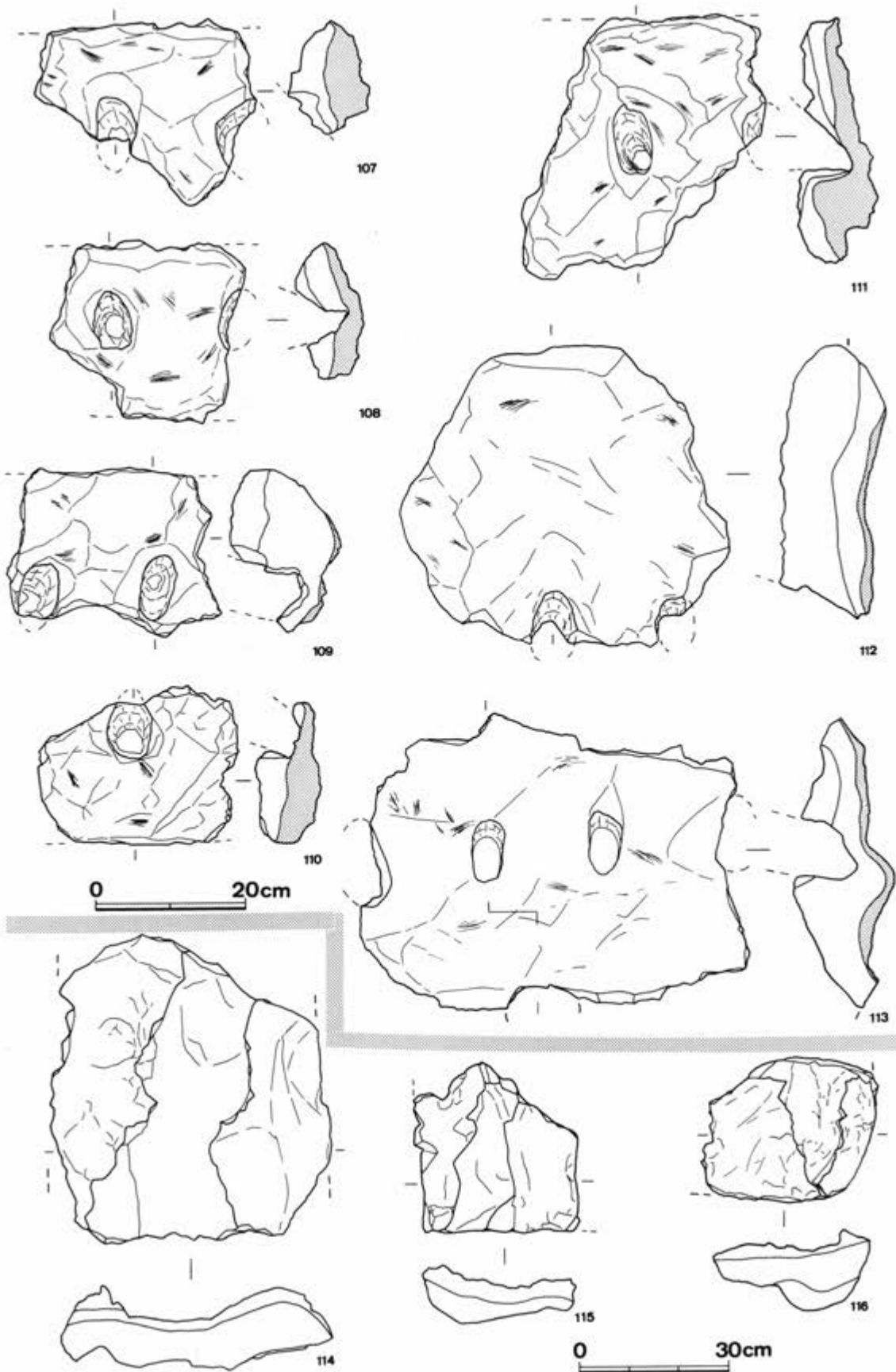
非常に残りのよい炉底滓が出土した。すなわち、長辺は不明であるが、炉の内法の短辺が約
 56cmと確認できるものが出土した。また、排滓溝への流れをよくするためか、炉底中央部が窪む
 ものも多く見られた。炉底滓の中には、下部構造の一部も付着したまま廃棄されており、底が球
 状に丸みを持つものもあった。

③ 鉄滓(125~129)

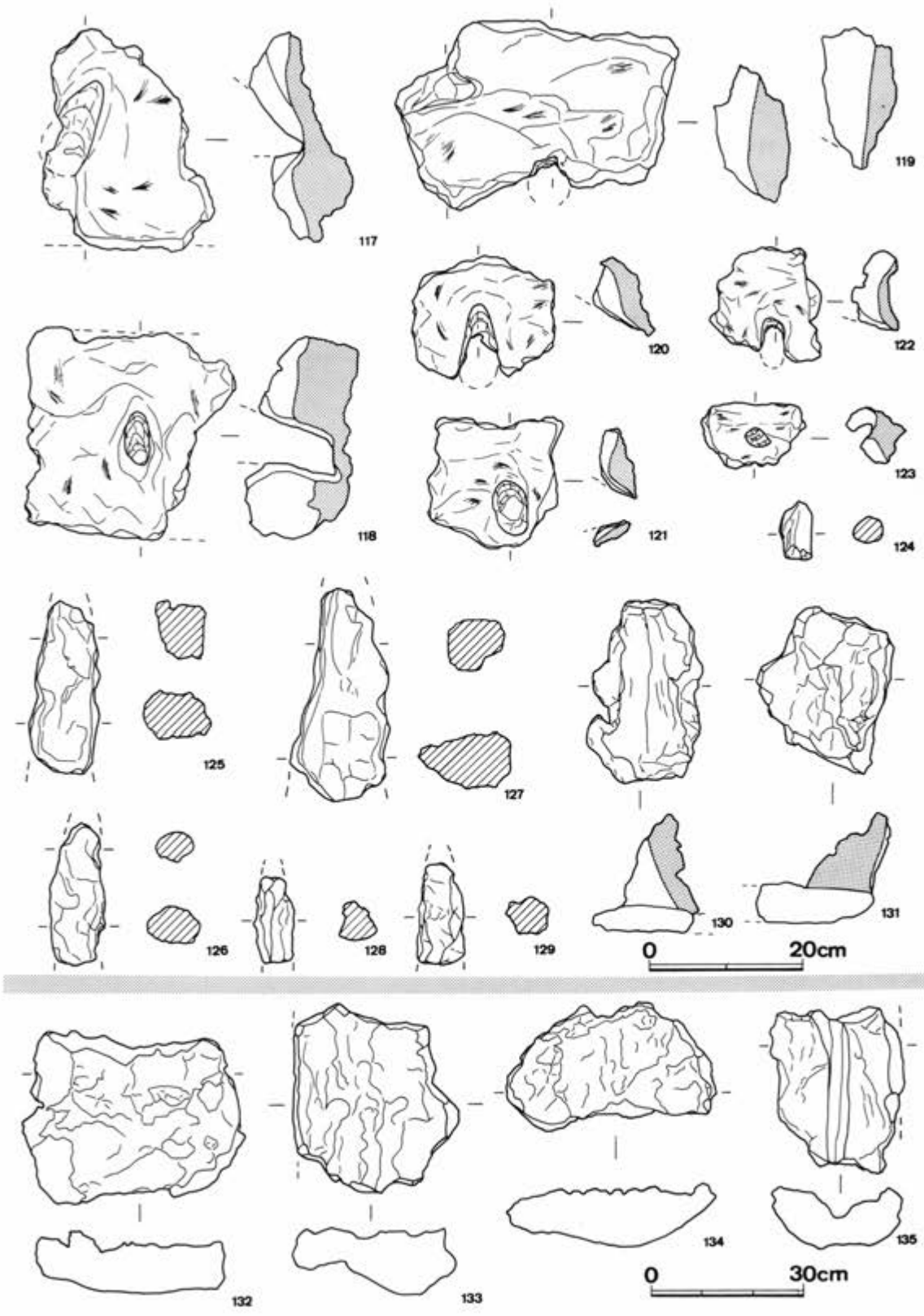
排滓場から多量の鉄滓が出土したが、その中に断面半円形の棒状の鉄滓が数本出土した。半円
 形の径は約6~12cmを測り、送風口下に設けられた排滓口から流れ出した鉄滓が冷えて固まった
 と思われる。

④ 小型炉の炉壁と炉床(130・131)

小型炉から掻き出された排滓場に堆積する炉壁や炉床の量は、かなり少なく、良好な資料を得
 ることはできなかった。その中で、小型炉の構造のわかる炉壁と炉床を数点確認した。厚さ約5
 cmを測る炉床端から、斜め方向に立ち上がる炉壁が付着した状況で出土した。これは、前回の炉
 床を再利用して壁を設けて炉を再構築していたことを示す。これを繰り返すことによって、小型
 炉は作業ごとに階段状に築かれ、発見時には階段状の炉床を検出することとなる。



第78図 出土遺物実測図(7) 107~116. 3号製鉄炉廃滓場出土



■ 炉壁

107~113・117~122. 炉壁 114~116・132~135. 炉底 123~129. 鉄滓
130・131. 炉底と炉壁の癒着状況

第79図 出土遺物実測図(8)

117~124. 1号製鉄炉廃滓場出土 125~135. 2号製鉄炉廃滓場出土

6. ま と め

平成4年度から平成6年度までの発掘調査の結果、「丹後あじわいの郷」整備事業予定地内には、8世紀後半に操業した製鉄炉3基と間接的証拠ではあるが、10世紀初頭に操業した製鉄炉1基の計4基を確認した。いずれも、原料は砂鉄を使用しており、鍛冶炉の検出までは至らなかった。ここでは、良好な状態で出土した炉壁や炉底滓から見た製鉄炉と、各製鉄炉の鉄滓や炉壁、炉底滓などの炉関係遺物の排滓量について考察し、周辺の製鉄遺跡と考え合わせてまとめとしたい。

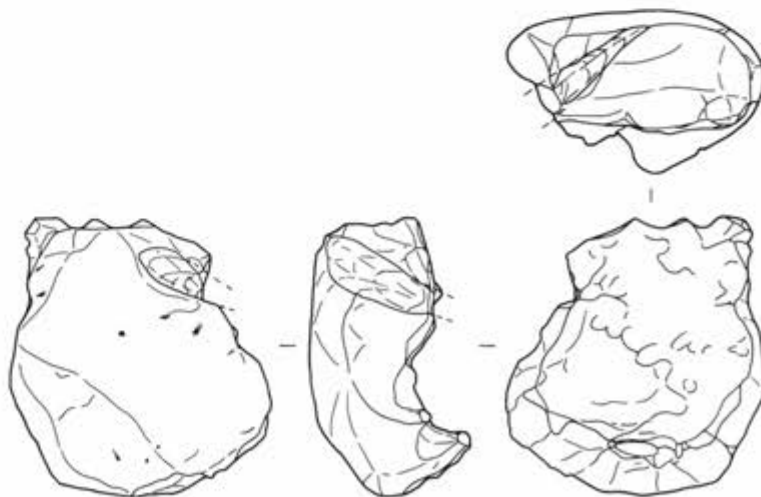
(1) 炉関係遺物から見た製鉄炉について

1・3号製鉄炉と2号製鉄炉(小型炉) 3号製鉄炉は、後世の削平によって遺存していなかったが、炉壁や炉底滓などの形態などから、溝状の下部構造を持つ箱形炉と考える。ニゴレ遺跡では、1号製鉄炉では下部構造が確認され、3号炉では良好な炉壁や炉底滓を検出した。出土遺物から、ほぼ同時期の操業と思われるが、遺構・規模も異なり、同じ規模の製鉄炉を構築していたとは考えられない。しかし、3号炉の出土遺物に等間隔に送風口を設けた炉壁片の出土は、炉を構築する際の当時の企画性を物語ると考え、強引ではあるが、1号製鉄炉の下部構造と3号製鉄炉の炉壁・炉底滓を合わせて考え、8世紀後半の製鉄炉を想像してみたい。

1号製鉄炉の下部構造は、幅約1m、焼土の範囲から内法の長さ約3.4mの箱形炉が想定できた。これに3号製鉄炉の炉壁・炉底滓の資料を加えると、下部構造の幅は約1mに対して、製鉄炉炉底での内法は0.56mと、下部構造よりも製鉄炉の炉底の内法の方が0.44m狭くなる。遺構の概要で記したが、1号製鉄炉の粉炭層の範囲から焼土の範囲を引いた1.5mを、製鉄炉の短辺の炉壁の厚さとみれば、厚さ約0.75mの炉壁が四方をめぐる可能性が高い。このことから、幅約1mの溝を掘った後に粉炭をほぼ地山面まで敷き詰めて下部構造を造り、下部構造中軸ラインに沿って幅約0.6mあけて粉炭層から地山にかけて厚さ70~80cmの炉壁を築いたと想定される。このような状態で炉壁を築き、下部構造を囲む形で四方をめぐるかと推測する。

また、下部構造から見た製鉄炉推定長約4.9mから短辺の炉壁の厚さを除くと、製鉄炉の内法の

の長さは3.4mとなる。15cm間隔に送風口が設けられていた炉壁の検出例から、1mで6個の送風口となり、扇状に配管していたとしても12~15本の送風管を持つ製鉄炉と考えられる。第80図に示した炉壁は、送風口が斜めに設けられており、発見した個体数はわずかであるが、このような送風口をもつ炉壁の発見から、送風管を扇形に配してい



第80図 炉壁実測図(1/8)

た可能性がある。これだけの送風管へ均等に風を送ることのできる輪は、気密性が高いと同時に、かなりの技術で鉄生産していたことを物語る。また、多くの炉壁を観察すると、面を持つものがあり、中には「L」字状に面を持つものや径2cmほどの穴がその面に直に開いているなど、炉壁からいろいろな成果が得られた。

面をもつ炉壁は、製鉄炉を築く際にブロック状の粘土を造り、それを築き上げて炉を構築したと考えられる。これらのことは、限られた遺跡の断片的な資料から見たもので、古代の製鉄炉の実態に近づくことができたかは、今後の発見例に期待したい。

これに対して、2号製鉄炉は、一辺または径が70～80cmと非常に小型になる。操業時期は、付近の炭窯の操業時期などから10世紀初頭と考えられる。この小型炉は、粉炭層を敷き詰めたような下部構造を持たず、丘陵斜面に直交する形で排滓するなど、1号炉とは構造的に異なる。また、その排滓場から出土する鉄滓や炉壁、炉底滓を見ても、大きな破片は少なく、炉壁や炉底滓の量もかなり少ない。これは、炉の操業規模によるのか、必要とされる鉄の減少によるのか検討の余地はあるが、少なくとも鉄生産をするにあたって、大規模な操業・行程が必要とされなくなった可能性が高い。製鉄炉付近から送風管があったと思われる痕跡も1か所見つかっているが、下部構造を持つ製鉄炉と比較すると、送風管の本数も少ない。このことから見ても、製鉄炉の規模の縮小化を知ることができる。ニゴレ2号製鉄炉については、保存の対象となったため、下部構造の詳細は不明な点が多い。ただ、少なくともこの時期(10世紀初頭)には、下部構造を持つ大がかりな製鉄炉が丹後地域では構築・操業されなくなったことは事実である。

以上のように、1・3号製鉄炉と2号製鉄炉の発見から、8世紀後半の製鉄炉を見れば、10世紀初頭前後には下部構造を持つ製鉄炉は消滅し、代わりに小型の製鉄炉へと移行する変換期であったことがわかった。限られた資料であるため、かなり無理はあるが、今後の調査・報告によって、丹後地域の製鉄史がより確かになると考えている。

(2) 各製鉄炉の排滓量について

ニゴレ遺跡で発掘調査を行った製鉄炉は、4基である。各製鉄炉の鉄滓や炉壁・炉底滓混じりの排土を、排滓坑や排滓溝、廃滓場などの出土地ごとに水洗いし、炉壁・炉底滓・鉄滓・鉄塊状遺物・砂鉄・炭を採取した結果が付表8である。2・3・4号炉は、排滓坑や排滓溝が確認できなかったため、一括で廃滓場として取り上げて整理した。また、製鉄に伴うと思われる祭祀遺構は、土坑端で確認した砂鉄の量と上面に敷き詰めてあった鉄塊状遺物の総量を測った。

8世紀後半の操業と考えられる1号製鉄炉は、中でも良好に残っていたため、炉内・排滓坑・排滓溝・廃滓場の4つの区画に分けて採取できた。排滓坑や排滓溝からの炉壁の出土量が少ないことから、鉄を採取する際には、炉壁の大半を舌状の平坦地から谷部に崩し、炉底が見えるようにしてから取っていたと考えられる。操業中に出る鉄滓や操業後に掻き出す炉底滓は、主に排滓溝から掻き出されており、数値から見る限り排滓坑は補助的な役割でしかなかったのではないかとと思われる。ほぼ同時期の操業と考えられる3号製鉄炉も、廃滓場出土の2割の排土しか洗浄していないが、1号製鉄炉に匹敵する製鉄炉であったことが、各炉関係遺物の出土量からわかる。

1号製鉄炉炉壁・炉底滓・鉄滓の出土量に対して、2号製鉄炉の出土量は、炉壁で1/5、鉄滓では、1/15ほどとなる。なお、炉底滓については、ほぼ同量であるが、これは操業回数が多かったためと考える。

最後に、丹後地域における製鉄遺跡の発見状況とそれぞれの操業時期を考えて総括し、今後の課題としたい。

丹後地域では、6世紀後半に遠所遺跡群で製鉄が行われていたことは、周知のとおりである。遠所遺跡群では7世紀の製鉄関連遺構はないものの、8世紀後半には製鉄から鍛冶工程までの一貫した作業が行われていた。7世紀前半から8世紀中頃まで製鉄が行われなかったことは、製鉄をする際に必要な木炭をつくるための樹木が6世紀後半の製鉄時に減少したため、7世紀は他の地域に移動して製鉄を行ったと考えられている^(註13)。いずれにせよ、ここで発見された製鉄炉は「U」字状の溝に粉炭を敷き詰めた下部構造を持つ箱形炉であった。

このような構造の製鉄炉が少なくとも6世紀後半から築かれ、操業し鉄生産されてきた。黒部遺跡では、丘陵裾部に数基の製鉄炉を、斜面には重なり合うように登り窯状炭窯を築いてまで製鉄を行うようになる。ニゴレ遺跡に点在する製鉄炉や炭窯などの遺構密度に対して、遠所遺跡群や黒部遺跡は丹後地域での鉄生産の最盛期を示しており、ニゴレ遺跡では最盛期以降に製鉄が行われたと思われる。

その後、10世紀初頭には下部構造を持たない、小型の製鉄炉が出現する。これは、下部構造を作る工程を省いていることから、鉄生産を行う上での工程上の省略と考えられ、丘陵中腹に製鉄炉を築くことで、排滓溝を設けずに鉄滓を廃棄したことは、大がかりな工人による鉄生産から少人数による鉄生産へと規模縮小がなされたと考える。

遠所遺跡群からは木簡が出土しており、その内容から、8世紀以降の鉄生産において何らかの形で中央とのつながりが考えられている^(註14)。その後、このような小型製鉄炉が出現したことから、10世紀初頭には民営に変わっていたと思われる。このような現象が何によるのかは、小型製鉄炉の発見例も少なく、また7世紀前半から8世紀中頃にかけてと9世紀に操業していた製鉄遺跡の

付表8 炉関係遺物出土量一覧表(単位:kg)

	炉壁	炉底滓	鉄滓	鉄塊状遺物	砂鉄	炭
1号炉炉内	8.9	4.2	21.4			
1号炉排滓溝	91.1	107.5	789.3			
1号炉排滓坑	121.1	30.1	119.7			
1号炉排滓場	2297.9	1070.7	22973.9	213.7		29.2
1号炉合計(A)	2519	1212.5	23904.3	213.7		29.2
2号炉排滓場(B)	506.4	944.1	1528.4	41.4		2.9
3号炉排滓場(C)	1718.5	71.1	2650.9			
4号炉排滓場(D)	343.7	32.5	139.5			
祭祀遺構(E)				8.2	21.8	474.6
総合計(A+B+C+D+E)	5087.6	2260.2	28223.1	263.3	21.8	506.7

(3・4号炉排滓場については、全体の2割を計測した数値である。)

発見例もないため、今追求することはできない。ただ、少なくとも、現状での調査例からすれば、丹後地域での製鉄史の8世紀後半は最盛期にあたり、おそらく9世紀後半には大きな変革期を迎え、製鉄規模が縮小されて

いったと考える。10世紀中頃以降の古代製鉄関連遺構は発見されておらず、10世紀後半には衰退期を迎えると思われるが、今後の調査例を待って検討したい。

(岡崎研一)

- 注1 ①岡崎研一「丹後あじわいの郷関係遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第53冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
 ②岡崎研一「桐谷古墳群・ニゴレ遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第48号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993.6
 ③岡崎研一「丹後あじわいの郷関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第59冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
 ④岡崎研一「ニゴレ遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第52号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994.6
 ⑤岡崎研一「丹後あじわいの郷関係遺跡平成6年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第66冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
 ⑥岡崎研一「ニゴレ遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第56号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995.6
- 注2 石井 清・岩佐正一・小国喜市郎・嵯峨根清一・城下則行・高原与作・菱川 實・平林秀夫・藤原敏子・藤原ヒサエ・堀江登喜雄・森 秀雄・森戸源一郎・安田正夫・横島 迪・吉岡正子・有田美恵子・伊熊佐知子・上田奈智子・河崎祐子・金保真由美・金久真弓・谷辻絹代・中島恵美子・藤井矢壽子・松村和美・吉岡美秋
- 注3 現地説明会資料「奈具谷遺跡・奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター No.95-10 1995.10.29
 増田孝彦「最古の水晶玉工房群・陶質土器の発見」『文化財報』No.92 1996.2
- 注4 注3に同じ
- 注5 ①増田孝彦「遠所遺跡群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第39号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991.3
 ②増田孝彦「丹後の古代鉄生産」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
 ③岡崎研一「遠所遺跡群」(『京都府埋蔵文化財情報』第44号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992.6
 ④増田孝彦「丹後の製鉄遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第45号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992.9
 ⑤土橋 誠「遠所遺跡出土木簡」(『京都府埋蔵文化財情報』第47号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993.3
 ⑥増田孝彦「遠所遺跡群」(『京都府埋蔵文化財情報』第48号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993.6
- 注6 ①河野一隆「黒部製鉄遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第52号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994.6
 ②現地説明会資料「黒部製鉄遺跡」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター No.94-09 1994.9.9
 ③中間報告資料「黒部遺跡」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター No.95-04 1995.6.28
 平成8年度の『京都府遺跡調査概報』に「黒部遺跡」として報告予定。
- 注7 分布調査成果については、付表5に記す。

- 注8 鉄滓と炉壁の大部分が保管され、土器などについては当調査研究センターで保管している。
- 注9 1基については、弥栄町教育委員会が試掘調査を行った。その結果、古墳でないことがわかった。
- 注10 出土遺物と検出遺構の関係については、下記参照。
岡崎研一「丹後あじわいの郷関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第59冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994 第3図参照
80・81・88.1号住居跡出土 77・78・82・84・86・87.2号住居跡出土 90.6号住居跡出土
83.7号住居跡出土 89.26号住居跡出土 79・85.27号住居跡出土
- 注11 増田孝彦「丹後地域の古代製鉄遺跡に関する問題」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注12 注11に同じ。
- 注13 当センター増田孝彦主任調査員の教示による。
- 注14 注5-⑤

付 載 1

ニゴレ遺跡出土炭化材の樹種同定

藤 根 久(パレオ・ラボ)

1. はじめに

ニゴレ遺跡は、竹野郡弥栄町地内の標高約35m前後に位置する。遺跡では、鉄滓あるいは燃料材としての炭化材を伴う製鉄炉跡が検出されている。この燃料材のほか、製鉄炉送風口内に送風管材と思われる材が炭化して検出されている。ここでは、これら炭化材の樹種について検討する。

2. 炭化材の樹種

炭化材は、比較的保存の良い部分を選び、実体顕微鏡下で横断面について観察し、片刃カミソリなどを用いて横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面(柁目と同義)の3断面について作り、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM T-100型)で観察する。以下に、結果を表1に示し、炭化材標本の記載と同定の根拠を示す(表1)。

イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 図版1a~1c.

やや小型の丸の管孔が単独あるいは放射方向に2~3個複合し散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、同性で1~3細胞幅、3~40細胞高であり、集合放射組織が見られる(接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科クマシデ属のイヌシデ節の材と同定される。イヌシデ節には、イヌシデ(*C. tschonokii*)及びアカシデ(*C. laxiflora*)があり、暖帯から温帯にかけて分布する樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版2a~2c.

大型の管孔が放射方向に配列する放射孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものがある(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のアカガシ亜属の材と同定される。いわゆるカシ類であるアカガシ亜属の樹木にはアカガシ(*Q. acuta*)やアラカシ(*Q. glauca*)あるいはシラカシ(*Q. myrsinaefolia*)をはじめ8種類ほどある。アカガシ亜属の樹木は、樹高20m、幹径1mに達する常緑広葉樹である。カシ類は、樹木の中では硬い材として知られている。

コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版3a~3c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のコナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ(*Q. serrata*)やミズナラ(*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、カシワ(*Q. dentata*)、ナラガシワ(*Q. aliena*)などがある。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. クワ科 図版4a~4c.

年輪のはじめに大型の管孔が数列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部で接線方向に数個複合して散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、2~30細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クワ科クワ属のヤマグワの材と同定される。ヤマグワは、温帯から亜熱帯にかけ広く分布する樹高12m、幹径60cmの落葉広葉樹である。

3. 考察

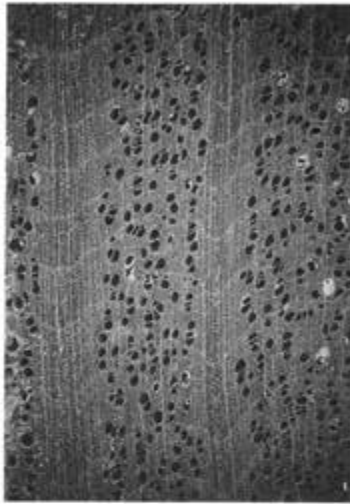
ここで検討した炭化材は、製鉄に用いた燃料材と炉の送風管材と思われる炭化材である。燃料材では、コナラ節やイヌシデ節あるいはヤマグワなどの木材が検出されるが、これらは周辺域に比較的多く生育していた樹木であり、特にコナラ節の樹木は優占していたことが十分予想される。

一方、炉送風管材の一部と思われるアカガシ亜属は、いわゆるカシ類であり樹木の中で最も硬い材質の樹木である。多分、熱的に耐えうる炉送風管材として、このアカガシ亜属の樹木を利用したものとする。

表1 3号製鉄炉跡出土炭化材の樹種

試料	出土地点	炭化材の性格	樹種
1	西側廃滓場下層(その1)	製鉄燃料材	コナラ節>イヌシデ節
2	西側廃滓場下層(その2)	製鉄燃料材	コナラ節
3	送風口内	送風管材	すべてアカガシ亜属
4	祭祀遺構	燃料材	ヤマグワ、イヌシデ節

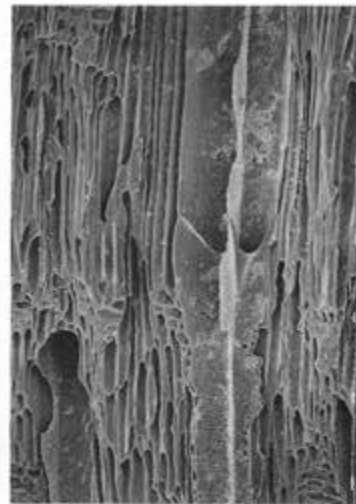
図版1. ニゴレ遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



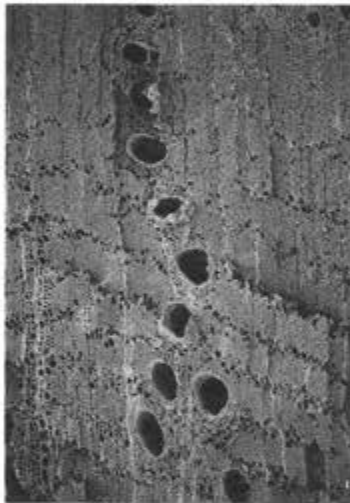
1a. イヌシデ節 (横断面)
西側廃滓場下層 bar:1mm



1b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



1c. 同 (放射断面) bar:0.1mm



2a. 7カゴ茎 (横断面)
送風口内 bar:0.5mm



2b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



2c. 同 (放射断面) bar:0.5mm



3a. コナラ節 (横断面)
西側廃滓場下層 bar:1mm

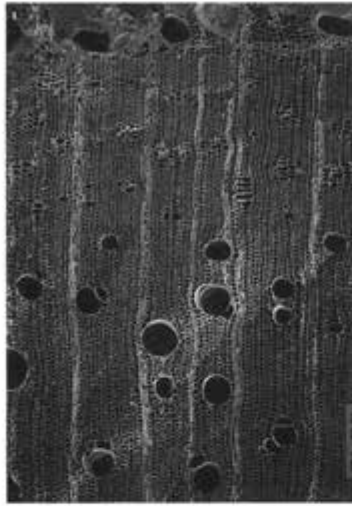


3b. 同 (接線断面) bar:0.5mm

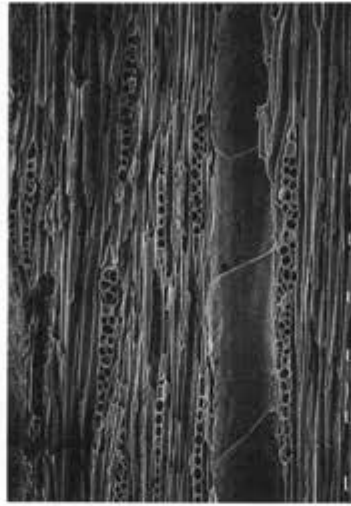


3c. 同 (放射断面) bar:0.1mm

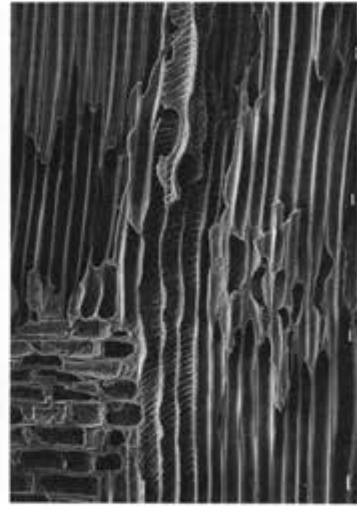
図版2 ニゴレ遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



4a. ヤマグチ (横断面)
祭壇場遺構 bar:0.5mm



4b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



4c. 同 (放射断面) bar:0.1mm

付 載 2

ニゴレ遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査

大澤正己

概要 ニゴレ遺跡の8世紀後半から9～10世紀に属する製鉄炉廃滓場出土の砂鉄と鉄滓を調査して次のことが明らかとなった。

<1> 8世紀後半の1号製鉄炉廃滓場では、高チタン含有塩基性砂鉄(TiO_2 :16.2%)を用いた製錬が行なわれ、3号製鉄炉廃滓場では低チタン塩基性砂鉄(TiO_2 :5.67%)^(注1)を充当した操業であった。後者は、地元賦存砂鉄の可能性をもつ。

<2> 9世紀から10世紀に比定される2号製鉄炉廃滓場出土砂鉄は、低チタン含有塩基性砂鉄(TiO_2 :5.77%)であった。この時期の製鉄炉は、8世紀後半のものに比べて矮小化し製錬温度も低下する。製錬滓の鉱物相は、ウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$)主体で、これにマグネタイト(Magnetite: Fe_3O_4)やヴスタイト(Wüstite: FeO)共伴晶出となる。

<3> 上記に対して8世紀後半に比定される3号製鉄炉廃滓場出土鉄滓のうち、送風口近傍の炉内滓(MSD-15)では、高温操業で晶出する鉱物相のシュードブルーカイト(Pseudobrookite: $\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot\text{TiO}_2$)やルチル(Rutile: TiO_2)の折出があった^(注2)。ここでは大形製鉄炉の操業であるにもかかわらず、炉内還元温度は高温化が確保された操業が窺われる。

<4> また、8世紀後半代に製鉄炉に近接した個所で製鉄炉を模したと想定される祭祀遺構が検出された。土坑内に小割りした炭を敷き、鉄滓・鉄塊系遺物・砂鉄を規則正しく埋納している。この砂鉄は、高チタン含有塩基性砂鉄(TiO_2 :15.63%)の生砂鉄であって1号製鉄炉廃滓場出土品と同系品であった。また、鉄滓は含鉄系の高チタン含有製錬滓に分類された。<3><4>の内容は、製鉄が官営であった事を示唆するものと考えられる。

<5> 製鉄炉廃滓場以外で、B地区包含層や、木橋側から出土した製錬滓は、1・2・3号製鉄炉廃滓場出土製錬滓に準じた鉱物組成と化学組成を有するもので、8世紀後半の製錬に関連すると考えられた。

1. 調査方法

1-1 供試材

Table. 1に示す。6地点(1・2・3号製鉄炉の各廃滓場、祭祀遺構、B地区、木橋側)出土の砂鉄と鉄滓が供試材となる。

1-2 調査項目

(1)肉眼観察、(2)顕微鏡組成、(3)ピッカース断面硬度、(4)化学組成

2. 調査結果

2-1 1号製鉄炉関連遺物

(1)NGR-3：砂鉄

①肉眼観察：被熱砂鉄で光沢性に欠け、全体的に灰黒色を呈し、粒子に均等性がなく0.1～0.3mmの集合体である。

②顕微鏡組成：Photo.2の①～⑨に示す。砂鉄中の主なる鉱物組成は、磁鉄鉱(Magnetite： $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{FeO}$)と格子組成をもつチタン鉄鉱(Ilmenite： $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)である。①は、生砂鉄に近く、粒径が0.1～0.5mmの磁鉄鉱粒子を提示した。②③は被熱粒子を含み、淡褐色と黒色まだら粒子は、金属鉄粒が溶け出した残骸の被熱粒である。④⑤は格子組成、⑥⑦⑧の黒色斑点は熱影響をもつ被熱粒子を示した。また、⑨の白色微小斑点粒子も被熱の影響をもつものである。なお、各粒子は包裹鉱物(輝石、角閃石、石英等)を特別多く含むものではない。包裹鉱物とは、各粒内に散在する黒点である。

③化学組成：Table.2に示す。全鉄分(Total Fe)は、51.32%、金属鉄(Metallic Fe)0.20%、酸化第一鉄(FeO)17.34%、酸化第二鉄(Fe_2O_3)53.82%の割合であり、一般レベルの含鉄量である。不純物としてのガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は若干の土砂の混入もあるが左程多いものではない。ただし、砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)が19.4%と高めは、難還元性格子組織をもつチタン鉄鉱が多く残されているためであろう。バナジウム(V)の0.20%も砂鉄の特有成分である。他の随伴微量元素らは低めで、酸化マンガン(MnO)0.46%、銅(Cu)0.005%を含む。塩基性砂鉄である。

(2)NGR-4：砂鉄

①肉眼観察：炉に投入されて被熱を受けた粒子を含み、光沢度がおちて灰黒色を呈し、0.1～0.3mmの粒径をもつ。砂粒の混入は少ない。

②顕微鏡組織：Photo.3の①～⑨に示す。前面白色の生砂鉄である磁鉄鉱粒子(Magnetite： $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{FeO}$)と、格子組織のチタン鉄鉱(Ilmenite： $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)があり、被熱粒子は粒子面に微細な斑点を生じている。各粒子はやや角張ったもので波浪による磨耗がなく浜砂鉄ではない。

③化学組成：Table.2に示す。前述した3号製鉄炉砂鉄に近似した成分系であり、全鉄分(Total Fe)54.40%、ガラス質成分6.9%、二酸化チタン(TiO_2)16.2%、バナジウム(V)0.25%、酸化マンガン(MnO)0.41%、銅(Cu)0.005%である。塩基性砂鉄に分類される。

(3)NGR-5：砂鉄製鍊滓(炉内滓)

①肉眼観察：表面は黒色流動状の肌をもつ炉内滓の破片。送風口からやや離れた位置で形成さ

れた可能性をもつ。気泡は少なく緻密質。裏面は白色礫粒を噛むが滑らか肌である。

②顕微鏡組織：Photo. 1の⑦に示す。鉱物組成は、淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネル(Ulvöspinel： $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)と白色針状結晶のイルミナイト(Ilmenite： $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、淡灰色木ずれ状のファイヤライト(Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。高チタン含有塩基性砂鉄を始発原料とした製錬滓である。

③化学組成：Table. 2に示す。鉄収率は左程悪くなく全鉄分(Total Fe)は30.34%、ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)が36.21%に対して、鉄と滓の分離を促進する塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)を7.6%と多く含む。炉材粘土からの影響であって鉄収率を上げている。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)は23.8%、バナジウム(V)0.15%などは多くて、塩基性砂鉄を製鉄原料とした成分系を表わしている。

(4)NGR-6：砂鉄製錬滓(炉底塊)

①肉眼観察：表面は荒れていて木炭痕と凹凸肌をもつ。色調は灰黒色で粘土を一部に付着した炉底塊の破片で、破面は黒色で小気泡を散在させるが緻密質。裏面は外層の大部分は剝離する。

②顕微鏡組成：Photo. 4の①～③に示す。鉱物組成は、砂鉄粒子から鉄分がとれて、砂鉄残骸粒子の痕跡を残したマグネタイト(Magnetite： Fe_3O_4)からウルボスピネルへ移行する過程の結晶と、白色点列状結晶のイルミナイト(Ilmenite： $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、木ずれ状淡灰色結晶のファイヤライト(Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。これも塩基性砂鉄の製錬滓組織である。

③ピッカース断面硬度：Photo. 4の③に淡灰色多角形結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は584Hvであった。マグネタイトの文献硬度値が500～600Hvであって、この範囲に収まることから、当結晶はマグネタイトに同定される。^(注3)

④化学組成：Table. 2に示す。該品は前述のNGR-5製錬滓に準ずる成分系であった。

小結 1号製鉄炉の廃滓場から出土した鉄滓は、チタン分の高い塩基性砂鉄を始発原料とした製錬滓であって、炉内や廃滓場に遺存した砂鉄と関連する成分系であった。鉄滓は炉内滓もしくは炉底塊である。

2-2 2号製鉄炉関連遺物

(1)NGR-7：砂鉄

①肉眼観察：砂鉄粒子は0.1～0.3mmの粒が比較的揃っているが、一部鉄滓屑や砂粒が混在するので、外観写真では別印象を受ける。該品も生砂鉄と被熱砂鉄の混ざりがあって茶褐色で光沢度はおちる。粒子の角ばりは目立つものではなく、川砂鉄程度の磨耗が感じられた。

②顕微鏡組織：Photo. 5の①～⑨に示す。全面白色を呈する生砂鉄の磁鉄鉱粒子と、被熱された格子組織の周縁部の侵されたチタン鉄鉱粒子の混在組織である。各粒内の包裹鉱物は多くなく、

品位は良好な砂鉄であった。

③化学組成：Table. 2に示す。前述した1号製鉄炉出土砂鉄(2点)とは確実に成分系を異にする。全鉄分(Total Fe)は61.67%と高く、二酸化チタン(TiO₂)は5.77%と低下する。バナジウム(V)は0.22%と差異はないが、酸化マンガン(MnO)は0.32%とこれも減少気味である。この成分系は酸性砂鉄と塩基性砂鉄の境界線にくる砂鉄である。

(2)NGR-8：砂鉄製錬滓(炉底塊)

①肉眼観察：側面全部が破砕面の炉底塊。黒褐色を呈した流動状肌で、局部的に赤錆を発する。緻密質。裏面も剝離面で本来面は損失する。

②顕微鏡組織：Photo. 4の④～⑧に示す。鉱物組織は、淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネルと白色粒状結晶のヴスタイト、大きく成長した淡灰色盤状結晶のファイヤライト、これに砂鉄粒子から金属鉄が還元されつつあって、まだ凝集しきれずに点在するフェライト(Ferrite： α 鉄もしくは純鉄)と基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。チタン濃度の低め砂鉄を原料とする製錬滓の炉底塊の特徴を有する鉱物相であった。

③ピッカース断面硬度：Photo. 4の⑦は金属鉄、⑧は淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は、前者で87.6Hvでフェライトを指し、後者はマグネタイトにチタン分を固溶したウルボスピネルとしての値を呈するものであった。

④化学組成：Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)が44.19%、ガラス質成分は28.0%、塩基性成分(CaO+MgO)3.93%、二酸化チタン(TiO₂)は砂鉄(NGR-7)の約2倍と濃縮された値の9.81%、バナジウム(V)0.20%、酸化マンガン(MnO)0.72%、銅(Cu)0.005%は鉱物組成に見合った成分系であり、出土砂鉄との対応もついた結果の炉底塊となる。

(3)NGR-9：砂鉄製錬滓(炉底塊)

①肉眼観察：表皮は赤褐色を呈し、木炭痕と気泡の露出があるが、肌荒れの少ない炉底塊の大型破片である。全面に赤色粘土が覆う。裏面は黄褐色粘土が付着して肌は不鮮明である。

②顕微鏡組織：Photo. 6の①～③に示す。鉱物組成は、大きく成長した淡茶褐色多角形のウルボスピネルとファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。結晶の成長は徐冷を受けた証であって、砂鉄製錬滓の晶癖と読みとれる。

③ピッカース断面硬度：Photo. 6の③に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は788Hvなので、ウルボスピネルに同定される。

④化学組成：Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)37.90%、ガラス質成分33.4%、二酸化チタン(TiO₂)13.8%、バナジウム(V)0.28%など、前述NGR-8炉底塊より若干高め傾向にあるが、ほぼ同系製錬滓と見なすことができる。

小結 2号製鉄炉廃滓場の製錬操作は、製鉄原料の砂鉄が前述した1号製鉄炉廃滓場出土品と

は異なり、チタン含有量が5.77%と少ないものが使用されている。これが製錬滓にも反映して、鉍物組成はイルミナイトの晶出がなく、ウルボスピネルと、マグネタイト、ヴスタイトの存在というふうにより低温例へ推移する。

2-3 3号製鉄炉廃滓場関連遺物

(1)MSD-16：砂鉄

①肉眼観察：中粒から大粒の混在する砂鉄である。0.2~0.4mm径で、色調は黒色で光沢をもつ。粒子は、やや角張ったものが多く山砂鉄の可能性をもつ。

②顕微鏡組織：Photo.9の①~⑨に示す。包裹鉍物の少ない白色面の磁鉄鉍粒子が多く、僅かに格子組織をもつチタン鉄鉍が点在する。生砂鉄と共に、周縁部が熱に侵された被熱粒子も認められた。

③化学組成：Table.2に示す。製鉄原料としては鉄分が多く、不純物の少ない良好な品位の砂鉄である。全鉄分(Total Fe)は64.76%、ガラス質成分3.44%、砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)は2号製鉄炉のNGR-7砂鉄と同系の5.67%、バナジウム(V)0.18%であった。酸化マンガン(MnO)0.40%、銅(Cu)の0.006%なども同系傾向を示す。

(2)MSD-15：砂鉄製錬滓(炉内滓)

①肉眼観察：表裏共に黄褐色から茶褐色を呈し、大きな木炭痕を残したガラス質分の多い炉内滓である。送風口近くの炉壁溶解物の可能性をもつ。粘土皮膜に覆われる。

②顕微鏡組織：Photo.8の⑥~⑧に示す。鉍物組成は、暗黒色ガラス質スラグ中に、淡茶褐色片状のシュードブルーカイト(Pseudobrookite： $Fe_2O_3 \cdot TiO_2$)、イルミナイト、一部は塊状となったルチル(Rutile： TiO_2)などの析出で高温析出物を形成する。送風口近傍の高温個所での派生品であろう。当鉍物相は炉内の局部での反応であって全体を表すものではない。

③ピッカース断面硬度：Photo.8の⑧に暗黒色ガラス質スラグ中に析出した淡茶褐色不定形凝集物の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は870Hvと硬質でルチル(Rutile： TiO_2)が推定される。高温析出物である。

④化学組成：Table.2に示す。ガラス質成分($SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$)が41.7%と多く、全鉄分(Total Fe)は18.92%と少ない。これにルチルの析出でチタン濃度は上がり、二酸化チタン(TiO_2)は21.52%と多い。バナジウム(V)0.29%など加味すると砂鉄製錬滓となる。ただし、該品は3号製鉄炉排出滓の代表値ではなく、送風口近傍で形成された局部的な滓として受けとめる資料となる。

小結 3号製鉄炉廃滓場では、二酸化チタン(TiO_2)が5%台の砂鉄を使用した製錬が考えられる。ただし出土鉄滓の分析調査は送風口近傍で形成された製錬滓を当てたので、シュードブルーカイトやルチルなど高温析出物からの情報に留まった。炉内滓のデータが欲しいところである。とはいえ3号製鉄炉での操業での送風口近傍の挙動が判明したことは成果の一つとして評価できる。

2-4 祭祀遺構出土関連遺物

(1)MSD-17：砂鉄

①肉眼観察：粒径が0.3mm前後と中粒で比較的均一性をもつ被熱されていない生砂鉄である。各粒子は角張ったものと、やや丸みを帯びるものが混在するが、磨耗度は川砂鉄レベルであろう。砂粒を若干含む。

②顕微鏡組織：Photo. 10の①～⑨に示す。砂鉄の鉱物組成は、生砂鉄で磁鉄鉱と格子組織のチタン鉄鉱が混在する。各粒内の茶黒点の包裹鉱物(輝石、角閃石、石英等)は多くはなく、組織的には純度の高いものである。

③化学組成：Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)は53.27%、不純物のガラス質成分が9.5%と砂粒含みの影響があつて、二酸化チタン(TiO_2)15.63%と高チタン含有塩基性砂鉄に分類される。バナジウム(V)0.19%、酸化マンガン(MnO)0.40%、該品は銅(Cu)が0.014%と高めであつた。前述した1号製鉄炉廃滓場出土砂鉄(NGR-4)に近似した成分系であるが、銅(Cu)に差異が認められた。成分のバラツキか、産地が異なるか検討を要す。

(2)MSD-14：砂鉄製錬滓(炉内滓)

①肉眼観察：鉄塊系遺物の表皮を連想させる黄褐色錆被膜を付けた丸みをもつ塊で、一部に亀裂を走らせ、剝離面も現す。

②顕微鏡組織：Photo. 8の①～⑤に示す。鉱物組成は大きく成長した淡茶褐色不定形状凝集型のウルボスピネルと淡灰色木ずれ状のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。また、錆化鉄のゲーサイト(Goethite： $\alpha-FeO \cdot OH$)を一部に含み炉内滓というより含鉄鉄滓とも呼称できる組織であつた。また、金属鉄は極微量に残している。

③ピッカース断面硬度：Photo. 8の⑤に淡茶褐色不定形凝集型結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は672Hvであつた。ウルボスピネルに同定される。

④化学組成：Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)が43.44%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.01%、酸化第一鉄(FeO)33.94%、鉄錆を含むので酸化第二鉄(Fe_2O_3)が24.38%と多くなる。ガラス質成分は低めで18.61%、二酸化チタン(TiO_2)18.88%、酸化マンガン(MnO)0.41%、銅(Cu)の0.02%は高め傾向で、前述砂鉄(MSD-17)と同系の可能性が高い。

小結 祭祀遺構に供献されたと推定される砂鉄と含鉄鉄滓的な炉内滓を調査した。砂鉄はチタン(Ti)分を15.63%と多く含む塩基性砂鉄である。一方、炉内滓は錆化鉄含みの製錬滓であつて、やはり二酸化チタン(TiO_2)は18.88%含有であつた。製鉄の成功を祈つての祭祀であろうか。古代製鉄跡での祭祀は不明点が多い。

2-5 ニゴレ遺跡内自然堆積砂鉄

(1)NGR-12:砂鉄

①肉眼観察：粒径が0.4mm前後と大きいグループである。生砂鉄と被熱砂鉄が混在して光沢度にムラをもつ。各粒子はやや角がとれたものもあるが、川砂鉄程度の磨耗であった。色調は、茶褐色から黒色を呈す。

②顕微鏡組織：Photo.7の①～⑨に示す。鉱物組成は全面白色の磁鉄鉱粒子と、格子組織のチタン鉄鉱が混在する。また、被熱粒子は②③の粒子で格子組織に沿って熱影響の斜線が顕著に残る。包裹鉱物の含有も多いものではない。

③化学組成：Table.2に示す。全鉄分(Total Fe)は62.72%、不純物のガラス質成分5.89%、二酸化チタン(TiO₂)6.45%、バナジウム(V)0.26%、酸化マンガン(MnO)低値の0.27%、銅(Cu)0.005%であった。当遺跡内では2号製鉄炉廃滓場出土品(NGR-7)と3号製鉄炉廃滓場出土品(MSD-16)に近似した成分系であった。

2-6 製鉄炉以外(B地区・木橋側)出土鉄滓

(1)NGR-1:砂鉄製錬滓(炉内滓)

①肉眼観察：黒褐色を呈するやや丸みを帯びた炉内滓である。肌は木炭痕を残し気泡が露出し、凹凸をもつ。裏面は、石英質殻を付着する。

②顕微鏡組織：Photo.1の①～③に示す。鉱物組成は、淡茶褐色多角形で樹晶状に晶出したウルボスピネルと淡灰色木ずれ状のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから形成される。砂鉄製錬滓の晶癖である。

③化学組成：Table.2に示す。全鉄分(Total Fe)は39.99%、ガラス質成分32.84%、二酸化チタン(TiO₂)9.81%、バナジウム(V)0.58%などから砂鉄製錬滓に認定できる。チタン分は下限値であるが、前述2号製鉄炉廃滓場出土品NGR-8と同系である。

(2)NGR-2:砂鉄製錬滓(炉内滓)

①肉眼観察：表面は赤褐色で滑らか肌の扁平状流動滓である。裏面は木炭痕をつけて浅く反応痕を残す。表裏共に赤色粘土が覆う。

②顕微鏡組織：Photo.1の④～⑥に示す。鉱物組成は淡茶褐色多角形状のウルボスピネルと白色針状結晶のイルミナイト、淡灰色短柱状ファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。チタン濃度の高い砂鉄製錬滓である。

③ピッカース断面硬度：Photo.1の⑥に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は675Hvであり、ウルボスピネルと同定される。

④化学組成：Table.2に示す。全鉄分(Total Fe)37.06%、ガラス質成分28.78%、二酸化チタン(TiO₂)17.6%、バナジウム(V)0.25%、酸化マンガン(MnO)0.55%、銅(Cu)やや高めの0.02%で、砂鉄製錬滓に分類される。

(3)NGR-10：砂鉄製錬滓(炉外流出滓)

①肉眼観察：該品は炉外流出で急冷されて小波状の小皺を寄せた鮎状肌の滓である。破面は小気泡を発するが緻密質。裏面は石英粒含みの粘土を付着する。

②顕微鏡組織：Photo.6の④～⑥に示す。鉱物組成は淡茶褐色多角形状のウルボスピネルと、その粒間に淡灰色木ずれ状のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。砂鉄製錬滓の晶癖である。

③ピッカース断面硬度：Photo.6の⑥に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は672Hvであった。ウルボスピネルに同定される。

④化学組成：Table.2に示す。全鉄分(Total Fe)は35.59%、ガラス質成分33.10%、二酸化チタン(TiO₂)18.7%、バナジウム(V)0.27%、酸化マンガン(MnO)0.72%、銅(Cu)0.005%などから砂鉄製錬滓に分類される。

(4)NGR-11：砂鉄製錬滓(流出孔滓)

①肉眼観察：製鉄炉内から排出孔を通して流出した楕円状断面をもつ滓である。表裏の肌は鮎状の滑らかさを持ち、緻密質である。

②顕微鏡組織：Photo.6の⑦に示す。鉱物組成は、淡茶褐色線状に伸びた結晶と点列状のイルミナイト、淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。炉外流出の急冷で結晶は十分に成長しきれずに小さい。砂鉄製錬滓の晶癖である。

③化学組成：Table.2に示す。鉄分が少なくガラス質の多い滓である。全鉄分(Total Fe)は26.99%、ガラス質成分が39.28%あって、このうちの塩基性成分(CaO+MgO)は7.53%と多く流動性をもつ原因となっている。二酸化チタン(TiO₂)が23.3%と高く、バナジウム(V)0.17%、酸化マンガン(MnO)0.61%、銅(Cu)0.005%などの成分構成から、砂鉄製錬滓に分類される。

小結 1・2・3号製鉄炉廃滓場以外の出土鉄滓の調査を行った。B地区と木橋側出土の鉄滓は、いずれも砂鉄製錬滓であり、各廃滓場の製錬滓と近似した組成をもつものであった。

注1 岩瀬慶三『砂鉄の研究』 科学主義研究社 1942 555頁

注2 J. B. MacChesney and A. Murau: American Mineralogist, 46(1961), 572 下記FeO-TiO₂二元状態図によると、Pseudobrookite、Rutileの析出は高温例での析出となる。

注3 日刊工業新聞社『焼結鉄組織写真および識別法』 1968 マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトが600～700Hv、ヴスタイトは450～500Hv、磁鉄鉱が530～600Hvなど示されている。

注4 遠所遺跡群で砂鉄を埋納した穴がある様に福岡市所在の大原D遺跡群内でも、製鉄炉から0.7m離れて0.25m隅丸方形で深さ10cmのピットより4.85kgの砂鉄が出土した。製鉄用としては量が少なく、祭祀用と考えられている。年代は、8世紀後半を想定。

福岡市教育委員会『大原D遺跡群I』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第481集) 1995
また、鉄塊系遺物の供献としては次の報告書がある。鳥根県教育委員会『父ヶ平遺跡・中ノ原遺

跡・タタラ山第1・第2遺跡] (一般県道市木井原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I)

1993

タタラ山第1遺跡の3号テラスの鉄塊は銑鉄であって、初ノロあるいは初銑の可能性がある。

砂鉄の分類

	塩基性砂鉄	酸性砂鉄
TiO ₂	5~20%	0.2~6.5%
SiO ₂	-	2.0~14.0%
Al ₂ O ₃	-	1.0~5.0%
CaO	0.7~2.5%	-
MgO	1.5~10%	-
P	0.05~0.78%	0.004~0.2%

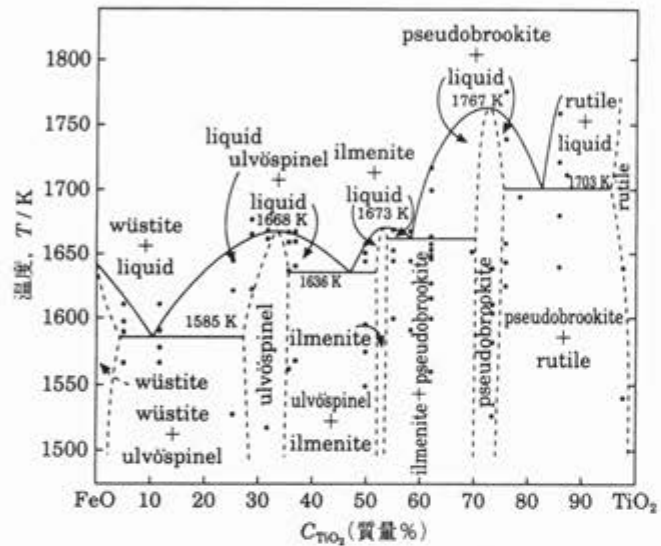


図3 FeO-TiO₂ 二元平衡状態図

Table.1 供試材の履歴

符号	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目		
				大きさ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	ピッカース断面硬度	化学組成
NGR-3	砂鉄	1号製鉄炉炉内	8世紀後半			○		○
NGR-4	砂鉄	1号製鉄炉廃滓場	8世紀後半			○		○
NGR-5	鉄滓	1号製鉄炉廃滓場	8世紀後半	123×114×50	815	○		○
NGR-6	鉄滓	1号製鉄炉廃滓場	8世紀後半	145×160×45	1560	○	○	○
NGR-7	砂鉄	2号製鉄炉廃滓場	9~10世紀			○		○
NGR-8	鉄滓	2号製鉄炉廃滓場	9~10世紀	40×62×37	162	○	○	○
NGR-9	鉄滓	2号製鉄炉廃滓場	9~10世紀	130×175×75	1830	○	○	○
NGR-16	砂鉄	3号製鉄炉廃滓場	8世紀後半			○		○
NGR-15	鉄滓	3号製鉄炉廃滓場	8世紀後半	50×30×17	30	○	○	○
NGR-17	砂鉄	祭祀遺構	8世紀後半			○		○
NGR-14	鉄滓	祭祀遺構	8世紀後半	85×60×50	260	○	○	○
NGR-1	鉄滓	B地区包含層	8世紀後半	48×53×32	116	○		○
NGR-2	鉄滓	B地区包含層	8世紀後半	56×73×27	118	○	○	○
NGR-10	鉄滓	木橋側	8世紀後半	39×65×29	96	○	○	○
NGR-11	鉄滓	木橋側	8世紀後半	45×105×28	168	○		○
NGR-12	砂鉄	表面採集	現代			○		○

Table. 2 供試材の化学組成

試料 番号	全鉄分	金属鉄	酸化 第一鉄	酸化 第二鉄	二酸化 珪素	酸化アル ミニウム	酸化カル シウム	酸化マグ ネシウム	酸化カリ ウム	酸化ナト リウム
	Total Fe	Metallic Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O
NGR-3	51.32	0.20	17.34	53.82	3.20	2.32	0.00	1.53	0.12	0.05
NGR-4	54.40	0.10	12.95	63.25	3.25	2.16	0.00	1.36	0.10	0.05
NGR-5	30.34	0.05	25.33	15.16	22.37	4.94	2.48	5.12	1.02	0.28
NGR-6	29.92	0.14	25.40	14.35	23.60	6.06	2.08	4.43	1.18	0.25
NGR-7	61.67	0.08	21.88	63.74	3.82	2.54	0.08	0.74	0.12	0.05
NGR-8	44.19	0.56	52.89	3.60	17.42	5.61	1.96	1.97	0.91	0.13
NGR-9	37.90	0.12	42.96	6.27	19.56	6.86	2.83	2.90	1.07	0.19
MSD-16	64.76	0.03	23.03	66.96	0.92	1.45	0.18	0.82	0.05	0.03
MSD-15	18.92	0.34	3.92	22.21	24.15	9.67	3.27	2.90	1.34	0.35
MSD-17	53.27	0.01	23.46	50.08	4.29	2.98	0.22	1.76	0.16	0.12
MSD-14	43.44	0.01	33.94	24.38	10.73	4.10	0.48	2.81	0.35	0.14
NGR-1	39.99	0.11	35.98	17.03	20.29	8.75	0.73	1.60	1.23	0.24
NGR-2	37.06	0.05	26.62	23.33	16.94	5.67	1.97	2.97	0.95	0.28
NGR-10	35.59	0.18	36.34	10.24	19.35	7.03	2.70	2.32	1.38	0.32
NGR-11	26.99	0.23	20.00	16.03	24.36	5.72	2.39	5.14	1.30	0.37
NGR-12	62.72	0.09	60.20	60.20	2.17	2.46	0.01	1.18	0.06	0.01

試料 番号	酸化マ ンガン	二酸化 チタン	酸化 クロム	硫黄	五酸化 燐	炭素	バナジ ウム	銅	造滓 成分	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe
	MnO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	S	P ₂ O ₅	C	V	Cu			
NGR-3	0.46	19.40	0.07	0.02	0.11	0.10	0.20	0.005	7.215	0.141	0.378
NGR-4	0.41	16.20	0.06	0.01	0.10	0.10	0.25	0.005	6.915	0.127	0.298
NGR-5	0.63	23.80	0.06	0.01	0.26	0.05	0.15	0.005	36.205	1.193	0.784
NGR-6	0.59	23.10	0.07	0.02	0.27	0.05	0.15	0.005	37.350	1.248	0.772
NGR-7	0.32	5.77	0.05	0.02	0.08	0.18	0.22	0.005	7.350	0.119	0.094
NGR-8	0.72	9.81	0.06	0.02	0.28	0.05	0.20	0.005	28.000	0.634	0.222
NGR-9	0.89	13.80	0.07	0.03	0.33	0.07	0.28	0.005	33.410	0.882	0.364
MSD-16	0.40	5.67	0.05	0.01	0.12	0.03	0.18	0.006	3.446	0.053	0.088
MSD-15	0.90	21.52	0.10	0.02	0.26	0.52	0.29	0.014	41.686	2.203	1.137
MSD-17	0.40	15.63	0.06	0.01	0.14	0.09	0.19	0.014	9.524	0.179	0.293
MSD-14	0.41	18.88	0.05	0.04	0.20	0.09	0.18	0.020	18.614	0.429	0.435
NGR-1	0.36	9.81	0.19	0.04	0.26	0.23	0.58	0.005	32.835	0.821	0.245
NGR-2	0.55	17.60	0.05	0.04	0.43	0.10	0.25	0.020	28.775	0.776	0.479
NGR-10	0.72	18.70	0.31	0.02	0.20	0.05	0.27	0.005	33.095	0.930	0.525
NGR-11	0.61	23.30	0.08	0.01	0.23	0.03	0.17	0.005	39.280	1.455	0.863
NGR-12	0.27	6.45	0.07	0.01	0.05	0.07	0.26	0.005	5.885	0.094	0.103

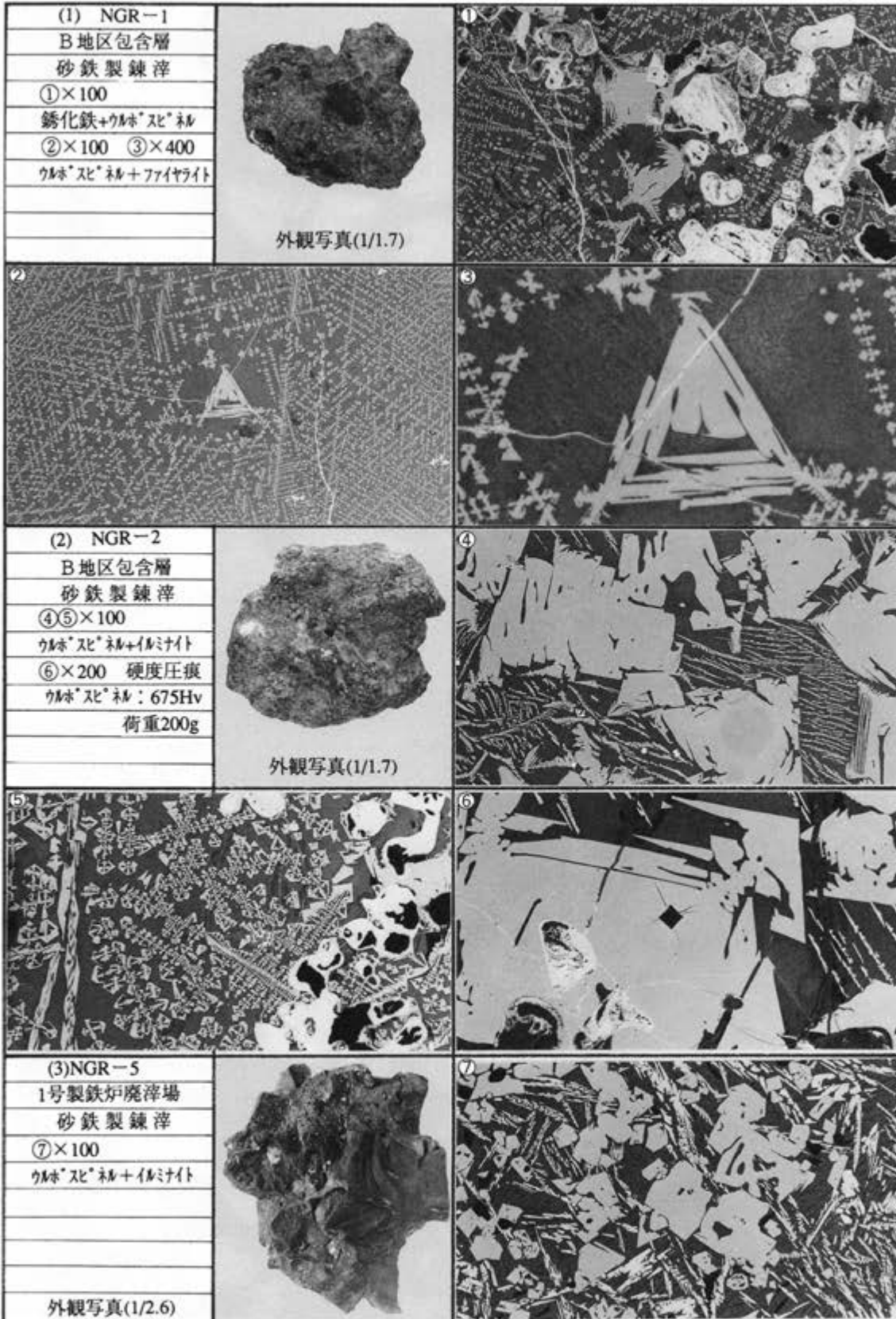


Photo.1 鉄滓の顕微鏡組織 (外観写真・顕微鏡写真は、上記倍率から87%縮小した。)

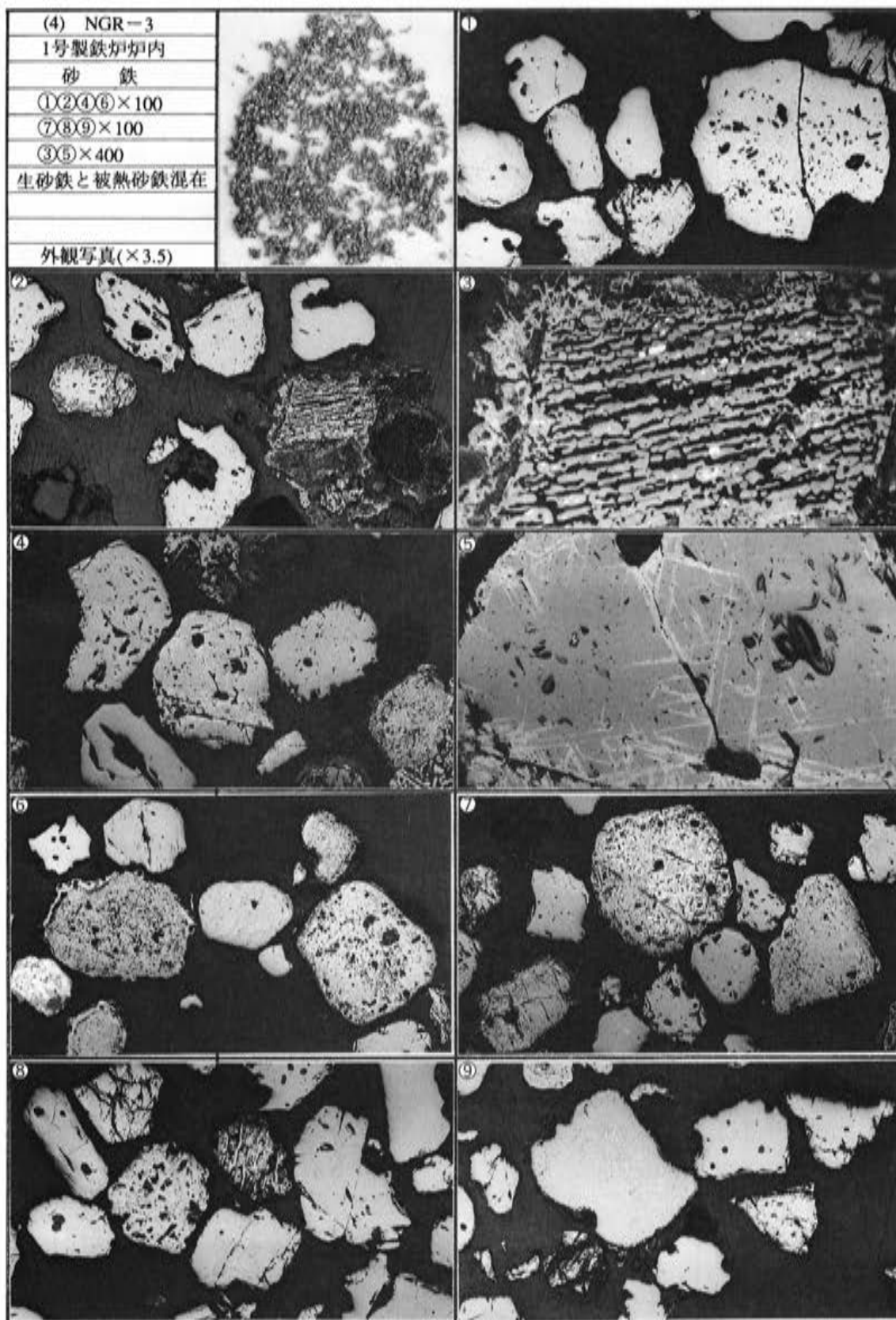


Photo.2 砂鉄の顕微鏡組織 (外観写真・顕微鏡写真は、上記倍率から87%縮小した。)

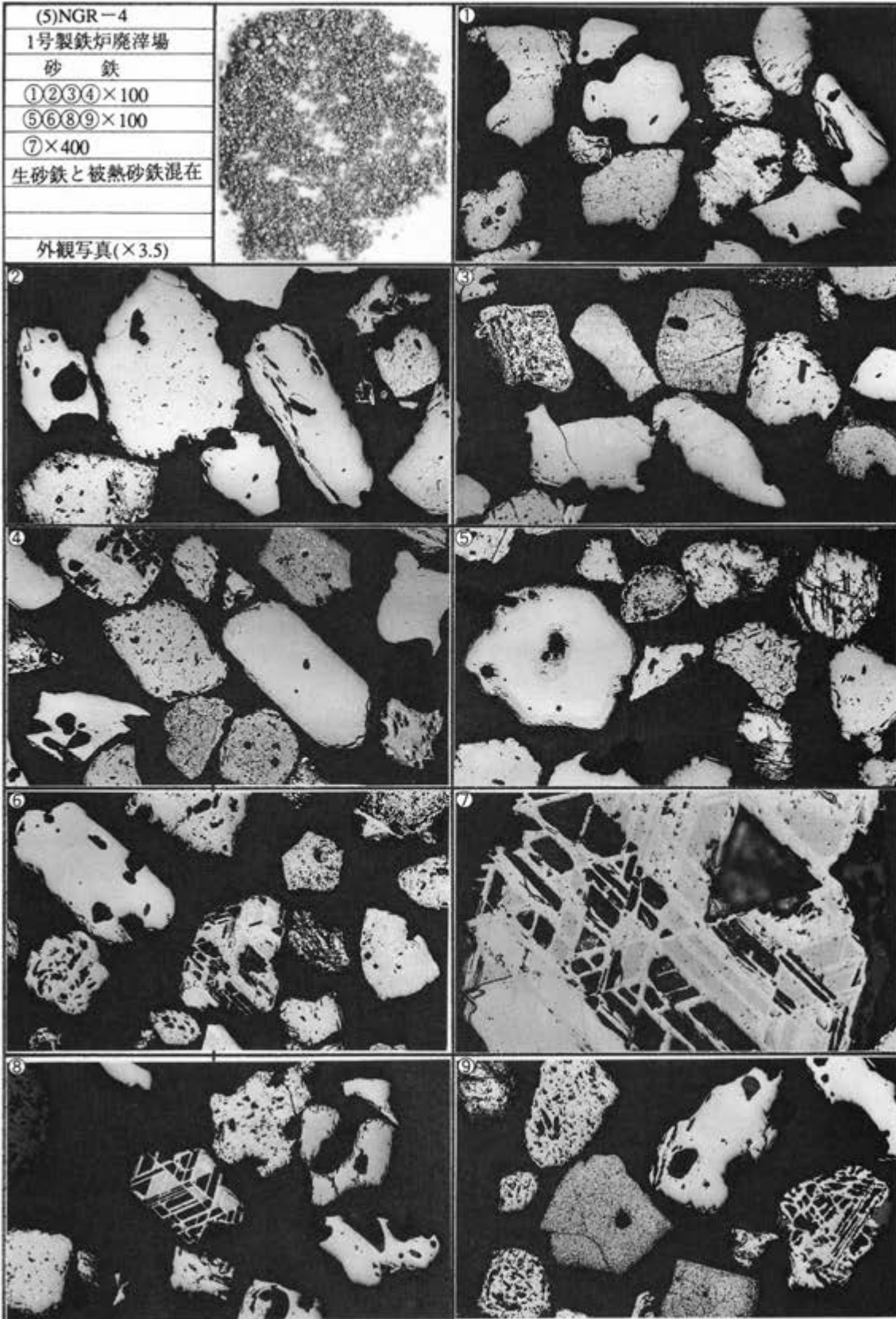


Photo.3 砂鉄の顕微鏡組織 (外観写真・顕微鏡写真は、上記倍率から87%縮小した。)

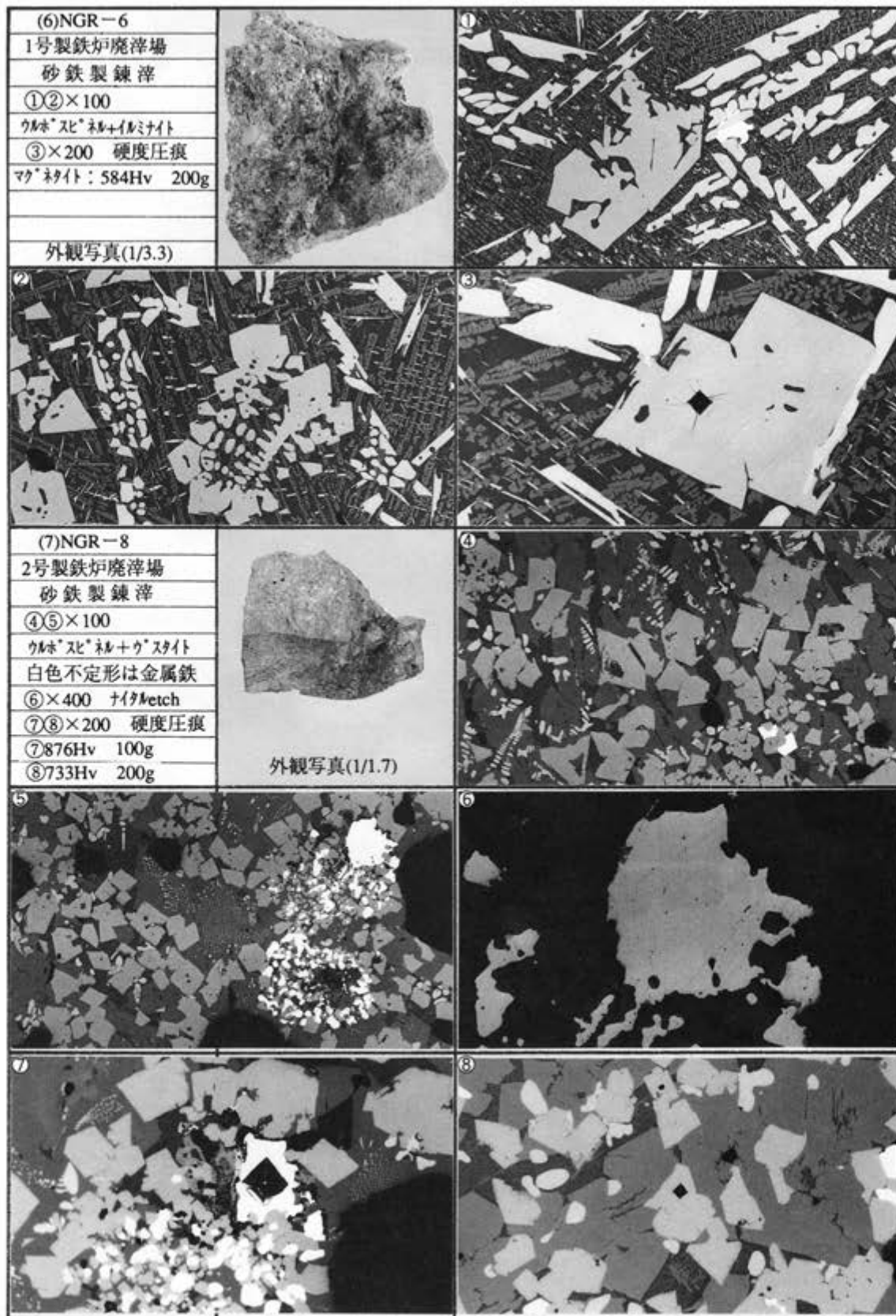


Photo.4 鉄滓の顕微鏡組織 (外観写真・顕微鏡写真は、上記倍率から87%縮小した。)

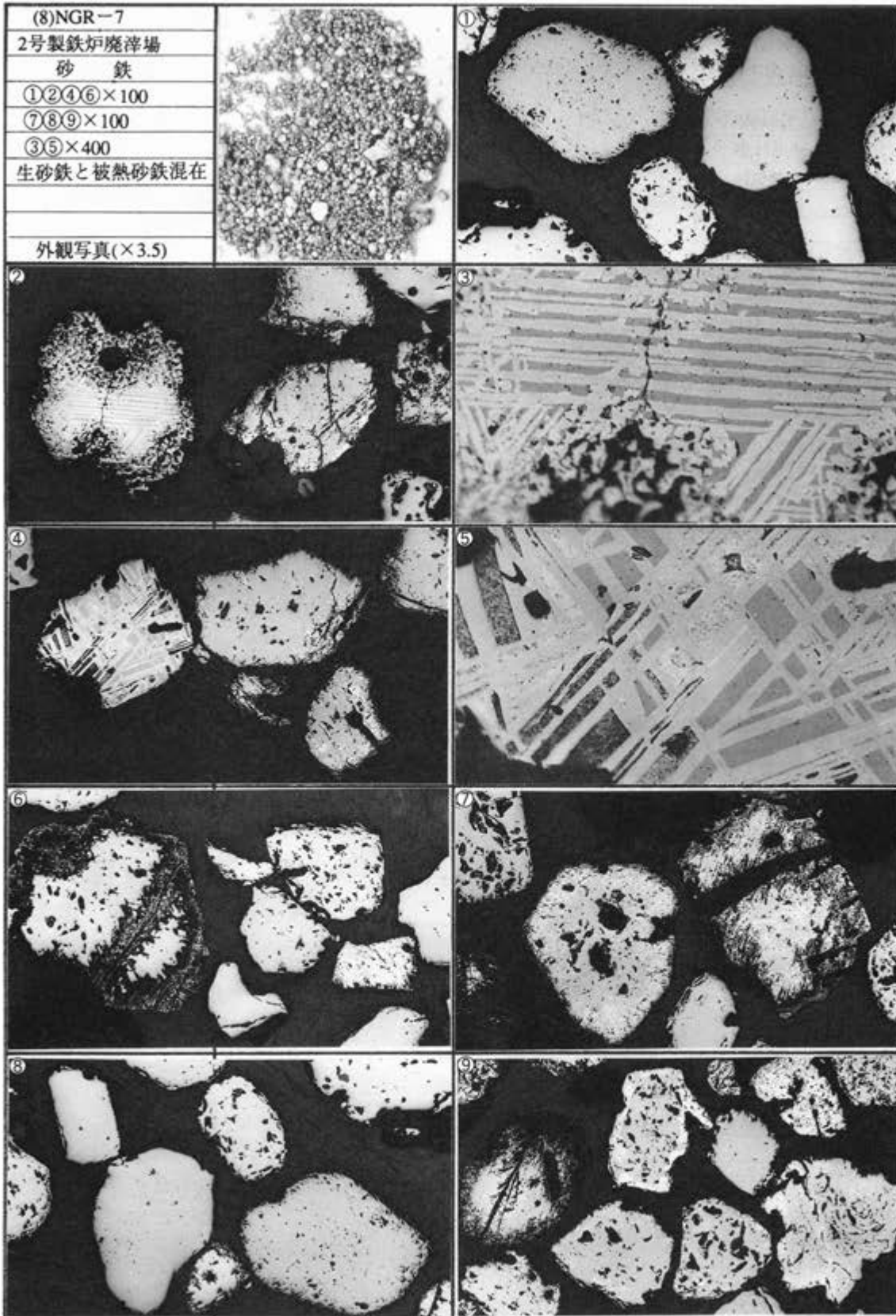


Photo.5 砂鉄の顕微鏡組織 (外観写真・顕微鏡写真は、上記倍率から87%縮小した。)

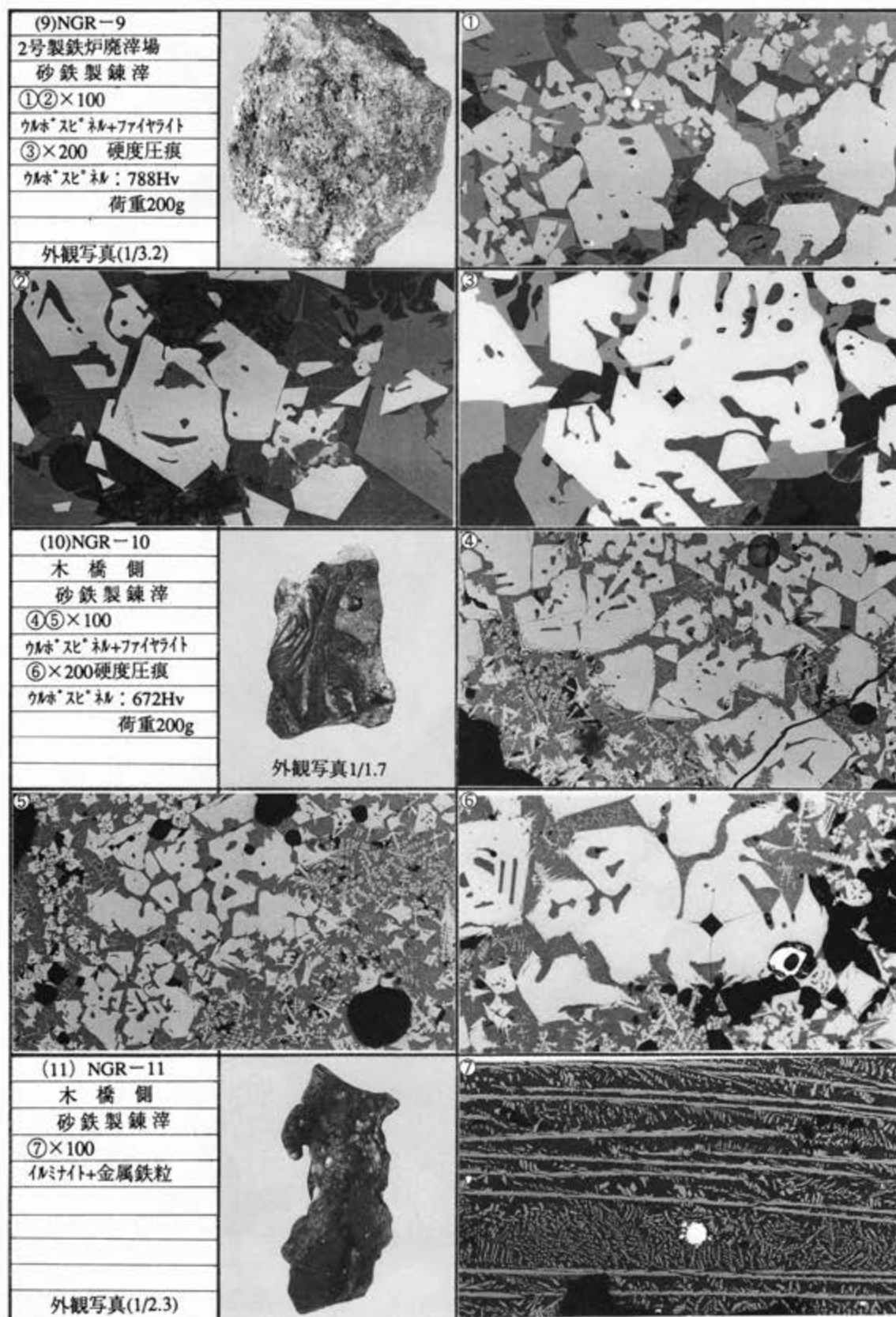


Photo.6 鉄滓の顕微鏡組織 (外観写真・顕微鏡写真は、上記倍率から87%縮小した。)

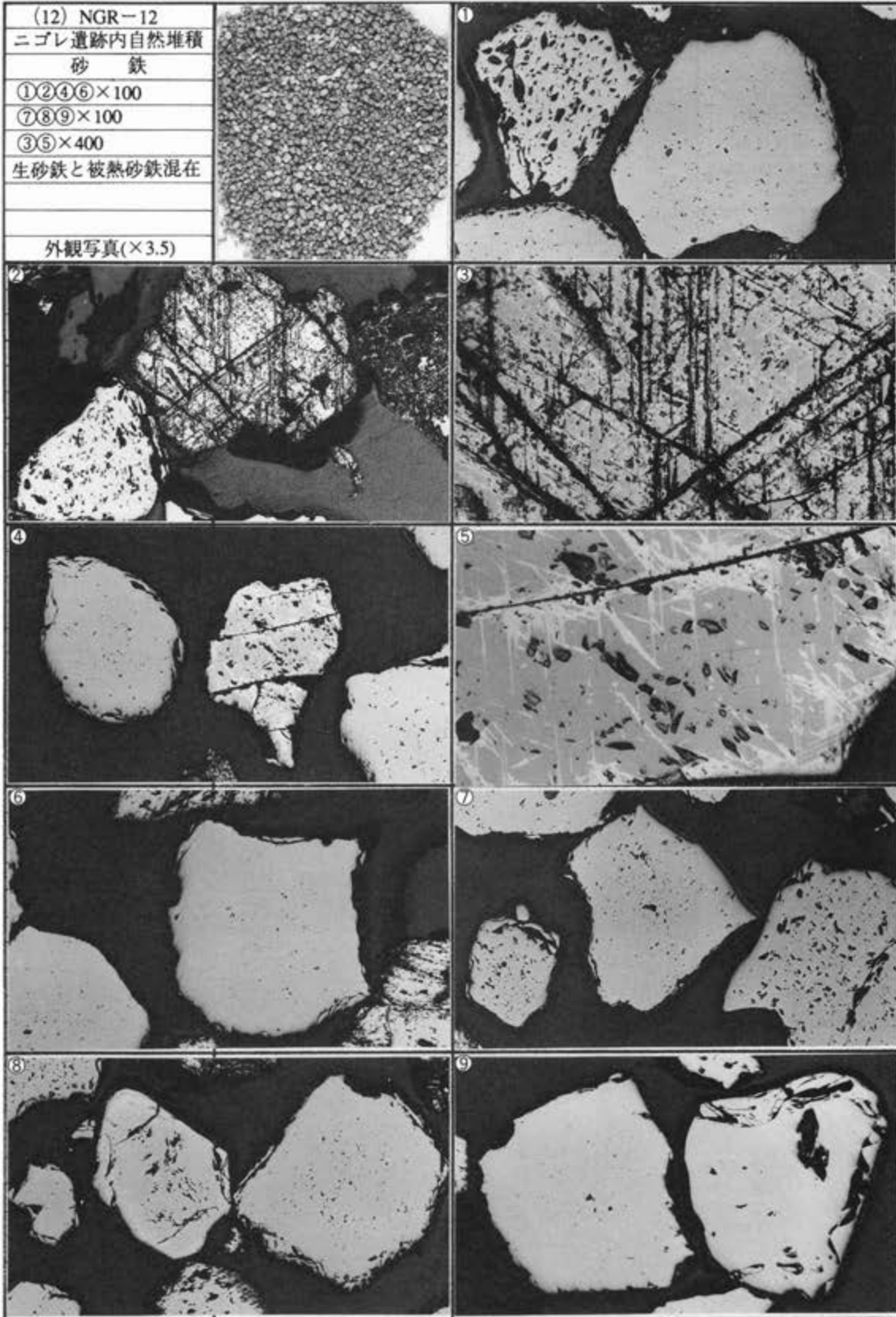


Photo.7 砂鉄の顕微鏡組織 (外観写真・顕微鏡写真は、上記倍率から87%縮小した。)

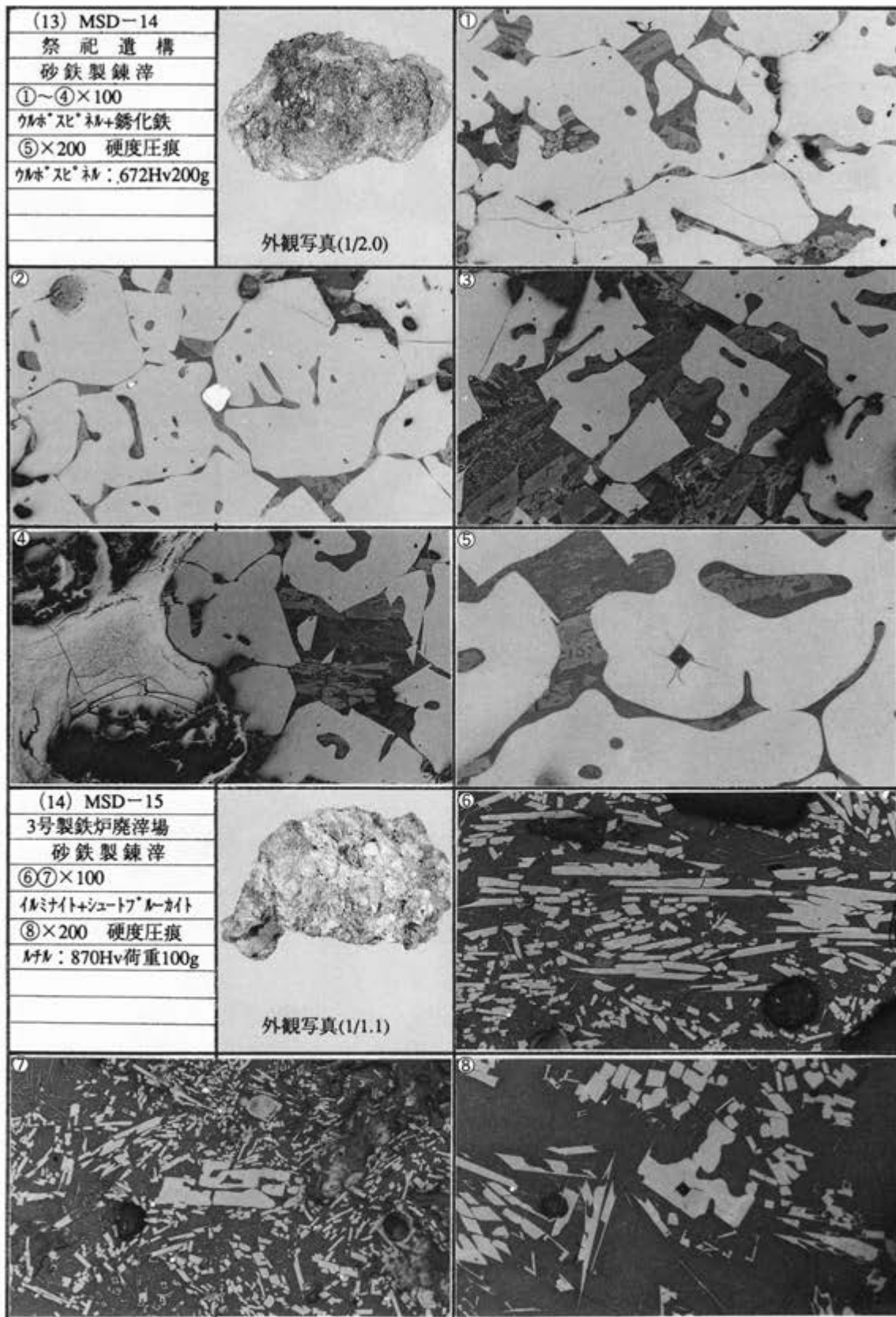


Photo.8 鉄滓の顕微鏡組織 (外観写真・顕微鏡写真は、上記倍率から87%縮小した。)

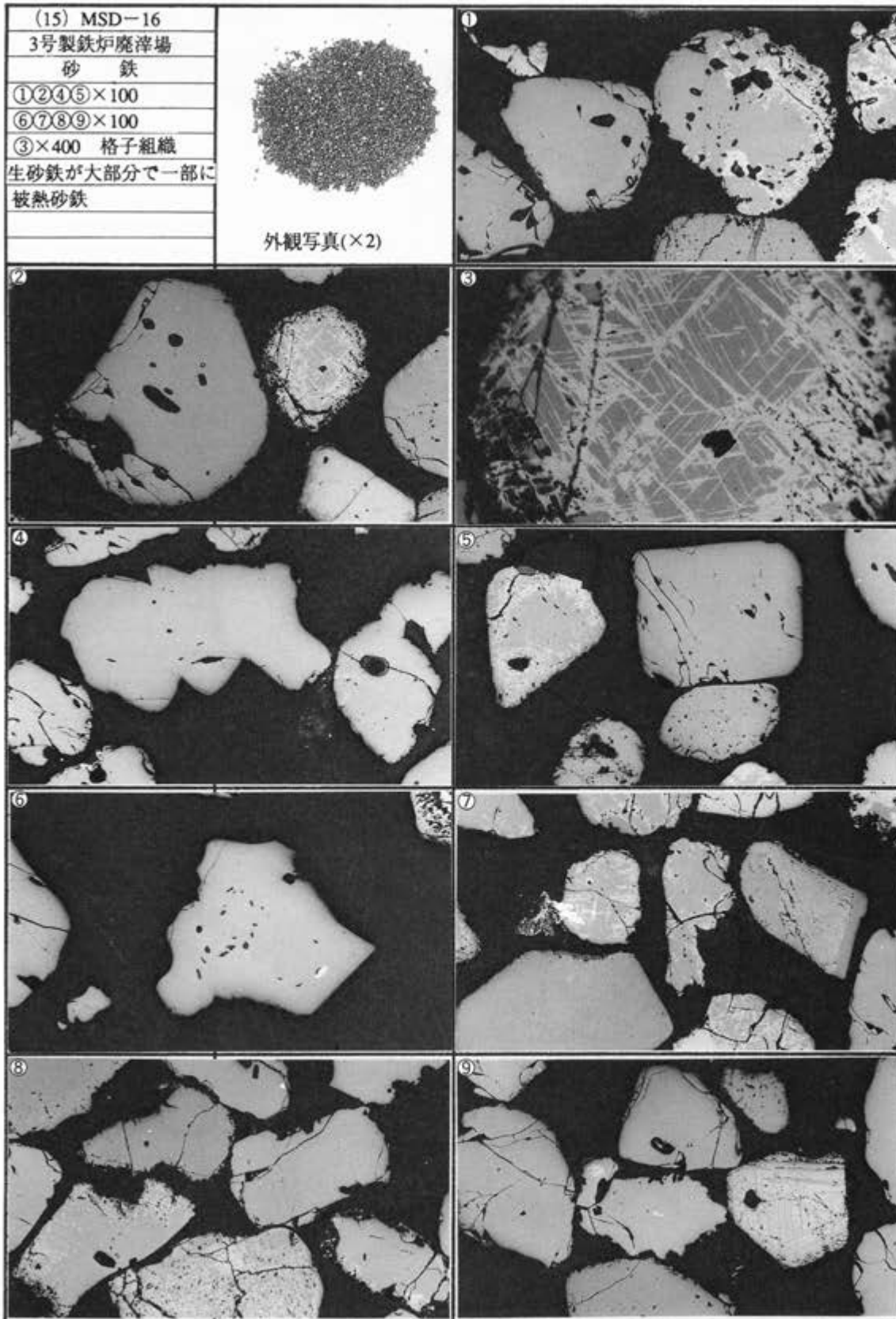


Photo.9 砂鉄の顕微鏡組織 (外観写真・顕微鏡写真は、上記倍率から87%縮小した。)

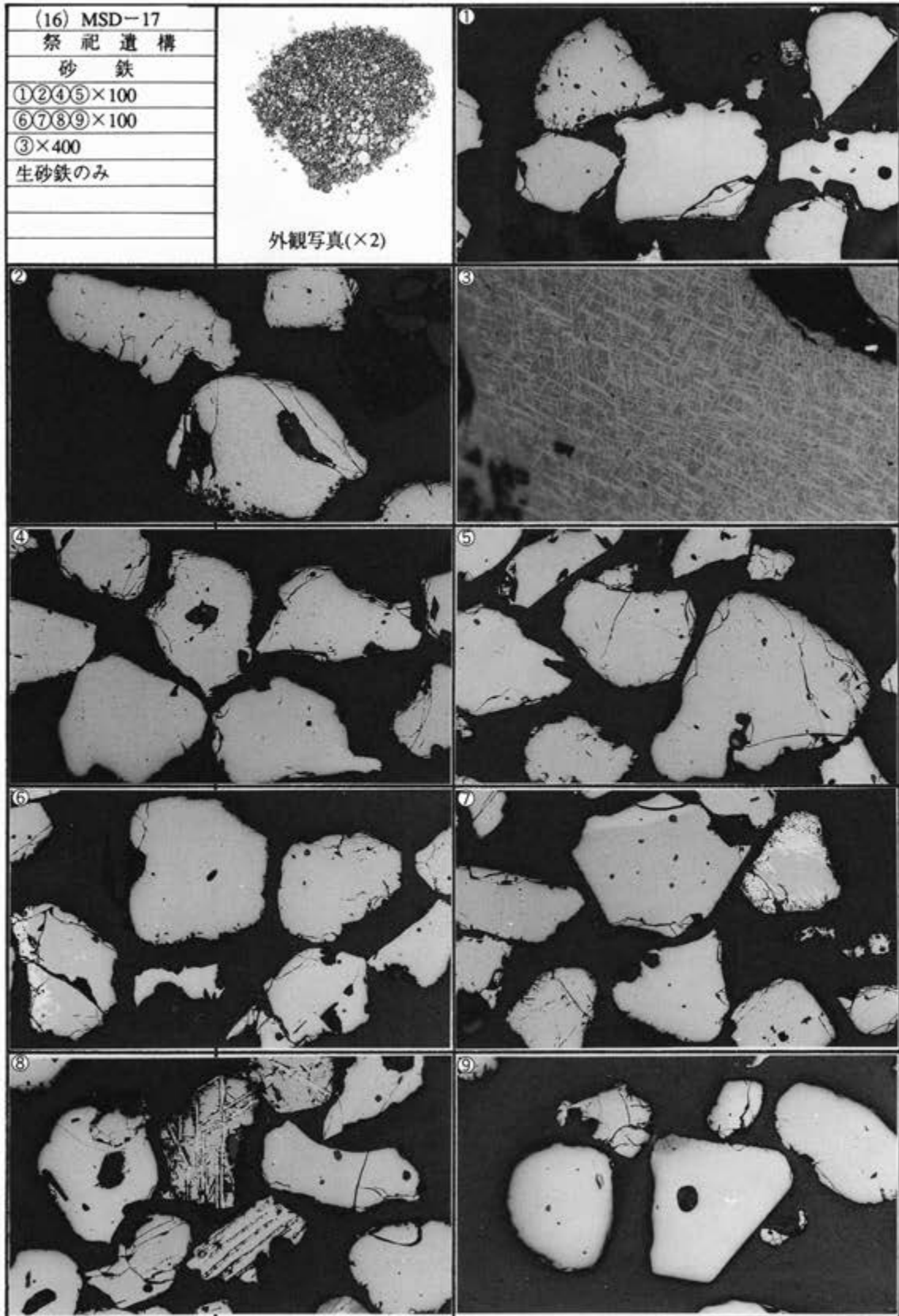


Photo.10 砂鉄の顕微鏡組織 (外觀写真・顕微鏡写真は、上記倍率から87%縮小した。)

圖 版

図版第1 島津遠所古墳群



(1) 遠所古墳群全景（東から）



(2) 遠所古墳群全景（南から）



(1) 遠所古墳群全景



(2) 遠所古墳群完掘状況(西から) 手前より16・19・20・21号墳



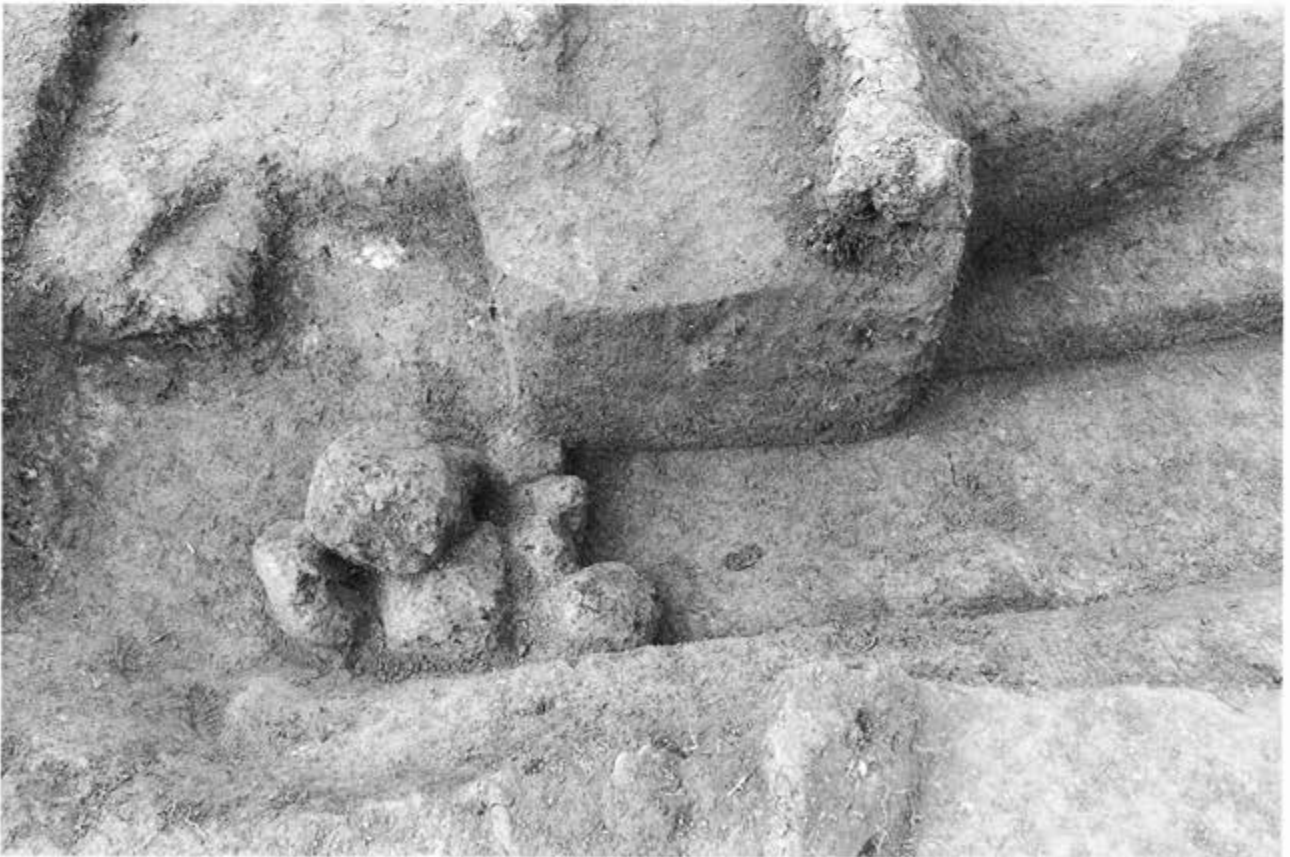
(1) 遠所16号墳北側斜面（西から）



(2) 遠所A城南側斜面（西から）



(1) 遠所16号墳第1主体部全景（東から）



(2) 遠所16号墳第1主体部西側集石状況（南から）



(1) 遠所19～21号墳完掘状況（西から）



(2) 遠所21号墳副葬品検出状況（南から）



(1) 遠所A城集石検出状況（南から）



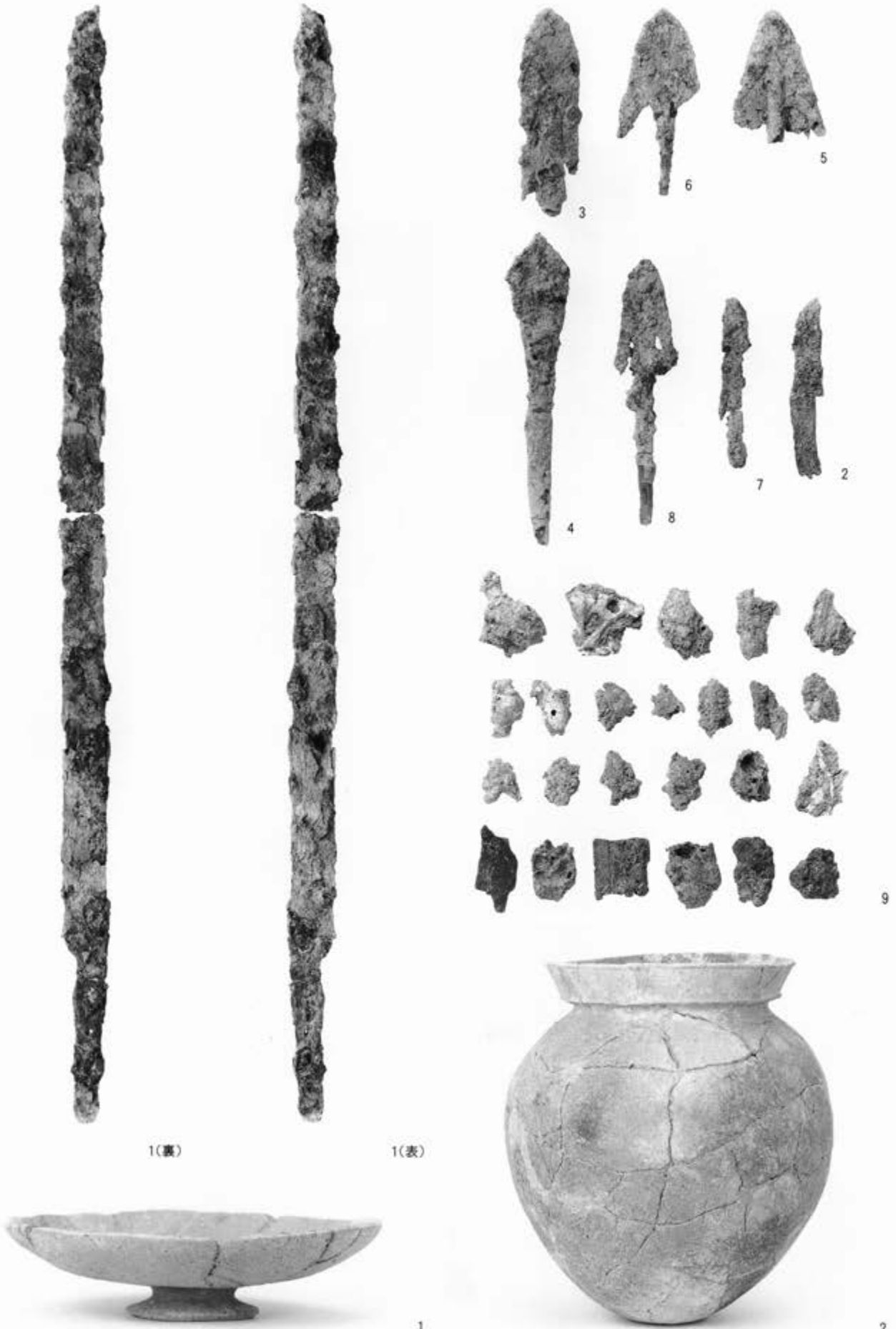
(2) 遠所A城被熱土坑1検出状況（南から）



(1) 遠所A城腰曲輪検出状況（北から）



(2) 遠所A城盛り土状況（番号は第12図と対応）



遠所古墳群出土遺物（番号は第2図・第11図と対応）



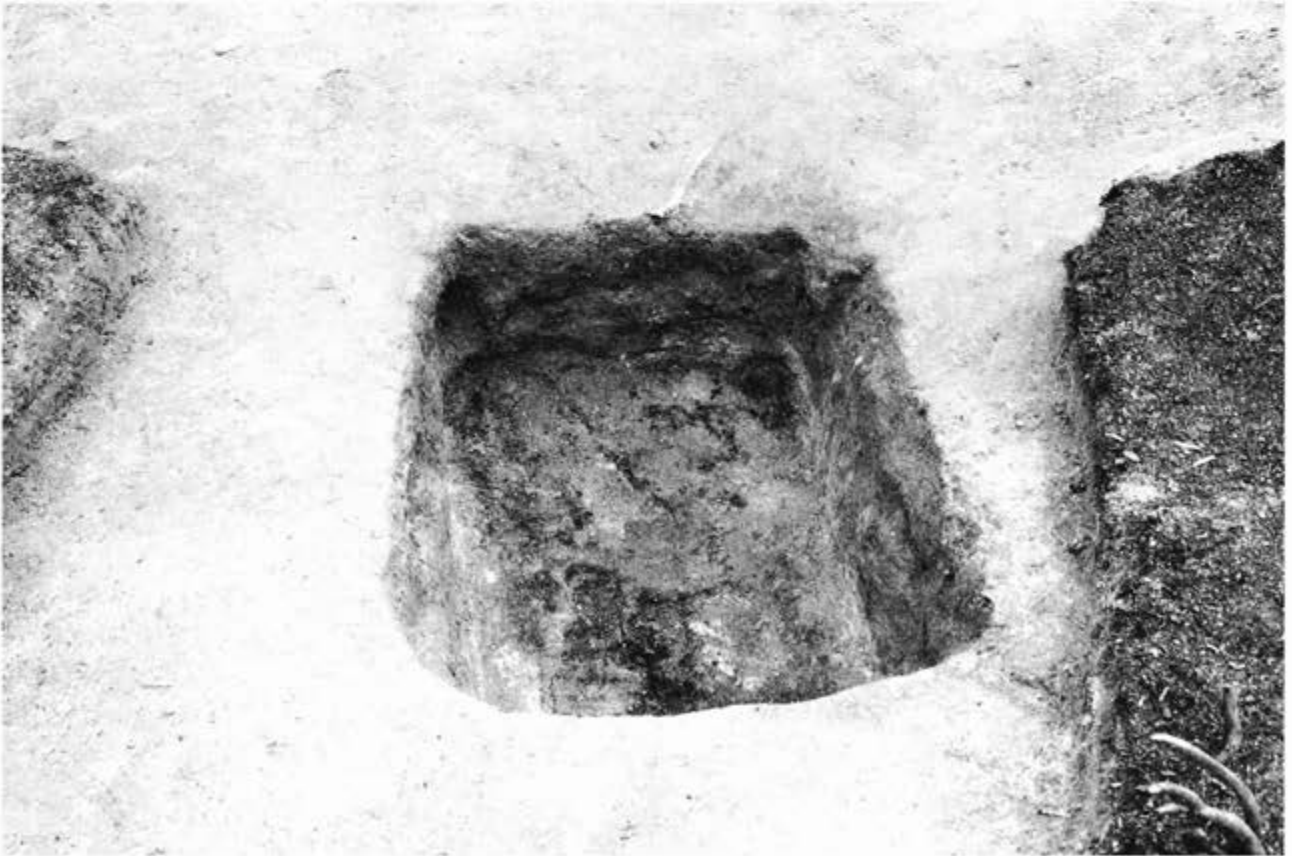
(1) 調査地遠景（西から）



(2) 試掘トレンチ完掘状況（南から）



(1) 焼土坑1完掘状況(西から)



(2) 焼土坑2完掘状況(北から)



(3) 左坂墳墓群調査後全景（東から）



(4) 近世墓群検出状況（南西から）



(1) 左坂墳墓群調査前全景（北東から）



(2) 近世墓群調査前（北西から）



(3) 13号近世墓 人骨 (西から)



(4) 11号近世墓出土古銭



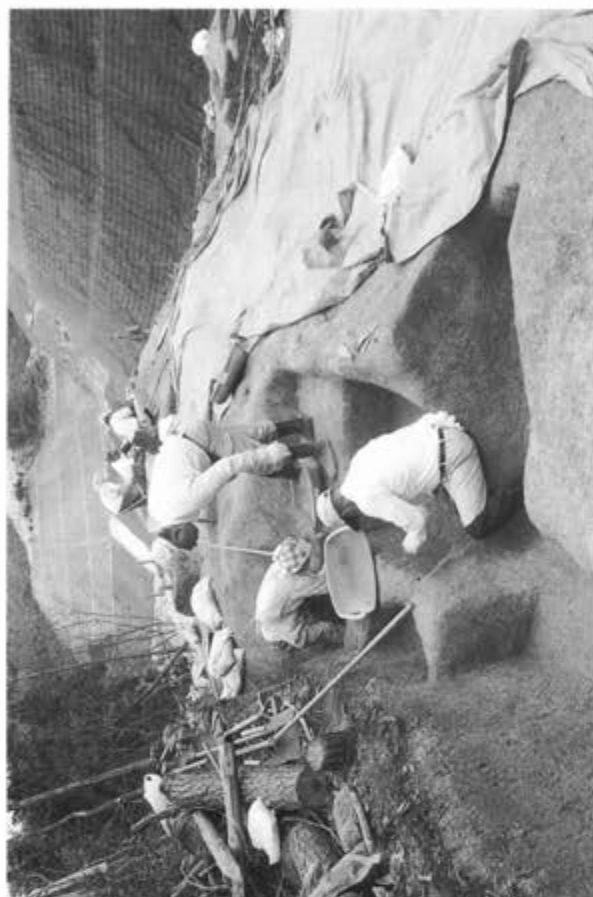
(1) 13号近世墓 (西から)



(2) 1号近世墓 人骨 (南東から)



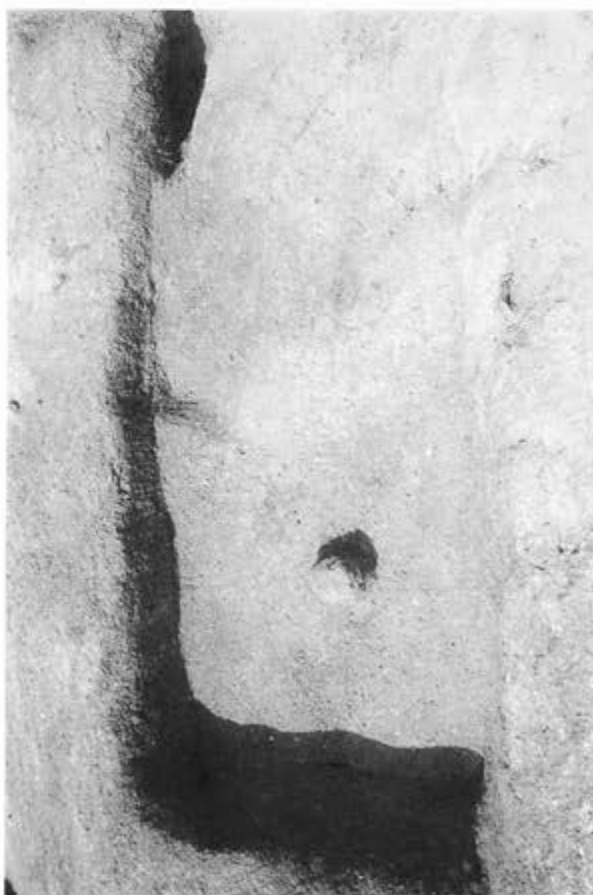
(3) 22号・33号墓区画溝 (北西から)



(4) 33号墓調査風景 (南西から)



(1) 22号墓全景 (南西から)



(2) 22号墓埋葬主体部 (南東から)



(3) 33号墓第2主体部 (南西から)



(4) 33号墓第4主体部 (北東から)



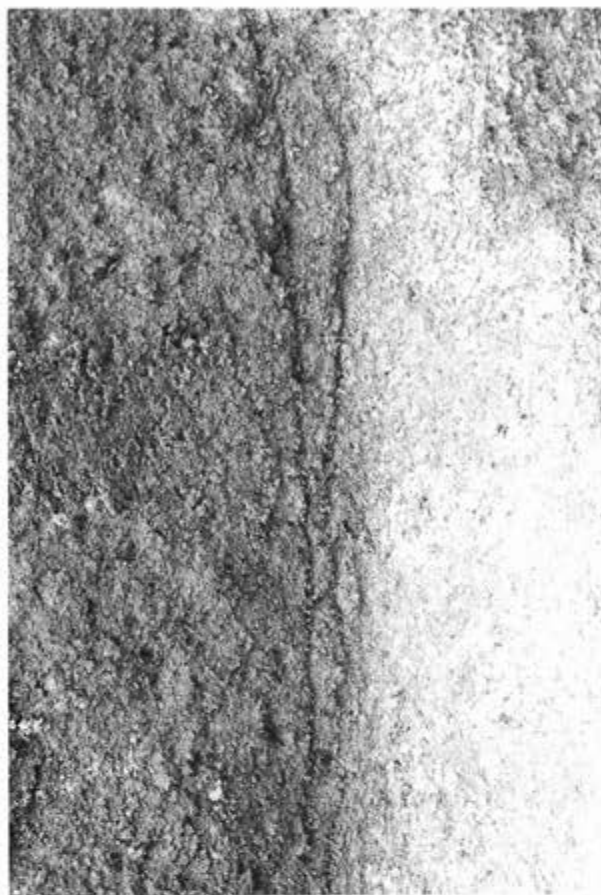
(1) 33号墓第1主体部 (南西から)



(2) 33号墓第3主体部 (南東から)



(3) 34号墓第1主体部完掘状況(西から)



(4) 34号墓第1主体部断面の朱泥じり土層(北東から)



(1) 34号墓第1主体部検出状況(南東から)



(2) 34号墓第1主体部断面(南西から)



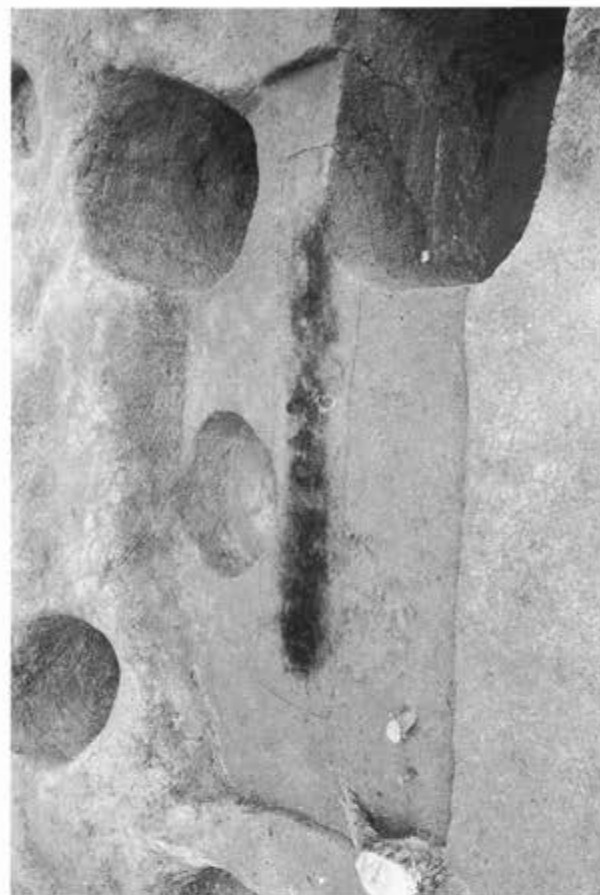
(1) 34号墓第2主体部棺痕跡検出状況 (南東から)



(2) 34号墓第2主体部調査風景 (南西から)



(3) 34号墓第2主体部棺内完掘状況 (南東から)



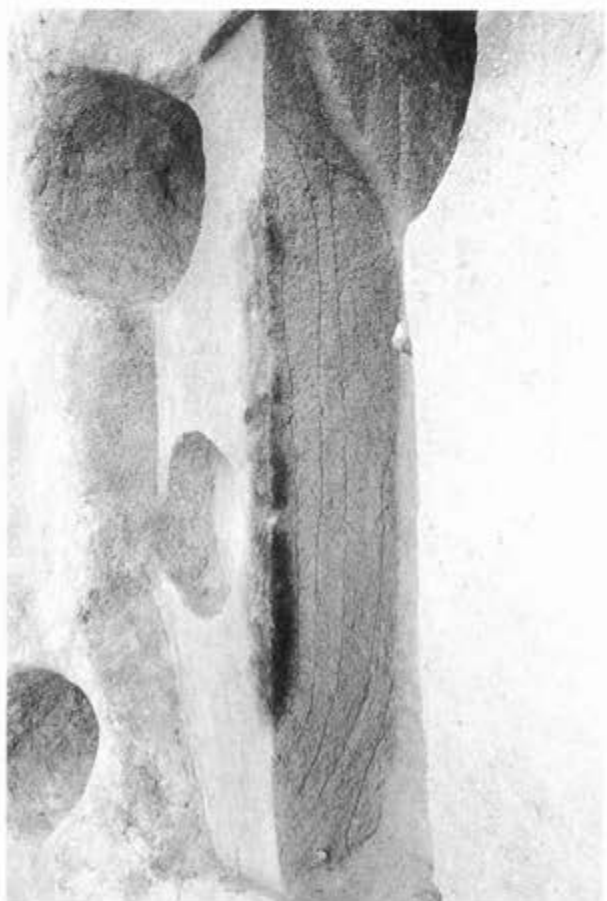
(4) 34号墓第3主体部検出状況 (南東から)



(3) 34号墓第3主体部完掘状況（北西から）



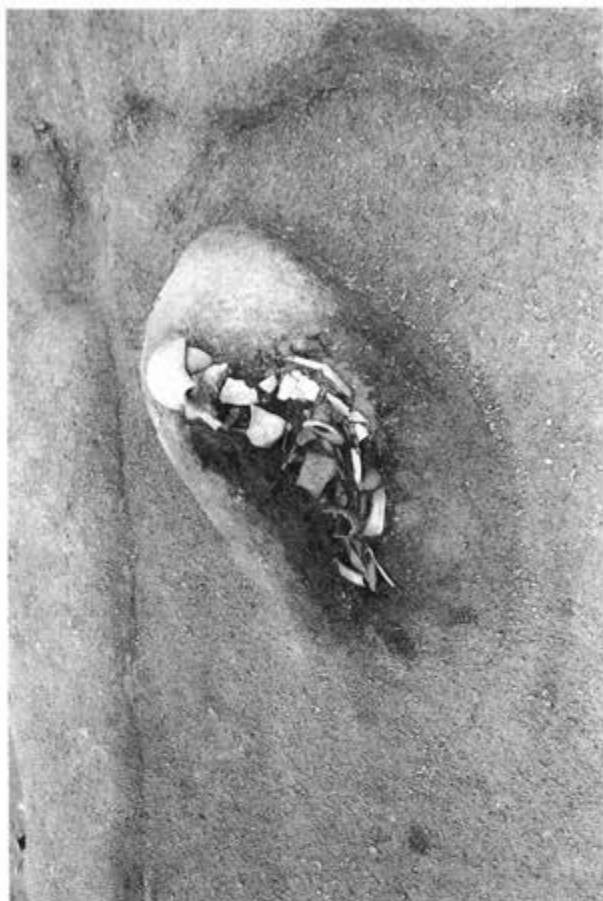
(4) 34号墓甕棺断面（南東から）



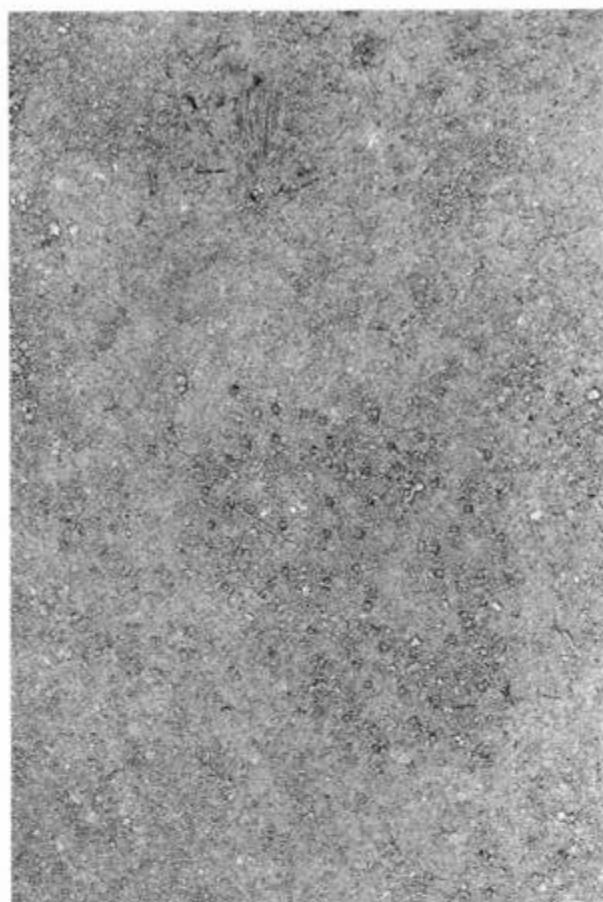
(1) 34号墓第3主体部断面（南東から）



(2) 34号墓甕棺蓋検出状況（南から）



(3) 35号墓埋葬主体部墓上土器群 (北から)



(4) 35号墓埋葬主体部棺内ガラス小玉・木質 (南から)



(1) 35号墓埋葬主体部検出状況 (西から)



(2) 35号墓埋葬主体部完掘状況 (西から)



(1) A-3号横穴調査前(南東から)



(4) A-3号横穴完掘状況(南東から)



(2) A-3号横穴玄室(南西から)



(5) A-3号横穴玄門部(西から)



(3) A-3号横穴玄門部(南東から)



(6) A-3号横穴玄室内遺物(南東から)



(3) 左坂古墳群C支群空中写真(北西から)



(4) C-7号墳埋葬主体部(南から)



(1) 左坂古墳群C支群空中写真(東から)



(2) C-6号墳埋葬主体部(東から)



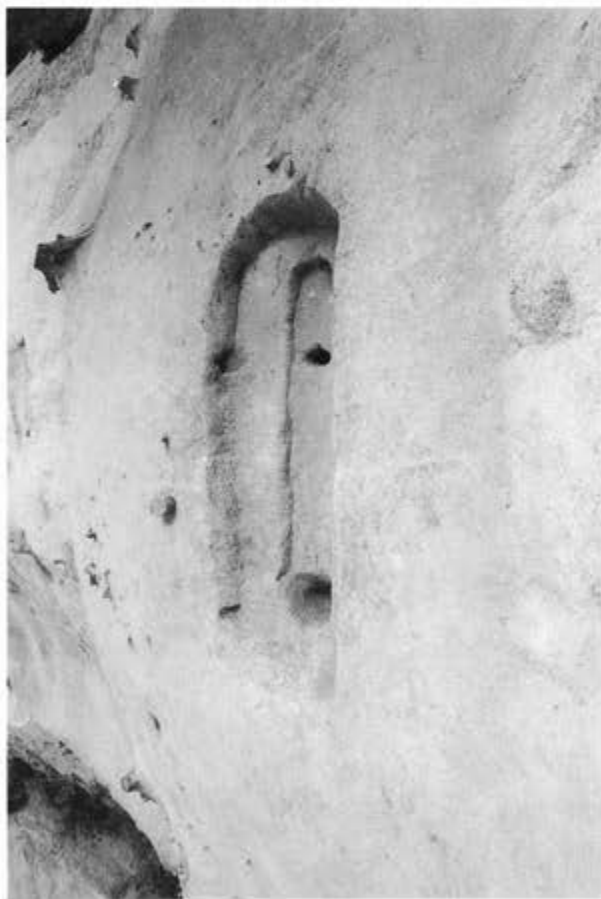
(3) C-9号墳埋葬主体部 (南から)



(4) C-10号墳全景 (南から)



(1) C-9号墳全景 (西から)



(2) C-10号墳埋葬主体部 (南から)



(3) C-11号墳第1主体部 (北から)



(4) C-12号墳全景 (北から)



(1) C-11号墳全景 (東から)



(2) C-10・C-11号墳区画溝遺物出土状況 (南から)





1



4



5



2



6



7

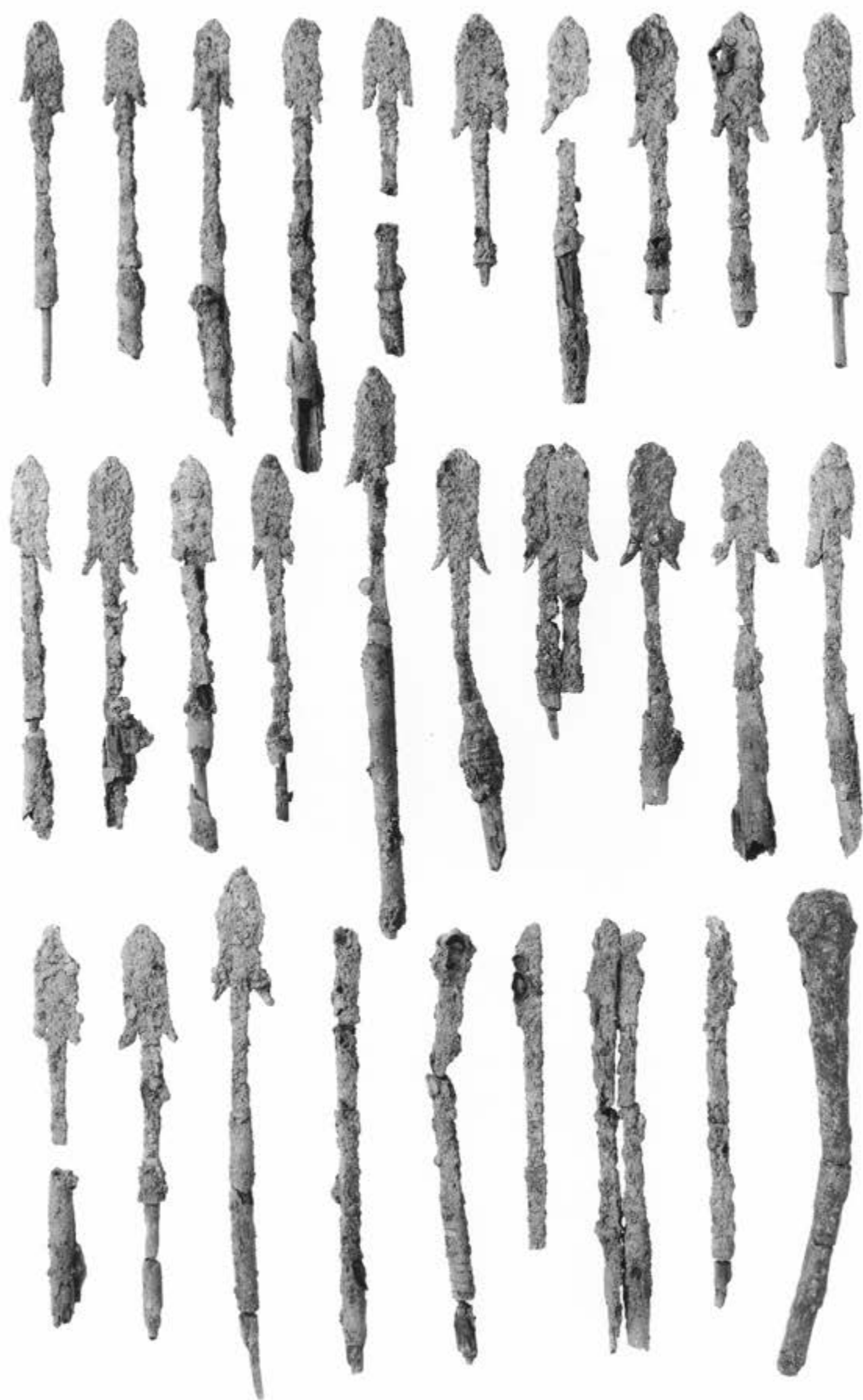


3



8

左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群出土遺物
(1~3. 左坂34号墓、 4・5. 左坂A-3号横穴、 6~8. 左坂C-11号墳)



左坂古墳群C-9号墳主体部出土遺物



(1) 枯木谷遺跡全景（東から）



(4) 調査地全景（南西から）



(2) B地区全景（北東から）



(5) C地区全景（北東から）



(3) A地区全景（北西から）



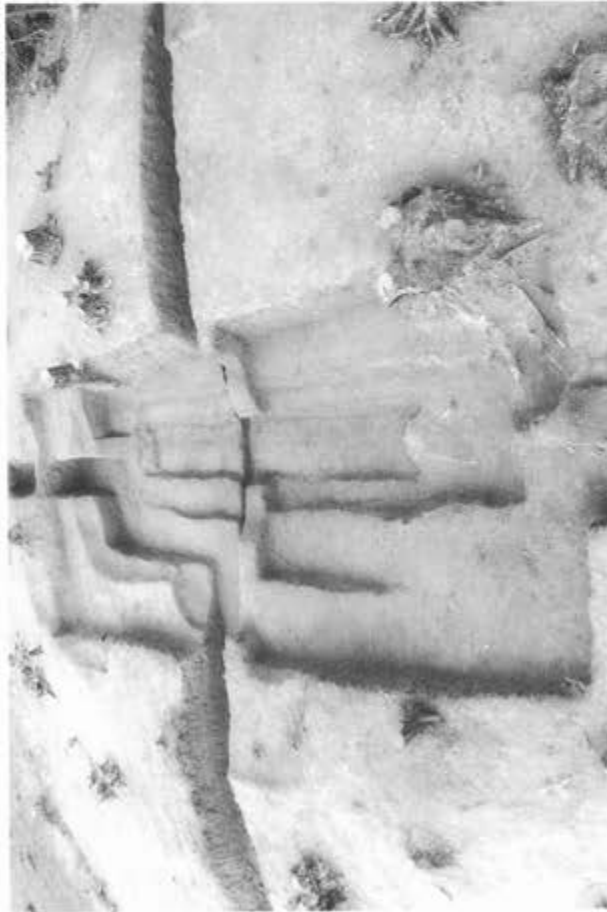
(6) A地区河川内遺物出土状況



(3) 南谷1号墳主体部完掘状況(東から)



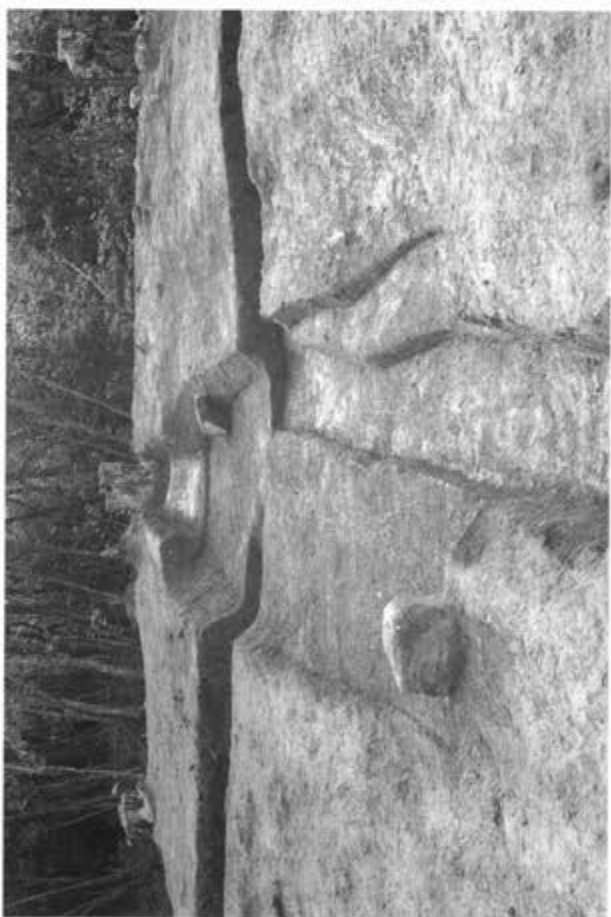
(4) 南谷1号墳木棺内遺物出土状況(西から)



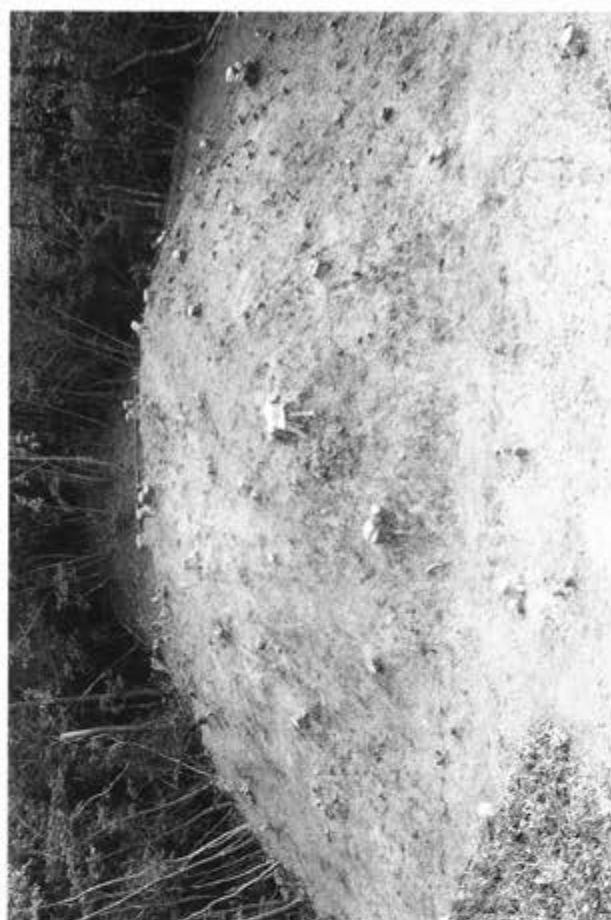
(1) 南谷1号墳調査前全景(東から)



(2) 南谷1・2号墳全景(南西から)



(1) 南谷4号墳調査前全景(東から)



(3) 南谷4号墳主体部完掘状況(東から)



(2) 南谷3・4号墳全景(北東から)



(4) 南谷4号墳陥没痕内遺物出土状況(西から)



1



2



20



21



22



23



24



25



5



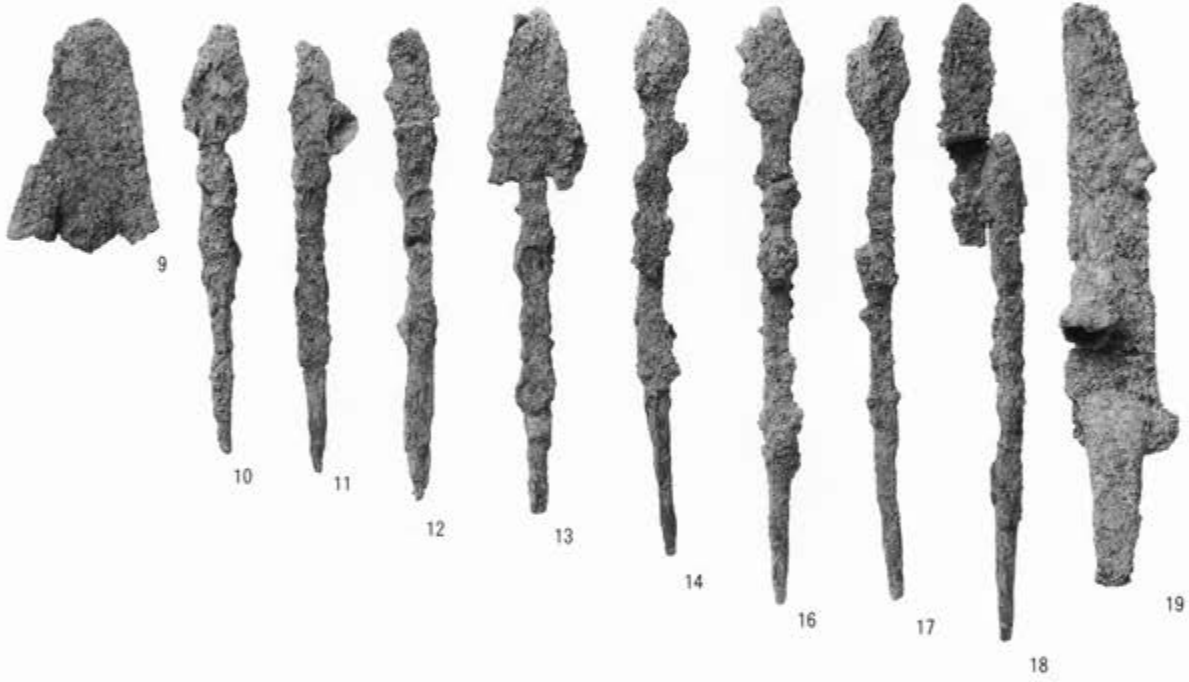
7



6



3



南谷古墳群出土遺物 (2)



(1) ニゴレ1号製鉄炉全景（北東から）



(2) ニゴレ1号製鉄炉近景（北西から）



(1) 1号製鉄炉排滓坑近景(北西から)



(3) ニゴレ1号製鉄炉内粉炭層近景(南東から)



(2) ニゴレ1号製鉄炉内粉炭層近景(南西から)



(4) ニゴレ1号製鉄炉内流れ込み遺物出土状況(南西から)



(1) ニゴレ2号炉近景 (南西から)



(2) ニゴレ2号炉送風管痕跡近景 (南西から)



(1) ニゴレ3・4号炉祭祀遺構全景（南西から）



(2) ニゴレ3号炉廃滓場全景（東から）



(3) 砂鉄堆積状況 (西から)



(4) 祭祀遺構完掘状況 (南から)



(1) 祭祀遺構検出状況 (南から)



(2) 祭祀遺構内堆積状況 (東から)



(1) A地区・桐谷1・2号墳遠景(南から)



(2) B地区全景(北東から)



(1) B地区住居跡19近景 (北西から)



(2) B地区柱穴群近景 (北東から)



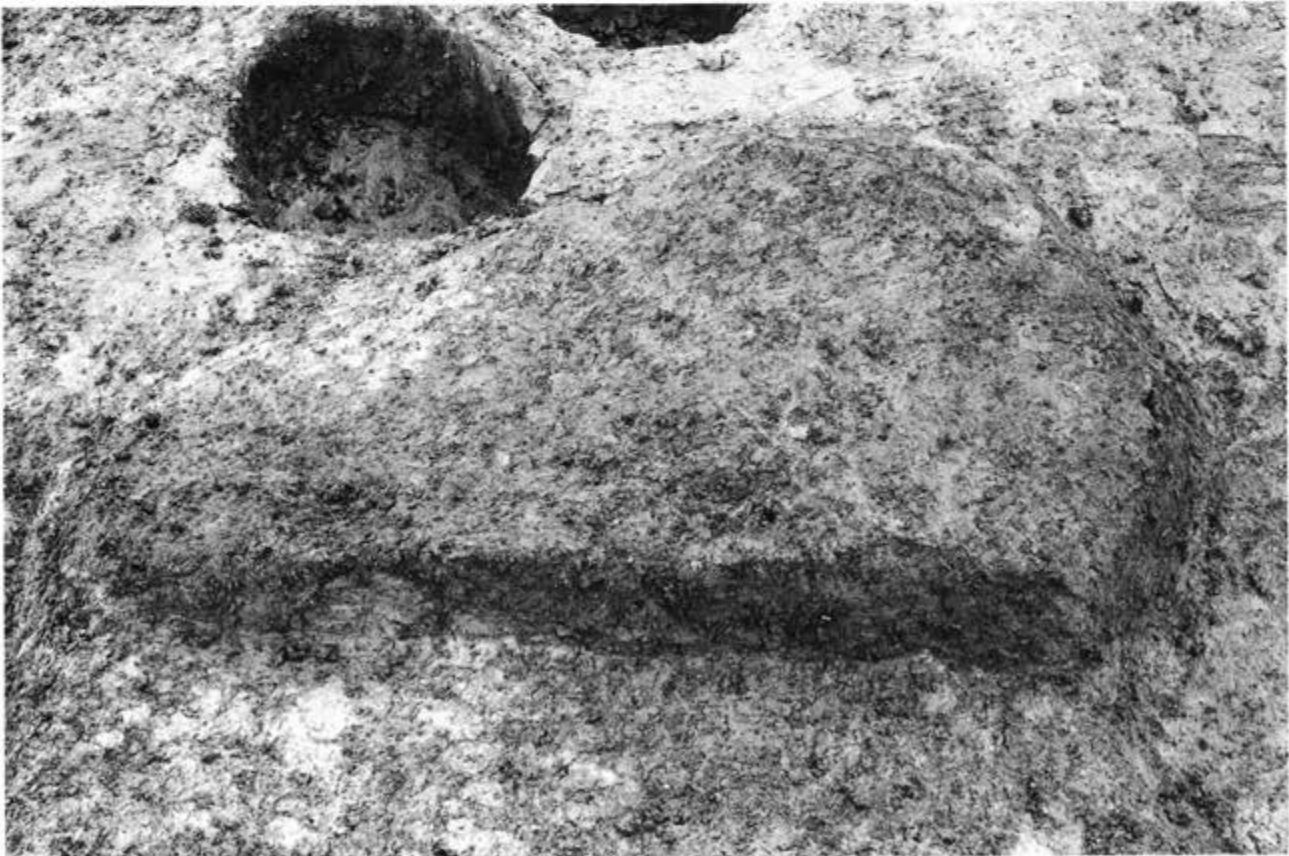
(1) 住居跡内遺物出土状況（南から）



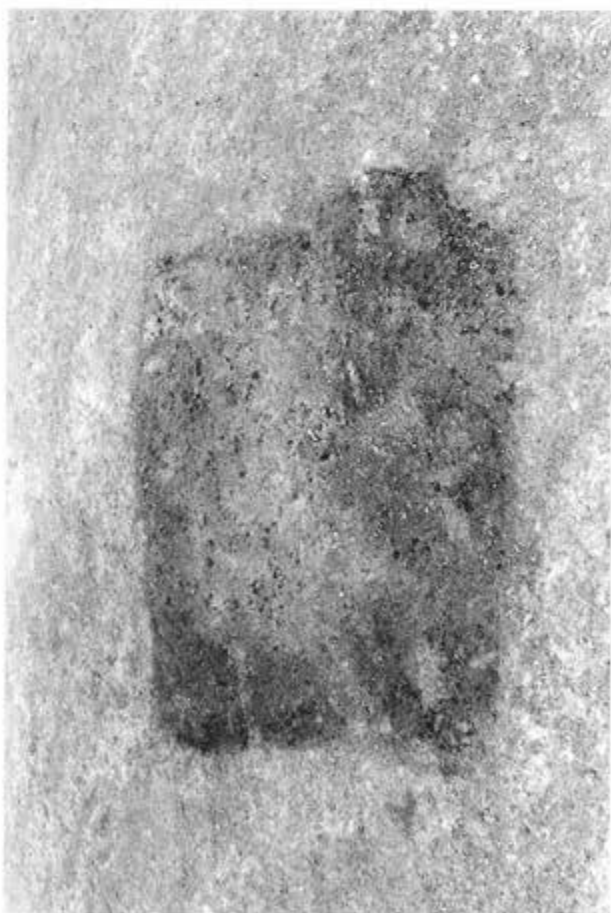
(2) B地区住居跡2近景（北西から）



(1) B地区住居跡2近景(南東から)



(2) B地区住居跡1内焼土半掘状況(北西から)



(1) 小型炭窯発出状況 (南から)



(3) A地区小型炭窯近景 (南から)



(2) A地区小型炭窯近景 (南から)



(4) A地区小型炭窯近景 (南から)



3



1



2



5



10



7



14



24



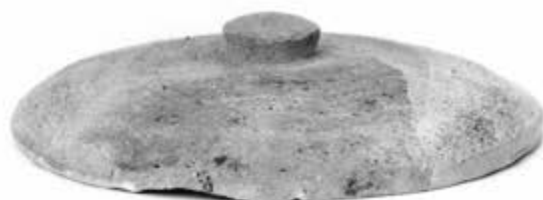
—



16



52



37



25



35



32



91



95



93



48



92



28



58



51



56



50



54



85



68



87



75



76

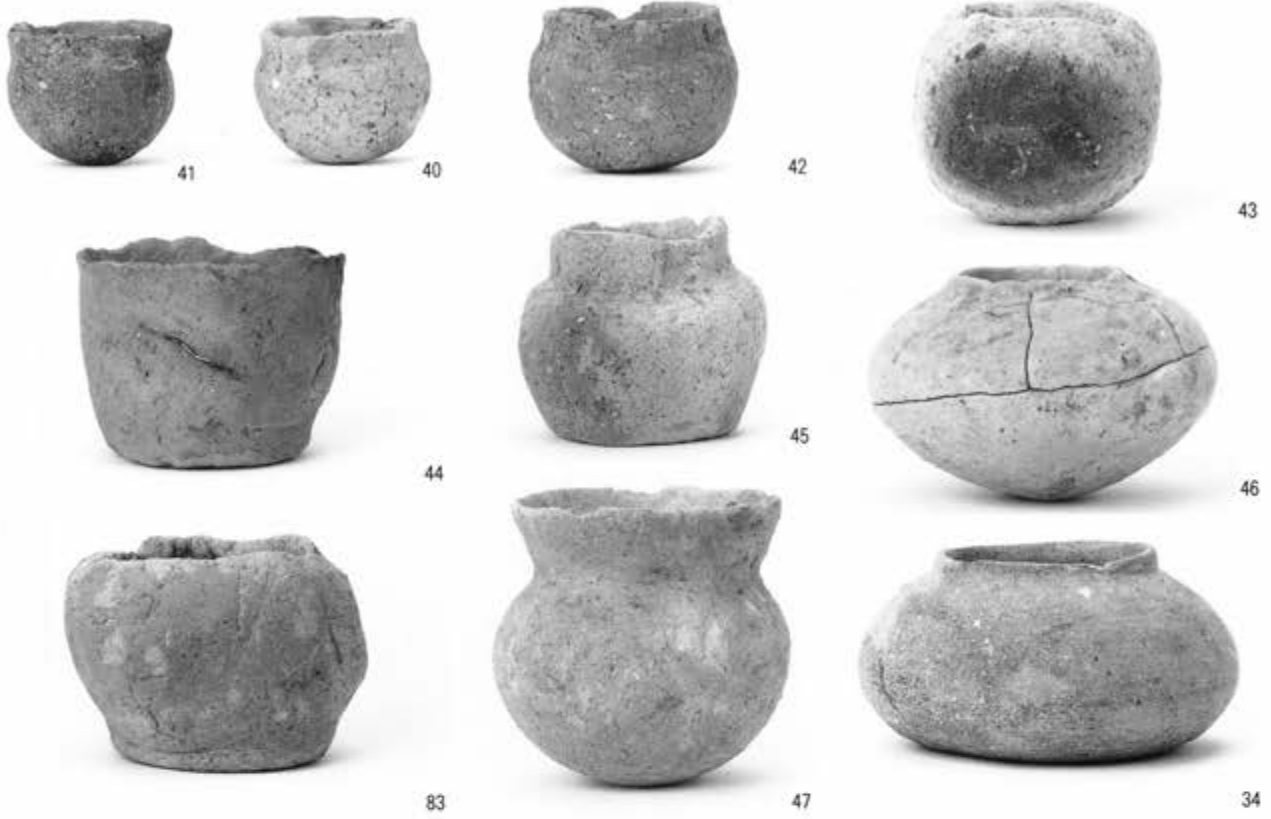


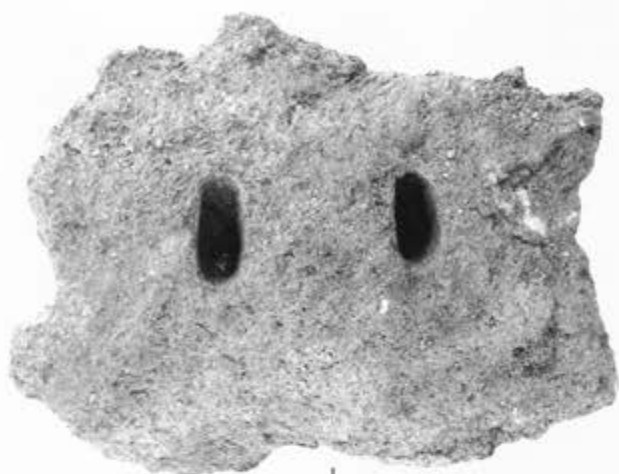
89



86

図版第44 ニゴレ遺跡





108



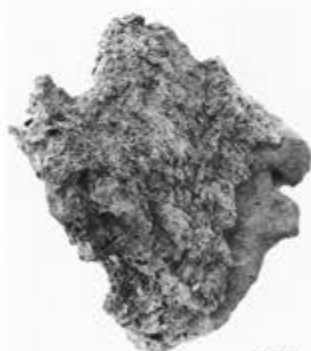
113



111



109



130



131



110



126



129



125



127



114



116



133



115

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第71冊							
編著者名	河野一隆・村田和弘・竹原一彦・増田孝彦・柴 暁彦・筒井崇史・岡崎研一							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				TEL	075(933)3877		
発行年月日	西暦	1996 年		3 月	27 日			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	" "	" "			
しまづえん じょこふん ぐん 鳥津遠所古 墳群	たけのぐんあみの ちょうしまづこあ ざえんじょ 竹野郡網野町鳥津 小字遠所	501	66、140	35° 41' 10"	135° 3' 20"	19950519 ～ 19950811	600	農地造成
なかはら じょうあと 中原城跡	なかぐんみねやま ちょうはしきこあ ざしんぞう 中郡峰山町橋木小 字新蔵	481	161	35° 39' 35"	135° 4' 28"	19950523 ～ 19950705	360	農地造成
ささかふん ほぐん、さ さかおうけ つぐん、さ さかこふん ぐん 左坂墳墓群 左坂横穴群 左坂古墳群	なかぐんおおみや ちょうすきこあざ ささか 中郡大宮町周積小 字左坂	482	107	35° 34' 55"	135° 6' 41"	19950417 ～ 19950808	1,580	農地造成
かれきだに いせき 枯木谷遺跡	なかぐんおおみや ちょうおくおの こあざかれきだに 中郡大宮町奥大野 小字枯木谷	482	97	35° 34' 23"	135° 5' 25"	19950918 ～ 19951129	1,000	農地造成
なぐおかい せき、なぐ おかきたこ ふんぐん、 なぐだにい せき 奈具岡遺跡 奈具岡北古 墳群 奈具谷遺跡	たけのぐんやさか ちょうみぞたに 竹野郡弥栄町溝谷	503	108	35° 40' 00"	135° 5' 48"	19950411 ～ 19960228	12,500	農地造成
みなみだに こふんぐん 南谷古墳群	くまのぐんくみは まちょういちおみ なみだに 熊野郡久美浜町壱 分南谷	521	185	35° 36' 3"	134° 57' 28"	19950717 ～ 19951020	750	農地造成

にこれいせき、きりたにこふんぐん、ぎょうじゃやま1ごうふん、とっとりとうげ1ごうふん ニゴレ遺跡 桐谷古墳群 行者山古墳群、鳥取峠1号墳	たけのぐんやさかちようとっとり・きばし 竹野郡弥栄町鳥取・木橋	503	35° 40' 35"	135° 4' 20"	19920924 ～ 19950228	20,000	農業関連整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
島津遠所古墳群	古墳、山城	古墳、鎌倉、室町	木棺直葬墓、土坑、盛り土		鉄桶、鉄鎌		
中原城跡	山城	鎌倉、室町	なし		なし		
左坂墳墓群	墳墓	弥生	台状墓、近世墓		弥生土器、鉄鎌、石鎌、ガラス小玉		
左坂横穴群	横穴	古墳	横穴		須恵器、土師器、刀子		
左坂古墳群	古墳	古墳	古墳		須恵器、土師器、鉄鎌、刀子		
枯木谷遺跡	集落	奈良	掘立柱建物、柱穴、流路		須恵器、土師器、墨書土器、転用硯		
奈具岡遺跡	生産遺跡	弥生	工房		水晶製玉作り関係弥生土器、鉄製品		
奈具岡北古墳群	古墳	古墳	前方後円墳		陶質土器、初期須恵器、土師器、鉄器		
奈具谷遺跡	水田	弥生	板杭列		弥生土器		
南谷古墳群	古墳	古墳	木棺直葬		須恵器、鉄鎌		
ニゴレ遺跡	生産遺跡	奈良、平安	製鉄炉、炭窯、住居		鉄滓、炉壁、炉底滓 須恵器、土師器		
桐谷古墳群	古墳	古墳	主体部				
行者山古墳群	—	—	—			古墳でない	
鳥取峠1号墳	古墳	古墳	主体部				

京都府遺跡調査概報 第71冊

平成8年3月27日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)